
ヒーロー

オズワルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒーロー

【Nコード】

N1088Q

【作者名】

オズワルト

【あらすじ】

私立秋川高校に通う高校一年生、久坂英志はヒーローに憧れていた。

誰かの為に闘えて。

誰かの為に命を賭けて。

誰かの為に平和を守る。

高校生にもなって、子供じみていることはわかっていた。

それでも久坂英志は、ヒーローに憧れていた。

ある日、彼は本物のヒーローと怪人の闘いを目撃する。
憧れていた存在に、彼は心を躍らせる。
だがそれは、厳しい非日常の始まりでもあった。

非日常の中、久坂英志は選択を迫られる。

彼の掴み取る正義はなんなのか。

彼の選ぶヒーローとはなんなのか。

後半は結構ハードにいきます。

出会い（前書き）

まあ、タイトルのまんまです。

前半は普通のヒーロー物やりますが、四章終盤からはやりたい放題やるので、ダークでハードで主人公がトチ狂っちゃうような作品が大好きな方は期待してください。

出会い

子供の頃からヒーローに憧れていた。

正義の味方、と言い換えてもいい。

いかなる時でも正義を守り、いかなる場合でも悪を倒す。

どんな強敵にも立ち向かい、どんな危険も乗り越える。

自分が死ぬ可能性があろうとも怖れず、そして必ずやり遂げてみせる。

そんなヒーローに憧れていた。

今、僕の前でヒーローが怪人と闘っている。

ここは一軒家が立ち並ぶ住宅街。時間は午後の五時を過ぎたところ。車一台と少し分の幅しかない道路には、僕のほかに目の前の二人しかない。不思議だ。全く人の気配が無い。

二人、と呼ぶのはもしかしたら間違っているかもしれない。特に一方は、人と呼ぶのに抵抗があった。

ポリバケツとその蓋の隙間から見える光景は、あまり現実味が無く、それでいてはつきりとしていた。

一方は黒のプロテクターを付けた人間。

もう一方は赤い巨大な豚の化け物。

ポリバケツの中で充満している生ゴミの臭いなんて、どうでもよくなる光景だった。僕の目はそれに惹きつけられてしまう。

黒のプロテクターをした人間は、特撮にでてくるヒーローのような外見をしていた。どこかの番組の衣装だと言われても、違和感はない。

そいつの頭は黒いヘルメットのようなもので覆われていた。バイクに乗るときのようなヘルメットとは全く違い、ところどころが尖がっているヘルメットだ。目元や口元を全く確認する事ができず、どんな顔をしているのか、全くわからない。

全身にはプロテクター以外に、白い線が所々に入っていた。背中には、ロボットでいうバックパックのような物がついている。

赤い豚の化け物は、成人の二倍くらいの大きさをしていて。二足歩行しているくせに、顔は豚のそれだ。テレビに出てくる怪人のようだ。

顔は豚とよく似ていたが、若干違う。筋肉質になっている感じだ。両手首には腕輪のようなものが填められていて、手には巨大な斧を持っている。斧も普通のものよりも巨大だ。

今、それが振り下ろされた。その先には、黒のプロテクターをした人間がいる。

「危ない」

かすかな声で僕は言った。子供の頃、テレビに映るヒーローを応援していた時のように。

轟音と共に、アスファルトが裂けた。地面が震動し、道路に書かれた「止まれ」の文字が、真っ二つに両断される。アスファルトの破片が周囲に飛び散る。僕が中に入っているポリバケツに、いくつかの破片が当たった。

プロテクターをした人間は、間一髪で豚の怪人の斧を左に避けていた。そしてそのまま跳躍して化け物を飛び越え、その背後へと着地する。その高さは三メートル以上あった。常人の身体能力をはるかに超えている。

——本当にヒーローみたいだ。

化け物が唸り声を上げながら背後を見た。身体をねじるようにして斧を引き抜いた。身体を相手に向けながら斧を振りかぶり、そして今度は縦ではなく横で切りつけた。

斧はブロック塀を破壊して家の一部を切り裂き、そして目標へと向かっていく。

プロテクターをつけた人間は跳躍した。そしてそのまま化け物の顔面へと拳を叩き込む。

化け物がよろけた。斧を手放し、仰向けになって倒れていく。手放された斧は、民家へと激突していく。それでも人の声はしなかった。野次馬が来てもよさそうなのに、誰もこない。

そのまま追撃をかけるのかと思ったが、着地するとなにやら右腕のブレスレットを操作し始めた。ダイヤルを回すような仕草をし、そして右腕を前へと突き出す。

光が右腕のプロテクターに集まっていた。機械のモーター音が辺りに響き、バックパックから蒸気が噴出した。

化け物はそれに気がついたのか、身体を起き上がらせ、焦ったように殴りかかった。倍以上ある体格の化け物が襲い掛かってくる。

しかし動じる様子は無い。特に何かをするわけでもなく、右腕を突き出したままだ。

化け物の拳が叩き込まれた。鈍い音が走った。プロテクターが破壊された音なのかもしれない。

だが相変わらずモーター音と蒸気は出つづけていた。

僕の目には、左手で化け物の手を受け止めている姿が映っていた。子供のパンチを受けるような軽さで。

次の瞬間、右拳が化け物に叩き込まれた。光と轟音と爆風が同時

に表れ、そして化け物が吹き飛ばされた。

民家の窓ガラスに罅が入って、瓦がいくつか飛んでいった。僕の入っていたポリバケツはゴミ袋へと倒れこんだ。

化け物は十五メートルほど吹き飛ばされていた。その腹部は発光していて、そこから全身に光の罅が走っていく。そして――砕けた。

化け物は光の粒子となり、消えていった。それを確かめると、プロテクターをつけた人間は僕の方へとやってきた。

僕はポリバケツから這い出す。生ゴミのにおいが鼻についた。気が緩んだのかもしれない。

変わりに胸が高鳴っていた。僕の目の前にヒーローがいる。子供の頃から憧れてたヒーローが。

「立てる？」

プロテクターを装備した腕が差し出された。左腕だ。右腕はまだ若干発光している。

これが、僕が初めてヒーローを見た日だった。

久坂英志 1

私立秋川高校は進学校だ。

共学で下には中学校もあり、ある程度の成績さえとっていれば、エスカレーター式に上がれる付属の大学もある。

ただ、大学の偏差値は高いわけではないので、普通の生徒は高校を卒業したら他の大学へと行く事が多い。

運動部はだいたい、中の下から下の中ほどの強さ。生徒の殆どが大学受験を視野に入れているため、あまり熱心に部活に取り組んでいるわけではない。極稀にベスト16とかベスト8のいわゆる強豪ランクまで行く事があるらしいが、僕が付属の中学に入学してからは一度も無かった。

そのほか部活、つまり文化部や同好会などはそれ以上に力が入られていなくて、実際に活動しているのか、怪しい部も多い。それは申請さえすればどんな部活や同好会でも認められてしまうせいもあるのだが、部員が廃部ギリギリの部や同好会というのも珍しくは無かった。

ただ、毎年のように部や同好会が量産されているせいで、4月から5月にかけての新入部員獲得が後を耐えない。

挙句の果てには、それから身を守るために、昨年「帰宅同好会」なるものが設立されたくらいだ。活動内容は単純明快。「よりよく帰宅を実行する」というというもので、何もやりたくない、と言う生徒は皆、「帰宅同好会」へと入っていった。

そのせいで、部員数がギリギリの部や同好会は殆どが廃部に追い込まれようとしていた。

そして、僕達の同好会も。

「じゃあ、そういうことだから」

そう言って、田上君は軽く礼をした。

「そういうことだからって」

僕は哑然としていた。僕の手には、たった今田上君から渡された、退部届がある。僕はビックリして立ち上がった。

僕の隣には遠藤が椅子に座っている。背の部分を前にして、その上に両腕を乗っけている。

目の前には田上君。部室に來たかと思ったら、突然僕に退部届けなんてのを渡してきた。

プレハブ四階建ての部室の窓からは、中庭が見えていた。ここは最上階、つまり四階だから見晴らしもいい。中学生がドッジボールをして遊んでいる。そういうえば僕も小さい頃、よくやった。大して強くは無かったけど、避けるのは自信があった。グラウンドではサッカー部が活動している。ゲーム形式の練習をしていた。その周り、つまりトラックでは陸上部が走っている。長距離のタイム測定をしているようで、記録の紙とストップウォッチを持った部員が、励ましの声を走っている生徒に送っていた。

いや、そんなことはどうでもよくて。

「なんで、急にまた」

何か喋らなきゃ、と思って口を開いた。今、田上君がこの部室を出て行ってしまったら、もう二度とここには戻ってきてくれないだろう。そんな気がした。

「この同好会、周りから変な目で見られるだろう？俺達、もう高校生なんだぜ」

田上君は、少し申し訳なさそうに言った。

気さくで、優しい、いい人だ。そんな田上君が退部したいと言いつ出すなんて、僕は夢にも思わなかった。

「さすがに恥ずかしいよ。『ヒーロー同好会』なんて」

今度も申し訳なさそうに、けれどはっきりと田上君は言った。

ヒーロー同好会。

それは僕が一人で中学の時に立ち上げた同好会だ。とにかく僕は小さい頃からヒーローが好きで、中学生になったら同好会を作ろうと決めていた。そこに同じ小学校だった遠藤、あと同じクラスの数人で、同好会を結成した。皆が退部していつて、結局、中学の終わりは、僕と遠藤だけが残った。同好会がなくなりそうになり、田上君に形だけ、入ってもらっていたのだ。同好会は三人以上いないと活動が認められないから。

「まあ、確かに恥ずかしいよな。高校生にまでなつてヒーローつてよ」

遠藤が口を開いた。こいつには危機感はなく無い。

「結局、英志が好きでやつてるようなもんだしな。田上がそう思うのもわからなくは無い。お前は幽霊同好会員なわけだし」

「遠藤、余計なこと言わないでよ」

「なにいつてんだよ。田上もそう考えてるぜ」

「そんなこと」

田上君の表情は、まさにその通り、と書いてあった。

「最初の頃は別にいいかなくて思ってたけど、あんなことを言われるようになってから、段々嫌になってきて」

「言われるようになったつて、何を？」

「『ヒーロー同好会』の人つてさ。特に、高校から入学してきた奴から。恥ずかしいんだよ。別にヒーロー物の番組とかが嫌いってわけじゃないんだよ。ただ、知らない奴にまでそう言われるのが嫌なんだ。なんか俺も向こうに話し掛け辛いし」

つまり、ヒーロー同好会の肩書きが受け入れられなくなった、ということみたいだ。

「でもさ、ほら、人の噂も八十五日つて言うし」

「英志、間違つてるぞ」

そんな指摘をする暇があったら、どうにかして田上君を引きとめようとして欲しい。

「大体よ、同好会に入るか入らないかなんて個人の自由だぜ？しかも俺たちはお願ひしてる立場なんだから、文句言えないだろ」

そうは言ったって、田上君がいなくなったら同好会が無くなってしまう。

僕は何か良い言葉はないかと思考を巡らせるが、ロクな考えが浮かばない。

「大丈夫だよ。きっと、面白がって言ってるだけだからすぐ飽きるって」

なんとかひねり出した言葉は、あまりにも説得力に欠けていた。

「飽きるとか飽きないとか、そういうのを待っているのも嫌なんだ」

田上君は心底嫌そうな顔で否定した。

無意味かもしれない事でもいいから何かを言わないと、田上君はすぐにでも部室を出て行きそうだ。

「そういう人って切り無いじゃん。きっと止めても言ってくるって。だからさ、ここは負けないで」

自分で言ってる、説得できるわけがないと思った。

田上君は本当に嫌そうな顔をしているのだ。気さくでいい人の、

田上君が。

「負けるとか負けなとかじゃないんだ。とにかく、そういう事だから」

田上君は僕の言葉を無理矢理切って、部室から出て行った。

残されたのは、僕と遠藤。

ドッジボールは丁度決着がついたようだ。サッカー部はもう別の練習メニューを行っていて、トラックではまだ測定が行われていた。

久坂英志 2

そういうわけで、ヒーロー同好会は僕と遠藤、たったの二人になつてしまった。

田上君の退部届け騒動の後、僕たちは何か活動するわけでもなく、互いの家へと向かった。

僕と遠藤は一緒に家路を歩く。

僕らの住む街は、都心とベットタウンの中間にある。この街にマンションはあまりない。立ち並ぶのは殆ど一軒家だ。買い物する場所と言えば長い商店街と、デパートくらい。ゲームセンターやCDショップなんてのは、デパートの中に申し訳程度にしかない。他には大きな本屋が一つあるくらいで、なんというか店に関しては、特徴になりそうなものがない。ボウリング場なんて洒落た施設はない。ファーストフード店や喫茶店、そしてファミレスやコンビニなどの全国チェーン展開している店なら結構ある。焼き鳥屋とかトンカツ屋とか、魚屋とか八百屋とか、そんな地味な店だったら充実している。

その代わりと言ってはなんだけど、特徴的なものとして、高級住宅街がある。高層マンションがいくつも建てられていて、しかもマンションの一部屋が物凄く広い。道幅がとってもなく広く、夜になるとライトアップまでされるらしい。僕らには到底届かなさそうな、とんでもない値段で売り買いされている。そのくせ周辺にある店は大した事ないんだから、謎だ。交通の便も底までいいわけじゃない。都心にはすぐいけるけど、それだけだ。最寄り駅には一つの路線し

か通ってない。

遠藤の家は近所にある。僕もそうだ。学校まで徒歩通学、十五分。自転車は持っているけれど、登録が面倒だから使っていない。僕と遠藤は途中まで、というか殆ど同じ道を通って帰る。路地の手前か奥か程度の違いで、お互いの家の距離は百メートルもない。

おまけに家のデザインも同じ、一軒屋だ。丁度同じ時期に僕の家族も遠藤の家族もこの町に引っ越して来て、その時に完成したのがその家だった。

僕と遠藤は小学生の頃から、同じところに通っていた。腐れ縁、という奴だ。

遠藤がヒーロー同好会に入っているのも、それが関係している。遠藤は僕のようにヒーローが好きなのではない。ただ、入部しているだけだ。

僕はちゃんとヒーローに興味のある部員が欲しい。一緒に番組の話をしたり、漫画について色々語り合える部員が欲しい。だけど。

「三人いないと同好会は潰れちゃうぜ」
相変わらず遠藤は人事のように喋っている。というか、こいつの場合は完全に人事なのだ。遠藤が同好会に入っている理由は「暇」と「他の部活はしたくない」というだけだ。

「わかってるよ。そんな事は。こうならない為に、田上君に入部してもらってたんじゃないか」

三人以上でなければ、同好会は活動が出来ない。活動が出来ない、ということは、部室を追い出され、帰宅部になるという事だ。

「気のいい田上が退部したがるくらいだから、我等がヒーロー同好会に対する世間の目は、相当厳しいみたいだな」

「それがよくわからないんだよね。どうして馬鹿にされるんだろう。カッコいいじゃん。ヒーローって。なんであの良さが皆わからないのかな」

「それはともかくだ……ヒーロー同好会なんて言っちゃあいるが、

その実態は特撮同好会だからな。明確な活動指針があるわけでもないし。大体さ、部員募集の謳い文句が“ヒーローに憧れてる人募集”だってんだから、そりゃ噂にもなるわな」

“ヒーローに憧れている人募集”というのは僕が部員勧誘の時に使った言葉だ。学校の掲示板にあるポスターにもそう書いてある。

「もうちょつと上手く書けばよかったんだよ。“特撮好き募集”って書いとけば、そこまで変な目で見られる事も無かったんじゃない。黒魔術同好会なんてのもあるからな。あそこは“占いやってます”、だぜ。なんだよ憧れてるって。変身でもしたいのかよと思われろだろ？」

「変身できるならしてみたいよ」

ヒーローになれるんだったら、なってみたい。憧れというのはそういうものだろう。

「お前のヒーローに対する情熱はおいといて、俺達の世間評価はそれとは別だ。そいつを上げようたって、今更どうしようもない」

「実際に、ヒーローがいれば、人気でるのかな……」

心の底からそう思った。

皆がヒーロー好きを馬鹿にするのは、実際にそういう人間がいないからだ。

自分の正義の為に全てを捨て。

自分の信じる物のために戦い。

自分の守りたいものを守りきる。

カッコいい生き方だ。もしそうやって生きていけるなら、僕は生きてみたい。

「いやいや、そんな事はねえよ。世の中の学生は冷めてるぜ？熱狂して憧れるのはアイドルだけだったの」

「でもさ、本当にヒーローがいたら、皆絶対憧れるよ。そりゃあ、テレビとか漫画の中だけだったら馬鹿にするだろうけどさ。自分の正義を貫ける人がいたら、カッコいいじゃないか」

「でも実際、ヒーローなんてこの世にいないんだけどな」

冷めた口調で遠藤は言う。

そう言われたら、僕に言い返す言葉はない。気が滅入る。

僕が落ち込んだのを察したのか、それとも自分の家の前まで着いたからなのか、僕の肩を叩き、遠藤は口を開いた。

「ともかくさ、まだ同好会が潰れるまでには三日間の余裕があるんだ。それまでにどうにかすればいいんだよ。そんな深く悩む必要はねえって」

と言って、遠藤は自分の家のドアを開けた。

散々駄目出ししておいて、よく言う。

——評価が最低だとか、ヒーローが実際にいないとか、そんな風に言われて、どうにかできる気がしないよ。

さらに落ち込んだ僕の気も知らず、遠藤は明るい口調で「じゃあな」と言って自分の家へと入っていった。

久坂英志 3

遠藤の家から八十歩くらい進むと自宅の前へと着いた。いつも思う事だが、遠藤と僕の家は恐ろしく近い。

「ただいま」

僕は鍵を上げ、家の中へと入った。

返事はない。父さんはまだ仕事のようだ。僕の家には母さんはいない。

母さんは僕が六歳の頃に交通事故に巻き込まれて死んだ、と父さんから聞いた。丁度その時、けれど僕にはその記憶がない。

たしか、幼稚園の頃は父さんが何処か色んな所に転勤を繰り返していたんだっけ。小さな頃、僕を育ててくれたのは、母さんだった。母さんの事で覚えているのはいつもやさしかった事と、けれど怒ると物凄く怖かった事だ。怒った母さんは別の生き物みたいな印象だったのは覚えている。

葬式の事は一切覚えていない。もしかしたらやらなかったのではないかと疑うほどだ。

その後引越してこの街にきた、というのは覚えている。幼稚園の仲が良かった友達と離れるとき、号泣したのはハッキリ思い出せた。

あの頃は性別での仲間意識は殆どなくて、男の子でも女の子でも関係なく仲が良かった気がする。確か一番仲が良かったのは女の子だったはずだ。

もう、名前は忘れてしまったけれど、その子も特撮ヒーローが好きだった。

覚えているのはその位で、あとは殆ど記憶がない。小さい頃の記憶だから、そんなものなのかもしれない。

写真をたまに見ることがあるが、そこに写っている母さんとイメージの中の母さんは一致しない。

母さんが死んで、この街に引っ越して来てから、父さんは一人で僕を育ててくれた。

ドラマにあるような再婚の話は父さんから一度も聞いた事はない。今でも父さんは母さんの事が好きなんだろう。

父さんは町の工場に勤めていて、確か今は現場監督を任されている、と聞いた。具体的な仕事の内容は聞いていない。どんな仕事でも、父さんが一人で働いて一人で僕を養ってくれてる事には変わりはないから、興味は無かった。

僕は階段を上がって自分の部屋のドアを開ける。

自分のベットに倒れこむ。全身の力を抜いて、布団に身体を埋めた。

時計は四時三十分を示している。

時計から視線を外すと、フィギュアが目に入った。

それは僕が小さい頃にテレビでやっていたヒーローのフィギュアだった。昔、こっちに引っ越してきたばかりの時、まだ誰も友達らしい友達がいなかった頃、父さんに買ってもらったものだ。

——ヒーローなんてこの世にいない、か。

遠藤の言葉が頭の中で響いた。

わかってる。そんなことは。世の中の常識だ。鳥は飛ぶ、ということと同じくらい当たり前の事だ。

どんなに優しい人だって、いつでも弱い人のピンチに駆けつけられるかという、そうでもない。というか、無理なんだ。

結局の所、良い人、悪い人なんていうのは人によって印象が違う。誰からも良い人だと思われてる人だって、正義の味方とは違う。犯罪者を防ぐ為に、何かをするわけでもない。そういうのは警察の仕事だからだ。

だから正義の味方も、きつと、いない。

けれど、だから、憧れる。

だからこそ、どこかに正義の味方がいると僕は信じている。

——ガキだよな……

自分でもわかっている。そんなことは。

だからいろんな人に蔑まれるんだろうし、それが耐えられなくて田上君は辞めたんだろう。

高校生に似つかわしくないのだ。こんな考えも、こんな憧れも。わかっている。けれど、僕はどうしてもヒーローに憧れている。

正義を貫く生き方に、憧れてる。

僕自身が、そうでありたいから。

白衣の男

黒のキャンピングカーが道路を走っていた。

他にも何台かの車が走っていたが、黒のキャンピングカー恐ろしいくらいに溶け込めていない。

側面と後ろの窓には黒い布が被せられていて、横から内側を窺う事は出来ない。車の上にはパラボラアンテナのようなものがいくつも取り付けられていた。

正面からは、白衣を着た中年の男が運転をしているのが見える。右手には携帯電話を持ち、左腕でハンドルを握っている。その向こうは黒い布が隠していて、外からは確認できない。

「本当に頼むよ？君に全てが掛かってるようなものなんだから……ああ、こっちもできる限りのバックアップはするから……」

不服そうな声を上げながら男は通話をつづけた。左手は指で苛立たしげにハンドルを叩いている。

男の目の下にはクマがあった。恐らく全く気を使われていないであろう髪と髭。やせ気味の身体。それらが男の気味の悪さを演出していた。

「だからできる限りのことはするって言ってるだろう？君は君のやる事と彼の心配だけしてればいいんだよ」

ハンドルを叩く速さが上がった。男の声には苛立ちが滲む。

目の前の信号が青から黄色へと変わった。歩道からは、気の早い通行人が歩き出そうとしていた。男はそれに構わず、アクセルを踏む。

赤信号になりかけた所を黒のキャンピングカーが走り抜ける。通行人の十センチほど手前を突き進んでいった。

キャンピングカーの後ろから罵声が飛んできた。男はそちらには目もくれず、通話を続けている。

「ああ、それでいいよ。それ以上の事はこっちでやる……それでいいよ……ああ、じゃあ頼むよ」

通話が終わると、男は携帯電話を隣の座席へ投げつけた。携帯電話がシートで跳ねて、ドアへと当たる。

目の前の信号が赤になった。今度は走り抜けるような事はせず、停車する。

「こっちに着いてさっそくで悪いんだけどさあ、お仕事頼まれてくれる？」

男は黒い布の向こう側へ話し掛けた。

「情報提供があつてね。そんなに凶暴な奴じゃない。大体の場所は携帯電話に転送してあるから、見といて。じゃあよろしく」

返事を待たず、男は一方的に話を終えた。向こう側からも声が聞こえる事は無い。

男の発言から暫くして扉の開く音がした。男がドアを開けたわけではない。前の座席にある両側のドアは開いていなかった。

キャンピングカーの後ろ側のドアが開けられていた。風で揺れる布の向こう側には、誰もいなかった。

ミラー越しにそれを確認すると、男は満足そうに表情を変えた。手元にあるレバーを押し、背後のドアを閉める。ロックが掛かる音と同時に、車内から風が無くなる。

男は信号が青になったのを確認し、ゆっくりと車を前進させた。ビルに埋め込まれた時計は、午後四時四十五分を指していた。

「……ここまでやって上手くいかなかったら、この街を爆破してやろう。どうせ邪魔だし」

などと不吉な事を言いながら、男は楽しそうに笑った。

呼び出し

かすかな振動を腰あたりに感じて、目が覚める。何時の間にか寝ていたようだ。視線の先にある時計は、五時を指そうとしていた。日はまだ落ちていない。窓の外では夕焼け空が広がっている。

制服のズボンから携帯電話を取り出した。液晶には遠藤光一という文字が浮かんでいた。

どうやら遠藤から電話がきたらしい。何の用だろうか。

僕は電話に出るか出ないかで迷った。

遠藤から電話がくる事は稀だ。そして、電話をかけてきた時の用事はロクでもないことばかりだ。

もしかしたら、大事な用があるのかもしれない。

そうやって自分に言い聞かせるようにして、僕は通話のボタンを押した。

「よう、英志。元気か？俺は元気だ。ところでお前は家にいるよな？」

「そうだけど。僕、寝てたところだったんだ。どうしても言い用事なら、寝てたい」

実際はそれほど眠たいわけじゃなかった。むしろ、丁度良い仮眠のお陰で頭は冴えているくらいだ。

そんな状況でも、遠藤の話す内容によっては電話を切りたい気持ちがあった。

これまでのように、「ＡＶ観にこいよ」だとか、「俺の秘蔵エロ画像みせてやるよ」だとか、そんなどうでもよくてロクでもない内容だったら、付き合う気にはなれない。

「そんな怒るなよ。お前が寝てたなんて知らなかった。悪かった」

珍しく遠藤が素直に謝ってきた。普段なら、そのまま自分の言いたいことを言っていく奴なのに。今回はちゃんとした用事があるのか？

「お前に渡したい物があるんだよ」

「変な物じゃないよね」

「安心しろよ。俺はこれまでのお前との付き合いの中で、お前が極度のヒーローマニアだと理解をしたからな。今まで俺は、そのマニアと大切な大切なコレクションを共有しようとしたが、無理だった」
「僕がマニアだとかマニアじゃないとかは置いといて、無理だっかわかってくれたら嬉しいよ。」

「普通は興味示すんだけどなあ……」

遠藤が小声で呟いたが、僕はそれを無視する事にした。遠藤にとってもそれは独り言だったらしく、僕の無視を気にせず話を進める。
「お前が考えているようなことはもう諦めてるよ。もはやこれは悟りの境地と言ってもいい」

「それならいいんだけど。それで、なんの用？」

「いや、それは俺の家に来たらわかる。だから今すぐ来い。例えばんな用事があってもすっ飛ばして来い。必ずだぞ。じゃあな」

「え、ちょっと」

遠藤は一気にまくしたてると、そのまま電話を切ってしまった。

「いや、これはロクでもなさそうな気が物凄くするんだけど……」

急に電話をかけてきて、急に電話を切ってしまった。こういうときはあんまりいい事がないと、僕の今までの経験が告げている。

やっぱり、遠藤がまともな用事で電話をかけてくる事なんてないのかもしれない。

とはいえ、このまま無視しておくわけにもいかない。

僕は制服のまま部屋を出た。階段を下りて玄関へと向かう。

途中でリビングを通ったが、まだ父さんは帰ってきていなみたいだった。

僕は靴を履き、玄関のドアを開けた。遠藤の家へは真っ直ぐ、八

十歩。近い。急ごうとしなくてもすぐに着く。

僕は普通にいつもどおり、例えば学校に行く時とか、コンビニへ飲み物を買に行く時のように歩き始めた。

その時、不意に、唐突に、予期せずに。

視界が真っ白に染まった。

怪人 1

気が着くと、僕はさっきまでと違う場所にいた。

辺りを見回すと、よく知っている風景だ。いつも、僕が通っている通学路だ。一軒家とブロック塀に囲まれている、そんな道。二分もあれば、僕の家へつく。

「なんでここに……」

思い当たるのは、真っ白になったあれのせいってことくらいだ。視界が真っ白に染まって、何も見えなくなった。一瞬、意識を失うような感覚があった。

もしかして頭でも打ったのかと思ったけれど、頭痛がするということとはなかった。どこかに違和感を感じているわけでもない。

とりあえず、遠藤の家に行こうと思った。僕は遠藤の家へ向けて歩きだす。

その時、視界に巨大な何かが入った。

赤いそれは、斧を振り回している。その斧はブロック塀突き破つてを民家を破壊して、暴れまわっている。

——なんだ、あれ。

僕は呆然として、声が出なかった。それに目を奪われ、僕は立ち尽くした。

そいつは豚だった。

ただ、普通の豚とは違う。赤く、民家よりも巨大で、二足歩行をしていた。

僕はそんな豚を見たことをなかったし、そんな豚がいるだなんて聞いたことすらない。

そう、それはまるで。

——怪人じゃないか。

そうとしか言いようがなかった。それ以外に当てはめようがなかった。町を破壊していくそいつは、特撮番組に出てくる怪人そのものだ。

赤い豚は低いうなり声を上げ、斧を振り回している。斧はブロック塀を破壊して、住宅を切り裂いていく。

僕は目の前で起こっていることが信じられなかった。

特撮番組ならかなり見ている。テレビにこういう場面はいくつもあった。言い方を変えるなら、僕はこんな場面なら見慣れている。

赤い豚が動きを止めた。斧を振り回すのを止めて、辺りを見回しだした。

——何かを探している？

怪人 2

赤い豚は獲物を探しているように見えて、それでいて何かに脅えているようにも見えた。

とにかく、見つかるのはマズイ。

赤い豚に気づかれぬように、僕はブロック塀の影へと隠れた。見つからないようにとしゃがんで座り込む。

赤い豚が何を探しているかはわからないが、もしも僕が見つかったら無事ではすまないだろうという事は感じた。

見境なく家を壊しているくらいだから、見境なく人を殺す事だつてあるだろう。

赤い豚が動き出した。足音というには大きすぎる音があたりに響く。

周囲はあまりにも静かで、赤い豚の足音とうなり声以外は聞こえない。

そこで僕は、あまりにも遅すぎる疑問を浮かべた。

なんでこんな事が起こっているのに誰も声を上げない。そして、僕はさっきから誰にも会っていない。こんなことって、あるのか？

時間は夕方の五時くらい。場所は学校の近くの住宅街。

こんな異常なことが起きているっていうのに、誰も姿を見せない。

そうでなくとも、帰宅している学生がいたり、買い物帰りの主婦がいるのが当たり前のはずだ。

それなのに、誰もいない。

そもそも、ここは本当に僕が住んでいる街なのか？

僕の身体を何か、嫌な感覚が駆け抜ける。それは恐怖だった。僕はこの状況に怯えていたのだ。

どこがぼんやりとした感覚の中で感じ取っていたことが、急に鮮明なものに感じ取れた。赤い豚も、誰もいない町も、いきなり現実味を帯びてきた。

徐々に大きくなってくる足音は、確実に僕へと向かってきている。僕は這うようにして近くの家へと向かった。恐怖で足がすくんでいた。

もしここが僕の住んでいる街じゃなかったら。

もし僕以外に誰もいなかったら。

一体僕はどうすればいいんだ？

なんとか玄関へたどり着いた。

何度も見たことのある家だ。僕がこの街で住んできた時間の中で、何度もこの家を見た。僕が学校へと向かう途中の通学路で、さっきも遠藤と一緒にここを通った。

この家には年を取った夫婦が住んでいる。話したことはないが、会釈程度はしたことがあった。

ドアノブへと手を伸ばした。鍵は開いていた。僕は震える手でドアを開ける。

玄関には二足の靴と、サンダルと下駄が一組ずつあった。それなのに、人の気配はない。

僕はそのままりビングへと向かった。

そこにはミカンと給湯ポットがおりてあるテーブルがあり、椅子の近くには食べかけの饅頭が落ちていた。

窓が開いていて、そこからは庭に干してある洗濯物が見えた。その近くには洗濯物が入っている籠がある。

洗濯物を取り込んでいる途中のように。

「なんだよ、これ」

洗濯物を取り入れるのを途中で止めて出かける人はあまりいないだろうし、食いかけの饅頭をその場に置いて出かける人間もまずいないだろう。

まるで、普段の生活の中から人間だけをなくしたようだった。

怪人 3

ここはきつと、僕の知っている街じゃない。

全身から力が抜けて、僕はその場に座り込んでしまう。直後、コンクリートが砕ける音とともに、僕の上を何か巨大なものが通過する。

「うわっ！」

風圧で僕の身体が吹き飛ばされた。近くでメキメキと木が折れる音が聞こえる。僕の視界には吹き飛ばされた屋根が映っていた。

何かが背中に当たり、僕の身体が止まる。痛みは後からやってきた。

自分の目の前で起こったことが信じらず、痛みに意識が向かなかったからだ。

「あ……ああ……」

屋根が無くなっていった。そして目の前には赤い豚がいる。その手に持っている巨大な斧で、この家の上半分を吹き飛ばしたのだ。

赤い豚が僕に向かって手を伸ばしてくる。

——に、逃げなきゃ……

そう思っているのに、僕の足は動いてくれない。

怯えることしかできない。

僕の身体を巨大な手がつかんだ。そのまま僕は上へと持ち上げられる。

身体を締め付ける力は徐々に強くなっていった。豚の低いうなり声が僕の心臓の音と共に耳の奥で鳴り響いた。

——ここで死ぬ？こんな訳の解らない状況で？

僕はついさっきまで自分の家で寝ていた。その前だって、何も無かったわけじゃないけど、極めて普通の生活を送っていたはずだ。死ぬようなことなんて、こんな状況に陥るなんて、絶対にありえなかったはずだ。

それなのに。

心臓が大音量で鳴り響く。息が荒くなり、頭が内側から殴られているかのような感覚に見舞われる。見慣れた街と似ている何処かは、僕には何所もが歪んで見えた。赤い豚は僕を見ていた。荒々しい吐息が吐かれている。

僕は力を振り絞って暴れた。ただこの巨大な化け物から逃れたいと暴れた。言葉にならない声を上げ、身体の束縛を解放とうとして暴れた。

それでも僕は逃げ出すことができない。僕を押しつぶす力は増す一方だ。

——痛い、痛い、痛い！

肉が圧迫される。

骨が軋む音がした。

全身が引きちぎられそうな痛みを感じた。

そして、僕は死を覚悟して——

僕の目の前にヒーローが現れた。

ヒーロー

今、僕の目の前にヒーローがいる。

ポリバケツから這い出した僕は、ヒーローの差し出した手を掴んだ。その手には装甲が付いていてゴツゴツしていたけれど、どこか温かった。

「あの、助けてくれて、ありがとうございます」
僕は立ち上がりながら礼を言った。

さっき、僕が赤い豚に押しつぶされそうになっていた時、目の前にいるこの人が助けてくれた。豚の顔を蹴り飛ばし、僕を掴んでいた手が緩んだところを、助け出してくれた。僕がポリバケツの中にいたのは、この人がそのあたりに隠れていたほうが良いと言ったからだ。

目の前の人は本当にヒーローだった。

黒のプロテクター。顔を覆うヘルメット。背中のバックパック。そして、さっきの必殺技。

辺りは夕焼けに染まりだしていた。僕が赤い豚、つまり化け物見つけてから少なくとも十五分は経っているだろう。それでも、他人の気配は無いままだない。やっぱりここは僕の街じゃない何処かなんだ。

けれどそんなことはどうでもよかった。

僕目の前にはヒーローがいる。子供のころから憧れていたヒーローが。

「えっと、本当にさっきは死にそうで、僕、きっと助けてもらわなかったら死んでいたと思います。あの、だから本当にすごく感謝

してて、それで」

「無事ならよかった」

僕はヒーローのその声に感激する。

一生、夢見たままで終わると思っていた。ヒーローなんて本当は
いないと諦めていた。憧れたままで、いつかは僕も皆と同じように、
興味がだんだん無くなっていくのかと思っていた。いつかはテレビ
も観なくなつて、懐かしく思い返すだけになるのかと思っていた。

それでも、目の前にいるこの人は紛れもなくヒーローだ。僕を助
けてくれて、怪物を倒したヒーローだ。

「それじゃあ、気をつけて」

「あ、あの」

そういうと、その人は跳躍して去ってしまった。

僕は呼び止めようとしたが、聞こえなかったのだろう、見向きも
しないで遠くへ行ってしまった。

人を超えたジャンプ力だ。

僕なんかではとても追いつけない。

けど、仮に追いつけて呼び止められたとして、今の僕では考えが
まとまらなくて、ちゃんと話せないだろう。

僕は、自分の憧れが本当にあったと知れて、それで十分だった。

それでも呼び止めようとしたのは、僕の目の前から消えてしまっ
たら、二度と会えない気がしたからだ。

会話

「なんていうか、末期って言えばいいのか？ 正気とは思えないぜ」
ため息をつきながら遠藤が僕の方に手をやる。

僕の話をもったく信用してないようだ。普通の反応だ。僕だって
他人がそう言っているにも信用しない。

ここは遠藤の部屋だ。僕は座布団の上に座り、遠藤は椅子に座っている。遠藤の勉強机の上にはノートパソコンがある。勉強をしている形跡は無かった。本棚には漫画が大量にある。参考書は一冊も無い。

そして、僕の目の前にはポテトチップスとアーモンドチョコレート
の盛り合わせがあった。

「俺はお前との付き合いが長いからさ、笑って済ませられるんだ。
けどさ、他人から見たらお前は重度の妄想癖持ちヒーローオタクだ
ぜ？ そこを踏まえて冷静になれよ」

「言ってる意味がよくわからないし。信じられないかもしれないけど、
本当なんだ。だってホラ、遠藤から電話貰ってからここに来る
まで、かなり時間が掛かっているだろう？」

時計を見ると、夕方の五時二十分だった。

僕が家を出たのが五時前。この約二十分の時間が、あの出来事が
本当にあったのだと僕に確信させる。

あの後、ヒーローが去っていった直後、僕の視界は再び真っ白に
なった。

気が付くと僕は元いた場所に戻っていた。自分の家の近くで倒れ
ていたのだ。

辺りを見回しても破壊されたような建物は何所にも無い。いつも
どおりの街並みだった。

それでも、あれは本当にあったことなんだ。

「確かにお前が呼び出してからこんなに時間をかけるというのは珍

しいことだ。けどな、だからって『ヒーローと怪人に会った』って言われてもなあ。それに知らない場所に居たとか言うしよ。わけわからん」

「だから嘘じゃないって。本当だよ」

「嘘臭い。ていうか嘘だろ？　またまた、英志君は想像力豊かなんだから」

「だから、本当なんだってば。赤い豚の怪物が現れて、僕、殺されそうになったんだ」

「何だよ赤い豚って。ジブリじゃあるまいし」

「そこに、ヒーローがやってきて」

「変態だろ、そいつ」

「僕を助けてくれて、それで必殺技で赤い豚を倒したんだってば」

「お前、夢の話をしてるんだろ？」

いくら言っても遠藤は信じてくれない。

嘘ではないのだけれど。

「まあ、それはそれとしてだ」

「勝手に話題を変えるなよ」

「嫌だ。変えるね。大体、俺はそのためにお前を呼んだんだぜ。本来の目的を蔑ろにする訳にはいかないだろ」

遠藤は机の引き出しから一枚のCDを取り出した。

CDを受け取ると、表面に油性マジックで「英志のヤツ」と書かれているのいがわかった。

「何これ。すぐくアバウトな名前の付け方だね」

「それ、お前が観たいって言ってた特撮の映画のヤツだよ。たまたま見つけたから、落としといた」

「えっと、あ、ありがとう」

僕はびっくりして戸惑ってしまった。

遠藤がこんなものをくれたのは初めてだ。

いままではアダルトビデオだとか名前も聴いたことの無い漫画とか、そんなものしか渡してこなかったのに。

「何かあったの？」

「別になんでもねえよ。、ああ、強いて言えば食わず嫌いもよくないのかなーって」

遠藤は皿の上のポテトチップスに手を伸ばした。

「気が引けるなら金でも払うか？ 千円でどうだ。手ごろな値段だろ」

「落したヤツで金儲けしたら犯罪だよ」

「英志は固いな。まあ、いっか。とりあえず用事はいいつな。観終わったら感想教えろよ」

僕は皿の上のアーモンドチョコレートを口に入れた。

「感想って、遠藤はまだ観てないの？」

「いやあ、俺っていいやつだろ？ だからさ、自分で見る前に親友に見せてやろうと思ったわけよ。俺はその間別のヤツを観てればいいしな」

嘘臭い事を真顔で言っただけ。遠藤っていうのはそういうやつだ。

わけわからないし、変なところもたくさんある。けど、根本ではいいやつだ。

「とにかく、ありがとう。うれしいよ」

「じゃあ、僕帰るよ。そろそろ父さんも帰ってくる頃だろうし」

「そうか、じゃあな」

遠藤の部屋は一階にある。廊下に出たらすぐに玄関だ。

そして僕の家と遠藤の家の距離は近い。ここを出たら数分で家に帰れる。

父さんは六時くらいには帰ってくる。今の時間は五時三十分。今から風呂を洗ったり米を磨いだりと、やることはたくさんある。

僕の家では米を炊いたり洗濯物を干したりするのは僕の役目だ。

その代わり、父さんは仕事に買い物をしてくれて、僕の弁当を作ったり晩御飯のおかずを作ってくれる。

「ああ、そうだ。英志」

玄関で遠藤に呼び止められた。僕は靴をはきながらその言葉に耳を傾ける。

「なんだよ」

「いや、さっきのお前の夢の話なんだけどさ」

「本当にあったことだよ」

「お前さ、そいつがヒーローだと思えるの？」

「どうということ？」

「そいつはさ、お前を助けるために怪物を倒したんだろ？ 怪物だって生きてるんだぜ。もしかしたらさ、怪物にだって何か事情があったかもしれないじゃないか。それでも、お前の言うヒーローはそいつを殺したんだ。それでもお前、そのヒーローが正しいって言うの？」

この質問は、ふざけてる訳じゃないというのはわかる。僕を困らせたいただけの時はもっと軽い口調で喋るからだ。

けど、今はそんな軽さは無い。本気で答えが知りたくて、僕に質問をしている。

「……死にかけの僕を助けてくれる人が、悪い人なわけないじゃん。それこそ、ヒーローにだってあの赤い豚を倒す理由があったんだよ」僕は玄関を開け、外へと出た。

夕や明けは少し青く変わっていた。暖かいような寒いような、微妙な風が吹いている。

「じゃあね、遠藤」

「ああ、変な事聞いて悪かった。また明日な」

家

家に帰ると、父さんがいた。今日は早帰りだったのだろうか。

リビングにあるソファ―に座り、ぐったりとしている。きっと、仕事に応えたのだろう。

「ああ、英志。帰ってきたのか」

父さんは僕に気がつく、ソファ―から身体を起こした。顔を見ると、疲れているのだということがよくわかる。

「何、そんなにつらいの？ 今の仕事って」

今はあまり景気がよくない。町工場もそれはきっと例外じゃないはずだ。

「いや、仕事はそこまでじゃないんだが、ちょっとな」

「そっか。今から米を磨ぐから待っててよ。早く帰ってくるんだったら、教えてくれればよかったのに」

そうすれば前もって風呂を入れておくことができたし、米も早めに炊けて準備ができた。

僕も色々な事があって疲れているといえど疲れているけど、きっと、父さんほどじゃない。

僕は米を三合分とって、ボウルに入れた。浄水器の蛇口をひねり、水を出す。

米をかき混ぜるようにして磨いでいく。これを数回繰り返せば、あとは水を張って二十分ほど寝かせればいい。

その間に風呂場に行つて、風呂を掃除してお湯を入れる事くらいはできる。

「済まないな、英志。お前には無理をさせてしまつて」

唐突に父さんが口を開いた。

「何言っただよ、父さん。たかが家事じゃないか」

そうだ。たかが家事だ。

その代わり父さんは働いて、男手一つで僕を学校に通わせてくれている。進学校に通わせてくれているのも父さんだ。

「別にいいよ、これくらい何とも無い。なんなら、今日のおかずは僕が作るよ」
そう、これくらい何とも無い。今日、僕は死ぬような思いをして、憧れのヒーローに会った。その時の衝撃と感動に比べたら、こんなことは大したことじゃない。

父さんにも今日会ったことを話そうかと思ったが、やめた。

さすがの僕も、父親を相手にしてまでヒーロー、ヒーローと喋るのは恥ずかしい。

「本当に済まないな」

父さんのその言葉は、とても悲しそうで、今にも消えてなくなりそうだった。

薄暗い道を白衣を着た男が歩いている。

無造作に伸ばされた髪と髭。眼の下にある巨大なクマ。そして街中で白衣を着ていることから、誰かが変質者として通報してもおかしくは無い。

ここは久坂英志や遠藤光一の住んでいる住宅街とは離れた場所にある高級住宅街だ。

最近に作られた建物が辺り一体を照らしている。

それなのに、男は光を避けるようにして薄暗い道を進んでいた。

男は住宅街をそのまま通り過ぎ、川原へとたどり着いた。

川原には一台のキャンピングカーが止まっていた。男はそれに向かってふらふらと歩いていく。

男はキャンピングカーにたどり着くと、胸ポケットからカードを

一枚取り出した。

真っ黒な色をしたそのカードを通常のキャンピングカーにはない差込口にいれ、これまた普通は無いパネルを操作して、自分の目をカメラのようなものに近づけた。

青い光が男の網膜を調べ、データと照合させる。

一致したと認められ、キャンピングカーのドアが開いた。男はカードを差込口から取り出すと、そのまま運転席へと座り込み、そして脱力した。

少し時間経ってから、男は助手席においてあるノートパソコンを開いた。

何本ものコードがそのノートパソコンに繋がれていて、それがキャンピングカーの後ろの方へと続いている。

運転席と助手席よりも後ろ側は黒いカーテンが敷かれていて、見ることができない。

男は思い出したかのように口を開いた。

「今日も、目標消失まできっちり時間内だ。身体の調子はどうだい？」

「いえ、問題ありません」

カーテンの向こう側から声が聞こえた。

だが、白衣の男は不服そうに顔を歪めた。心底気に入らない、といった様子だ。

「嘘は意味がない。君の身体はもう限界が近いんだ。薬が症状を緩和させていると言っても、君の身体は君という器を忘れてきているはずだ」

カーテンの向こうから声は聞こえてこない。

「君に必要なのは見栄を張ることじゃない。事実を伝えることだ。そんなの、最初からわかっていたことだろう？」

白衣の男はノートパソコンを操作して、ファイルをクリックした。すると、パスワード入力画面が現れ、男はそれにパスワードを入力していく。

キャンピングカーの中にはカタカタ、という音だけが聞こえる。それ以外の音は無い。

しばらくして、白衣の男は舌打をした。

「あくまで見栄を張る気か。それならそれでいい。この件に関しては大目に見よう。結局は君の問題だ。けど、その他の指示には従ってもらおう。そのシステムを失うわけにはいかない」

パスワードを入力し終えたのだろう。男の手が止まった。

エンターキーを押すのと同時に、いくつかのウィンドウが画面に現れた。

「仮想空間でのことですが」

前触れもなく、声がキャンピングカーの中で発せられた。

カーテンの向こう側からだ。

「一人誤って転送されていました。変異種でない男性です」

「ああ、アレか。転送装置のミスだろう。しばらくメンテナンスをしてえいないからな。念のため、調べておいた方がよさそうだが…その辺の指示は明日にする。君は明日に備えてくれ」

「わかりました」

キャンピングカーの中では、ノートパソコンの光だけが輝いていた。

天月葵 1

翌日。

ぼんやりとした頭を抱え、起きた。

昨日、体験した事が気になって、あまりじっくり眠れなかったのだ。

階段を下りてリビングへ行くと、若干酒臭かった。僕が布団に入った、父さんは一人で酒を飲んでいたようだ。

台所にはビールの空き缶がいくつもあった。父さんが酒を飲む事はあまりない。やっぱり、仕事がつらいのだろう。

父さんは七時くらいに家を出る。今は七時十五分だ。僕はいつも八時過ぎぐらいに出ている。家と学校が近いからだ。

僕は朝食のパンをトースターで焼き、それにバターを縫って食べた。

リビングに置いてあった父さんの作ってくれた弁当をかばんに詰め、身支度をする。

テレビでは、どこかの田舎で集団失踪事件があったと告げていた。物騒な世の中だ。昨日見たような怪人がいなかったって、十分に。

時計を見ると七時四十五分。

いつもよりも早い時間だったが、僕は家を出た。

住宅街の入り組んだ道を抜けて、大通りに出る。その途中で遠藤と会った。会った、というよりは遠藤が追いかけてきた、というのが正しいかもしれない。

「よう、英志。今日は早いな」

若干息を切らせながら、遠藤は喋る。

「今日、俺たちのクラスに転校生が来るんだぜ。知ってたか？」

「転校生？」

「そう。転校生。どんなヤツかな。可愛い女子だったらいいな」

にやにやした顔をしている。頭の中では何を考えているのだろう。
「あのさ、ウチの学校は転校生の受け入れてやってないんじゃないの？」

僕達の通っている秋川高校は進学校で、外部からの編入は行っていないはずだ。

「それに、今は五月だよ？　こんな時期に転校っておかしいでしょ」
「そこは家庭の事情ってやつじゃねえの。物凄く頭のいいヤツだったら、ウチの学校みたいなどこでも特例で編入させる事があるかもしれない」

「そうかなあ」

何でこいつは学校にも着いていないのにこんなことを知っているのだろう。

僕は交友関係が広いわけじゃないが、極端に少ないわけでもない。遠藤は「転校生がやってくる」なんて情報を手に入れたら、即座に周囲にばら撒くヤツだ。それなのに、僕は今、この瞬間まで転校生がくる、という事を耳にした事が無かった。という事は、昨日、僕が遠藤の家から帰ってから手に入れた情報なのだろう。

それが遠藤の妄想じゃなければ。

「お前、俺を信じろって。俺は嘘をつかない男だぜ。神に誓ったっ
ていい」

「さらに信じられなくなった。転校生の情報って、誰から聞いたの
さ」

「情報源か。教えてほしいか？」

「少し気になる」

僕の言葉に対して、遠藤はしっかりとタメを作って言った。

「それは、秘密だ。言ったら殺されちゃうからな」
ちよつと殴りたくなってしまった。

横断歩道を渡ると、僕達の通う学校が見えてきた。

僕の家から徒歩にして十五分。多少入り組んだ道を抜け大通りを
突き進めばつく。間には横断歩道が一つあるだけ。

物凄く近い。

校門をくぐると、右手にグラウンドが見える。その周囲には40メートルトラックがある。その向こう側にはプレハブ四階建ての部室棟。校門からの道を真っ直ぐ進んだ先には、校舎。左手には校舎と繋がった建物がある。その一階は体育館で、二回は食堂。三階はプールと言う、微妙な構造になっている。十年前に改装工事をしたらしく、比較的校舎は新しい。グラウンドは人工芝だ。結構値の張る材質のようで、かなり状態がいい。週に一度、手入れも行っているらしい。

校門から下駄箱までの道の間には、僕達以外にも何人かの生徒がいた。中にはカップルもいる。グラウンドではサッカー部と野球部が朝連をしていた。

「まあ、情報源はともかく、こいつはチャンスだぜ」

「チャンス？ 何の？」

「馬鹿だなあ。ヒーロー同好会だよ。あと一人分埋めなかったら、俺たちの同好会はなくなっちゃうんだぜ。忘れてたわけじゃないだろう？」

「あっ」

正直忘れていた。

昨日は怪物に殺されそうになったりヒーローに会ったり、遠藤から借りた映画を見たりと、別の事が忙しくて、記憶から押し出されてしまっていた。

遠藤は呆れたようにため息をつく。

「俺がこんなにも協力的な姿勢を示しているのに、久坂君はどうでもいいと思ってたんですか。ああ、ショックだ。とてもショックだ。英志がそんなやつだったなんて思いもしなかった」

「悪かったよ。昨日は別の事で頭がいっぱいで」

「赤い豚とヒーロー様の事で頭がいっぱいだったのか？ ふざけんな、現実を見ろよ。俺はお前をそんな弱い男に育てた覚えは無いぜ」「遠藤に育てられた覚えは無いよ」

「まあな。俺も育てた覚えはねえ」

「自己完結はやめろよ」

「ともかくだ。転校生が男にしろ女にしろ、俺たちの同好会の悪評はまだ耳に入っていないはずだ。他のゴミ虫どもが集る前に、俺たちが奪ってしまえばいいんだよ。同好会は三人になって、お前は幸せだ。いいことしかない」

「そんなに上手くいくとは思えないけど」

世の中、そんなには甘くない。思い通りに物事が運ぶなんて事はまず無い。なのに、遠藤は自信に満ち溢れた顔でこう言った。

「俺に任せろ。なんとかする」

正直、あまりいい予感がなかった。

天月葵 2

ホームルームの時間が来た。

遠藤は「俺に任せろ」と言っただけ、何処かへ行ってしまった。学校内にいるのは確かだが、一体何所へいったのだろう。

僕の後ろの席には、遠藤の鞆が置いてある。

「ねえ、遠藤君何かあったの？ 鞆はあるけど、教室にいないし」隣の席の笹倉さんが尋ねてきた。髪は短く、目が大きい。面倒見のいい人で、遠藤はよく笹倉さんにノートを借りていた。曰く、「笹倉のノートが一番わかりやすい」だそうだ。

笹倉さんは合唱部に所属している。部員の数には中学高校合わせて二十人以上。ヒーロー同好会とは雲泥の差だ。

「野暮用があるっていったよ。心配しなくても大丈夫だと思う」
「ふうん、そうなんだ」

「それじゃあ、ホームルームを始めるぞ」
ジャージを着た担任教室に入ってきた。生徒は喋りながらも席に座っていく。

遠藤以外は全員出席だった。そして、誰も座っていない席は二つある。

——本当に転校生がくるのか。

「そこの空いてる席は……遠藤がないのか。しょうがないヤツだな」担任が座席表と照らし合わせながら言った。

僕たちがこのクラスになってたから一ヶ月と少しが経過したが、まだ担任の山崎先生は座席と名前が一致していないらしい。

山崎先生はコホン、と咳払いをした。山崎先生は若い。受け持つ

ている教科は体育。体格がよくて、もちろん運動神経もいい。けれど、仕草がいちいち古臭い。

「今日は皆に転校生を紹介する」

教室がざわついた。それはそうだろう。僕だって、朝に遠藤に聞かされていなければ、声の一つくらい上げていたと思う。

転校生なんて言葉は日常ではまず出てこない。そんな事は普通には無い。小学校のころならともかく、進学校の中学と高校では、まずありえない言葉だ。

「それじゃあ、天月^{あまつぎ}、入ってくれ」

ドアが音を立てて開けられた。みんなの視線がそこに注目する。けれど、そこにいたのは。

「――だからさ、入ってみようぜ。俺達の同好会に。活動なんてしなくたっていいんだ。そんなのは、有って無い様なものなんだから。君はいてくれるだけでいい。もう、君なんかと同じ同好会にいられたらそれだけで幸せだよ」

など抜かす、遠藤だった。

後ろ向きに歩きながら、誰かに向かって話を続けている。その相手はどうやら転校生、だと思う。僕は窓際の方の席なので、僕の位置からだと遠藤が邪魔になってその人物が見えない。

「何をしてるんだ、お前」

山崎先生が遠藤に向かって言った。怒っているのではなくて、呆れたような口調だ。

「あ、先生。今日もいい天気ですね。僕は元気ですよ。それじゃあ、後で。話が逸れたね。とにかくだ、僕は君と一緒に同好会にいたいんだ。だから頼むよ。よろしく！」

遠藤が転校生に手を差し出したらしい。しかし。

「私は何所に座ればよろしいですか？」

転校生の口から出てきたのは、遠藤に対する返事ではなく、山崎先生に対する質問だった。

「ちくしょう、失敗した」

そう言いながら、遠藤は自分の席に座った。

「何やってたの、遠藤君」

笹倉さんが質問した。それはきっとクラスの誰もが抱いている疑問だろう。

「勧誘だよ、勧誘。同好会が人数減っててヤバいから、あの女子を誘ってたんだよ」

悪い予感が当たったみたいだ。

「出会い早いもの順、第一印象が命というからな。俺の精一杯の誠意を伝えたんだが、駄目だった。敵は強大、俺はあえなく撃沈。いい作戦だと思ったんだけどなあ」

「あのさ、遠藤。僕は確実に第一印象が最悪になったと思うんだけど」

笹倉さんも、僕の隣で「馬鹿じゃないの」と呟いていた。

「そんな事は無いさ。きつと大丈夫だ」

こいつは何を根拠にこんな事を言っているのだろう。不思議で仕方が無い。

教卓の前では転校生が自己紹介をしていた。

紹介、と言えるほど喋っているわけではなかったが。

「天月葵あまつぎ あおいです。よろしくお願いします」

転校生は長く、黒くて綺麗な髪をしていた。背は平均的な女子くらい。そして……

「英志、お前、今あの子可愛いなって思ってるだろう」

「いや、そんなことはないよ」

口ではそう言ったが、遠藤の予測は大正解だった。けれど、そんなことがバレたら後が面倒だ。

クラスの他の男子も、同じような事を話している。女子はちょっ

と不服そうだ。

「天月、何か皆に言っておきたい事はあるか？」

山崎先生が転校生へ言った。

クラスに早く溶け込めるように、という配慮なんだろう。

「いえ、特に何も」

そう言った転校生の口調は、はっきりとしていた。

普通、こういう時は緊張して何もいえないものなのだろうが、転校生にその様子は無い。

何も言いたくないから何も言わない、と言っているようだった。

「そ、そうか。なら、誰か質問はあるか？」

すると、何人かの男子から手が挙がった。

その中には遠藤も入っている。

「好き嫌いがありますか？」

「特にありません」

「趣味とがありますか？」

「ありません」

「何で転校してきたんですか？」

「親の都合で」

「好きなバンドとかありますか？」

「音楽は聴きません」

「テレビは何観ますか？」

「テレビはあまり観ません」

「彼氏いますか？」

「いません」

などなど。

「表情一つ変えないとはな」

質問を終えた遠藤が呟いた。「彼氏いますか？」と聞いたのは遠藤だ。

「何聞いてんだよ。こっちが恥ずかしい」

「まあ、隣のヤツに頼まれたからな」

そう言って遠藤は左隣の佐藤君を指差した。

「ま、お前も聞きたかったんだから別にいだろう？」

「ちがうって」

一通り質問が終わり、ホームルームも終わりの時間になってきた。「それじゃあ、天月はあそこの空いている席に座ってくれ。皆、仲良くするんだぞ」

丁度その時、鐘が鳴った。係りが号令をし、ホームルームが終えると、山崎先生は職員室へと帰っていった。山崎先生はいつもなら鐘が鳴ってもホームルームを続けるが、今日は早めに切り上げた。

「気を使ったわけね」

遠藤が廊下を見ながら言った。

なるほど、転校生を一目見ようと、男子女子問わず生徒が沢山いた。

そしてもうすでに転校生の周りに包囲網ができている。

「これじゃあ、同好会に誘うのは無理そうだね。近づけそうに無い」それ以前にどんなに頼んでもあの転校生が『ヒーロー同好会』に入ってくれるとは思えない。

けれど、遠藤はまたもや堂々と言い放った。

「大丈夫だ。俺に任せろ」

その言葉で、僕は早く同好会に入ってくれそうな人を見つけようと決心した。

天月葵 2 (後書き)

やっとヒロインが出せました。

名前はベタに。登場方法もベタに。遠藤以外は。しかし勝手に暴走しまくるな、こいつは……

天月葵 3

昼休みになった。教室の中では弁当の匂いが充満している。僕も、父さんの作ってくれた弁当を食べていた。

ホームルームが終わってから何人かの人に声をかけたが、結局、誰一人として同好会に入ってくれなかった。

例の「帰宅同好会」の生徒にも声をかけえたが、あまり言い返事は返ってこなかった。どうやら、「ヒーロー同好会」というステータスを得たくないようだ。

——評判が悪いと他の人が入ってくれないなあ。どうしよう。

「手ごわいぜ、彼女。俺、全然相手にされてない」

そう言ってきたのは遠藤だ。僕の後ろで購買で買ってきたパンを食べている。

「そいやあ知ってるか？ 天月葵って、バレーの時間の時、すごかったらしいぞ」

「ああ、知ってる。運動神経抜群なんだって？」

聞いた話によると、天月葵は体育で行ったバレーボールで、類まれなる運動センスを見せ付けたらしい。バレー部を凌駕するほどの腕前だったと言う。

「お陰で運動部という強大な敵を作ってしまった。それにあいつ、スタイルもいいからな。下心丸出しの野郎どもが沸いてる。特に水泳部とか水泳部とか水泳部とか」

「遠藤も下心丸出しだろう？ 遠まわしに付き合ってくださいって言ってるようなもんじゃないか」

ホームルーム中からの言動の数々は、そうとしか言いようが無い。元々女子にちょっかいを出すような奴ではなかったのだが、天月葵に対しては驚くほどに積極的だ。

「いや、それは違う。俺はお前の為を思って行動してるんだぜ？」

それに、人はいつ死ぬかわからないんだ。もしその時彼女がいたら、可愛そうだろう？ だから俺は彼女はつくらん」

信憑性が全く無い。

とにかく、遠藤を当てにできないことが確定したということは確かだ。

正直、一目で新しい同好会のメンバーの獲得ができなかったら、次の日からも空振りに終わってしまう気がしてならない。

こうなったら、中学の時に同好会のメンバーだった人たちに頼むしかないかもしれない。

泣き落としなんて事はしたくないが、そうするしかない気がする。

「つーかよ、何で英志はそこまで『ヒーロー同好会』に拘るんだ？ 話題の合いそうな奴を見つけて、そいつと家とか店とかで話すだけなら、同好会の必要ないぜ？」

「それはそうなんだけどさ」

確かにそれはそうだ。

他人にそういった趣味を知られたら嫌な顔をする人はいるだろう。田上君みたいに、「ヒーロー同好会」という肩書のせいで肩身の狭い思いをする人もいるかもしれない。でも。

「なんていうか、誰かに隠れてやるより、堂々としてた方がきっと楽しいと思うんだよね」

僕はそう思う。他の人は違うかもしれないけど、僕はそう思うてる。

「お前の考えてる事は、イマイチよくわからん」

僕だって遠藤の考えていることがわからないことは沢山ある。

「僕は弁当を食べ終わったら勧誘にいくよ。遠藤は？」

「言わせるなよ、恥ずかしい」

遠藤はなぜか頬を赤らめて言った。

どうせ天月葵に勧誘という名のちょっかいを出しにいくのだろう。十分恥ずかしいことをしていると言うのに、口に出すことを恥じらう必要ないと思う。

「クールで手厳しく運動神経抜群でスタイルもよく、おまけに美人ときたもんだ。なんかのギャグだろ、あいつは。もう少しこう、隙っていうもんがあってもよさそうだけどな」

「ギャグとか言うなよ。失礼にもほどがある。それに、天月さん来てるよ」

噂をすればなんとやら、だ。

天月葵が数人の女子と一緒に教室に入ってきた。その中には笹倉さんもいた。転校生を放っておけなかったのだろう。購買に行ってたのだろうか。それぞれの女子の手にはパンや飲み物が握られている。

天月葵が持っていたのは、天然水と固定系のカロリー補給食だった。女子らしさが全く無い。

「つうか彼女、こっちに來てるぞ。俺の積極的なアプローチが実を結んだんだな！」

パン、と遠藤が手を叩いた。

「いや、笹倉さんの席に行きたいだけじゃないの？　いつも女子はこの辺で固まってるし」

というか、それしか考えられない。天月葵からしてみれば、遠藤は鬱陶しいことこの上ないだろう。

入る気も無い同好会の勧誘ひたすら続け、纏わり付いて来るんだから。

そんな相手に好印象を持っているわけが無い。ずっと無視を続けてるってことは、きつとそうなんだと思う。

「まあまあ、見てなって」

例のごとく、遠藤にはよくわからない自身が満ち溢れている。

天月葵 4

笹倉さんが自分の席に座った。そのほかの女子も、自分の椅子を持ってきてその周りに座った。天月葵もそうしていた。

「どう？ 俺と一緒に同好会に入ってくれる気になった？」

そこに遠藤が話しかけに言った。見てるこっちが恥ずかしくなってくる。

「遠藤君、もう止めたほうがいいわよ。天月さん、困ってるじゃない」

笹倉さんが立ち上がった。

他の女子も口には出さないが笹倉さんと同じ事を思っているのだろう。その目には敵意があった。

その一方で天月葵は別のところを見ている。辺りを見回し、何かを探しているようだ。

「あのなあ、こっちは廃部の危機なんだよ。いや、同好会だから廃会か。まあ、そんな事はどうでもいいんだ」

「なんで関係の無いことで自己完結してんのよ。気持ち悪い」

僕も全くその通りだと思う。

「うん、まあ、今回は俺が悪かった。ともかくさ、俺は天月葵に同好会に入ってほしいの。合唱部の美由紀はお呼びじゃないの。お前が代わりに入ってくれるって言うなら別だけど」

美由紀、というのは笹倉さんのことだ。

「うっさいバカ。なんで私がアンタのよくわからない同好会に入らなきゃいけないのよ」

笹倉さんの頬が赤くなったのは気のせいだろうか。

「言っとくけど、そのよくわからない同好会を設立したのはそこにいる英志だからな。お前の言葉はすべて英志の胸に突き刺さったぜ」

遠藤が僕を指差した。僕を話題の中に盛り込むのは止めてほしい。遠藤と笹倉さんの口喧嘩は、今、いろんな人からの注目を浴びかけているのに。

笹倉さんは僕がいることに気がついていなかったか僕がいることを忘れていたのか、僕を見ると早口で誤ってきた。

「久坂君、いるってわからなくて、いや、えっと、そういう意味じゃないくて、このバカがよくわからないって事で、同好会のことがかしいって意味じゃなくて、いや、うんと、ゴメン……」

「いや、いいよ。気にしてないし」

本当は笹倉さんの言葉はかなり心に刺さった。目の前であんなにハッキリ言われたら、さすがに傷つく。

それに、隣の席なのに僕が存在に気がついてなかったという事も少なからず僕の心にダメージを負わせていた。

「アంతのせいだからね！」

笹倉さんが遠藤を睨みつけた。

声を大きくしたせいで、余計に注目が集まってしまった。

「落ち着けよ、美由紀」

「何よ！」

笹倉さんと遠藤の言い合いはヒートアップしてしまった。

顔を真っ赤にして詰め寄ってくる笹倉さんを、なぜか遠藤がなだめている。

「どうどう」

「バカにしてるの！？」

笹倉さんが怒るのも、わからなくは無い。

「一体、何やってるんだろう……」

ため息が出た。天月葵にひたすら話しかける遠藤を見ているのは恥ずかしいが、笹倉さんと痴話喧嘩もどきをしている遠藤を見るの

も、違う意味で恥ずかしい。

どうせなら、まだ勧誘を名目にしている方がマシだ。
遠藤のターゲットだった天月葵はというと――

「いた」

天月葵が声を発した。

声というよりは、呟きと言った方が正しいかもしれない。

そんなに大きな声じゃなかったし、遠藤や笹倉さんの声にかき消されそうなのに、なぜか僕にはハッキリ聞こえた気がした。気のせいだろうか。

そして気のせいじゃなければ、天月葵は僕を見ている。

天月葵が立ち上がった。殆どの生徒は遠藤と笹倉さんの痴話喧嘩を見ていた。

だから、多分、彼女の行動には気がついていないと思う。

天月葵は僕のほうに向かって来た。

無言で、無表情で。

今朝のホームルームの時のように、遠藤の言葉を見無視し続ける時のように、歩いている。

「久坂君」

「は、はい」

天月葵が発した言葉に反応し、僕は反射的に返事をした。

なんで天月葵が僕のところにきたのかが解らなかった。

それに、天月葵は僕の名前を呼んだ。僕は自己紹介なんてした覚えはないし、先程の様子から察するに、彼女が遠藤と笹倉さんの痴話喧嘩を聞いていたとは思えない。

どうやって僕の名前を知ったのだろう。

そんな疑問は、次の言葉で吹き飛んだ。

「今日の放課後、時間ある？」

そんな言葉を、天月葵は表情一つ変えずに喋るのだ。

「着いてきてほしい場所があるんだけど」

僕は驚いて言葉を失ってしまった。

そんな事を言われるだなんて、思いもしなかったから。

それでもなんとか「別に無いけど」という一言をひねり出した。

「そう。よかった」

そう言って、天月葵は踵を返した。

それを見た僕は、何故か何も考えず、次の言葉を発していた。

「あのさ、入る部活って決めてるの？」

天月葵を引き止めるような形になってしまった。彼女は席へ戻ろうとするのを止め、僕の方へと顔を向ける。

何でそんなことを言ったのかはよく解らない。

ただ、色々と混乱していたせいだと思う。そうだと思いたい。

「決めてないならさ、僕達の同好会に入らない？ 遠藤が、えっと、遠藤って言うのはあのうるさい奴の事ね。その遠藤が何回も言ってると思うんだけど、僕達の同好会は人数が足りないんだ。もしよかつたらどう？」

僕はそれを一気にろくに息継ぎもせず喋っていたような気がする。息が苦しいはずなのに、頭の中が真っ白になっていて、そんなことも考えられなかった。

僕の話を聞くと、天月葵は考え込むように瞼を閉じた。

ほんの少し、間が空く。その時の僕の心臓は、とにかく暴れまくっていた。

そして、目を開くのと同時に天月葵はこう言った。

「いいわ」

それだけを言うと、天月葵は女子たちの固まっていた場所へ戻っていった。

天月葵が去ってから、僕は座ったままだった事に気がついた。せめて、目線ぐらいは合わせるべきだったかもしれない。

僕と天月葵のやり取りを遠目から見ていたのか、遠藤は皆に聞こえるような声でこんなことを言っていた。

「なあ、美由紀」

「何よ!」

「俺はモテないと思うんだ」

「は?」

「好き放題やってるし、正直うざったいだろうし、俺が女子にモテないのはわかるんだ」

「遠藤君、アンタ、何言ってるの?」

「それでもさ、俺があんなにひたすら話しかけても完全にシカト決めた天月葵が、何故か英志に自ら話しかけて、さらには何であるに好意的なのか、俺は理解ができないんだ。あいつだってモテるわけではないのに、どうしてこうも差がつくのか、俺には納得できないんだ。これが月を見るスッポンの気持ちか。雲泥の差って奴か。うわ、なんだこれ。悲しくなってきた。なあ、どう思うよ、美由紀」

「わ、私は知らないわよ」

「英志、後で屋上に行こうぜ。いや、つうか来いよ。必ずだぞ。のしてやるからな」

最後に遠藤が何を言っていたが、そんなことは僕にはどうでもよかった。

ともかく、僕は何故か天月葵と放課後に何処かへ行く約束をし、彼女を「ヒーロー同好会」へと誘うことに成功していた。

放課後 1

帰りのホームルーム中、僕は山崎先生の言っていることが全く頭の中に入ってこなかった。

原因は一つ。昼休みに天月葵と何所かに行くという約束のせいだ。僕は女子との係わり合いに積極的なわけじゃないし、普通の男子高校生よりは女子に対する興味が無いという自信がある。

そんな僕だって、転校生の美少女と何処かに行く、という約束を交わしたらどうしたって気になってしまう。

「英志はいいなあ。放課後は愛しの天月さんとデートだもんなあ」
後ろから冷かしてくるのは遠藤だ。

昼休みの時から、ずっとこんな調子だ。自分が無視され続けている、僕に対しては彼女の方から話しかけてきたのが気に入らないらしい。

まあ、単に僕をからかいたいだけなのかもしれないが。

「多分、そんなんじゃないよ」

「ほう。多分。多分か。つまりはそういう期待が無いわけじゃないんだな？」

別にそういう意味で言ったわけではないのだが、遠藤はそうとは思ってくれなかったらしい。

「でも、愛しの彼女は転校初日から掃除当番だ。残念だな。待たなくちゃいけない。いや、待つ時間も幸せのうちか？」

ウチのクラスは出席番号順で掃除当番を決めている。

天月の出席番号は四。その以降の出席番号は一つずつ、ずれたことになる。

ホームルームが終わり、掃除が始まった。

僕は荷物をまとめ、廊下へ行くことにした。

僕が教室にいたって掃除の邪魔になるだけだし、掃除が終わるまで待つんだったら何所にいたって一緒だ。

「やあ。久坂」

廊下に出た瞬間、声をかけられた。

声の主は田上君だった。昨日彼の出した退部届けは、今、僕の鞆の中に入っている。

「田上君。どうしたの、一体」

正直、僕と田上君の接点はあまり無い。中学二年生の頃、その時に一度だけ同じクラスになったことがあったが、それっきりだった。今の僕のクラスは一年八組で、田上君は九組だ。

なにか接点があるとすれば、「ヒーロー同好会」くらいのものだったが、田上君は昨日、僕に退部届けを出している。きっと先生にも退部届けを出していることだろう。

「なんていうか言いにくいんだけど」

田上君は気まずそうに言った。

「やっぱり、同好会を辞めるの、取り消そうかと思って「え？」」

僕はびっくりして、手に持っていた鞆を落としてしまった。

「おう。どうしたんだよ、田上」

僕の背後から遠藤が現れた。

「お前も天月さんを見に来たのか？　しかし、彼女には先約があるぞ。まあ、見るのは自由だ。その相手も文句は言うまい」

余計なことを言ってくれる。

「それマジ？　誰だよ、相手って」

田上君は興味津々だ。

けど、僕としてはその相手が誰だか、知られたくない。

「田上君が退部届けを取り消すってさ！」

僕は田上君の言葉を掻き消すように叫んだ。

それを聞いた遠藤は、田上君を見た。というか睨みつけた。
田上君はそれに気おされたらしく、一步後退りをする。

「何んで睨んでんの」

この状況でどうして睨むのが、僕には判らなかった。

「そうか。お目当ては天月葵か」

遠藤が口を開いた。

「なるほど、大体わかったぜ。お前がどんなヤツなのか」
後のほうの言葉は、呟くように小さな声だった。

「なんだよ。どうしたんだよ、遠藤」

僕は遠藤が心配になってきた。

今日一日の行動で遠藤が変な奴だというのは証明済みだ。

けれどその上に、ぶつぶつと独り言を呟くようになったら、変人
を通して犯罪者予備軍の仲間入りだ。

一応友人として、あまり人の道を外れてほしくない。

「お前、どうして田上が急に辞めないって言ったのかわからないの
？」

まるで世間一般常識を知らない人間を馬鹿にするような口調で、
遠藤は僕に問いかけた。

しかし、僕には全く見当が付かない。

無言でいる僕を見た遠藤は、あのな、と前置きをしてから喋った。

「田上はな、あのクールで手厳しく運動神経抜群でスタイルもよく
おまけに美人な天月葵と一緒に同好会に入っておきたいんだよ。だ
から退部届けを取り消すって言ってんの。つまりそういうこと。男
の子なんだから当たり前だろ？」

当たり前と言われても、とまで考えて、僕は理解した。

もしかしたら、田上君は彼女に惚れているのかもしれない。

そうでなくとも、好意は抱いているはずだ。だから、なるべく近

くにいたい。

つまりはそういうこと。

「お、おい。止めてくれよ、遠藤」

それを公衆の面前でさらけ出された田上君はたまったもんじゃない。

顔を赤くし、他の生徒からのからの視線を気にしている。

「まあ俺はこういうヤツが出現することまで見越して、彼女を誘ってただけだな」

得意げに胸を張る遠藤。

もしそれが本当だったのだとしたら、同好会のメンバーが増えるのはうれしいけど、複雑な気持ちだ。

その人たちは「ヒーロー同好会」に入りたいのではなく、「天月葵と一緒に同好会」に入りたいだけなのだ。

「そ、そういえばさ、なんで天月さんは内部生のクラスに転入したんだろうね」

田上君が無理やり話題を変えようとした。

内部生、というのは中学生の頃からこの学校に通っている生徒のことだ。

この学校では進路の進みの違いから中学から入った生徒と、高校から入った生徒は分けられている。

「よくわからないけど、普通は高校入ってきたやつと一緒にのクラスにすると思うんだ。なんでだろうね」

「そこは大人の事情ってヤツだろ。まあ、俺達みたいな純粹無垢な学生の知ったこっちゃ無い範疇の話だ。気にするだけ無駄だ、無駄」
どうやら田上君の作戦は成功したらしい。

周りの生徒の反応はともかく、遠藤の思考は完全に切り替わった。

放課後 2

「そうは言ってもさ、俺たちって中学生の頃からほんの少しだけど高校の内容を先取りして勉強してるだろ？ だから、転校生が内部生のクラスに入るって、おかしいと思うんだ」

田上君の疑問は正しい。それは、僕も思っていたことだった。

中高一貫生のメリットの一つに、中学生の頃から高校の内容を勉強し、普通の高校生よりも早くカリキュラムを終えることができる、というのがある。

僕たちは普通の高校とは勉強している範囲が違う。少し進んでいるんだ。

けれど、高校から入ってきている生徒の勉強している範囲は、他の学校と大して変わらない。

だったら、転校生は高校からのクラスに転入するのが普通なんじゃないだろうか。

「そんな堅苦しいこと考えてどうするんだよ。それより面白いことがあるんだ。英志の野郎、放課後にさ」

「遠藤、やめてよ」

油断の隙もありはしない。

こいつは、ともかく人の恥ずかしいことをばら撒きたくて仕方が無いらしい。

「何？ 俺、それちょっと興味あるんだけど」

「だろ？ ほら、田上も知りたがってるし、いいだろ？」

「そんなの関係ないよ」

そんな理屈で暴露されるだなんて、たまったもんじゃない。

今、廊下にはたくさんの生徒がいる。

もし遠藤が言いたい事を全て暴露したら、僕はきっと主に男子生徒からの怒りの視線を浴びるだろう。

そんなのは嫌だ。

「英志、お前顔が赤いぞ。まあな。お相手があの愛しの彼女だもんな。口じゃあ否定しているが、満更でもないんだよな」

赤くなっている、と思う。多分。

「愛しの彼女？ それって誰だよ。俺にも教えてくれよ、久坂」

「だから違うって」

「久坂君」

突然、後ろから声をかけられた。

振り向くとそこには天月葵がいた。もしかしたら、今の会話を聞いていたのだろうか。

そうだとしたら、僕はすごく恥ずかしい。きっと彼女は、そういうつもりで僕を誘ったわけじゃないのに。

「行きましょう」

僕は無言で頷き、それに従った。

遠藤と田上君が何も言わずに道を開ける。

二人とも、突然に現れた天月葵に驚いているんだと思う。僕だってそうだ。

僕と天月葵は二人で廊下を歩いていく。

途中、生徒の視線、特に男子生徒からの視線がきつかった。天月葵はなんともないのだろうか。

僕にとってこんなことは初めての経験だったから、緊張して仕方が無かった。

でもそれはきっと、視線のせいだけではなかったと思う。

「どういうこと、あれ」

「天月葵が、英志の放課後の相手って事」

「えっと、よく状況が飲み込めないんだけど」

「天月葵の先約は、なんと久坂英志君だったってことだよ」

「……マジ？」

「マジだよ」

放課後 3

僕達二人は学校の外へと出た。大通りを歩く。

校内での視線の鋭さは相当のものだった。学校の外でもそれはまだ続いている。主に、帰宅途中の生徒からだ。

僕の先に行く天月葵は、僕の家とは逆方向へと向かっていた。

その方角にあるのはお洒落なカフェや値段の張る料理屋、そして高級住宅街だ。

天月葵は何も喋らず先に行く。

何か話題を切り出そうかと考えるが、よく考えれば僕は天月葵の興味のありそうなことを何も知らない。

転校初日の生徒について、知っている事がある方がおかしい。

そもそも、僕と天月葵がこうして並んで歩いている事自体が間違ってる。

そうして無言のまま歩いている内に、カフェや料理屋を通り過ぎていった。この先にあるのは、高級住宅街くらいだ。

「あの、天月さん？」

僕はあたりまえの、というかもっと早くに切り出しておくべき話題を口にした。

「何」

彼女の返事はそっけない。

遠藤曰く、クールで手厳しい。そういうことなのだろうか。

「僕達、何所に向かってるんでしょうか」

「私の家」

僕は立ち止まってしまった。

僕の聞き間違いじゃなければ、家、と言ったと思う。

いや、でも、そんなことあるわけないし。

「どうしたの？」

彼女が不思議そうに問いかけてきた。

驚くほどのことでもないじゃないか、と言っているように。

「いや、ごめん。なんでもない」

もう、わけがわからない。

僕は考えるのも面倒くさくなって、歩き出した。

どうせ、彼女はなんとも思っていないんだ。僕だけ振り回されてるみたいで、馬鹿らしい。

昨日からこんなことばかりだ。気がついたら変な所にいて、変な怪物に殺されかけて、ヒーローに助けられて。転校生が来て、いきなり話しかけてきて、何故か約束をさせられて。誰かが故意にいろんなことを僕にぶつけているんじゃないか、って思うほどだ。

「私の家、もうすぐで着くから」

この住宅街は、僕みたいな庶民には夢のような場所だ。幅の広い道の横には、手入れの行き届いた街路樹。デザインのよい街頭がいくつも並び、夜になると木にくくりつけられた電球がライトアップされる。ここにはいくつもの高層マンションが立ち並び、二十階なんてざらだ。この街の中で、異様に浮いている。この場所だけ、建物が高すぎるのだ。

僕らの街は、都心ほど栄えているわけでもないし、マンションが大量に建造されて得いるわけでもない。というか、マンションなんてこの高級住宅街くらいのものだ。安アパートならば、何軒かあるけれど。

駅から近く、都心へも近いというこの住宅街は、いくつものセキュリティによって守られている。聞いた話では、事前に頼みさえすれば衣類のクリーニングや、部屋の掃除までしてくれるサービスがあるらしい。夜景の面では少々物足りないのかもしれないが、その分、サービスを売りにしている。

もしかして、天月葵はそんなところに住んでいるのだろうか。家

が金持ちで、お嬢様、という事なのだろうか。ありえない話じゃない。

だがそれは僕の勘違いだったようだ。彼女は高級住宅街を過ぎても歩みを止めなかった。

この先には人が住めそうな、家と呼べそうなものは無い。川を越えた先に廃工場がたくさんあるくらいだ。

「ここ、降りて」

そう言って彼女は川原の土手を下っていった。

一体、彼女の家は何所にあるのだろう。

僕は彼女についていった。

ここに来るのは久しぶりだ。中学二年生以来だろうか。

川原にはいくつかのビニールシートで作られた家と、ダンボールが捨てられている。雑草がこれでもか、というくらい生えている。地面はぬかるんでいて、靴には大量に泥がついた。

そんな場所に、黒いキャンピングカーが留めてあった。窓はカーテンに覆われていて、上には巨大なアンテナみたいな物が付いている。不気味だ。誰が住んでいるのだろう。

「着いたわ」

そう言って彼女が止まったのは、黒いキャンピングカーの前だった。

放課後 4

——このキャンピングカーが家？ いや、確かに人は住めるかもしれないけど。

そんなことを信じられるわけが無い。

常人には理解できない、高度なギャグの類なのかもしれない。

彼女は制服であるブレザーの裏ポケットから黒いカードを取り出すと、それをドアの近くにあった差込口に入れた。

少しすると、パネルと小型のカメラが出てきた。

天月葵は慣れた手つきでそれを操作し、そして顔をカメラに近づける。

一体何をしているのだろう。

ただ、これだけはわかる。

この車も、天月葵も、普通じゃない。

カチャリ、とドアの開く音が聞こえた。

直後、差込口から黒いカードが排出される。天月葵はそれを差込口から取り出し、ブレザーの裏ポケットへしまった。

「こっち」

そう言って、天月葵はキャンピングカーの後ろの方へ行ってしまった。

僕は無言でついていく。それ以外にどうしたらいいかわからない。

彼女はここでも何か捜査をし、そしてドアを開けた。

中には確かに人が住めるだけの空間があった。

ベットがあり、机があり、ソファがある。机の上にはノートパソコンが置いてあった。

奥のほうにはトイレだと思われる個室もあった。

台所は無かった。普通は付いているものだと思っていたが、必ずしもそうじゃないのかもしれない。

代わりに、巨大なサーバーと思われるものがある。

運転席はここからだと思えない。黒いカーテンがさえぎってしまっている。

「上がって」

彼女は土足のままで車の中に入った。

僕もそれに続く。

この車を家と呼んでいいのなら、女子の家に入ったのは幼稚園以来だ。

キャンピングカーの中は、普通の部屋のようなだった。

少し狭い気はするが、確かに生活できなくはないだろう。

けれど、ここに天月葵が住んでいるというのはかなり違和感がある。

音を立てて、入ってきたドアが閉まった。天月葵が閉めたのだろうか。

彼女は何もしていなかった。ただ部屋の中で立っただけだ。すると。

「やあ、君。よく来てくれたね。名前は久坂英志、だったっけ？」

黒いカーテンの向こうから男の声が聞こえてきた。

天月葵の父親だろうか。

車を高校生一人では運転できないだろうし、もし本当に彼女がここに住んでいるなら、一人で、というのは物騒だ。

でも、今はまだ学校が終わったばかりだ。備え付けられていた時計を見ると、三時五十分だった。

こんな時間から家に帰っている親がいるだろうか。いや、それより前に、なんで声の主は僕の名前を知っているんだろう。

「はじめまして、か。僕の名前は一ノ宮。よろしく」

そう言って出てきたのは、髪とひげを無造作に伸ばして白衣を着た男だった。

少なくとも、一般人の類ではない。あまり関わってはいけないうるがする。

それに、一ノ宮、と言う名前が苗字だとするなら、天月葵は血縁関係ではないということになる。

「あの、あなたは……」

「まあ、立ち話もなんだし、座りなよ」

僕の言葉をさえぎって、一ノ宮と言う男はソファに座り込んだ。僕は机を挟み、もう一方にあった椅子に腰掛ける。

「じゃ、ちょっと失礼」

そういうと、一ノ宮という男は僕の腕に何かを刺してきた。

あまりにも突然のことで、何が起こったか最初は理解できなかった。

刺されたものが注射だと気がついた時には、もう僕の腕からそれは抜かれていた。

「え、あの、これは一体」

「悪いんだけどさ、髪も五本くらい、くれないかな。なるべく新鮮なやつがいいんだけど」

一ノ宮という男は、僕の質問に全く答えてくれない。

しかも、何故か僕の髪の毛を要求してきた。

この男がとても危険な人間だという事はなんとなくわかった。
正直逃げ出したい。けど、出口は閉まっている。

「君は昨日仮想空間に間違って転送されただろう？ まあ、システムの誤動作だと思うんだけど、一応君も調べとかなくちやいけないだよ。血液サンプルだけじゃ足りないから、身体の一部を貰いたいんだけど、髪の毛が一番無難だろう？ だから、髪を頂戴」

一ノ宮と言う男は、半分以上理解不能な事を喋った。

何かの調査で僕の血と髪の毛が必要だと言うことはわかった。

でも、仮想空間とか、転送とか、システムの誤動作とか、全然意味がわからない。

「あれ？ もしかして、天月君は事情を説明してないの？」

困惑した僕の表情を読み取ってか、一ノ宮という男が天月葵に聞いた。

「はい。一般人に私達の事をむやみに公表すべきではないと判断したので」

当然のように、淡々とした口調だ。今はその冷静さが怖い。

それを聞いた一ノ宮という男は、ため息をついた。そして、胸ポケットから一枚の名詞を取り出す。

「いや、ごめんね。説明が無くて」

何回か質問はしたのだが、それはすべて無視されていた。一ノ宮という男は、そういう人のようだ。

「じゃあ、改めて。僕は一ノ宮敦^{いちのみや あつし}。政府管轄の、対変異種第三実動隊の現場指揮官を任されているんだ」

一ノ宮博士 1 (前書き)

この物語の敵にあたる、「変異種」についての説明の話。
わけわからない理屈ですが、大目に見てください。

一ノ宮博士 1

「はあ……どうも」

僕は差し出された名刺を受け取った。

それには今、一ノ宮という男が言った通りのことが書かれていた。

『対変異種第三実動隊 現場指揮官 一ノ宮敦』。やたら長い肩書だ。

「何所から説明しようか。君は何か知りたいことはあるかい？」

「それなら、何で僕の名前を知ってたのかを……」

どうでもよさそうなことなのだが、僕が一番気になっていることと言ったらそれだった。

というか、他の事に関しては知りたいとかそういう次元じゃなかった。全くの理解不能で、知りたいという気持ちすら起きない。

「そうだな、そんな事よりもまずは変異種について説明しようか。」

その方がいいと思うんだが。構わないかい？」

自分から言ってきたくせに、目の前のこの人は僕の質問に答えてくれない。

「じゃあ、それで」

僕は気の無い言葉を返した。

多分僕に拒否権は無いんだろうし、どうせ全部知らないことばかりだ。

どれから聞いても一緒だろう。

けど、僕の考えは甘かった。

「変異種というのは、全ての生物の遺伝子に眠っていると言われている『進化の系譜』が、脳や身体に影響を与えるようになった生物の事を指す。ある程度の差はあるが、どの個体も理性を失い、凶暴

性が増す、という特徴がある。これはヒトおよび霊長類と言う種の最大の特徴である発達した脳が、『進化の系譜』内に記録されている他の生物のものと入り混じることにより、俗に言う、本能という奴が活発化するのが原因だ。他の生物は理性を持ちながら行動することは無いからね。極稀に全ての『進化の系譜』を自由に引き出せる個体が発見されるが」

「あの、すみません。もう少し解りやすく教えてもらえますか？」
一ノ宮という男の口から出た言葉は、さっきよりも訳がわからなくなっていた。

僕の言葉を聞き、目の前の男は首をかしげた。
「十分解りやすいと思うんだがなあ……」
そんなことはない、という言葉を飲み込んだ。

「うーん、じゃあこうしよう」
そう言うと、彼は黒いカーテンの向こうへと行ってしまった。
その場には、僕と天月が残される。

お互い、何も喋らない。
一ノ宮さんはカーテンの向パソコンをいじっているようだ。
キーボードを打ち込む音が、こっちまで聞こえてきた。
ここにもノートパソコンはあるのに、何故向こうで作業をするのだろう。

「天月さん、あの入って、天月さんの父親とかじゃないんでしょう？」
二人の間に流れる沈黙に耐え切れなくなった僕は、天月葵に問いかけた。

これは僕が二番目に気になっていたことだ。
彼女はここが家だと言った。それなら一ノ宮と言う人保護者と言うことになるのだろうか。

僕にはあの人が保護者、と言うのが想像できない。

「そう。一ノ宮博士は現場指揮官。私の上司。だから、私のパパではないわ」

一ノ宮と言う人はどうやら博士らしい。けど、そんなことより。

「パ、パパ？」

僕は彼女のその言葉に驚いた。

「何？」

「天月さんがパパなんて言うとは思ってなかったから」
今日の朝から今までの間で、天月葵はずっと淡々とした口調だった。

自分の言いたいことを、必要最小限の言葉で語る。そんな感じだった。

その彼女が、自分の父親のことを「パパ」と呼ぶだなんて、誰が予想できただろう。

「パパって呼ぶのは、おかしいの？」

彼女は僕の顔を覗き込むようにして聞いてきた。
なんというか、近い。

「いや、そんなことないと思うよ」

僕は何も考えずにそう言った。というか、考えられなかった。

「そう。ならよかった」

そう言って、彼女は僕から顔を離した。

それから少しして。

「これなら大丈夫だろう」

一ノ宮博士がカーテンの向こう側から飛び出してきた。

その手にはいくつものコードに繋がれたノートパソコンがあった。
それらのコードは全て、サーバーへと伸びている。

「どうやら君は一つ一つの単語を明確にしなくちゃわからないようだからね」

普通の人間はそうだと思うんだけど、一ノ宮博士の中では僕は特別に理解力のない人間ということらしい。

「説明することは最低限に絞ることにしたよ。これでわかるはずだ」

一ノ宮博士が僕へと見せたノートパソコンの画面には、昨日の怪物が、赤い豚がいた。

「こいつは」

僕を握りつぶし、殺そうとした怪物。

そして、ヒーローに倒された怪物。

なんでこいつの画像が画面の中にあるんだろう。

「そう。これが変異種。普段は僕たちと同じような人の形をしているけど、遺伝子の中に刻まれている『進化の系譜』にアクセスし、このような化け物になってしまう」

画面の中には赤い豚以外にも、下半身が馬の人間や、蝙蝠のような人型の化け物がいた。

「『進化の系譜』って？」

「『進化の系譜』とは、全ての生き物の遺伝子に刻まれている、進化の過程の記録だ。僕たちがプランクトンからこの姿までになるまでの過程や、そしてなりえた可能性までが刻まれている」

「あの、そんな話は聞いたことが無いんですけど」
なんなんだ、そのトンデモ理論は。

「ある意味、有名だよ。この説は知らないかい？ 『生物の一生は遺伝子に刻まれている』っていう説。その飛躍版だと思えばいい。『生物の進化は遺伝子に刻まれている』ってことだ。もっとも、未来の進化の過程も刻まれている。解析した結果によると、僕ら。つ

まりヒトという種は行き止まりのようだ。ここから先に発展しない。退化ならしていくだろうが。まあ、そんな事は置いといて」

画面は切り替わり、教科書に出てくうるような、枝分かれした図があらわれた。出発点は微生物で、終着点は人や鳥、魚などが描かれている。

「例えば君が遭遇したあの変異種なんかは、僕たちがなりえたかもしれない『豚』というの系譜を覚醒因子、まあ言うなれば、起動装置のようなものが呼び覚ます事によって、『人』という種と交わったものだ。君も体験してわかったと思うが、あいつらは凶暴だ。その理由は人の理性が交わった種の本能にかき消されてしまうから。それに彼らは自分を制御できないんだ。人間の理性なんて他の種の本能に比べればちっぽけなものだからね。だから変異種は危険な生き物だ。まあ、変異種に対する説明は以上。わかった？」

「あの、なんで変異種とか言うのは、『進化の系譜』っていうのを利用できるんですか？」

「というか、なんで他の動物と混ぜあっちゃうのか、よくわからな

い。

普通の人間はそんなことはできない。

「それができるような突然変異をしているから、変異種って言うんだよ」

「なんというか、適当だ。」

「まあ、大まかに言うところだ。本当はもっと複雑なんだが……これだけ知っていれば十分だろう」

一ノ宮博士 2 (前書き)

ついにヒーローの変身アイテム(の名前)が出せた！
やったね！最高！

前の話で敵(の名前)も出せてるし、それっぽくなってきた！
しかし、会話ばっかしててアクションないですね。

仮想空間についての理論は、そのうち書きます。
相変わらずトンデモですが。

一ノ宮博士 2

「はあ、そうですか」

僕はあまり納得できてなかった。

言ってることはさっぱり理解できなかったし、わかったことと言え、あの怪物の名前が変異種という事ぐらいだ。

それにしても、何でこの人は赤い豚の画像を持っていたのだろう。

次の瞬間、一ノ宮博士は驚くべきことを口にした。

「君は昨日、殺されかかっていたしね。変異種の危険性については、よくわかっているだろう」

「なんで、それを」

どうしてこの人はそんなことまで知っているんだ。

あの場面には、ヒーローと、変異種と、僕しかいなかったはずだ。
「なんでって、それは僕が対変異種第三実動隊の現場指揮官だからだよ」

パソコンの画面が切り替わった。

「僕達はこの街に潜伏している変異種を殲滅しに来たんだ。戦いの記録は全て撮っているし、報告書だって受け取っている。だから、君が昨日どんな目にあっただのかも知っている」

画面に表示されているのは動画だった。

赤い豚に掴まれている僕が映っている。

直後、黒と白の装甲をつけた人間が、赤い豚の顔面を蹴り飛ばした。赤い豚の手が緩み、僕の身体が空中に放り出される。

「僕達、ってことは、天月さんもそうなんですか？」

そういうことなのか。

この目の前の人は昨日の赤い豚のような怪物を倒すためにこの街に来た人間で、天月葵はその仲間と言うことなのか。

「もちろん。君も一度見ているからわかると思うよ」

僕の目の前では赤い豚と、白と黒の装甲をつけた人間が闘っていた。

まるで、特撮みたいに。

「そこにいる天月葵こそ、変異種に対する人類の切り札であり希望でもある、ヴァリアント・システムの適合者だ」

「ヴァリアント・システム？」

また意味のわからない言葉が出てきた。

「難しいことを抜きにして言うなら、彼女は変異種と闘う人ってことだよ。ほら、これに映っているだろ。これ、天月さん」

そう言って一ノ宮博士が指差した画面にいたのは、昨日僕を助けてくれたヒーローだった。

「……え？」

僕は横に立っている天月葵に顔を向けた。

相変わらず無言で立っている。自分が話題に上っている自覚があるんだろうか。

いや、そんなことより。

——天月葵が昨日、僕を助けてくれたヒーローってこと、だよな？

「そして、君が変異種と出会い、天月さんに助けられたあの場所が、仮想空間だ。あれは、一般人に知られないように、変異種を殲滅するための空間だ。普通の人に変異種の存在を知られるわけにはいかないからね。本来は天月さんと変異種のみを仮想空間に転送する予定だったんだが、なぜか、君も転送されていた。だから、君を調べる必要があるんだ。これでわかっただろ？だから、髪を頂戴」

そうか、そういうことか。

やっぱ話が繋がった。

昨日、僕が気がついたら違う場所にいたのは、仮想空間っていうところに事故か何かで送りつけられてしまったから。

赤い豚の怪物は変異種とかいうやつだった。

あの場所で人の気配が全く無かったのは、そもそも人のいない場所だから。

僕を助けてくれたヒーローは、変異種っていう化け物を倒すために、あそこにいた。

そして、天月葵がそのヒーローだということ。

彼女はおそらくこの人に頼まれて、僕をここまで連れてきた。

それで、仮想空間って所に送られてしまった原因は僕の身体にもあるんじゃないか、ということで僕の血を注射器で採って、さらに髪の毛を要求している。

こういうことらしい。

僕は自分の髪の毛を適当に抜いて、目の前の一ノ宮博士に渡した。
「やっとわかってくれたか。じゃあ、結果が出るまでそこにいてくれ」

僕の手から髪の毛を奪うようにして受け取ると、カーテンの向こうへと消えてしまった。

また、僕と天月葵が取り残される。

「あのさ、天月さん」

僕は聞きたくてしょうがなかった事を聞こうとした。
どうして君は闘っているのか、と。
けれど。

「出たよ、結果。血液だけで十分だったよ。悪いね」

一ノ宮博士が戻ってきてしまった。

なんというか、すさまじく早い。

前もって血の方だけを調べていた、という事だろうか。

「それでさ、久坂英志君に提案があるんだけど」

一ノ宮博士は笑顔で言った。

「君、ヴァリアント・システムを使ってみないかい？」

「博士、それは」

そう言った天月葵の顔に、初めて感情らしきものがうかがえた。それは、焦りだと思う。

「彼は一般人です。巻き込むわけにはいきません」

「彼の適合値は全て君を上回っていたんだ。それだけで理由としては十分だ」

「でも」

「それに、指揮官は僕だ。誰を闘わせるかは、僕が決める」

その声は、僕に話しかけたときよりも低く、暗かった。

こっちが本来の喋り方なのかもしれない。

「あの、ヴァリアント・システムって何ですか？」

使う、使わないはともかく、僕はそれが何なのか全くわからない。

「君ならきっと気に入るよ。きっとね」

一ノ宮博士 3

「一ノ宮博士、それは」

天月葵が口を開いた。強い口調だった。怒っているようにも聞こえた。

「適正が高いとしても、彼は一般人です。ヴァリアント・システムを使用させるのは正しい判断とは思えません」

天月君は一ノ宮博士を睨み付けている。僕はそれを見て、驚いた。朝のホームルームから今までで、こんな感情的な天月葵を見るのはじめてだった。

感情が欠落しているんじゃないかという程に、表情が変わらない。遠藤曰く、「クールで手厳しい」。そんな彼女が人を睨むなんて、思わなかった。

「僕に命令する気かい？ この僕に、部下の君が。所詮、ヴァリアント・システムを使えるだけという君が、現場指揮を任されている僕に、命令するのかい？」

「命令ではありません。あくまで私個人の意見です」

二人の間に険悪なムードが流れる。

「遠回しに強制しようとしているだろう？ 君の言葉で僕の決定を変更させようとしているんだから。ならそれは命令しているのと同じだ。正直、気に入らないな」

「適正が高いというだけでヴァリアント・システムを使用させるのは、軽率過ぎるのではないでしょうか」

「軽率？ 僕が？ 何も知らないただのガキがよく言う。僕が君に指図される筋合いはない」

ちょうど一ノ宮博士そう言い終えた時、携帯電話の着信音が聞こえてきた。

曲は初期設定のままなのだろう、ベル着信音だった。一般的に、「着信音1」という名前で登録されているやつだ。

一ノ宮博士は白衣の胸ポケットから携帯電話を取り出した。携帯電話を開き、ボタンを操作する。

あまり使わないのだろうか。携帯電話を操作する指が遅い。

それから少しして、一ノ宮博士が口を開いた。

「変異種の所在が特定できた。今すぐ仮想空間に転送する」

一ノ宮博士は手に持っていた携帯電話をソファーに投げ捨てると、ノートパソコンを自分へと向けた。そして、先程の携帯電話の操作とは比べ物にならないほどの早さでタイピングを行う。

「……了解」

一ノ宮博士の言葉を聞いた天月は、感情を押し殺すような口調だった。壁にあったレバーを下げた。僕の背後のドアが開いていく。僕は何が起ころうとしているのかまるでわからず、ただ呆然と二人を見ているだけだった。さっきの会話だって半分も耳に入っていない。

僕はあり得ない非日常を受け入れようとするのが精一杯だった。

赤い豚、ヒーロー、同じようで違う別のどこか。

仮想空間、変異種、ヴァリアント・システム。

頭の中が整理できなくて、ぐちゃぐちゃになる。

「変異種が見つかったんだ今から天月君が殲滅に向かうんだよ」

一ノ宮博士が言った。

「そうだな、君も着いていくといい」

「着いていく？」

「そう。百聞は一見にしかず、と言うだろう。実際に仮想空間に行

って、変異種をその目で見て、天月君の闘う姿を見れば、僕の言ったことが理解できるようになる」

「それは危険です。もし変異種に襲われでもしたら」

天月葵が反論した。それに対して舌打ちが返される。

——なんか、この人、変だよな。大人らしくないって言うか。

一ノ宮博士は四十代に達しているような外見をしている。寝不足で出来たであろう隈のせいでそう見えるのかもしれない。それでも、少なくとも三十代にはなっているだろう。

三十代と言うことはもう十分に社会人だ。その社会人が、女子高生に反論されただけでここまで怒るものだろうか。怒ったとしても、ここまで不快だと言う事を表に出すものだろうか。

「現場指揮官は僕だ。何をどうするかは僕が決める」

「でもそれは」

「久坂君はどうしたいんだい？」

天月葵の言葉を遮るように一ノ宮博士が言った。

「え、僕、ですか？」

まさか話題を振られるとは思っていなかった。思考が一瞬止まる。

「ヴァリアント・システムと変異種、そして仮想空間。もう一度その目で見てみたくなかないかい？ 本物の正義のヒーローと悪の怪人。その闘いを見たくはないかい？」

一ノ宮博士 4

「本物のヒーロー……」

僕はそう呟いていた。

子供の頃から憧れていた。

誰かのために自分の身を省みず闘い、自分の信念を貫き、正しい道を行くヒーローに。

カッコいいから、と言う理由だけじゃない。僕自信がそうでありたかった。誰かのために闘えて、自分の信念を貫ける人間になりたかった。

けれど成長していけばいくほど、それが無理だとわかっていく。

正しい人が否定されて、間違っている人が肯定されるなんて、よくある話だ。

それでも、だからこそ、僕は正義のヒーローに憧れる。

憧れるだけなら、誰にも文句は言われないから。

正義のヒーローなんてこの世にいやしないと諦めるしかないのに、諦めきれない。だから、僕はさすがのように架空のヒーローに憧れる。

でも今、僕は本物のヒーローをこの目で見ることができる。

「久坂君、止めて」

天月葵が僕を見て言った。

「あの時はたまたま無事だった。けど、次もそうとは限らない。だから、止めて」

「決めるのは君だ。危険だと思うなら今すぐ家に帰ればいい。データーは採れたしね。でも、もし君が望むなら、僕は君を仮想空間へ送ろう」

僕は黙って、うつ向いている。

天月葵の言うことはわかる。僕が生きて帰ってこれるという百パーセントの保証はないだろうし、それに、僕がいても邪魔になるだけだろう。

けれど僕はこの目でヒーローを見たい。

本物のヒーローがいるとわかっていて、それなのに家に帰っていつも通りの生活を送るなんて、僕にはできそうになかった。

「見てみたいです。この目で」

単なるワガママだ。そんなのはわかってる。天月葵の迷惑にだってなるだろう。

でも僕はもう一度、この目で本物のヒーローを見たかった。そこに本物にヒーローがいると、確かめたかった。

「よし、じゃあ決まりだ」

一ノ宮博士が嬉々とした表情で言った。

天月葵は何かを言いかけたが、飲み込んだようだ。不満そうな、悲しそうな、辛そうな、そのどれでもあって、どれでもないような顔をしている。

わかってる。僕の決めた事はきつと間違ってる。

「よし、じゃあ二人まとめて仮想空間に転送するから、外に出て待っていてくれ」

「外、ですか？」

「ああ。建物の中だったり電波が少しでも入りにくい場所だと、仮想空間に転送する事ができないんだ。だから、外に出て行ってくれ。あとはこっちでやる。久坂君を頼むよ、天月さん」

「……了解」

僕と天月葵は車の外に出た。

二人になると、やはり沈黙が流れる。ただ天月葵が怒っているだけかもしれないが。

彼女が怒るのも無理は無いと思う。彼女は僕を心配してくれているのに、僕はそれを無視したんだから。

「それじゃあ、転送を始めよう」

車の中から一ノ宮博士の声が聞こえてきた。

次の瞬間、真っ白な光が僕の視界を包んだ。

仮想空間 1

真っ白な光の中で声が響いていた。

「仮想空間の原理としては、僕達の存在している空間をベースとし、僕らの次元から僅かにずれた場所に新しい次元を人工的に作り出す。そこに配置するのは物体だけで、生命体は存在しない。物体は街を丸ごとスキャンすればそのまま配置するだけでいいし、生命体は仮想空間に必要ない。何より、複製が面倒だ」

「僕達の生きている次元は三次元に時間を加えた世界、つまり四次元と言われているが、五次元的視点から見るとそれらは重なり合い、密集したものだ。それを立体的思考で捉えたとしたら、箱という五次元空間に、いくもの紙、すなわち四次元が大量に詰め込まれている。仮想空間は僕達の次元のそばに作成される。その次元と僕達の生きている次元は五次元的に殆ど重なり合っているため、干渉しやすい。なので次元と次元を人為的に繋ぎ、人や物質を転送する事ができる」

「しかし、仮想空間は完全な新しい次元ではなく、所詮人為的に作られた不安定なものだ。維持には膨大な量の電力を必要とし、維持ができなくなれば、崩壊してしまう。仮想空間内で生命体が存在している時は、さらに電力が必要となる。ちなみに、核のような周囲に影響を与えるような物は仮想空間と僕達の空間が互いに干渉してしまい、僕達の次元へと影響がでしてしまうので、使用できない」

「物語などでは、五次元空間内に密集している四次元空間をパラレルワールドと言われることが多い。仮想空間は人為的な一定時間のみの空間だから厳密には違うが、まあ、同じものと考えてくれれば

いい。そっちの方が理解しやすいだろう。人為的な、人や動物のいないパラレルワールドを作り出し、変異種とヴァリアント・システムの適合者を転送し、そこで変異種を殲滅する。それが仮想空間だ」

光が次第に薄れ、僕は横断歩道のご真ん中に立っていた。

学校の近くの、とうか僕の通学路にある横断歩道だった。車が道路に止まっている。中に人はいない。

人の気配が無い。仮想空間には僕達と変異種他に生き物がいないから、だろう。多分。

隣には天月葵がいる。

そして正面には、よだれを垂れ流した男がいた。

訳の解らない事をぶつぶつと呟き、両手をだらりとぶら下げ、今にも倒れそうな足取りで歩いている。

まるで、麻薬中毒者みたいだった。

「久坂君は下がって」

僕は天月葵の言葉に従い、少し離れた所に止まっていた車の陰に隠れる。

それを確かめた天月葵は右の袖を捲くった。天月葵手首には、見たことの無いデザインの腕輪がはめられていた。

涎をたらした男は、天月葵に気がついたようだ。

男の声がいきなり大きくなった。しかし、言っている事は要領を得ない。

「あははあ、オンナだなあ。おい、なんか言えよ。何でなにも言わねえ。どうしてだ。今の俺が、さっきの俺が、昔の俺が悪いのか？俺のせいじゃない、こんなのは。ああ気に入らない、気に入らない。ぐちゃぐちゃにして、八つ裂きにして、何回も噛み砕いて、あああああ！！！！」

「脳が他の生物と混ざり合って、まともな思考ができなくなっているんだ。これが末期症状」

僕の後ろから一ノ宮博士の声が聞こえた。

「えっ？」

振り向く。しかし、誰もいない。

「これは空間を干渉させて、僕の声だけを仮想空間に送っているんだ。僕はそっちにはいないが、声を伝える事はできる。さっきの仮想空間の説明も、これと同じ原理でやっていたんだ。」

仮想空間 1 (後書き)

ビバ、トンデモ理論。

五次元空間の勝手な解釈。

まだ続きます。

仮想空間 2

理屈はよくわからないが、仮想空間にいても一ノ宮博士の声が聞こえる、というのだけはわかった。

さっきの仮想空間についての説明も、イマイチよくわからなかった。四次元と五次元がどうのこうのと言っていたが、最後の「仮想空間はパラレルワールドみたいなもの」と言う事しかなかった。

僕は男の方へ視線を戻す。

男は奇声をあげて、頭を抱えていた。もう、言葉すら喋れていない。

「一度でも『進化の系譜』を覚醒させてしまうと、もう普通の人間には戻れない。人のに戻る事はできても少しずつ、だが確実に体は『進化の系譜』に侵食されて、肉体や脳が別のものへと変化していく。最終的には、あのように人としての思考ができなくなり、己の本能のみに従う生き物になってしまう」

男の身体が少しずつ変わっていった。

全身に黄色の毛が生え始め、顔つきが人のものから虎のものへと変わる。身体が一回り大きくなり、服や靴は裂けて地面に落ちた。

歯は牙へと変わり、爪は鋭く分厚くなっていく。足は倍以上に膨れ上がり、目は獣のそれへと変わった。

虎のうなり声が無人の町に響いた。

もう、目の前の男は人ではなかった。変異種という名前の、得体の知れない化け物だった。

「あれが変異種だ。『進化の系譜』にアクセスする前に仮想空間に送れたのは幸いだった。もし街中であの姿になっていたら、何人も

の死者が出ている所だった」

虎の化け物は再び吼えた。

そして、天月葵へと襲い掛かる。

「そして、それらを倒すために造られたのが、ヴァリアント・システムだ」

《解除コード認証。ヴァリアント・システム起動》

機械的な声が天月葵のしている腕輪から聞こえてきた。

そして、虎の化け物時と同じように、天月葵の身体が変わっていく。

黒色と白色のプロテクターを纏った、ヒーローに。

戦闘 1 (前書き)

戦闘パートの始まり。
こういうのが書きたかった。
しかし、下手糞。

戦闘 1

――すげえ。

本当に、本物のヒーローだ。

誰かが考えた空想上のヒーローなんかじゃない。

本物の、ヒーローだ。

「あれがヴァリアント・システムだ。あの腕輪に内蔵された人工的な『進化の系譜』にアクセスする事で、あの姿になることができる。原理は変異種と同じだ。『進化の系譜』によって自分の姿を別のものへと変化させている」

変異種が動いた。身体を前に倒して前傾になり、地面を蹴る。鈍い音と共に、黒い破片がいくつか飛び散った。異常な加速を見せた変異種は、天月葵に、つまりヒーローに迫る。

変異種の蹴った所はアスファルトが窪んでいた。それだけの脚力があるということ。

ヒーローが腰の右腰のホルスターへと手を伸ばした。そこには銃があった。

照準を変異種に向けた。そして、引き金を引く。

誰もいない街に銃声が響いた。

変異種はそれを避けた。弾丸が見えているかのように、最小限の動きで。

虎はどうかしらないが、少なくとも弾丸なんて人間が目視できるようなものじゃない。あまりにも速くて、とてもじゃないが目で追うことなんてできない。

ヒーローが再び引き金を引いた。今度は連続して三発。

変異種も再び弾丸を避けた。またもや少ない動きで。
間違いない。変異種には弾丸が見えている。

戦闘 1 (後書き)

諸事情により短め

戦闘 2

「変異種はベースこそヒトだが、その身体能力は全くの別物だ。銃で撃ったとしても皮膚で弾丸を弾く変異種もいるし、あのように弾丸を避けてしまう変異種もいる」

隣から一ノ宮博士の声が聞こえてくる。すぐ側に本人がいるような感じだ。

「そんな相手に一人で勝てるんですか？ 援護とかした方がいいんじゃない」

「無駄な死人はいない方がいいだろう？ 銃で仕留められればいいが、できなければ接近されて殺されるだけだ」

「じゃあ、空爆とか」

「あまりにも強すぎる衝撃は僕達の次元に影響を与えてしまうんだ。五次元的に近いから、互いの次元が干渉し合う。昨日、変異種が家やブロック塀を破壊してただろう。あれくらいなら亀裂程度で済むが、変異種を消滅させるほどの爆撃なんてしたら、下手したら僕達の次元で死人が出る」

だから一人で戦うのか。

余計な犠牲を出さないために、周囲にあまり影響を与えないために。

変異種がヒーローに襲いかかった。その手の先にある爪で切りかかる。

長く、巨大なそれをヒーローは避けた。しかし、変異種は逆の手にある爪で追撃する。

ヒーローは変異種の手首を掴んだ。変異種は力づくで押しきろうとするが、ヒーローの力はそれに勝っていた。

ヒーローは再び銃を手にとると、すぐさま引き金を引いた。

隙だらけの変異種の腹に弾丸が撃ち込まれた。叫び声を上げなが

ら、変異種が仰け反る。着弾した所からは血が流れ出ていた。

「すごい。もう倒したなんて」

「いや、あの程度では変異種は死にはしない」

ヒーローは手首辺りからナイフを取り出した。装甲に収納されていたのだろう。

そのナイフを変異種に向かって突き刺す。正確には突き刺そうとした、だった。

変異種の巨大な爪がそのナイフを阻んでいた。爪と爪の間で器用にナイフを挟んでいる。

ヒーローはナイフを手放すと、逆の手に持っていた銃を変異種へと向けた。

しかし、引き金を引く前に銃は払い落とされてしまった。腕を叩かれた衝撃で、ヒーローの体勢が崩れる。

そこに変異種の蹴りが叩き込まれた。ヒーローの身体は五メートルほど吹き飛ばされ、ブロック塀へと激突する。ブロック塀は崩れ、ヒーローはその下敷きになってしまった。

戦闘 3 (前書き)

説明が多い。

そういえば、設定を読ませるような漫画は駄目漫画、って武装錬金に書いてあったなあ。

まあいいか、事故満だし。ていうか、小説だし。
とか思っています。

戦闘 3

「あれって、やばいんじゃない」

瓦礫が動く気配は無い。もしかしたら、気絶しているのかもしれない。

変異種が地面を蹴った。

ついさっきまで僕達と同じ人間の姿だったとは思えないほどの速さで疾走する。

巨大な爪は瓦礫のしたの獲物へと狙いを定める。

「大丈夫。天月葵はそんなに弱くない」

「でも、あれは」

「それに、ヴァアント・システムは変異種を殲滅するために造られているんだよ」

変異種が瓦礫に向けて爪を突き刺そうとする。

まさにその時、瓦礫の中から銃声が聞こえてきた。

直後、変異種の右足に弾丸が命中した。足を撃たれバランスを崩した変異種の身体は、転がって電信柱に激突する。

「あの程度の相手ならば、負けるわけが無い」

瓦礫の下からヒーローが現れた。その手には銃が握られている。

おそらく、瓦礫の隙間から変異種を狙ったのだと思う。

体勢は相当悪かったはずだ。視界だって満足のいくものじゃなかったはずだ。詳しい事はよくわからないが、きつとかなりの射撃技術なのだと思う。

変異種が立ち上がった。

腹部に三発、そして右足に一発の弾丸を受けている。

肩は大きく上下していて、息が荒かった。しかし、敵対の意思は消えていない。

ヒーローへと、巨大な爪を向ける。

ヒーローが変異種との間合いを一気に詰めた。

背中と足の裏からはバーニアが吹き出している。それで一気に加速したんだ。

変異種はそれに反応し、自らも前へと出る。

しかし、先程のような速さは無い。足を撃たれているからだろう。

ヒーローが銃を撃った。

変異種はそれを大きなアクションで避けた。ついさっきは多分、ギリギリ避けていた。今回そうしなかったのは、というかそうできなかったのは、それだけ身体に余裕がなくなっているという事なのだろうか。

撃ちこまれた弾丸が、確実にダメージを与えていると言う事なのだろうか。

「まだ終わらないよ」

一ノ宮博士が言った。

「確かに弾丸は変異種の肉を抉り、神経を断ち切り、骨を軋ませているだろう。だがそれは、一時的なものに過ぎない」

「どういう事ですか」

「変異種の腹部を見てごらん」

僕は言われるがままにそれを見た。

そこにはヒーローに撃たれた時にできた穴があった。

けれど、そこから血は出ていなかった。撃たれたのは本当につい

さっきだったのに。

「傷が高速で修復しているだろう？ あれは全ての生き物が持っている脳内のリミッターを外し、自然治癒力を急激に高めているからなんだ」

「自然治癒力って、傷口が瘡蓋になって瘡蓋が取れて、って奴ですか」

「そうだ。それを極限まで高めればどんな傷でも少しの時間さえあれば塞がっていく。人と動物の脳が混ざり合っているから、本来なら外れる事の無いリミッターも簡単にはずれてしまう。ただ『生きる』、という本能だけでリミッターは開放されてしまう」

「それじゃあ、倒せないじゃないですか」

いくら銃で撃っても傷が治ってしまうのなら、意味が無いじゃないか。

「どんなに攻撃しても修復してしまうなら、どうしようもないじゃないか。」

「さっきも言っただろう。ヴァアント・システムは変異種を殲滅するために造られているんだよ。使用者がシステムの性能さえ引き出せば、倒せない変異種はいない」

戦闘 4

変異種の爪が襲い掛かる。ヒーローはそれへと銃口を向けた。爪がヒーローへと接触する直前、弾丸が撃ち込まれた。一発だけではない。連続して五発。

複数の弾丸によって爪が破壊され、変異種の手の肉を抉った。苦しみの雄叫びが発せられる。

苦しみながらも、変異種は蹴りを繰出した。その足の傷からもう血は出ていなかった。今撃たれた爪や腕も、少しずつだが再生している。

傷跡にはミミズのようなものがいくつもあった。少しして、それはミミズなんかじゃないとわかる。それは肉だった。

いくつもの細い肉がまるで生き物の様にうねり、傷口を塞ごうとしていた。それはもう、生き物の治癒能力なんかとはまるで別物だった。そうやって傷口を治している様は、悪の怪人というより、映画とかで見るエイリアンだとかゾンビだとか、そんな風に言った方がしっくり来る。

ヒーローはそれを避け、変異種の腹部を殴りつけた。変異主の身体がくの字に折れ曲がる。そしてそのまま、今度は変異種が吹き飛ばされた。

民家の屋根へとその身体は激突し、いくつかの瓦が屋根から外れて宙を舞い、地面へと落ちて割れた。

「確かに変異種の再生能力はやっかいだ。常人が変異種に勝てない理由でもある」

ふらつきながらも、変異種は起き上がった。

腹部にあった弾痕はすでに消え、足の傷も治りかけていた。

まだ痛みはあるようで、足を庇う様な動きをしているが、それでも少し前よりも確実に傷は癒えている。

破壊された爪や肉を抉られた手も同様だった。

ミミズのような肉が傷を這いずり、傷を直している。

「だが、生命維持ができなくなるほどに身体を破壊する事ができれば、話は別だ。急所、つまり心臓や脳を完全に破壊する事ができれば、一撃で倒す事も可能だろう。だが、それだけでは死なない変異種もいる。あいつらは理性をなくした分、生存本能という奴が飛びぬけているからね。容易く脳のリミッターを外し、あるいは自分の身体を新しく作り変えて、生き残ろうとする。ならばどうすればいいか」

ヒーローは右手首の腕輪を操作した。するとバックパックからモーター音が聞こえ始め、蒸気が噴射される。

右腕が淡く光りだした。ヒーローはその手に握り拳を作り、それを腰のあたりに引き寄せる。力を溜めているみたいだった。

「再生できなくなるりほどに身体を破壊すればいい。その身体を全て消滅させてしまえばいい。爆撃でそれを行おうとしたらこの周囲を全て吹き飛ばさなければならなくなるが、あの姿なら、エニティレイターならばそれができる」

「エニティレイター？」

「ヴァリアント・システムを起動した時の名前だよ。名称があった方がわかりやすいだろう？」

変異種が跳んだ。目標へ一直線に向かっていく。

ヒーローも飛んだ。背中と足のバーニアを吹かして飛行し、変異種を迎え撃つ。

変異種が切りかかる。しかしそれは大振りで、動きも鈍くなっていた。

ヒーローはバーニアを前方に吹かして減速する。変異種の爪は空を切り、完全に体勢を崩す。隙だらけの背中がヒーローに向けられる。

その背中に、淡く光る右拳が叩き込まれた。

轟音、衝撃、発光。

変異主の身体は上空へと吹き飛ばされ、周囲には強烈な突風が吹いた。

昨日見た、赤い豚を倒した時のアレと一緒にだ。

瓦が飛ばされ、電信柱にぶつかっていた。アスファルトの破片が道路を転がる。突風で車のガラスがカタカタ、と揺れていた。発光の中心近くでは、窓ガラスが割れている車もある。

「エネルギーを右拳の一転に集中させ、そして放つ。それは全て変異種にぶつけられ、その身体全てを消滅させる。そうして全てを消し去って、エニティレイターは変異種を殲滅する」

上空へと吹き飛ばされた変異種には光の亀裂が入っていた。そして、徐々にその身体が光の粒子となり、消滅する。

「すごい」

僕は無意識のうちに呟いていた。

ただ目の前で起こったことに驚いて、そう呟いていた。

ヒーローは本当にいたんだ。

僕達の知らない所で、僕達が平和に暮らせるように、闘っていたんだ。

もしかしたらやられて死ぬかもしれないのに、一人で闘っていたんだ。

僕の憧れはフィクションの世界にしかないと思っていた。現実
につくりものいるわけが無いと諦めていた。
けど、僕の前で起きた闘いはフィクションじゃない。本当であっ
た事だ。

「それじゃあ、君達を元の世界に戻そう」

一ノ宮博士がそう言うのと、僕の身体は真っ白な光に包まれた。

僕は瞼を閉じる。

喜びのような安堵のような、そんな感情を胸に感じ、その光に身
を委ねた。

帰り道

「目が覚めた？」

気がつくと、僕はソファアの上で寝ていた。身体には毛布がかけられている。

すぐ近くには天月葵の顔があった。僕は驚いて飛び起きてしまう。天月葵はそれを少し仰け反るようにして避ける。天月葵の長い髪が僕の頬に触れた。

「どうしたの」

感情の無い声が聞こえてくる。

僕は「何でもないよ」と答えた。が、内心ではかなり動揺していた。

今まであんまり女子とこんな近い距離になったことが無かったからわからなかったけど、僕は女子に対する免疫があまりないのかもしれない。

まあ、ただ単に、今日会ったばかりの男に対してなんの抵抗もなく顔を近づけてくる天月葵のせいなのかもしれないが。

「起きたのか」

黒いカーテンの向こうから一ノ宮博士がやってきた。

それをみて、ここはあのキャンピングカーの中なんだ、とわかった。

よく考えてみればあの車の中以外であるはずがない。けど、僕の頭の中はそういったことに対してあまり思考が働いていなかった。

天月葵の近すぎる距離のせいもある。けれど、一番の理由はやっぱりヒーローが本当に存在していた、というある種の感動だった。しかも、その正体は僕のクラスにやってきた転校生で、僕の目の前にいる女の子だ。

「君は怪人とヒーローの闘いをその目で見てきたわけなんだが」
一ノ宮博士の手にはノートパソコンがあった。画面を見つめながら、僕に話しかけている。

「あれで大体わかっただろう。仮想空間、変異種、ヴァリアント・システム、そしてエニティレイターが何なのか」

「ええ、まあ」

確かに、ただ説明を聞くよりは分かりやすかった。

「ならいい。本当はまだ説明していないこともいくつかあるが、それはおいおい話すでしょう。今日の所はもう帰ってくれ」

なんというか、突き放すような言い方だった。

一ノ宮博士は、根も葉もない言い方をすれば不気味だ。無造作に伸ばされた紙と髭、痩せ細った体、大きな隈など、気味が悪い。

けれど、時折見せる不安定な感じを除けば、好意的な態度で僕に接してきていた。けど今は、もう用がないと言わんばかりに僕に帰れと言ってきている。

「久坂君を送ってやれ」

天月葵に命令じみた事を言いながらも、一ノ宮博士の視線は画面に固定されている。

天月葵はそれに対し、無表情で従う。彼女は無言でキャンピングカーのドアを開け、外に出ていった。僕もそれに続き、キャンピングカーの外へと出る。

「あの、今日はありがとうございました」

僕はキャンピングカーの中にいる一ノ宮博士に向かって御辞儀を

した。

けれど、一ノ宮博士からは何の返事も無かった。

ただ聞こえていないだけなのか、聞こえていて無視しているのか、僕には判断できなかった。

あたりは薄暗くなり始めている。さっき時計を見たときは、六時半すぎだった。

僕らの他にはあまり人がいない。会社勤めのサラリーマンや、少し遅めの買い物を済ませた主婦がいるくらいだ。

生徒はというと、全くと言っていいほど見かけない。

僕達の学校は最終下校時刻が八時だ。

進学校にしてはなかなか遅くまで部活をやっていると思う。これも、校長の「部活くらいは自由に」という配慮だ。

そんな学校だから六時半という時刻は中途半端だった。部活をやっていない生徒は六時までには殆ど下校するし、文化部の生徒は七時くらいまで学校にいる。運動部は八時ぎりぎりまで活動をしている。秋川高校とはそんな学校だった。

だから、下校している生徒の姿は見えない。

僕としてはそっちの方が気が楽で、すこし安心していた。

天月葵と一緒に歩くと言うのは、なんというか、視線で疲れてしまふ。

「あのさ、天月さん。いつぐらいから、闘ってたの？」

僕は家へと帰る道の途中で、彼女に尋ねた。

誰も僕達の話を盗み聞きするような人はいない。だから、尋ねた。

目の前にいるこの女の子は、僕が憧れてた、ヒーローそのものだった。

颯爽と現れ、僕を助けてくれた。

危険な怪物を倒し、人知れず世の中を守っている。

テレビに出てくるみたいなヒーローが、目絵の前にいる。

「訓練を始めたのは、七歳の頃から。実際に変異種と闘うようになったのは、十三歳の頃から。どうしてそんなことを聞くの？」

「なんでって、その……どうして正義の味方みたいな事してるのになって」

言ってからもう少し違う言い方をすればよかったかな、と思った。

僕は別になんとも思わないが、「正義の味方」という言葉は普通の人には抵抗があるもの、と遠藤が前に言っていた事を思い出したからだ。

けれど、危険な敵を人知れず倒すというのは、まさに正義の味方だった。

僕の言葉を聞いた天月葵は、少し時間を置いて、口を開いた。

「正義の味方なんかじゃないわ」

その言葉には、悲しみの感情が籠っていた。

「変異種になったとしても、人は人よ。だから私は……人殺しだわ」
彼女は悲しい顔でそんな事を言う。

でも彼女は僕達のために闘ってくれているんだ。

そんな人が、どうして悲しまなきゃいけないんだろう。

「そんなこと、ないよ」

僕は気がつくと言っていた。

「天月さんのお陰で皆平和に暮らせてるんでしょ？　僕だって君に

助けてもらったじゃないか。だったら、もしそうだとしても、絶対に間違った事じゃないよ」

もしも彼女が変異種という敵を倒さなかったら、僕は死んでいた。もしも彼女が変異種という敵を倒さなかったら、僕は普通に暮らせていなかったかもしれない。

彼女が闘ってくれたお陰で、僕達は普通に暮らせてる。

だから、それはきっと正しい事だ。

僕はそう思う。絶対に、そうだと思う。

「……ありがとう、久坂君」

そう言った彼女が見せてくれたのは、愁いを帯びた笑顔だった。

彼女が見せたそれは、とても可愛くて。

多分、僕の心臓が強く鼓動していたのは、女子に対する免疫が無いからかじゃなかった。

翌日

「やあ、英志君。昨日は楽しかったかい？ 天月さんのデート」
授業中だって言うのに、遠藤は騒がしい。
「というか、この話題は今日で五回目だ。
しつこい事、この上ない。」

「だから違うって」

「ほう、だったら二人で何をしてたか教えてくれよ」

「いや、それは……」

「言える訳が無い。」

変異種の事は一般人には秘密らしい。

そんなものの存在を公表してしまったら、混乱が起きるだけだ。

僕も他人に昨日の事を言わないように、口止めされていた。

それに、言っただって多分信じてくれない。

だって、赤い豚と遭遇した話をした時、「妄想癖」の一言で片付けられてしまったんだから。

「『言わない約束だから』ってか？ 二人だけの秘密ってか？ 一体何があったんだろいうなあ。人には言えない、つまりはそういう事が起こっていたわけだ」

「そういうことって、何だよ」

「ピュアな俺が口にするには過激すぎるぜ」

遠藤は自分の何をもってしてピュアと言い張っているのだろう。

今は情報の時間だった。

黒板には、パソコン用語がいくつも並べられている。担当している先生は今日この学校に赴任してきたばかりの先生だった。

なんでも、情報の担当だった先生が、いきなり学校を辞めることが決まったらしい。

僕達には家庭の事情、としか説明されなかった。

まあ、それ以上を知ってもどうしようもないだけだ。

「それにしても、つまんねーよなあ」

遠藤が大きな欠伸をした。

一応軽く注意するが、僕も心の中ではそう思っていた。

どうせすぐ忘れてしまうような単語を大量に覚えさせられ、しかもそれらは日常生活では二度と使わないような単語ばかりだ。

なんというか、やりがいを感じれなくて、僕も欠伸をしたくなってしまう。

黒板を見るのに飽きた僕は、視線を天月に移した。

他の生徒が机に突っ伏したり雑談をしている中、天月は真面目に授業を聞いていた。

姿勢よくノートを書き写し、先生の話に耳を澄ましている。

「愛しの彼女は」

「だからそんなじゃないって」

「最後まで言わせろよ」

「違うって言ってるだろ」

最後まで聞かなくても、遠藤が何を言いたいのかは大体わかる。伊達に長い事付き合っているわけじゃない。

「ああ、つまんねーなあ」

窓の外を見て、遠藤が独り言を呟いた。

グラウンドでは中学二年生が体育をしていた。

今は、サッカーの時間なのだろう。

リフティングに挑戦している中学生が何人もいた。

「でも、つまんねーってことは平和って事なんだよなあ。だったら、何か大変な事が起きて忙しくなるよりも、つまんねー方がいいのかもしれないなあ」

僕達は平和に暮らしている。

それは変異種という敵を倒してくれる人がいるからだ。

毎日普通に生きていけるのも、毎朝ご飯が食べれるのも、授業がつまらなくて欠伸が出るのも、全部、天月のお陰だ。

「ま、そんなことはどーでもいいんだけどよ。眠いし。じゃあ、俺寝るわ」

などと言いながら、遠藤は机に突っ伏した。

それにつられて、僕も寝る事を決めた。

天月はと言うと、やはりよい姿勢のまま、授業を聞いていた。

内藤光 1 (前書き)

久しぶりの更新です。
別の小説が終わったんで、ちよくちよく更新できると思います。

内藤光 1

あつという間に一日が過ぎていく。

気がつけばもう六時間目が終わり、帰りのホームルーム最中だ。昨日や一昨日に密度が濃い時間を過ごしていたから、より一層、学校が終わるのが早く感じる。

「起立」

日直の笹倉さんが号令をする。

特に何事も無く、ホームルームが終わった。

これで、今日の授業は全て終わり。

僕はなんて味気ない毎日の繰り返しを送っていたのだろう。

昨日や一昨日のことを考えれば、全てが馬鹿馬鹿しく思えてくる。

こんなことをやっている間にも、世界のどこかには変異種が人にまぎれて生活している。

そいつらはいつ暴走しだすか、わかったもんじゃない。何人もの人が犠牲になるかもしれない。

それなのに、そんな状況がどこかで起きているのかもしれないのに、僕はこんなくだらない事で毎日を消費している。

遠藤じゃないが、退屈で眠くなってしまう。

「よっしゃ。それじゃ、部活だ部活」

珍しい事を遠藤が言った。

部活というのはつまりヒーロー同好会のことなのだろう。

遠藤がそれを楽しみに思う発言をするのは、かなり珍しい事だった。

「だってよ、クラスの謎の美少女転校生を間近で見放題なんだぜ。」

それやあ、誰だって楽しみに思うだろ」

こいつの思考回路が中々下らないのだと言う事を僕は忘れていた。遠藤が浮かれてる時は、大体そんなものだ。

「ねえ、遠藤君。あなた、掃除当番なんじゃないの？」

笹倉さんが言った。

そういえばそうだった。遠藤は今日、掃除当番だった。

笹倉さんもそうだった気がする。

「えー、でも今日は美少女転校生天月葵さんとのデートが……」

「何がデートよ。馬鹿馬鹿しい。あの子はそんな事これっぽちも思っていないわよ」

「いや。思ってるね。心のどこかで俺と一緒に個室にいれることを期待している。俺にはわかる。これは確信と言ってもいい。女心と春の空、というだろう？そんなのもわからないなんて、お前は女子高生失格だな」

どこから突っ込んでいいのかわからなかったが、とりあえず「女心と秋の空」と遠藤は言いたかったのだろう。

なんで間違える。

「そうだ。英志、お前代わってくれよ。明後日の掃除当番お前だろ。俺が明日やるからさ」

「え、嫌だよ。面倒くさい」

「そう言うなよ。美少女転校生と俺の幸せな一時のためだからさ。

あ、田上もいたな。美少女転校生と俺と田上のためだ。マジ、頼むよ」

「それ、田上君関係なくない？」

遠藤が幸せな時間を過ごそうが過ごすまいが、田上君にはどうでもいい事だろう。

というか、遠藤がいないほうが田上君的には嬉しいんじゃないだろうか。

「何、馬鹿なこと言ってるのよ。あなたが掃除当番なんだからね」

「えー、勘弁してよ美由紀」

遠藤は笹倉さんに引っ張られて掃除用具入れへと向かっていった。

「久坂君」

突然、僕の後ろから天月の声が聞こえた。

僕はびっくりして身体をビクつかせてしまった。

「どうしたの？」

天月が不思議そうに聞いてくる。

君があまりにも気配を感じさせないで背後に立っていたからだよ、
とは言えなかった。

というか、もしかしてさっきのやり取りを聞いていたのだろうか。
そうだとしたらちよつと気まずいような感じがする。

いや、僕が気まずくなる理由は無いんだけど。

「さっきの話、あまり聞いてなかったけど。同好会、行くの？」

「……天月さんさ、もしかして相手の心とか読めたりする？」

僕はついそんな事を口走ってしまう。

「そんなことないけど。なんで？」

天月は律儀にもそれに答えてくれた。

「いや、ゴメン。ちよつと思う事があって」

僕は適当に誤魔化した。

しかしなんだ、相変わらず天月は何を考えているのかわからない。

「今日、同好会ってあるの？」

天月が聞いてきた。

「もちろんあるよ。もし面倒だったら、来なくてもいいけど」

正直、天月がヒーロー同好会に入ってくれた理由がイマイチ理解

できなかった。

本物のヒーローが、造り物のヒーローを観たがるというのはあまりしっくりこない。

だが他に理由が思いつかない。けれど、天月がヒーロー番組なんて観たがるのだろうか。

僕が誘ったから、流れで承諾しただけなんじゃないのだろうか。

もしそうだったら無理に同好会に連れて行くのは気が引けた。

天月も楽しくないだろうし、僕はあまりそういうことはしたくない。

田上君には悪いけど、天月がヒーロー同好会で活動をしたくないのなら、それでもよかった。

僕らは結局、頭数さえそろっていれば存続できるから。

遠藤のことは知った事ではない。どうでもいい。

「じゃあ、行くわ。部屋まで案内してもらえる？」

以外にも天月は乗り気だった。

本当にヒーロー番組が観たいからだけの理由でヒーロー同好会に入っただろうか。

「おーい英志。お前にお客さんだぞ」

遠藤の声が聞こえてきた。

教室のドアのところで、モップを片手に僕に手を振っている。

「ゴメン天月さん。ちょっと待ってもらっていい？」

「ええ。構わないわ」

「ありがとう」

僕は遠藤の方へと向かう。誰だろうお客さんって。

「この中学生がヒーロー同好会に入りたいんだとよ」

そう言って遠藤が紹介してきたのは、ちょっと痩せ気味な男子生徒だった。

上履きには「内藤」と書かれていた。

「こいつは英志な。俺達のボスだ。情けなさそうだろう。実際、情けない。少年漫画や熱血アニメなら間違いなく主人公にならないタイプだ」

遠藤は僕の事を紹介しているんだろうか。

適當すぎる。

というか、まともに紹介できてない。

「は、はじめまして。僕、二年D組の内藤^{ないとう}光^{あきら}です。えっと、ヒーロー同好会に入りたいんですけど」

内藤君が言った。

「おい、英志。こいつからはあお前と同じ匂いがするぞ」

気のせいだろう、と言ってやりたかったが、確かになんとなく僕と似ているところがあった。

主に喋り方とか。

内藤光 2

「この内藤光君は特撮ヒーローが大好きなんだそうだ。お前と一緒にだな。よかったな。ちゃんとした仲間ができて」

「どういう意味だよ、それ」

「だって、俺も、田上も、もちろん天月さんも、別に心の底からヒーローに憧れてるわけじゃないし」

それはそうかも知れないけれど、新しく入ってくれるかもしれない子の前で言って欲しくはなかった。

聞かなきゃよかった。

「あの……」

内藤君の声は今にも消え入りそうだった。

なんでだろう、と考えて、ここが高校生のクラスだと言う事に気がつく。

中学生にとって、高校生はかなり怖く感じる。

何のかかわりも無ければ尚更。

僕みたいな奴だったら別だが、運動部の高校生なんて、僕が中学生の頃はあまり近寄りたくなかった。

身体の大きさが全然違うし、顔も怖そうだった。

今思えば顔の方は気のせいだったかもしれないけれど、怖かった感情は気のせいじゃない。

内藤君はとても運動部に所属しているように見えない。文化部か、もしくは帰宅部だろう。

身体も大きいわけではないし、むしろ細い。華奢な身体だ。喧嘩なんてしたら、骨が折れてしまいそうな身体だった。

そんな中学生が高校生の教室に来るといえるのはかなり怖い事なん

じゃないだろうか。

「同好会に入るのって、どうすればいいんですか？」

「ああ、それは」

先生からもらえる「入部届け」の紙に、自分の名前を書いて親に判子を押してもらって、担任の先生に提出すればいい。

それを知らないと言う事は、きっとまだ「入部届け」の存在も知らないんだろう。

それは職員室に行けば直ぐにももらえるけど、なんというか、内藤君を一人で行かせるのはなんとなく気が引けた。

僕がヒーロー同好会を立ち上げようとした時、職員室に行くのがたまらなく嫌だった。

別に誰か嫌いな先生がいたわけではない。ただ、なんとなくあの雰囲気嫌だった。

内藤君がそう思っているかはわからない。

けれど、彼と僕は同じ「匂い」がする、らしい。

「職員室に行けばもらえるから、そうだ、一緒に行こうか」

「え、あ、ありがとうございます……」

内藤君が軽く頭を下げた。

声は小さすぎてあまり聞き取れなかったけど。

「おい、アキラの面倒を見るのもいいけどよ、お前、天月さんをそんな長時間放置しといていいのか」

アキラ、というのは内藤君の事だろう。確か、下の名前がそうだった。

「あ、そうか」

確かに、これ以上天月を待たせるのは気が引けた。

かといって内藤君を一人で行かせるのあまり気が進まない。

「久坂に遠藤。どうしたんだよ、二人して」

僕達に声をかけてきたのは田上君だった。

「なんかさ、二人でその子を脅してるみたいに見えるぜ」

「そんな事してないよ」

「こいつはウチの新戦力だぜ。お前のように下心丸出しのスケベエな野郎とは違うのさ」

遠藤が胸を張って言った。

下心丸出しと言ったら、それはさっきの遠藤の方が下心丸出しだった。

隠す気なんて、全く無かった。

「別に下心なんてないって」

「そういえば田上は昨日、天月さんが同好会に入った途端、『やっぱり俺、同好会止めないよ』なんて言ってなかったっけ」

「へえ、この子、同好会に入るんだ」

田上君は遠藤の言葉を全力で無視しようとした。

まあ、凶星だったのだろう。

田上君は天月を近くで見えるために同好会に入ってきたようなものだし。

そう考えて、僕は思いついた。

「そうだ。田上君さ、天月さんを同好会で使ってる部屋に案内してよ」

田上君に天月を案内してもらえばいいんだ。

活動にはあまり来ていなかったっけど、田上君は同好会で使ってる部屋の場所を知っている。そうすれば天月を待たせないで、僕は内藤君についていく事ができる。

田上君的にもその方がいいだろう。

「え、マジで」

「おい、何だよそれ」

田上君と遠藤が同時に言った。

「僕はこの子と一緒に職員室に行くからさ、田上君は天月さんを案内ししてもらえる？」

「久坂、お前サイコー」

「うわあ、見損なったぜ、英志。お前は俺の親友だと思っていたのに」

「遠藤君」

僕達の背後から声がした。

この声は、天月だ。

「うわ、ビックリした。やめてくれよ。転校生だからって、人の背後に気配を消して歩み寄っていいわけじゃないんだ」
それは転校生だろうがなかるうが、やめて欲しい。

天月は遠藤の言葉を無視して続けた。

「笹倉さんが怒ってるわ。掃除、真面目にやれって」

そういうえば遠藤は掃除当番だった。

教室の中を覗くと、笹倉さんが鋭い眼光で遠藤を睨んでいた。

「いや、ごめん。俺が悪かった。そんな怒るなよ、美由紀。折角の可愛い顔が台無し」

遠藤はそう言うと、教室へと戻っていた。

中からは笹倉さんの声が聞こえてきた。

もう、何を言っているかは大体想像ができる。

相変わらずなんだな、あの二人は。

「それじゃあ、用事終わったら、呼んで」

天月も教室の中へ戻ろうとする。

「ちょっと待って」

僕はそれ呼び止め、天月に説明する。

「この人は田上君って言うんだけど、僕、ちょっと時間が掛かりそうだから、代わりに田上君が、天月を同好会で使ってる部屋まで案内してくれる事になったから」

「わかったわ」

「えっと、よろしく、天月さん」

田上君が天月に喋りかけた。

天月はそれに対して淡々と答える。

まあ、こっちは問題ないだろう。

「ごめん、待たせたね。じゃあ、職員室に行こうか」

「は、はい……」

小さな声で、内藤君が返事をした。

僕はまだちょっと怖がられているのだろうか。

僕を怖がるなんて、結構珍しいと思うけど。

内藤光 3

まあ、少しずつでも慣れてくれればいいな、と思う。

僕達は一階にある職員室へと向かった。

途中、かなりの数の生徒とすれ違った。尋常じゃない量だった。

僕達の背後で人だかりができていた。多分、天月を見ているんだと思う。

それほどまでに転校生が珍しいのだろうか。

いや、転校生だから見に来ているんじゃないかと、天月が美人だからか。

僕みたいにそこまで女子に対する興味が無い奴から見ても、天月は可愛い。それはもう、相当なものだ。

運動神経もよく、スタイルもよく、美人。それでいて物静か。

もしかしたら、遠藤や田上君みたいな反応が当たり前なのかもしれない。

「あの、先輩」

階段を下りている途中で内藤君が口を開いた。

「先輩って、なんでヒーロー同好会なんて作ったんですか？」

今まで内藤君の声は聞き取りづらかったが、何故かその時の声はハッキリと聞こえた。

「何でって、そりゃあ……」

そんな事を聞かれると思っていた僕は、回答に詰まってしまった。

何故かと言われれば、それは「僕と同じような仲間が欲しかった」とか、「皆で一緒に会話できるような場所が欲しかった」とか、色々ある。

でも、あえて端的に言うならば。

「そりゃあ、ヒーローに憧れているからだよ。僕はヒーローが好きなんだ。カッコいいと思う。高校生にもなって、子供みたいかも知れないけど」

一番の理由はこれだ。

それ以外のことも理由と言えば理由だが、やはり僕はヒーローが好きで憧れているからヒーロー同好会を作った。

他の理由は全て、これの延長線上にある。

ヒーローが好きだから皆とそれについて話してみたくて、ヒーローが好きだからそれについて皆で話し合えるような場所が欲しかった。

「嫌じゃなかったんですか。他の人から、変な事言われるの」

もしかしたら、内藤君は気にしているのかもしれない。

ヒーロー同好会に入ると、奇妙な目で見られる事を。

田上君と同じように、誰かにその事で何かを言われるのが嫌なのかもしれない。

「僕、あまりそういうの気にしないから。内藤君は、そういうのが不安？」

僕は全然気にしてない。子供っぽいのはわかってるけど、それに憧れるのは悪い事じゃない。別に何が好きでどんな同好会に入っていくようと、個人の自由だ。

だから別に引け目なんて感じてないし、感じる必要も無いと思っている。

でもそれは、一般的な考え方じゃなくて、だから田上君は同好会を止めると言ったんだろう。

「えっと、それは……」

内藤君は口をもごもごと動かして、言葉を濁らせた。

「はは、別に遠慮なんてしなくていいよ」

そんな感じのことを思われるのは今に始まった事ではないし、僕は全く気にしない。

それよりも、嬉しいと思う気持ちの方が強かった。

高校生しかない同好会に中学生が一人で入るのはかなり勇気がいることだと思う。

それに、内藤君はヒーロー同好会の評判を知っていて、そしてどのような目で見られるかも、なんとなくわかっている。

でも内藤君はヒーロー同好会に入ってくれるという。

嬉しかった。単純に仲間が増える事と、勇気を出して同好会に加わってくれたという事が。

「他の人がどう思っても、僕はヒーローが好きなんだ。君は、どう？」

僕の質問に、内藤君は少し間を空けて、小さな声だったけど答えてくれた。

「……僕も、好きです」

「じゃあ、一緒だ。これから、よろしく」

その言葉に、内藤君は小さく頷いてくれた。

部室 1

入部届けの紙を貰った僕達は、部室へと向かった。校舎を出て、グラウンドの側を通る。

まだ授業が終わってそれほど時間がたっていないというのに、グラウンドではいくつかの部活が準備を始めていた。

五月にはどこの部活も大きな大会があるらしい。

それは三年生にとって最後の大会だったり、その一つ前の大事なものだったりする。

だから、きつといつも以上にやる気が出ているんだろう。

「僕達がいつも使ってる部室は、ここの三階にあるんだ」

僕は目の前の建物を指差し、言った。

僕達の部室は、校舎とは離れた場所にある。

他の部活や同好会の部室もそこにあって、合計で四十の部活および同好会が使用していた。

それはプレハブで大した作りではないのだけれど、何故か四階建てで、妙に巨大だ。

横幅もなかなか長くて、校舎の半分くらいの大きさはある。

これを建てるように命じたのは校長らしい。

やはりこれも、「部活くらいは自由に」という配慮なのだろう。

校長はこの学校を進学校にしたいのか、部活が盛んな学校にしたのか、あまりよくわからない。

「一階には男子の運動部がいて、二階は女子の運動部が使っている。三階は文化部が使っているんだ。僕達の同好会がある四階は、よくわからない不思議な部活がたくさんあるよ」

黒魔術同好会とか、人工知能製作同好会とか、キャッチボール同好会とか。

正直、僕からしてみれば何がしたいのかよくわからない。

「他の人から見たら、ヒーロー同好会もよくわからない不思議な部活なんじゃないんですか？」

「そこは、気にしない方向でいこうよ」

痛いところをついてくる。

中学生の彼は自分の思った事をつい口にしてしまう。

多分、まだ自分を抑える事に慣れていないんだと思う。

内藤君は納得しきっていないような表情で、僕を見てきた。

「軽蔑するような目で見なくてもいいじゃない」

そんな、露骨な表情をしなくたって。

僕の言葉を聞き、内藤君は言った。

「……してませんよ」

いや、しているだろ。口調は。

僕達はプレハブの建物のドアを開けた。

そして、入って直ぐのところにある階段を上る。

僕達の他にも、すでに何人もの生徒が部活の準備、もしくは活動をしていた。

この学校は進学校だったのに、何でこんなに部活が盛んなのだろ

う。

部室 2

「ここが、僕達の使っている部室。放課後だったら毎日活動してるから、いつでも来ていいよ。気が向かなかったら、別に来なくてもいいよ。そこは個人の自由ってやつで」

僕はこの同好会を作ってから特別な用事が無い限り、いつもここで放課後を過ごしていた。

遠藤と一緒に特撮番組のDVDを観て、無理矢理話を聞かせて、一日が終わる。

一向に遠藤は興味を持ってくれなかったし、かったるそうだったけれど、何だかんだでいつも僕に付き合ってくれた。

本人には絶対に言いたくないけど、あいつはいい奴だ。

「まあ、とにかく中に入ろう」

そして、ドアを開けると。

テレビでヒーロー番組の劇場版DVDを観ている天月がいた。

「え？なんで？」

僕は思わず間拔けな声を上げてしまった。

天月が部室にいるのはわかる。

そのために田上君に天月を部室まで招待してもらったんだし、そのこと自体はなんらおかしくない。

けれど、なんで彼女はこんな物を観ているんだ？

僕は部室の角で蹲っている遠藤と田上君を見つけた。

何してるんだ。二人とも。

「ちょっと待ってて」

僕は内藤君にそう言つて、二人の方へと駆け寄った。

「ねえ、天月さん、どうしたの？」

僕が尋ねると、二人は僕の方を睨んできた。

一体何事だ。

「ふざけんなよ、英志」

「なあ、久坂。お前が彼女をあんなふうにしたのか？」

「そんな、英志の毒牙がこんな所にまで」

「怨むぜ、おい」

などと、二人は呟いた。

しかもしれは小さな声の割には僕の耳にしっかり届き、なんとうか、気味が悪かった。

「ねえ、僕には何がなんだか理解できないんだけど」

遠藤の言っている事が滅茶苦茶なのは今に始まった事ではないが、田上君までおかしな事を口走っているのは変だ。

それに、なんで天月が特撮の映画なんてみているのか。全然わからなかった。

「何が理解できないだ。お前が美少女転校生に興味を押し付けたんだらう」

「いや、ますます理解できない」

「昨日、何をしたんだ？何をしたら彼女はあぁなってしまったんだ？なあ、久坂。教えてくれよ」

田上君からこんな風な発言な聞くのは初めてだ。

なんというか、妙に芝居がかっていた。

遠藤のあの喋り方の感じがうつったのだろうか。

「ごめん、田上君。本当にわけがわからないよ。しかも僕は何もしてない」

そう。僕は何もしてない。

むしろ僕の方が教えて欲しい。

はあ、と遠藤がため息をついた。

しらばっくれやがってこの野郎、と言うように。

何だ、こいつ。

ついさっきいい奴だ、と思ったばかりだったけど、本当はただの嫌みっただけの奴だったのか。

「あのなあ、美少女転校生天月葵がな、この部室についた途端『DVDって何があるの』と言い出してな、優しい俺はお前に渡す予定だったDVDを差し出したんだ」

「貸す予定のものを渡すなよ。というかお前、掃除はどうしたんだよ」

「いいんだよ。相手は天月葵なんだから。掃除は早めに切り上げて追いついたんだよ。まあ、それはともかくな、DVDを受け取ると彼女はな、『ありがとう』とだけ言ってな、そしてテレビの虜になっちゃったんだ。俺と田上がランプに誘ってもお菓子パーティーを開こうとしても、彼女は全くの無反応を貫き通しているんだ」

「それって」

もしかして、天月は本当にヒーロー同好会に乗り気だったのか？

「まさかだぜ。彼女までヒーローマニアの一員だったとはな。いや、英志、お前が彼女になんか吹き込んだんだろう」

「そんな事してないから」

「久坂、顔が若干ニヤけているな。怪しい」

「いや、何も無いよ」

「じゃあ教えてくれよ。英志は昨日、彼女と何をしてた？」

「いや、それは言えないけど……」

誰にも言わないと言う約束だから。

どうせ言ったとしても言い訳としかとられないだろうし。

「絶対になにかしたんだ。それはもう、とんでもない事を。最悪だ。最低だ。もう手遅れなんだ。もう彼女は英志のモノなんだ」

直ぐそこに天月がいるとわかっているのに、遠藤は恥ずかしくないのだろうか。

僕は恥ずかしかった。

天月に聞かれていたら、と思うと、気が気じゃない。

ただ幸い、天月はDVDに集中しているようで、全く話は聞こえていないと思う。

そうであって欲しい。そうでなくては困る。

なんて、考えながら天月の方を見ると。

「先輩も、ヒーロー好きなんですか」

天月の隣に、内藤君が座っていた。しかも、何故か自然に話している。

「私も昔、こういうの観てたから」

こういうのとは特撮番組の事だろう。

僕には小さい頃の天月がそれを観ている場面を想像する事ができなかった。

いや、目の前で天月がDVDを観ているんだけど。
なんというか、それは酷くリアルさに欠けていた。

部室 3

まず第一に、僕には目の前の転校生がヒーロー物が好きそうには全く思えない。

それはただの思い込みなんだろうけど、思えないものは思えないだからしょうがない。

第二に、天月は本物のヒーローなんだ。

そのヒーローがヒーロー物のDVDを真剣に観ている姿は、何かの冗談にしか思えなかった。

「アキラ、普通に天月葵と話してるな。意外と大物なのかもしれない」

真面目な顔でそう呟いたのは遠藤だ。

「大物って、どういうことさ」

「普通、天月みたいな美人の先輩がいたら多少は緊張したりするだろう。でも、アキラにそんな素振りは全く無いじゃないか」

言われて見れば確かに。

内藤君には全く緊張している様子は無い。

声の大きさも普通で、ちゃんと聞き取れる。

僕と話していた時はあんなに小さな声だったのに。

「先輩達は観ないんですか？」

内藤君が僕たちに聞いてくる。その声もハッキリと聞こえた。

どうやら、緊張していないのは天月に対してだけではないらしい。僕らに対しても同じなのだろう。

不思議な子だ。なんでいきなり緊張だとか警戒心だとか、そういうのが無くなったのだろう。

ヒーロー物が好きだから、とかなのだろうか。

DVDを観ているのを目撃して、僕らもそうなのだろうと確信したからなのだろうか。

まあ、どうでもいいか。

「僕も観るよ。遠藤と田上君もさ、一緒に観ようよ」

「嫌だよ。観たいならお前たちだけで見てろよ。俺は田上と二人でババ抜きやってるからよ」

二人でババ抜きなど、全然楽しくない事を何でやりたがるのか。それは止そうぜ、と言ったのは田上君だ。

「観ないの？ 貴方達」

天月が言った。

静かな口調で、首を傾げて。なんだかとても、不思議そうに。

「観る。観るよ」

天月の言葉に田上君はすぐさま反応する。

やっぱり、なんか田上君らしくない。

なんでだろう。テンションが上がっているのだろうか。

僕は田上君と、とても仲がいいというわけではない。同じクラスになったことがあって喋ったことがあって、同好会に協力してもっていた。それくらいの関わりしかない。

だから僕が今の田上君の振る舞いに違和感を感じるのは、僕の知らない彼の顔だと言うだけのこともかもしれない。

「裏切るのかよ、田上」

「遠藤も一緒に観ようよ。皆で観れば、楽しいって」

「はあ、これだからヒーローマニアはよ……仕方ねえな。いいよ、観てやるよ」

そう言って遠藤もテレビへと視線を移す。

まだDVDは始まったばかりだった。面白くなるのはまだこれからだ。

時計を見た。時刻は午後四時。六時くらいに下校すること考えても、時間まだはたっぷりあった。

下校 1

あつという間に時間は過ぎていった。

時間は六時。帰るには丁度いい時間だ。

僕は部室の鍵を閉めて、校門へと向かう。

「じゃあな、アキラ。それに天月……って、なんで英志までそっちにいるんだよ」

帰り際に遠藤が言う。

やっぱり、スルーしてはくれなかったか。

僕の家は遠藤と同じ方向だ。駅を使っている田上君とも一緒。けど僕はその反対側の、天月や内藤君と同じ方向に行こうとしていた。

「えっと、父さんと待ち合わせしてるんだ。今日は外食だから」
嘘だ。

外食の予定なんてないし、父さんと待ち合わせなんかしてない。

「ふうん、待ち合わせねえ」

「何だよ」

「いや、二日連続で天月葵と一緒に帰るのは偶然なのかと思ってただけだよ。気にすんな」

「偶然だから。遠藤こそ気にしないで」

本当は偶然じゃない。

でも理由を説明するわけにはいかない。

さっき、天月に言われた。

一ノ宮博士がもう少し僕の身体を調べたがっているそうだ。なんで身体を調べるのか、その理由は教えてくれなかった。

誤解を産みそうな言い方をするなら、今日も天月の家に行く。

あの真っ黒で怪しげな、キャンピングカーに。

「そうか。まあ、責任とらなきゃならなくなるような事はするなよ。じゃあな。帰ろうぜ、田上」

「ああ。久坂、信じてるからな」

田上君が僕を睨んだ。

安心して。君達が思ってるようなことは絶対に起きないから。

じゃあね、と二人に告げてその直後。

「あ、そうだ。今日は俺もそっちから帰らなきゃいけないんだ」

と、遠藤が唐突に口を開いた。

大人しく帰れよ、お前。

「だからさ、僕と天月さんはなんの関係もないって言ってるじゃん」

遠藤が何でそんな事を言い出したか、そんなのすぐにわかる。

遠藤は僕と天月が一緒の方向に帰るといいう、その本当の理由が知りたいのだ。

僕の言う事が嘘だと見抜いているだと思ふ。

多分、遠藤は僕が父さんと待ち合わせをしているっていう証拠が手に入るまで僕らと一緒にいるだろう。

そんな事をされたら困る。

下手したらあのキャンピングカーまで着いてこられて、色々と面倒だ。

「いや、別にお前と天月の関係も興味はあるけど、違うんだよ。俺アキラに用があるんだよ」

「僕、ですか？」

「内藤君に用って、今日会ったばかりなのに、何があるんだよ」

「うるせえなあ。世の中にはな、お前には全く思いもしない超複雑なことが沢山あるんだよ。だから俺はアキラと一緒に帰らなきゃならないの。お前と天月のデートを邪魔する気はないから、安心しろよ」

「だから、父さんと待ち合わせをしてるだけだから」

天月もいるってのに、そんな事を言わないで欲しい。

遠藤は恥ずかしくないかもしれないけど、僕は恥ずかしい。

天月に反応されたらどう責任をとってくれるんだ。

「デート？私と、久坂君が？」

心配した傍からこれだ。

「はは、悪い冗談だぜ。久坂」

田上君までそんな事を言い出す。

「全部、遠藤の気のせいだから。気にないで」

少なくとも、僕と天月と一緒に帰るのはデートだからじゃない。

遠藤だってわかっていくくせに、騒ぎ立てるのは、ちよっと、いや、かなり止めて欲しい。

「ハハハ、満更でもないくせに。英志は照れてるんだな。ピュアな男はモテるぜ」

「黙れよ」

「……いや、悪かった。言い過ぎた。俺が全面的に悪い。謝るから許してくれ」

遠藤の口調はふざけている様だが、こう言うのは本当に反省している時だ。

まあ、反省しているんだったら、いいかな。

ただ、それがいつまでも続くわけではないけれど。

下校 2

僕らは田上君に別れを告げ、校門を離れた。

「それで、本当に遠藤はこっちから帰るの？」

「ああ。だから言ったら。俺はアキラと一緒に帰らなきゃならないんだって」

天月は僕達を置いていくように先を歩く。歩みを合わせるといった思考は無いみたいだ。

そっちの方が気が楽だけど。

昨日もそうだったけれど、天月と一緒にいると視線が気になってしょうがない。

今だって、天月は通行人の視線を集めている。

「待ってくれよ、天月」

遠藤はそんな事を気にする様子は無く、天月と一緒に歩きはじめる。

なにやら色々語りかけているみたいだが、天月はそっけない返事を返すだけだ。

というか、遠藤は内藤君と一緒に帰るためにこっちに来たんじゃないのか。

「天月先輩って、なんか不思議ですね」

小さめの声で内藤君が僕に言う。

「うん。そうだね。たしかに不思議だ」

学校ではクールな美人転校生で通っているヒーローが特撮好きなんて、不思議でしかない。

「先輩たちは、付き合ってるんですか？」

「は？」

何を言い出すんだ。この子は。

「いや、なんか遠藤先輩達の言ってる事を聞いてたら、そうなのかなって」

確かに、DVDを観ている途中でも遠藤と田上君は執拗なまでに天月との事を僕に聞いてきた。

事情を知らない人が聞いていれば、そう勘違いしてもおかしくは無いんじゃないか、という位には。

天月は意味がよくわかっていなかったみたいだけど。

「違う違う。そんなことないから」

「そうなんですか？」

「そうだよ。天月さんは昨日転校してきたばかりだよ？」

「あ、そうか」

「そうじゃなくても、物凄くモテてる彼女と、僕なんかが付き合えるわけ無いだろ。」

田上君しかり、その他ギャラリーしかり。

天月は大人気だ。

もし僕みたいな奴が天月と付き合いでもしたら、その日以内に報復を受けるんじゃないだろうか。

その前に、付き合えるわけが無いんだけど。

「そういう物なんですか？」

「うん。そういう物なんだよ。アレは全部、遠藤の妄言だから。あいつ、中二の時に頭を強く打ったせいで、かなり強烈な妄想癖がついちちゃったんだよ」

でたらめ

「おい。そんな出鱈目を吹き込むなよ。中学生ってのは、何色にも簡単に染まっちゃうんだから。聞かす言葉には責任を持たないとな」
いつの間にか、遠藤は僕らの所まで戻ってきていた。

「出鱈目って、大体あってるじゃないか」

中学二年生の時に頭が打った事が本当の原因かわからないが、遠藤が今のように騒がしくなったのは、確かその頃からだった。

あの頃、遠藤は好きな子に振られたんだっけ。あれはもう少し前の話だったっけ。

昔の事だからあまり詳しくは覚えていない。

それまでは、たまに変な事を言うけれど基本的にはいい奴だったのに、今ではたまにいい奴で基本的には変な事を言っている奴になっちゃった。

「あのな、俺のこれは妄言なんかじゃないんだよ。いや、本当はそうかもしれないけど、俺がひたすら喋っているのには理由があるんだよ。それはもう、涙無しに聞かすにはいられないほどの、物凄い理由がな」

それこそ出鱈目じゃないか。

一応、聞いておくか。

「じゃあ、その物凄い理由ってのを教えてくれよ」

「うーん、今はまだ言えないな。そのうち、教えてやるよ」

やっぱり、出鱈目だった。

僕らは他愛の無い話をしながら歩く。

天月はそれに興味を示すような様子は無く、さらに僕らと天月の間の間隔はさらに広がっていた。

「それじゃあ、僕はここで」

喫茶店の近くにある横断歩道の前で、内藤君が言った。

「今日は楽しかったです。皆、優しかったし」

やっぱり、最初の頃に声が小さかったり俯いていたりしたのは、僕らを警戒してたからみたいだ。

「よければ明日も来てよ。多分、僕と遠藤は明日も部室にいるからさ」

天月はどうかかわらない。きっと、天月が来なかったら田上君も来ないだろう。

「はい。それじゃあ、さようなら」

「また明日だな。明日も学校で会おうぜ。絶対だ。約束だからな」
内藤君と一緒に、遠藤まで僕にそんな事を言ってきた。

「なんだよ、鳩が豆鉄砲食らったような顔しやがって。今時流行らないぜ」

「いや、本当に内藤君と帰るためにこっちに来てたのかな、って思っ
て」

「そうだよ。何度も言ったじゃないか。まあ、いいや。その辺はどうだっていいんだ。お前もホラ、早く行けよ。大好きな天月さんが先に言っちゃどうぞ」

天月は僕らを気にすることなく、先に進んでいた。

規則正しく、決まったとおりの歩幅とテンポで歩いていく。

「じゃあな、英志。行こうぜ、アキラ」

二人は横断歩道を渡って、路地の中へと入っていった。

僕はそれを確かめて、小走りで天月を追いかけた。

別に、離れたままでもよかったんだけど、天月に対する視線が気になってしょうがないんだけど、でもそれは天月を避けているみたいで、よくない事だと思った。

下校 3

僕が追いついたのを確認すると、天月は言った。

「彼、帰ったの？」

彼とは多分、遠藤の事だろう。やっぱり、天月は僕に気を使ってくれていたんだ。

「うん。本当に内藤君に用事があったみたい」

「そう」

相変わらず天月の返事は素っ気ない。

まだ二日しか経っていないが、それが天月のいつもどおりなのだろうな、とわかる。

よっぼどのが無ければ感情を表に出さないし、長い言葉を喋ることも無い。

「そういえばさ、天月さんってヒーロー物とか特撮、好きなの？」

多分そうなんだろうけど、他に話題も無いので聞いてみた。

だが、天月の返答は僕の予想とは違った。

「懐かしかったから」

「懐かしかった？」

「小さい頃、観てたから。ああいうの」

小さい頃と言うと、幼稚園くらいの頃だろうか。

七歳の時から訓練を行っていたと聞いたから、多分その時から普通の生活を送れていなかったんじゃないかと思う。

その頃に何があったか、聞いてはいない。聞いてはいけない事のような気がしていた。

七歳から化け物を倒すための訓練をしているなんて、通常ではありえない。

「田上君は、なんで同好会に来ているの？」

「え、何で？」

天月から質問が来るとは思っていなかったので、僕はそれに対し

て疑問で返してしまった。

「彼、私の事を観察しているみたいだったから」
観察とは天月らしい言い方だ。

本当はただ見とれていただけだと思うけど。

「気のせいじゃない？」

「そう？あなたも観察されていたけれど」

それはきつと、僕と天月の関係が親密なものなんじゃないかと疑ってたからだろう。

けれど天月にそんな事を言うのはちよつと恥ずかしい。

僕はもう一度、気のせいだよ、と言って誤魔化した。

僕らは無言のまま道を歩いていく。

高級住宅街には何台もの外国の車が沢山駐車されていた。油断したら盗難とか起きそうだ。

僕らは高級住宅街を通り抜け、川原へと着いた。

黒いキャンピングカーは昨日と同じ場所にあった。

それは薄暗くなった辺りと同化している。何も言われなければ、それがそこにあるとは気がつかないだろう。

天月は昨日と同じように黒いカードを通してパスワードを打ち込むパネルを出現させる。パネルを操作すると、小型のカメラを起動した。天月はそれに顔を近づける。昨日は気がつかなかったが、多分網膜認証をしているんだと思う。

小さい電子音が鳴り、キャンピングカーの後ろの方にある扉が開いた。天月は車内へ入っていき、僕もそれに続く。

「やあ、来てくれたんだね。久坂君」

その声の主は髭と髪を無造作に伸ばした、一ノ宮博士だ。

昨日と比べて、目の下の隈がさらに目立っていた。あまり寝ていないのだろうか。

一ノ宮博士の口調は優しかった。

昨日の、帰り際のあの吐き捨てるような言葉とは全然印象が違う。というか、昨日の帰り際がおかしかったのか。あの時だけは、僕

を拒絶するような感じだった。

衝動 1

「検査、昨日で終わったんじゃないんですか？」

僕は素朴な疑問を口にする。

血液と数本の髪の毛で解析は終わった、というようなことを昨日一ノ宮博士は言っていた。

「ああ、それ。嘘だよ。検査はもう必要ない」

「嘘？」

何でまた、そんな嘘を。

「一ノ宮博士」

天月が言った。

「彼にヴァリアント・システムを使用させる気なのですか？」

僕は天月が何故そんな事を言い出したのかわからなかった。

ヴァリアント・システムと言うのは、あのヒーローの姿へと変身するための腕輪をさしているんだと思う。

そして多分、一般人というのは僕だ。

「さすが、頭の回転が速い。まあ、昨日も言っていた事なんだがね」
一ノ宮博士は不快そうだ。天月に言われた事が、そこまで彼の気分を害したんだろうか。

「君の身体はもう限界だろう。隠してもわかる。その身体は確実に人ではなくなっている。因子が君という情報を書き換えている。後任が必要なんじゃないのか？君がヴァリアント・システムを使用できなくなってからでは、遅いんだよ」

「ですが、彼を巻き込むわけにはいきません。彼まで人でなくなってしまう」

「ならばどうすればいい。ヴァリアント・システムを使用できるかどうかは先天的に決まっている。一種の才能だ。不完全な適正者でさえ、発見できる確立は低い。だが、彼の適正は完璧だ。彼にヴァリアント・システムを使ってもらう以外、他にどんな選択肢がある

というんだ？」

「だからと言って、彼が因子に侵食されるのを私は容認できません」
限界、後任、才能、因子、侵食。

何を言っているのだろう。僕にはわからなかった。

二人は僕の知らないことを知っていて、僕の知らないそれで、僕の何かを決めようとしている。

彼らの言う事が理解できるようになれば、僕も仲間に入れるのだろうか。

一ノ宮博士にメールで呼び出されて、僕は内心、喜んでいた。天月が居たからあまり表情には出さないようにしたけど、嬉しかった。天月は僕をあまり変異種と関わらせたくないみたいだ。

きつと天月は、僕が危険な目に合わないように、気を使ってくれている。

特に親しくも無い僕を心配してくれている。

でも僕はこの真実をもっと知りたい。もっと関わりたい。僕の知らなかった非日常を体験したくてたまらない。

天月には本当に悪いと思う。

けれど、僕は憧れていたんだ。ずっと、ヒーローに。そんなものは存在しないと諦めて、それでも諦めきれなくて、中途半端な思いをずっと抱いていた。

けど、ヒーローはいた。正義の味方は存在した。僕の目の前に確かにそれはいたんだ。

だから、と僕は思う。

僕はその力になりたい。何でもいいから協力したい。

それが結果として迷惑にしかならなかったとしても、僕はこの状況を手放したくなかった。

「あの」

そう、それが例えどんなことでも。

僕はその力になれるのなら、どんな事だってやってみせる。

「僕、やります」

二人が何のことを言っているのか、正直僕にはわかっていない。けれどなんとなく、僕に何かをさせたいのだという事はわかる。それをすれば、きっと僕はこの状況をもっと知ることができる。根拠も無いのに確信があった。

「待って、久坂君」

「よし、じゃあ決まりだ」

二人がそう言った直後、一ノ宮博士の携帯電話が鳴った。

「失礼」

携帯電話を胸ポケットから取り出し、一ノ宮博士はそれを開いた。たどたどしい指使いで携帯電話のボタンを操作する。

「何？」

メールの文面を読んでいる内に、一ノ宮博士の眉間にシワが寄る。携帯で時間を確認し、さらに不快感を強めた。

「早過ぎる」

小さく呟いたその声は、十分すぎるほどに苛立ちが籠っていた。一体何があったのだろうか。

一ノ宮博士は「まあいい」と吐き捨てると、白衣から注射器を取り出し、それを天月に投げた。

注射器の中には黒い液体が入っていた。天月はそれを受け取る。その動作に違和感は無かった。それがなんなのか、天月にはわかっているのだろう。

「変異種が出た。今すぐに君達を転送する」
君たち、ということは、僕もなのだろう。

天月は少し困ったように言葉を詰まらせたが、「了解」と言い、キャンピングカーの外へと出る。

「ああ、そうだ。君にはこれを渡しておこう」

天月の後を追って外へと出ようとした僕に、一ノ宮博士が何かを渡してきた。

それは黒い色で重量感がある。

それは天月が、黒いヒーローが使った、あの拳銃と同じものだった。

「えっと、これは」

「護身用だよ。反動が通常の物よりかなり軽減されているから、君でも問題なく扱える」

僕はそのグリップを握った。引き金に指を当ててみる。初めて握った拳銃は全く現実味が無くて、まるで玩具のようだった。

「安全装置が付いたままだから、使う時は外すように」

一ノ宮博士はそう言って運転席の方へ、つまり黒いカーテンの向こう側へと姿を消した。

一人取り残された僕は外へと出る。

まだ空はオレンジと青の入り混じった空をしているというのに、川原は高級住宅街の陰に隠れていて、薄暗かった。

その薄暗い中、天月が先程受け取った注射器の針を自らの腕に刺していた。

ピストンを押し、黒い液体を体内に注入している。

「天月さん、それ、何なの？」

僕は気になって、つい聞いてしまった。

「私の身体を人に留めるための薬」

「え？」

身体を人に留めるための薬？

訳がわからなかった。天月は本当は人ではない、とでも言うつもりなのだろうか。

「ヴァリアント・システムを使用し続けると、その身体は少しずつ覚醒因子に侵食されていく。その症状を抑えるための、薬」

「覚醒因子？」

「『進化の系譜』を呼び覚ます因子の事」

「それって、変異種と同じものを持っているって事？」

「ヴァリアント・システムで影響を受けるのは、この腕輪に内蔵されているエニティレイターの因子だけだから、一概にそうだとは言えないけれど」

つまり、天月の身体はエニティレイターのそれと混ざりかけている、ということなのか。

あの黒い液体は、その症状を緩和させる為の薬、ということなのか。

「一ノ宮博士はあなたをエニティレイターにするつもりよ」

その言葉に僕の鼓動は少し強くなった。

エニティレイターとは、あの黒い装甲をしたヒーローの事だ。

僕をそれにする？どうしてだ。

「けれど、私はそんな事はさせたくない。私は貴方には貴方のままでいてもらいたい」

天月は僕をじっと見つめ、淡々とそれを伝えてくる。

「だから、貴方は闘わないで。こんな、間違った正義なんて選ばないで」

「間違った正義？」

僕らの身体は白い光に包まれて、それがどういう意味なのか、聞くことはできなかった。

衝動 2

僕は喫茶店の前にいた。

一ノ宮博士の元へと行く途中に通った場所だ。

近くにはファミレスもある。もう少し先にいけば高級住宅街が見えてくる。

「今回の変異種は二体だ。その内の一体がかなりの速度で移動している。もう一体は反応がない。人間の姿に戻った可能性がある」

一ノ宮博士の声だ。それは誰もいないはずの空間から聞こえてくる。

五次元的に近いからこそできる芸当、だったっけ。

一ノ宮博士の話では、どうやら変異種というのはレーダーか何かで居場所が特定できるみたいだ。

変異している状態、つまり人の姿じゃない時は特別な何かを発しているのだろうか。

「とりあえず、今は移動している変異種を追ってくれ」
「了解」

天月は右手首のに腕輪を操作する。

ヴァリアント・システム。変異種と闘う、エニティレイターへと姿を変えるための腕輪。

《解除コード認証。ヴァリアント・システム起動》

腕輪から電子音が聞こえてくる。同時に、天月の身体が別のものへと変わっていく。

黒の装甲。白のライン。背中にはバーニアがあり、太股には二丁の拳銃を内臓している。両手首には超振動で敵を切り裂くナイフも収納してある。

天月は瞬く間に漆黒のヒーローへと姿を変えた。

ヒーロー、つまりエニテイレイターの目が光った。薄暗い街にモーター音が響く。

「貴方は、私が守るから」

そして、天月は背中中のバーニアを吹かして飛んだ。

目標へ向かって一直線に進んでいく。すさまじい加速だ。

守るから、と言われてしまった。

彼女はヒーローなんだから合っている言えば合っている台詞なんだろうけど、僕も一応男だ。

男として、女の子に守ると言われるのは、ちょっと情けない気分になる。

「さあ、君も行くんだ」

一ノ宮博士は当たり前のように言ってくる。

けれどそんな事を言っただって、人間にはあれに追いつくだけの脚力は無い。もちろん、僕にだって。

「その辺に自転車があるだろう。それを使えばいいじゃないか。そっちの次元の物は誰のものでもないんだから」

「それもそうですね」

僕は適当な家の庭から一台の倒れている自転車を見つけた。

都合よく、チェーンも鍵も掛かっていなかった。スタンドが立っていない所を見ると、乗っている途中の物だったのだろうか。

それにしても、本当に仮想空間というのは生き物以外の全てを忠実に再現しているものらしい。

こんな技術、僕は見たことも無ければ聞いたこともない。こんなにすごいのに。

「仮想空間とかヴァリアント・システムとか、どうやって造ったんですか？」

僕は自転車を起こしながら尋ねた。

「とあるお偉いさんがね、家族を変異種に殺されたんだ。変異種が憎くてしょうがなかったんだろうね。その復讐の為に僕ら、つまり対変異種実働部隊を秘密裏に設立した。世界最高峰の頭脳を集めた研究施設まで立ち上げた。一般人に変異種を知られずに対抗する術を手に入れるために。そこでヴァリアント・システムも仮想空間も造られたんだ。ちなみに、費用は全て税金から出てる」

「そ、そうなんですか」

なんかこう、嫌な一面を聞いてしまった。

確かにヴァリアント・システムを開発したり仮想空間を作り出すにはかなりの費用が掛かるだろう。

けど、それが全部父さん達が必死で働いた税金で賄われているなんて、必要な事なんだとわかっていても、いい感じはしない。

僕は自転車にまたがり、天月の飛んでいった方向へ向かって漕ぎ出した。

周囲には誰もいない。道には買い物袋だったり鞆だったり、そういった物がいくつも捨てたれたようにあった。

「一ノ宮博士も研究、やったんですか？」

博士と言うのだから、それくらいは当たり前のようにやっているんだろうか。

「僕も一応、開発には携わってただね。ある科学者によって理論はすでに出来上がっていたんだ。その人は僕の尊敬している人物でもある」

意外だった。

一ノ宮博士にも、尊敬している人っているんだ。

口には出さなかったけど、僕は内心でかなり驚いていた。

「その人はある日忽然と姿を消してしまって、ヴァリアントシステムと仮想空間の基本構成のメモと膨大な研究データが残った。僕らのやっている事はその人の後追いに過ぎない。だから正確には、僕は研究をやったとは言えない」

多分、謙遜と言う奴だ。一ノ宮博士がそんな事を言うとは、これまた意外だった。

科学者としてのプライドみたいなものがあるんだろうか。

僕は自転車を漕ぐ。

天月が向かった方向の大体の場所はわかる。伊達に長年この街で生きてきたわけじゃない。

しばらく訪れていない場所だっただうやって行けばいいかわかるし、近道だって知っている。

黒のヒーローの姿が見えた。目が発光している。薄暗い空でそれは目立っていた。

追われているのは兎の様な変異種だった。子供用アニメに出てくるような、二足歩行をしている兎。

兎は住宅の屋根を飛び跳ね、移動している。別の言い方をすれば、逃がっている。それはかなり速くて、エニティレイターが加速してもその差は僅かしか縮まらない。

衝動 3

天月が腰のホルスターから銃を取り出した。細かく背中と足裏のバーニアの勢いを調整して身体を安定させ、銃口を兎の変異種へと向ける。

変異種はそれを察知してか、それまでのように長い距離を跳ねるのを止めた。代わりに細かく鋭く、左右に身体を振りながら跳ね始める。

何度も方向転換をすることで狙いを定まらせないようにしているのだろう。

変異種が屋根を蹴り、跳ねる度、何かの欠片が飛び散る。

あれは多分、瓦だ。コンクリートの破片もある。

それを粉碎するくらいの脚力があの兎の変異種には有るってことだ。

「なるべく変異種には見つからないようにしてくれよ。エニティレイターと同じ銃を持っているが、君の身体はただの人だ。襲われたらひとたまりも無い」

一ノ宮博士が忠告してくる。

確かに、今みたいに十字路のど真ん中で突っ立ってたら、簡単に変異種に見つかってしまう。

僕はブロック塀の影に隠れた。

自転車をそこに立て掛け、また天月と変異種の闘いを食い入るように見る。

何発もの銃声が響いていた。

だがそれは全て民家の屋根やその辺の電柱へと着弾している。

時たま、全くの的はずれな所に弾丸が飛んでいき、アスファルトの地面に着弾している。

変異種が左右に身体を振りながら逃げているとは言え、ここまで当たらないものなのだろうか。

昨日、天月は瓦礫の下から変異種の足を正確に狙い射った。その天月が、まだ一発も変異種に弾痕を付けていない。

調子が悪いのだろうか。それとも敵が素早いのだろうか。

銃声が止んだ。多分、弾丸を命中させることは難しいと判断したんだろう。

腕に収納されていたナイフを手にとった。もう一方の手には銃を握ったままだった。隙があれば、再び引き金を引くつもりなんだろう。

天月がバーニアを吹かした。銃口を定まらせる必要がなくなり、身体ブレを気にせずに一気に加速する。

だが、それでも両者の速度の差はそこまでない。

気のせいかもしれないが、天月の速さはさっきよりも若干落ちている気がする。やっぱり、調子が悪いのかもしれない。

けど、変異種と天月の距離は目に見えてわかるほど縮まっていた。

変異種は屋根の上から飛び降り、路地へと着地した。

そしてアスファルトとブロック塀を不規則に跳ねる。

天月もそれに続いた。かなりの速さで路地を跳び跳ねる変異種との差を、みるみるうちに詰めていく。

兎の変異種が路地を曲がってもそのせいで差が開くようなことはない。

一体、何で。

変異種は速い。銃で撃たれないために余計な動きをしているって言うのにそれを追う天月と対して変わらない。むしろ、天月の方が遅いくらいだ。

なのに、天月は差を縮めていく。普通に考えたらありえない早さで。

方向転換にも振り回される事なく――。

「あ、そうか」

そこまで考えて僕は気がついた。

天月は変異種の動きを予測しているんだ。

変異種の次の動きが判るから、最短距離で動く事ができる。

最短距離で無駄なロスなく追っているから、同じくらいの速さでも距離が縮まっていくな。

すごい。

経験という奴なんだろうか。僕には絶対にあんな事はできない。

二人の間の距離が殆ど無くなる。手を伸ばせばお互いに届くほどの距離。

天月が手に持つナイフが振動を始めた。

超振動ナイフ。何かで聞いたことがある。

確か、超振動によって対象との摩擦を減らし、切れ味を極端に上げる事ができるナイフだ。

天月がそれを振りかざした。吸い寄せられるように変異種の背中へとそれが向かっていく。

だが。

ナイフの刃が突き立てられようとしたその時、天月の身体が横へ

と吹っ飛ばされた。

蹴り飛ばされたのだ。

突然現れた、もう一体の変異種によって。

衝動 4

そいつは銀色の毛で全身を覆われていた。その眼光はまさに獲物を狙う獣だ。

顔は犬と似ていて、しかしそれよりも鋭い。

不意に現れたそれは、狼のようだった。銀色の毛並みをした、狼の変異種。

この変異種は兎の変異種の仲間なのだろう。あのタイミングで天月を襲ったのは、きっと兎の変異種を助けるためだ。

二対一となってしまった。

天月がどれくらい強いのかというのは、まだ僕にはイマイチわからない。もしかしたら、変異種が一体増えたところでそんなことは全く関係ないくらい、強いかもしれない。

けど、天月は不調だ。

さっきの動きは凄かった。でも、その前に天月が的はずれな場所へと銃を撃っていた事を僕は知っている。

避けられたからではなく、照準からすでおかしかった。ブロック塀に隠れながら見ていたから、僕の気のせいという可能性がない訳じゃないけど。

狼の変異種が兎の変異種へと視線を向けた。何かを喋っているわけではない。だが、何かを伝えようとしている。

天月が立ち上がる。そして、自分を蹴り飛ばした相手に視線を送る。その手に握られているナイフは振動を続けていた。

天月はこの状況をどう感じているのだろうか。

大した事はないと思っているのだろうか。それとも、内心焦って

いるのだろうか。

でも、天月はそのどちらでもない気がする。

いつもどおり、平静で闘う。

多分、それができるから、さっきみたいな動きが可能なんだ。

狼の変異種が動いた。それと同時に、兎の変異種もアスファルトの地面を蹴る。

天月は超振動ナイフをその手に握み前に出る。狼の変異種と天月の距離は瞬く間に縮んでいく。

そして、兎の変異種はと言うと、逃げ出していた。

高く高く跳んだそいつは、民家の屋根へと着地し、遠くへと跳んでいった。

二体一だったというのに、その優位性を自ら放棄した。

天月に勝てないと思って逃げたのか？

いや、でも、折角助けに來た仲間を置いて逃げるなんて、変だし。

天月がナイフを振るった。

変異種はナイフを紙一重でかわす。

そして天月の手首を握み、握りつぶそうとする。

天月から微かに苦痛の聲が漏れた。本当に微かだったが、何故かハッキリと聞こえてくる。

変異種が天月を振り上げ、そして地面へ振り下ろす。その動きは速い。

天月は空中でバーニアを吹かして体勢を整え、地面へ着地した。その足には恐らく、人間ならば骨折するほどの衝撃が加えられているだろう。だが、天月に痛みを感じている様子は無い。

エニティレイターの身体だから耐えられるのか、それとも天月だから耐えられるのか。

天月の腕から何かが飛び出した。それは凄まじい速さで変異種の手首に突き刺さる。

そのままの勢いでそれは変異種の手首を切断した。

絶叫が薄暗い街に響く。

天月を掴む手は力を無くし、落ちた。変異種の手首からは赤い血が吹き出している。

変異種も赤い血をしているんだ。

僕はそんな事を思っていた。

考えれば当たり前の事だ。ヒトも狼も、血は赤いんだから、その混合みたいな変異種の血は赤くなくちゃおかしい。

天月は苦しんでいる変異種に蹴りを叩き込んだ。

変異主の身体は先程の天月のように、吹き飛ばされる。

天月は追撃をかけようと、地面を蹴り、背中と足の裏の推進剤を燃焼させる。

すさまじい速度で変異種との間を詰めいてく。

その時、変異種が身体を回転させた。宙に浮く足で、丁度間合いに入ってきた天月に踵落しを喰らわせる。

天月は反応できず、地面に叩きつけられた。反動で少し、地面から浮く。変異種は天月を浮かすように上へと蹴り、隙だらけの腹を殴った。

天月が再び吹き飛ばされる。

変異種はすぐに天月に攻撃を仕掛けると言う事はしなかった。

自らの身体を見て、修復状況を確認している。

切断された右手首から先は、ての甲あたりまで再生していた。

傷口には、ミミズのような肉が這い、折り重なって新たな肉とな

っている。

その間に天月が起き上がった。少し、ふらついている。それほどまでのダメージだったのだろうか。

銃を構える手は震えていた。苦しみながら、それでも力を振り絞って構えている。

そう見えた。

「ようやく効いてきたか」

とても小さい、呟きと言う事すら躊躇われるような声が聞こえてくる。

それは僕に話しかけている訳じゃない。

誰にも聞かせるつもりのない独り言が偶然僕に聞こえてた。そんな感じだ。

ようやく効いてきた。

それは一体どういう意味なんだろうか。

天月の調子が悪いのは僕の気のせいなんかじゃなくて、しかも一ノ宮博士はその原因について何かを知っている。そういうことなのか。

だったらそれは何なんだ？

銃声が鳴る。だが、それは変異種へと命中することなく、ブロック塀へと直撃する。

変異種が避けたからではない。照準が合っていなかったからだ。

原因に何か心当たりがあるとすれば、天月が仮想空間に転送される前に射っていた注射くらいだ。

でも、あれは因子の侵食を抑えるためのもの、と言っていた。

詳しいことはわからない。だが、因子の侵食と言うのが避けねばならない事ならば、それを抑える薬で天月が不調になると言う事が有り得るのか？

仮にそれが副作用の産物だったとしても。

一ノ宮博士博士の言い方はまるでそうなるのを待ち望んでいるようだった。

もしかしたら、一ノ宮博士は天月がああなってしまう事を望んで、あの薬を――。

そんな事があるわけない、と僕は自分の考えを打ち消した。

もしそうだったとして、一ノ宮博士にどんなメリットがあると言うんだ。

ただ困るだけじゃないか。僕の聞き間違いだ。きっと。

何かが崩れる音が聞こえた。

そこに目をやると、エニティレイター、つまり天月が倒れていた。その周囲にはいくつものブロック塀が欠片となって飛び散っている。

「どうやら因子の侵食が限界に達しているようだ」

「侵食が、限界？」

「変異種とエニティレイターの原理は一緒なんだ。人工的に創られた『進化の系譜』を、言わば起動装置で呼び覚ます事で、エニティレイターとなることができる。その起動装置を覚醒因子と言うんだが、これがまた面倒な代物なんだ。何度も起動を繰り返す事で、その人物の身体と『進化の系譜』に刻まれている生物の境界線をなくしていく」

「それって」

「彼女の身体は今、人でなくなろうとしている。これまでは何も無い素振りをしていたが、本当は覚醒因子の侵食に苦しんでいたはず

だ。その影響が、もう抑えきれないほどになっている」

狼の変異種が天月の首を掴んだ。

天月はそれに対し、ナイフで抵抗しようとするが、それは敵わない。
い。

ナイフを握る手が緩み、ナイフは地面へと転がった。

覚醒因子の影響。ひたすら闘い続けてきたその代償。

天月は僕たちの為に闘ってくれているんだ。

僕らが変異種という、危険な存在を知らなくても言いように闘ってくれているんだ。

それなのに、どうして天月がそんな目に会わなくちゃならない？

天月が吊り上げられた。

首を締めながら、変異種は天月をブロック塀へと叩きつける。

「仕方が無い。政府に連絡して、軍隊を派遣してもらおう。軍隊の準備が整うまで仮想空間は維持しておくから、君はあいつに見つからないように逃げるんだ」

衝動 5

もう天月は闘えない。だから現実の世界で増援を呼び、迎え撃つ。それはわかる。時間が必要だから、仮想空間に変異種を閉じ込めておきたいというのもわかる。

でも、それは。

「天月を見捨てるってことですか？」

僕に逃げろと言ったということは、多分、僕や天月を元の世界に戻せないと言う事なんじゃないか。

事情はわからない。ただ技術的に無理なのかもしれない。

天月は覚醒因子とか言うもののせいで苦しんでる。狼の変異種に抵抗する力も残されていない。

それなのに、こんな状況を維持していたら、天月は――。

「仕方がないんだ。今、天月と変異種はかなり接近しているから、転送の際に不具合を生じかねない。天月と変異種の身体が混ざりあって、滅茶苦茶になってしまうかもしれない。君一人を転送するのだって長時間、仮想空間を維持する事を考えると、どうしてもできないんだ。転送と仮想空間の維持には、莫大な量の電力を必要とするから」

天月の身体がエニティレイターから元の人間の姿へと戻る。

その顔は苦痛に歪んでいた。それでも首に回されている手を振り解こうともがく。

だがその手は緩まない。手が離される様子も無い。

「さあ、早く。彼女が時間を稼いでるうちに」

時間を稼ぐ。「見捨てる」ではなく、一ノ宮博士はそう言った。言葉は勝手だ。それだけを聞いていれば、正しいように思えてしまう。

そんな事は絶対にならないのに。

目の前では天月が苦しんでいる。

僕はそれを前にしてただ見ているだけ。

さらには天月を犠牲にして逃げる。

そんな行為が至極当然のように感じられてしまう。

そんな事、あっていいはずが無いのに。

変異種が天月の右手から腕輪を取った。

ヴァリアント・システムと呼ばれるそれが無くなれば、天月はエニティレイターへとなくなってしまう。狼の変異種はそれをわかっているのかもしれない。

狼の変異種はほんの少しの間、腕輪を手に取りを眺め、道路へと放り投げた。

腕輪が黒い地面に転がる。

天月の手には何も無い。ヴァリアント・システムによる変身が解けてしまった際に、銃も超振動ナイフも消えてしまっていた。

だが、もしあったとしても、それを使うための力はもう残されていない。

このままだと、天月が、死ぬ。

そう考えた途端、どくん、と心臓が強く鼓動する。

僕は「嫌だ」と、呟いていた。

何か具体的な理由が頭に浮かんだわけじゃない。けれど僕は、どうしても天月が死ぬのが嫌だったんだ。

だから僕はポケットから銃を取り出した。グリップを握り、引き金に指を置く。

さっき手に取った時は玩具のように感じしかなかったのに、今は本物のそれを握っているという感覚があった。

「何をしているんだ。早く逃げろ」

僕はそれに対し、安全装置を外しながら答える。

「嫌です」

理由は後からこみ上げてくる。

僕の無謀な感情と行動に、思考が追いついてくる。

僕はヒーローに憧れていた。

目の前に本物のヒーローが現れたときは、本当に嬉しかったんだ。誰かの為に闘っているヒーローを、身を削って闘う天月を、僕は本当にすごい、と思ったんだ。

だから、死なせたくない。

だから、引き金を引く。

だから、僕は。

ブロック塀の影から僕は飛び出し、走った。

変異種に接近し、二十メートルくらい手前の距離で止まる。

人差し指に力を込めた。

銃声と共に弾が吐き出され、その反動が僕の手に伝わる。

弾丸は変異種の肩を掠めた。

変異種は僕に気がついたようだ。

僕へと視線を向け、そして天月の首から手を離した。

天月の身体が地面に落ちる。全ての力を失っていた彼女は、地面に引き込まれるように倒れた。

「こっちだ！」

僕は再び銃を撃つ。

反動が重く、辛い。

衝動 6

「何をするんだ。止めろ。そんなことに意味は無い」

そうかもしれない。この行動は客観的に見れば無意味だ。生身の人間が化け物に敵うわけがない。

でも僕自身に意味はある。天月を見殺しにするなんて、できないんだ。

弾は変異種から僅かに逸れる。撃てば撃つほど、変異種から離れた所へ飛んでいく。

手が震えていた。足も同じだ。心臓の鼓動が早くなり、嫌な汗が吹き出てくる。

恐怖の感情が無いと言ったら嘘になる。物語のようにカッコよくいられない。

でも、最低の生き方を選ぶなんて嫌だ。

誰かを見捨てて生き延びたとして、そんな僕は嫌なんだ。

変異種が僕へとゆっくりと歩み寄ってくる。

静かに、ゆっくりと、だが確実に。

怖い。

僕は怯えている。足は鋤くんで動かない。手は震えてまともに照準を合わせられない。

でも、何かが僕の背中を後押しする。

それが何かはわからない。けれど心の奥底から沸き上がるそれは、確かに僕を鼓舞し、僕を奮い立たせていた。

変異種が少しずつ天月から離れていく。

それでいい。そのまま、僕に向かってきてくれ。

右手の人差し指に力を入れる。相変わらず手は震えていた。

それでも僕は何度も銃を撃つ。天月には当たらないように、ぶれる照準で変異種を狙う。

少しずつ接近してくる変異種と一定の距離を保つように、僕は後ろへとゆっくり下がる。銃の反動を感じながら、僕は下がっていく。

それが少しの間続き、次の一瞬。

いきなり、前触れもなく、唐突に変異種が吼えた。そして、強く地面を蹴り、僕へと一気に迫ってくる。

僕はそれに反応して銃を撃つ。だがその弾が吐き出されるよりも早く、変異種の蹴りが僕の腹部へ衝撃を与えた。

痛いなんてもんじゃない。身体が腹から裂けるかと思うほどだ。僕の身体は宙を舞い、そして重力によって道路へと叩きつけられる。

そして数秒後、変異種は僕の身体を持ち上げると、電柱へと投げつけた。

再び衝撃が僕を襲う。痛さを通り越した痛みのせいで、呻き声すら出ない。

僕の身体が地面へ倒れこむ。背中も腹も、何かをなくしたような感覚があった。

そこにあるはずのものが無い。そんな感覚。

痛みのせいで、痛覚や触覚が鈍くなっているのか。

変異種は地面に蹲る僕を見ると、敵に値しないとみなしたのか、

背を向けた。

天月の方へと向かう。

やめろ。

僕は右手の銃を変異種に向けようとする。

けど、僕の右手にそれはなかった。僕の三メートルほど先に、転がり落ちている。

僕は身体を這い、銃を手についた。銃口を目標へ向け、そして引き金に力を入れる。

だが、弾は出てこなかった。壊れたのかもしれない。

僕がそんな事をしている間に、変異種は天月の元へとたどり着いていた。

天月を殺す気だ。息の根を奪う気だ。

心臓の鼓動がさらに早く、強くなる。嫌な感覚が僕の全身を駆け抜ける。

自分の弱さが憎い。守りたい時に守ることができない。わずかばかりの抵抗をして、ただ惨めに地面を這い蹲るしかない。

このままじゃダメだ。どうしたらいい。どうしたら、どうしたら！

その時だった。僕の目にそれが映ったのは。

「あれは……」

僕が見つけたのは腕輪だった。

天月がしていた腕輪。ヴァリアント・システムと呼ばれる腕輪。

エニティレイターという力を得るための腕輪。

仮想空間に転送される前、一ノ宮博士と天月が言い争っていた言葉が思い起こされる。

「彼にヴァリアント・システムを使用させる気なのですか？」
天月は確かにそう言っていた。

「後任が必要なんじゃないのか？」
つまり、新しいヴァリアント・システムの使用者。

「彼の適正は完璧だ」
適正がある。一ノ宮博士は確かにそう言った。

「一ノ宮博士はあなたをエニティレイターにするつもりよ」
そして、僕をエニティレイターにするつもりだった。

だったら、今、僕がこれを使えば。
僕がエニティレイターへと変わる事ができれば。
あいつを倒して、天月を救えるかもしれない。

衝動 7

僕は腕輪を掴んだ。そして、それを右手にはめる。

すると、腕輪は自動的に太さを調節し、僕の腕にフィットする太さになった。

素朴な疑問が生まれる。どうしてあの変異種はこれを外すことができたんだ？

天月がはめていたときも、きっと腕にフィットしていたはずなのに。

腕輪にはいくつかのスイッチがある。天月がヴァリアント・システムを起動するときには押していたやつだ。

「解除コードってやつ、教えてください」

呟いたその声を、一ノ宮博士は聞いている。確証はないが、そんな気がした。

解除の時に腕輪を操作していたことは覚えているが、どのように操作していたのかまではわからない。

でも一ノ宮博士ならそれを知っているはずだ。

「……止めた方がいい。まだ君用に最適化されているわけではないし、起動実験も済ませてない。今はとにかく生き延びる事を一番に考えるんだ」

やはり、一ノ宮博士は僕にヴァリアント・システムを使用させたかったんだ。だから僕を嘘の口実で呼び寄せた。

でも今は都合が悪いらしい。だから僕に逃げろと言っている。天月を見捨てて生き延びろ、と。

冗談じゃない。

僕の手には力がある。二人とも生き延びる可能性があるんだ。

それなのに僕だけ逃げるなんて、駄目だ。

「どうでもいいですよ。そんなの。それに、あいつを倒せば、一ノ宮博士だって都合がいいんでしょう？」

見栄だ。どうだっていいわけが無い。

本当は無茶苦茶に怖い。あの化け物と闘うなんて、恐ろしくてしようがない。

でもやらなきゃ、天月が死ぬ。

そんなの嫌だ、と思う僕がいる。

だったらやるんだ。そうしなきゃいけないんだ。

変異種は天月へと、鋭い爪の生えた手を伸ばしていた。
時間が無い。

一ノ宮博士が解除コードを口にした。

僕はそれにそって、スイッチを順番に押す。

「ありがとうございます」

僕は礼を言った。一ノ宮博士の返事は聞こえない。

解除コードを入力し終えた。

程なくして腕輪から電子音が聞こえてくる。

《解除コード認証。ヴァリアント・システム起動》

「死なないでくれよ」

一ノ宮博士が言った。それは僕を心配してくれているからなのだろうか。

僕がヴァリアント・システムを使えるからなのだろうか。

それともただ、変異種に腕輪を破壊されたくないからなのだろうか。

まあ、いいさ。そんなことはどうでも。

僕は天月を助けたい。

守りたいんだ。この手で。

僕に力があるというのなら、僕はその力で天月を助けたいんだ。
見殺しになんてするもんか。助かる命なんだ。絶対に、諦めてたまるか。

不思議な感覚が僕を包み込む。

ずっと前から、産まれる前から知っていたような、そんな感覚。

ああ、そうだ。

今、僕には力がある。だから僕はやるんだ。

守りたいものを全部、守って見せるさ。このヒーローの力で！

僕の身体が光に包まれる。

黒い装甲と白いラインを持つそれに、身体が変わっていく。

本音を言えば怖くて恐ろしくてたまらない。今すぐ逃げ出したい
てたまらない。

それでも、僕は守るんだ。守りたいんだ。

死なせるもんか。絶対にそんなこと、させるもんか。

光が次第に薄くなる。

そして僕は、ヒーローへと変身していた。

初陣 1

「ハハッ！ハハハハハ！」

薄暗い車内で、白衣を着た男が笑っていた。

目の前のパソコンの画面の光が男の顔を照らしていた。それ以外の光は無い。

「最高だ！思ったとおりだ！やはり、陣内博士は完全な成功体を持ち出していたんだ！」

青白い光に照らされる男は笑う。画面に映る黒い装甲でその身を変えた少年を見て、笑う。

男は感情を撒き散らすように叫ぶ。

「来るべき闘いの為の力！醜い化け物どもを皆殺しにする為の力！陣内博士が創り上げた最強の力！ああ、そうだ。久坂英志、君こそが人類の英雄だ！」

一ノ宮敦の表情は、酷く歪んだ狂気に溢れていた。

僕の身体は、僕の身体ではなくなっていた。

この状態を上手く形容する言葉が見つからない。

判りにくくても簡潔に言うとしたら、僕はエニティレイターに「なった」。

僕の身体は黒の装甲に守られている。でもそれは「装着」されているんじゃない。僕の身体の一部なんだ。

腕や足、胸や腰周りの装甲の表層で、僕は風を感じる。それはただの防護服や鎧では絶対にありえない感覚だ。

黒の装甲や背中のスラスターを「装着」しているんじゃない。僕の身体が装甲やスラスターに「なった」んだ。

変な感じだ。自分の身体が、自分の身体じゃない。今までに無い感覚が全ての感覚を支配している。

視力一つを取ってみても、かなりクリアだ。僕は元々目が悪いわけではなかったが、それでも違和感を感じるくらい、今の僕は視力が格段に上がっている。

僕は狼の変異種と対峙する。

鼓動が強くなるのを感じた。この身体でも、心臓はあるみたいだ。心臓がポンプする理由。それは、恐怖であり、焦りであり、興奮だ。

何て奴なんだろう、僕は。

天月の命が掛かったこの状況で、ヒーローとなれた事に胸を高鳴らせている。

狼の変異種が僕に突っ込んできた。

速い。けれど今の僕はそれにちゃんと反応ができる。さっきは銃を撃つ事すらできなかったのに、狼の変異種の動きが見えていた。

僕は腰に装備されている銃を両手に取る。そして引き金を何度も引く。

反動をあまり感じない。今手にしている銃の性能がいいのか。それとも、このエニティレイターの身体のパフォーマンスがいいからなのか。

恐らくは後者だ。一ノ宮博士は、僕がさっき使った銃とエニティレイターの使う銃は同じだと言っていた。

変異種は大量の弾丸を上へと跳ぶことで避けた。

僕はそれを追って銃口を向けるが、狙いが定まらない。

乱射を続けるうちに、銃の弾が尽きた。僕は太股あたりから代えのカートリッジを取り出し、両方の銃に装填する。

——あれ？どうして僕はここにカートリッジが内臓されているってわかったんだ？

無意識のうちに行動していた。でも、太股にカートリッジがあるだなんて、僕は知らなかった。

身体が勝手に動いていた。思考を介入せず、反射的に。

初陣 2

変異種が民家の屋根に逃げた。

そこに向けて発砲するが、弾丸はそれてしまう。今の僕に正確な射撃を行う技術はなかった。

だったら、接近するしかない。

僕は一気に屋根へと跳躍する。力加減がわからなかったので思いつき跳んだ。

僕の身体はビル三階分の高さまで持っていられる。

下を見ると、狼の変異種が僕を見上げていた。ここからなら、僕の腕でも狙えるかもしれない。

屋根の上の変異種にへと銃口を向ける。そして空中で発砲。

ひたすらに撃った。偶然のまぐれでもいいから、一発くらい直撃してくれればいい。

変異種は違う家の屋根へと飛び移り、それを避けた。民家の瓦がいくつかの鉛の直撃を喰らって、破壊される。

僕はそこに膝を曲げて衝撃を和らげながら、着地する。

痛みはなかった。エニティレイターの身体でなければ、相当な激痛を足に感じていただろう。

変異種が逃げる。僕はそれを追い、民家の屋根を走った。

一歩で楽々と五メートルくらい進む。足場の悪い、この状況で、だ。

僕は運動が苦手と言うわけではないのだけど、普段、こんなに速くこんなに高く動く事なんて、絶対にできない。

変異種が急にその足を止めた。そして、僕へと身体を向ける。
丁度その時、屋根から屋根へ飛び移るために跳躍をしていた僕は、
変異種に無防備な姿を晒してしまう。

やばい！

腕を身体の前で交差させた。防御の姿勢をとり、衝撃に備える。
次の瞬間、変異種の握り拳が僕の腕へと叩き込まれた。
僕の身体は強烈な一撃を暗喰らい、アスファルトへと吸い込まれるように落ちていった。

「ぐあっ！」

背中に硬い壁が当たる。僕の身体は跳ね、そしてまた地面に落ちる。

腕も背中も痛い。勢いよく走っていた所にあんなカウンターを受けたからだ。

それでも、このエニティレイターの身体のお陰で相当マシになっていると思う。もし人間の身体だったら、痛いなんてレベルじゃすまなかったハズだ。

もしかしたら、死んでいたかもしれない。

いや、この状態でもやばいんじゃないか……？

僕は痛みをこらえ、起き上がった。

銃を撃つても、敵に当てる事ができない。

素早さと耐久力があっても、一方的に攻撃を受け続ければ限界が来る。

そしたら、死だ。

「大丈夫か、久坂君」

一ノ宮博士だ。

大丈夫じゃないですよ。怖いんです。逃げたしたいです――。

口が裂けても言っちゃいけない事だ。言っただとしても、実行に移しちゃいけないことだ。

僕が逃げれば、変異種の標的は天月となる。

そしたら、苦しんでいる天月は一瞬で殺されてしまう。

だから駄目だ。逃げちゃいけない。痛くて辛くて怖くても、逃げちゃいけないんだ。

一ノ宮博士の言葉に答えることなく、銃をホルスターに収める。口を開いたら、逃げの言葉を口にしような自分がある。だから喋らなかった。

僕は腕の奥に収納されているナイフを取り出す。

それをどう取り出すのか、僕は知らなかった。けどカートリッジの時と同じように、無意識のうちに身体が動いていた。

変異種が屋根の上から道路へと降りてきた。

僕を観察するかのような視線を送ってくる。きっと僕の状態を探っているんだ。まだ闘えるのかとか、もう限界なのかとか、そんな感じのことを。

初陣 3

油断も隙も、見せてくれないか。

こっちはビビって逃げ出したくてたまらないのに、狼の変異種は冷静に状況を見極めている。

闇雲に突っ込んできてくれれば、まだどうにかなりそうな気はする。けど、僕の対処できないような手で攻められたら、どうしようもない。

なら、僕から仕掛けるしかない。

やられるまえにやる。

絶望的な状況に陥る前に、行動を起こす。目の前の敵に、自分から攻撃を仕掛ける。

銃じゃ駄目だ。てんで命中しそうな予感がしない。このナイフで変異種を斬るしかない。

でも、と躊躇する僕がいる。

それでも、と背中を押す僕がいる。

どっちの僕を選ぶべきか、そんなの決まっている。怖くてたまらなくても、やるしかない。

僕は変異種へ接近した。変異種も僕へと接近してくる。

横へ弧を描くようにナイフを振るった。けれどそれはあっさりと避けられる。

懷に変異種が潜り込んでくる。その腕が振りかぶられた。再び拳を振るう気だ。

させるか。

逆の腕からもう一方のナイフを取り出す。そしてそれを振動させ、変異種の拳を上から突き刺した。

ナイフの刃が変異種の手の甲を貫通した。傷口から血が流れ出る。一瞬動きが止まった。それでも拳は再び動きだし、僕を狙ってくる。

だったら！

ナイフは前へと押し出した。手の甲を刃が切り裂き、腕の真ん中が骨ごと二つに裂けていく。

力は特に必要なかった。それほどまでの切れ味があった。

変異種が絶叫する。

やった、のか。

安堵したその瞬間、腹部に蹴りが直撃した。

全く予測していなかった反撃に、僕はよろめいた。

後ろへと足が動いてしまう。腹が痛かった。腕だって背中だって痛い。それは僕の記憶の中で一番の痛みだった。

腹の装甲がいくつか割れて無くなっている。何かが傷つき、抜け落ちた感覚があった。

装甲の下、白い身体が見えていた。装甲を皮膚だとしたら、それは肉や骨にあたる部分なのだろう。

焦りが頭の中をうめつくす。

正直、ナイフで腕を切り裂けたことは奇跡に近かった。あれ以上の事は、多分無理だ。

でも変異種は生きていて、僕に反撃をしてきた。

昨日、一ノ宮博士が言っていた言葉を思い出した。変異種は、その身体を生命維持が不可能なほどまでに破壊しなければ、死なない。

あれだけじゃ駄目なんだ。でも今の僕に、あれ以上の事ができるとは思えない。

できないってことは負けるってことだ。

負けるってことは、死ぬってことだ。

死ぬってことは――。

変異種が動く。その血だらけの腕を押さえつけながら、跳んだ。

僕はナイフを構えた。それは格好だけのものだった。

頭の中はパニックになっていて、どう行動すればいいかなんて事は全く思考の片隅にもなかった。

とにかく逃げちゃいけない、とだけ思い、構えただけだった。

高く跳ぶ変異種が目映る。

僕は動かない。いや、動けない。

断片的な思考は浮かぶんだけど、片っ端からそれらは消えていく。

変異種が頭の上を飛び越えた。それを目で追う。

民家の屋根を失踪していく。血を撒き散らしながら、何所かへと向かっていく。

回りこんで僕を襲う気なのか。

だったらどう対処したらいい。闘うしかないんだ。やるしかないんだ。

考えをまとめろ、まとめろ、まとめろ！

それでも僕の頭の中には焦りしかなかった。

このままだったら確実にやられる。そう思いながら、視線だけは変異種を捉えていた。

変異種はどこか遠くへ消えていった。

変異種の走った方向は、天月の倒れている場所じゃない。

ということは、僕の視界から消えて隙を突いてくるつもりなのだろうか。

しかし、数分が経過しても変異種は姿を見せなかった。

これって、まさか。

「え？」

間拔けな声が聞こえてくる。それが僕の発した言葉だと気がつくのに、少し時間が掛かった。

尻餅をついた。恐怖と緊張が一気に解けたせいで、足から力が抜けてしまった。

心臓は五月蠅いくらい鼓動している。

初陣 4

「逃げたな」

どこからか聞こえてくる声は、一ノ宮博士のものだ。

変異種が逃げた。それはつまり、僕達は生き残った、と言う事だ。あまり実感がわかなかった。

けど、脱力した身体とやかましい心臓が今起こり、起こった事を告げていた。

僕は立ち上がり、走った。天月が倒れていた場所へと向かう。

本当に、天月を守れたのだろうか。

僕はそんな不安に刈られていた。

もしかしたら、変異種は天月を狙いに行ったのかもしれない。あの逃亡はカモフラージュだったら。そして、天月が襲われていたら。敵は狼の変異種だけじゃなく、兎の奴もいた。もしかしたら、僕は体よく誘い込まれただけなのかもしれない。

もしそうだったら。僕の考えなしの行動のせいで、天月が死んでいたら。

そう思うと、走らずにはいられなかった。

路地を曲がった。

天月の倒れていた場所は大体わかる。昔、何度か通った事のあった場所だ。

もう一つさきの路地を左に行けば、そこにたどり着く。

「正直、最適化の済んでいないヴァリアント・システムでここまでやってくれるとは思わなかったよ」

声は聞こえていた。何を言っているかもわかっている。

けど、僕はそれに答える余裕はなかった。

本当に天月を守れたのか、一刻も早くこの目で確かめたかった。

「君には才能がある。ヴァリアント・システムを扱う才能が」

僕は走る。無事でいてくれ、と願いながら。あの路地を曲がれば、天月が見えるはずだ。

「変異種を倒す事はできなかったが、犠牲者も出さなかった。上出来すぎる」

路地を曲がったそこに、天月はいた。

顔を辛苦に歪めていたが、確かにそこにいた。

「久坂……君？」

エニティレイターとなった僕を見た天月は、悲しそうな声で呟いた。

その声の意味する事は大体わかる。天月は僕を巻き込みたくなかったんだ。

僕を巻き込まないために、一ノ宮博士に反論して、自分の体調を偽って闘っていたんだ。

でも僕はそれを無下にして自分から危険な状況に飛び込んだ。自分で選んでしまった。

天月からすればそれは理解できないことだと思う。

憧れを現実を感じたいからなんて、僕から見たって馬鹿馬鹿しい。

天月の元へと駆け寄る。

痛みも緊張も一切を忘れていた。ただひとつの思いが僕を支配していた。

僕は天月を抱き抱える。

そうしたかった。そこに天月がいるんだと言う、実感がほしかった。

「久坂君？」

僕の行動に驚く天月を無視して、身体を抱きしめた。
そして心の奥底からわき出る、一つの感情を口にする。

「君を守れて、本当によかった——」

僕は守れたんだ。

それだけで十分だった。

変異種に対する怖さも恐れも何もかも、この思いの前ではどうだってよかった。

死にそんな思いをしたことだって、この事実の前ではどうだってよかった。

天月が生きていてくれているという、その事実さえあれば他に何も要らないじゃないか。

天月の体温を感じる。生きているんだと実感する。守れたんだと実感する。

それだけで、僕には十分だった。

「久坂君、君さえよければ僕らの力になってほしい。君のその才能で、人類を救う英雄になってほしい」

人を救う、ヒーロー。

それは僕がなりたかったものだ。

でも今は、僕は天月を守れたという、実感だけあればよかった。

今、わかった。言葉ではなく、気持ちで理解した。
誰かを守りたいから、何かを守りたいから、だからヒーローは闘
うんだ。

その手に感じる天月を、僕はさらに抱きしめた。

ああ、君を守れて、本当によかった。

こうして、僕の初陣は幕を閉じた。

一週間後（前書き）

後半に突入。ここからシリアスにいきます。本当ですよ？嘘じゃないですから。

壮絶な長すぎる前フリに付き合ってくれた方々、ありがとうございました。

これからはもっと面白くなりますよーって、こんなハードル上げて大丈夫なんだろうか。

一週間後

僕がエニテイレイターとなったあの日から、一週間が経った。

結局、「ヒーロー同好会」の新しいメンバーは、天月と内藤君の二人だった。

遠藤が考えていたような「天月と一緒に同好会にいたい」という生徒は田上君だけだったみたいだ。

部員の数が五人になり、僕達の同好会是最悪の状況を回避できた。活動内容では今までどおり。与えられた部屋で誰かが持ってきた特撮のビデオを観ている。

そもそも、そういうために作った同好会だ。皆で観たい物を観て、楽しむ。

内藤君はそれを気に入ってくれたらしく、ほぼ毎日通ってくれた。たしか、来なかった日は六日前じゃなかったっけ。それ以外はいつも来てくれている。

あまり自分からは喋らないけど、楽しんでるのは顔を見ていればわかる。

感情が顔に漏れている。中学生らしい。まあ、僕もついこの間まで中学生だったから、人のことなんて言えないんだけど。

田上君は天月を見るために同好会に来ている。元々、特撮が好きというわけじゃないし。

たまにテレビを見たかと思うと、すぐに視線を逸らしてしまう。

この間「久坂には悪いけど、ちょっと子供だましみたいだ」と言っていた。

意外だったのは、遠藤がヒーロー物の番組や映画を自分から観る様になっていた事だった。多分それは、特撮映画を僕に渡してきた辺りからだったと思う。

これまで僕がどんなに誘っても無理矢理みせても全く興味を示さなかったのに、一体どんな心境の変化なのだろうか。

遠藤本人に聞いても「気が向いた」としか教えてくれない。

でも、そんな理由でヒーロー物の作品を観るようになったわけじゃないと思う。

なんとなくだけど、そう思う。

それとは別で、もう一つ意外だった事がある。

天月はヒーロー物が好きだ、ということだ。

彼女はいつも、僕や内藤君の持ってきたDVDをじっと観ている。観ているということは、好きなんだと思う。天月の場合は。

この一週間を同じクラスで過ごしていてわかったことなのだが、天月は興味の無いものに対してはあまり自分から関わろうとしない。話かけられたり頼まれたりしたら別だが、それ以外の場合は本当に関わろうとしない。

クラスの女子に対してでもそれは同じで、自分から話しかけると言う事は全くといっていいほど無かった。

お陰で女子から嫌われつつあるらしい。

「クール、もとい無愛想で、美人。ほぼ無口だし、自分からは全然喋らない。女子からしてみれば、嫌味な女、ってしか見えないんだろうな。自分たちのことを見下してるんじゃないか、って思ってるんだらうぜ。まあ、天月はそんな奴じゃないんだらうけど」と、遠藤が言っていた。

ただ、笹倉さんは別のようで、天月を購買に誘ったり遊びに誘ったりしているらしい。これも遠藤から聞いたことだ。

それ以外では特に変化は無かった。

変わったことといえば、天月と一緒にいる事で視線を浴びるくらいだ。

学校の授業は問題なく進んでいるし、何か特別な事があったわけでもない。

まあ、ともかく僕の日常はいつも通りだった。

訓練 1

「ヴァリアント・システムの原理は基本的には変異種と同じだ。その腕輪に組み込まれた人工的な『進化の系譜』を、同じく腕輪に組み込まれた覚醒因子によって引き起こし、装着者の身体と一体化させる」

そして、これが僕の非日常だ。

僕は自分の右手首につけてある腕輪のスイッチを何度か押した。全部でスイッチは五つある。解除コードを入力するためのものだ。間違って起動することがないようにだったり、盗まれても扱えないようにしてある。

ここは川原の近くにある廃工場の中だ。

この付近を人が通る事はあまり無い。ここなら、あまり人に見つかる心配は無い。

僕の身体が右手首を起点として変化していく。
自分の身体が作り変えられていく。そんな感覚が僕の全身に走った。

僕の身体は黒をベースとし、白い線が掘り込まれている姿へと変わった。

背中や足の裏にはスラストスターがあって、腰には拳銃の入ったホルスターがある。

腕の中にはナイフが内蔵され、太股の中には十数発の弾が装填できるカートリッジがある。

僕は軽く跳び、そしてそのまま飛んだ。
足と背中のスラスタを吹かし、空中を移動する。

妙な感覚だった。これは僕の身体のはずなのに、感覚がまるでちがう。

自分の身体ではないのに、これは自分の身体。それに順応している自分が不思議で仕方がない。

「なかなか身体の扱いが上手くなったじゃないか。天月さんもそう思うだろう？」

一ノ宮博士の問いに彼女は無表情で答える。

「上達はしていると思います」

やっぱり、天月は僕が闘う事を嫌がっている。喋り方でわかる。

天月は感情をあまり表に出さないから、だからこそ口調に含まれる意志がわかりやすい。

でも、僕は天月の代わりに闘いたかった。

一ノ宮博士の話では、天月の身体はもう限界なんだそうだ。覚醒因子の侵食が限界まで進んでいて、彼女の身体はヒトでなくなりかけている。

この一週間、僕は同好会の活動が終わると、毎日のようにヴァリアント・システムに慣れるためのトレーニングをしていた。

一ノ宮博士も言っていたが、ヴァリアント・システムは身体に装着するようなパワードスーツの類ではない。

自分の身体を作り変え、別の自分の身体を作り出す。

装着するのではなく、成るんだ。

ヴァリアント・システムは『進化の系譜』との一体化の過程で、

自分の身体を別のものへと作り変える。

そしてヴァリアント・システムを解除する時、元の身体との間に誤差が生じるらしい。

全く適正のない人間がヴァリアント・システムを使うと、自分の身体に戻れなくなる。例えば腕の一部が黒の装甲のままだったり、ひどい場合はまったく別の何かになってしまう。

天月は適正が高く、その症状を抑える薬を飲む事で人間の姿のままでいられた。

でも、その薬は症状を完璧に押さえられるわけじゃなかった。度重なるヴァリアント・システムの使用は使用者の身体を蝕んでく。

それは天月も例外ではなく、彼女の身体は人のものから段々変わっていった。

天月の高い運動能力も感情が表に出にくいのも、その影響らしい。

このまま闘い続ければ、天月は人でない何かになり、そして最悪の場合、死んでしまう。

「さすがだ。あの数値は間違いじゃなかった。一週間でここまでできるようになるなんてね。それに、特に身体に異常も無い。最高だよ、久坂君」

一ノ宮博士が言うには、僕には天月以上の適正があるらしい。

エニティレイターの覚醒因子に侵食されにくいという、特異体質なんだそうだ。

天月もそうなのだが、僕の方が侵食を押さえ込む事ができるらしい。

なので、政府から後任の装着者が来るまでの助っ人ということで、僕が闘う事になった。

この街にいる変異種は残り三体。

それを僕が倒す事になった。

まるで僕がヒーローになったみたいで、少しワクワクしている。

「じゃあ今日は、飛行とその身体にある装備を扱う練習だ」

僕はそれに従い、博士の指定したコースを飛行する。

工場の中は適度に広く、そしていくつかの作業用の機械が配置されていた。

僕はパイプやベルトコンベアの間を縫って飛ぶ。

自分の思ったように飛べる。一週間前には考えられなかった事だ。

結局あの最初の戦闘ではバーニアを使わなかった。

使い方はわかっていたが、扱い方がわからなかったからだ。

でも今ではどうやって加速し、減速し、飛行すればいいのか、バツチリだ。

この一週間、僕は同好会の活動が終わると、毎日のようにトレーニングをしていた。

一ノ宮博士も言っていたが、ヴァリアント・システムは身体に装着するようなパワードスーツの類ではない。

自分の身体を作り変え、別の自分の身体を作り出す。

装着するのではなく、成る。

自分が今まで持っていた感覚が一瞬にして変わり、新しい感覚が全身に回っていく。

僕はそれを初回で適応できた稀有なパターンらしい。

だが、技術は皆無のため、ろくな闘い方ができない。

銃の扱い方一つをとってみても、照準はろくに定まらない、適当

に撃っているだけ、残弾など全く考えないなど、例を上げればキリがない。

訓練 2

だから僕はこの一週間、基本的な事を訓練していた。

グリップの握り方から構え方、目標の狙い方。ナイフの扱い方や、飛行の体勢、加減速、方向転換など。変異種の身体を消し去る、あの技も一応教わった。

完璧には程遠いが、知識としては頭の中に入っている。

指定されたコースを飛び終えた。

「よし、じゃあ次は射撃だ」

一ノ宮博士の前に着地する。いつも、飛んだ後は身体が重く感じる。

腰から拳銃を取り出す。

三十メートルほど先に停止したベルトコンベアがある。その上に、十数個の植木鉢がある。その内の一つ照準を合わせ、撃った。

弾丸の命中した植木鉢は割れ、その破片は地面へと落ちていく。

僕は別の植木鉢に狙いを定めて引き金を引く。

植木鉢が割れた。そしてまた、別の植木鉢に狙いを定める。

全ての植木鉢を撃ち終わると、ベルトコンベアが動き出した。

動局的を当てる訓練だ。遠くから植木鉢が流れてくる。

こんな風に、一週間訓練を行っていた。

その間、変異種が出てこなかったのは幸運なんだろう。三日連続で変異種が現れていた事を考えてみれば、本当に幸運だ。

もしかしたら立て続けに仲間をやられたせいで、慎重になっているのかもしれない。

そのお陰で、訓練を行うことができた。

天月の闘い方にはほど遠いが、一週間前よりは確実に強くなっているはずだ。

狙いを外す時もあるけど、自分の撃ちたい所に銃を撃てるようになったし、飛行の仕方だって覚えた。必殺のあの技だって、使えるようになった。

天月の代わりを完璧にこなせるとは思わないけど、後任の装着者が来るまで、僕も一緒に闘えると思う。力になれると思う。

それに、憧れだけで終わらすのは嫌だ。

正義の味方になれるのなら、なってみたかった。人を守るヒーローに、なってみたかった。

あの日、あの時、天月を守れた時。

僕はたまらなく嬉しかった。僕でも、誰かを守れるんだって事が。憧れだけで終わらなかったと言う事が。

守りたいから闘う。

だから僕はエニティレイターになるんだ。

訓練が終わった。

始めたのが六時で、終わったのは八時。二時間ほどやっていた事になる。

僕はいつものように、右手につけていた腕輪を一ノ宮博士に返そうとした。
けれど。

「ああ、別にいいよ。君がそのまま持っていて。というか、そうし

てくれないと困る」

と、一ノ宮博士が言った。

「明日から変異種を本格的に探し始める。見つかり次第、君を仮想空間に転送する。その時は連絡をするよ。屋外にいてももらわないと、転送はできないから」

「実戦ってことですか」

「ああ。そうだよ。緊張してきたかい？」

「ええ、まあ」

一週間前にも一度闘ったけど、あの時は怖くて緊張して仕方が無かった。

今回はちゃんと訓練をしているし、若干の自信のようなものがあるけれど、それでもやっぱり不安はあるし、恐れもある。

「僕に上手くできますかね」

「ああ、その辺は大丈夫だ。彼女にバックアップに回ってもらおうから。もしもの時は、彼女が何とかしてくれる」

「天月が？」

彼女を見る。天月は不思議そうに僕を見てくる。

何を疑問に思うのか、と。当たり前のことなんじゃないか、と。

そう言っているような気がした。

確かにそうなんだろうけど。

天月が闘うのは当たり前と言えば当たり前の事だ。今までそうしてきたんだ。これからもそうする。たとえエニティレイターという力が無くなったって、闘う事はできる。

けれど、天月の身体はあまりいい状態じゃない。

ヴァリアント・システムの使用を禁止しているから、今は薬で症状を抑えられている。

でもそれは、ギリギリの、辛うじてのレベルだ。

いつどんなタイミングで再びあの時のようなことがおこるか、予測できない。

もしもその時、変異種に襲われたら。もしもその時、守ることができなかったら。

そう考えると、天月には闘ってほしくなかった。

気まづさ 1

でもそれは多分、天月も僕に思っていることなのかもしれない。だから僕を巻き込みたくなって、だから僕にヴァリアント・システムを使わせたくなかった。

天月は僕を守ろうとしてくれてたのに、僕はそれを無視している。やっぱり僕のこの行為は、ただの我が侘なんだろうか。

「もう時間も時間だし、早く帰った方がいい。何かあったら、君の携帯電話に連絡するから。いつでも電話に出れるようにしておいてくれよ」

「僕の携帯に、ですか？」

「ああ。もう知っているから、言う必要は無いよ」

「いつの間に、そんな」

一ノ宮博士に携帯の番号を教えた記憶は無い。

「まあ、知り合いから聞いたのさ。僕は顔が広いからね。こう見えても」

知り合い、と言って真っ先に思いついたのは天月だ。

でも、僕は天月に携帯電話の番号もメールアドレスも教えていない。

他には誰も思いつかない。第一、僕が知る分には、一ノ宮博士はいつもキャンピングカーの中にいる。

身体を洗うために銭湯くらいは行っていると思うけど、そこで僕との共通の知り合いができるとも思えない。

考えるのがバカらしくなってきた。

一ノ宮博士は政府から変異種を倒すように言われているんだ。政府が後ろについているんだったら、個人情報全部筒抜けってこともありえなくはない。

そう言えば、初対面の時も僕の名前を知っていた。

「とにかく今日は帰ってよく寝る事だ。この一週間の訓練の疲れが溜まっていると思うから」

言われなくてもそうするつもりだった。

僕は運動が嫌いなわけじゃない。でも、進んでやろうとは思わない。

普段の僕は俗に言う運動不足で、だからこの数日の訓練はかなり応えていた。

エニティレイターの身体で訓練をしているんだけど、多少は僕の本当の身体にも多少は影響があるみたいで、全身が筋肉痛になっていた。

あんなに激しく運動して、筋肉痛で済んでいるだけまだマシだ。

「それじゃあ、彼をよろしく頼むよ。僕はデータの検証をやるから」
天月にそういうと、一ノ宮博士は僕らを置いて、キャンピングカーへと向かった。

これも、一週間続けていた事だ。

訓練が終わって、家に帰る。その時に何故か必ず、天月が僕を見送る。一ノ宮博士の指示で。

「もしかしたら、変異種に闇討ちされるかもしれない」

と、一ノ宮博士は言っていた。まあ、理屈はわかる。納得もできる。

でも、気まず事この上ない。僕が勝手に思っているだけだけど。

話しかけるのに緊張するって訳じゃない。別にそれ自体は抵抗はない。

ただ、天月と近くにいるのが気まずい。

問題はそう、一週間前だ。

何で僕、あの時あんな事しちゃったんだろうなあ……。

変異種を倒した後に、天月の元へと向かった時。

僕は思いつき天月を抱きしめたんだ。それはもう、盛大に。

あの時は気分がハイになっていたんだ。ヒーローになって、極度の緊張から開放されて、それでちょっと頭がおかしくなっていたんだ。

そう思いたい。

抱きしめるって、そんな間柄じゃないじゃんか。全然さ。

多分、天月は気にしていないと思う。

出会ったときから口調は変わってないし、別に僕を避ける様子もない。

僕が一方的に気まずく感じているだけなんだ。それはわかっているんだけど。

「はあ……」

ため息が出てしまう。

僕は天月が好きだ。でもそれは友達としてって事で、恋愛感情が

あるわけじゃない。

田上君とか内藤君と同じ、仲間。同好会と一緒にやっている友達。その友達と、妙な隔たりを創りたくは無かった。

しかも、その隔たりを感じるのは僕だけだ。天月はどうでもいい事だと思っているだろう。

結局は僕一人の空回りで、間抜けでアホらしい。それがわかっていなのに、気にしている僕。

だからため息が出てしまう。

「どうかしたの？」

天月は僕の考えている事なんて、絶対に理解できないだろう。

それが何、と言われそうだ。

わかっているんだ。わかっているけど、どうしても意識してしま
う。

抱きしめた天月の身体の感触。天月の鼓動。天月の体温。鮮明に
思い出せる。

なんだこれ、まるで変態じゃないか。

こんな事を天月に言えない。適当に返事をして、誤魔化すくらい
しかできない。

「身体に違和感があるなら、すぐに言って」

真剣な表情だ。いや、天月はいつも無表情だから、真剣に見える
んだけど。

とにかく、僕のことを心配してくれているってのはわかる。

それなのに、僕ときたら。

「大丈夫。何とも無いよ」

そう、何とも無いんだ。身体の方は問題は無いんだ。

強いて言うなら、心の問題。この状況を早く終わらせたいと感じる、僕の思考の問題だ。

「……そう」

何かを言いたそうだった。それが僕に対する言及でないことを心の底から祈る。

上手く誤魔化せる自信が無かった。うっかり、変なことを口走ってしまいそうだった。

僕が何を考えているか聞かれたら、それはもう引かれること間違い無しだ。

家に早く帰りたいかった。最短ルートを早足で歩く。

天月はそれに何も言わず、着いてくる。彼女はただ僕の事を気遣ってくれているだけなのに。

ただそれだけなのに、僕は居心地の悪さを感じている。ああ、僕ってこんなやつだったのか？

「久坂君」

「は、はい」

決心したかのような声。僕は足を止め、天月の方を見る。

相変わらず表情は変わらない。声の感じも同じだ。

あの時のことを聞かれるのだろうか。どうして私を抱きしめたのと。

冗談じゃない。そんなの止めてくれ。消し去りたいくらい恥ずかしい事なんだ。

しかし、天月の口から出てきた言葉は違う物だった。

「貴方は何で、闘う事を決めたの？」

「何でって」

とりあえず、安心した。やっぱり天月は気にしてなかったんだ、と。

そして考える。僕が何で闘うのか。

一秒もしない内に頭に浮かんできた。簡単なことだ。ずっと、頭の中にあったことだから。

「正義の味方になりたかったから、かな」

もちろん、それだけじゃない。

天月を守りたかったから、というのもある。

でもやっぱり、僕は正義の味方になりたかったんだ。

気まづさ 1 (後書き)

短編、書いてみました。

「セイギノタメ」というヤツです。

ヒーローの番外編なので、興味のある方はぜひ。

実は、「セイギノタメ」みたいな展開でヒーローも書いてみたかったり。

気まづさ 2

「じゃあ、貴方思うの正義の味方って何？」

「僕の思う正義の味方？」

「そう」

天月がそんな事を聞いてくるなんて、思いもしなかった。

これもあまり時間は掛からなかった。いつも思っていたことだから。

「誰かの為に闘えて、誰かの為に命を賭けて、誰かの為に平和を守るような人、かな」

自分のことよりも他人を心配できる。

損得なんかで動かない。

ありえないような、真っ直ぐな人間。

そんな生き方に憧れる。だからそんな生き方をしてみたい。

だから僕はヒーローになりたいんだ。

「僕に守ることができるなら、守ってみたいんだ。皆を、この街を、全てを」

あのエニテイレイターの力があれば、そうすることができる。

僕にだって、誰かを守ることができる。

正義のヒーローになることができる。

「僕も力になりたいんだ。平和を守りたい」

「……あなたには、無理よ」

「え？」

驚く僕を置いていくように、歩き出した。

「待って。それ、どういう意味？」

「そのままの意味。貴方はエニティレイターとして闘えない」

意味がわからなかった。どうして、天月はそんな事を言うんだらう。

僕の言ったことが気に入らなかったのか？

「貴方の正義は、人を殺せる？」

「なんでそんな話になるのさ。それに、倒すのは人じゃなくて変異種じゃないか」

「変異種も元々は人間なの。それでも貴方は闘える？」

「……闘えるよ。変異種は野放しにできない」

脳を本能に支配されていく変異種は、速やかに殲滅しなければならぬ。

一ノ宮博士が言っていた事だ。天月だって、それを知っているはずだ。

それを倒さないでいれば、被害が出る。誰かが死んでしまうかもしれない。あの時の、変異種と初めて遭遇した時の恐怖は、今でも明確に覚えている。

変異種という化け物を倒す為だったら、僕は闘える。

あの恐怖を皆に味合わせるのは嫌だ。

けれど天月は、僕の気持ちを折るように言ってくる。

「貴方にはできないわ。絶対に」

天月の真意がわからなかった。

僕の事を聞いてから遠ざけようとして、それであんな事を言ったのだろうか。

一ノ宮博士の説得ができないから、だから僕の心を折るような言葉を一ノ宮博士の口から出てくる。

そんなことない、と頭を振る。天月はそんなヤツじゃない。

僕の正義は、人を殺せるのか。

天月はそう言った。僕の思うヒーローを聞き、そう言ったんだ。僕が誰かを殺す。

想像してみる。誰でもいい。誰でもいいんだ。

エニティレイターとなって、誰かを襲う。誰かを殴る。誰かを撃つ。誰かを切り刻む。

想像できない。人を殺すなんて、僕にはできそうにない。

いや、違う。倒すのは変異種だ。危険な奴らだ。僕や天月の事を殺そうとしたやつらだ。

放っておけば、犠牲者が出る。傷つけられて恐怖して、殺されてしまうかもしれない。

天月だって、そうしてきたんじゃないか。

そのお陰で、僕らはこうして平和に暮らせてるんじゃないか。

僕らを守ってくれていた天月は、もうエニティレイターとして闘えないんだ。

だったら、誰かが代わりをやらなきゃいけない。

それが、僕だって構わないはずだ。

「英志君は黄昏の時期に突入しました、っと」

窓の外を見ていた僕に、遠藤が喋りかけてくる。

うるさいな、と小声で言う。考え事をしているときに、遠藤の無意味な話に付き合う気は無かった。

それに、今は授業中だ。私語は慎んだ方がいい。

「天月さんと上手く行っていないのか？二週間経たないうちに破局か。大事なのはお互いを思いやる事だぜ。お前、一人で我が侘な考えに走ってないか？」

「僕は何も我が侘な事は言っていないよ」

そうだ。僕は別に我が侘なんかじゃないじゃないか。

我が侘だとしたら、天月の方だ。僕に理解できないことを言って、困らせてくる。

僕が闘うのは、ヒーローになりたいからだけじゃない。

天月を死なせたくないからでもあるのに。

「まあ、何があったかわからないけどよ、そうカリカリしない方がいいぞ。落ち着いて話せば理解し合う事もできるだろうよ。時間は有限だ。なるべく早く、仲直りしといた方がいいんじゃないか」

「遠藤には関係ないだろ」

「あるよ。大有りだ」

何を根拠に、こいつは。

「俺とお前は親友じゃないか。その親友が困っていたら、手を差し伸べる。当たり前だろ」

「遠藤……」

よくもまあ、そんな恥ずかしい事を堂々と言えるな。
なんか可笑しくて、笑ってしまった。

「感動したか？感動しただろう？俺は親友を第一に考える男だからな。感謝していいぞ」

「違うよ。遠藤の言っている事が狂ってて、苦笑いが出たんだよ」
「声上げて苦笑いかよ。素直じゃないんだから」

丁度その時、チャイムが無かった。

四時間目が終わって、これから昼休みだ。

僕らは号令を済ませて昼飯を食べるを準備を始める。

天月は買ってきていたサラダやおにぎりやらを食べていた。

なんというか、運動部の男子みたいだ。その容姿から全く想像できない雰囲気だ。

そういう所がまた、女子にとっては近寄りがたいのかもしれない。

「あーあ。んじゃまあ、俺は学食にでも行こうかな。英志も来たかったら一緒に来てでもいいぞ。俺にジャンケンで勝ったら、カレーくらいは奢ってやってもいい」

「素直じゃないな。普通に、一緒に行こうって言えばよ。あとカレーはいらない。弁当あるし」

昼

学食は校舎とは別の建物の、二階にある。一階には体育館、二階に学食と購買、屋上にプール。よくわからない造りだ。

学食で料理を頼む時は、まず食券を買う。値段は二百円から五百円くらいで、なんとも言えない値段。

料理はおいしいと言えはおいしいし、おいしくないと言えはおいしくない。まあ、要するに普通の学食だ。

普通だから、いつもどおりの昼食を食べる分には何の不満も無い。僕も、弁当が無い時は学食で昼食を食べている。

学食に行く途中で、内藤君と会う。何人かの中学生と一緒に廊下を歩いていた。

内藤君は僕らに気がつくど、軽く会釈をする。

「一緒に学食に行かない?」、と言いかけて止めた。彼は今、友達と一緒にいるんだ。僕らに変に気を使わせるのも悪い。

「よう、アキラ。元気だったか?」

何も遠藤は迷うことなく内藤君に話しかけた。ある意味すごい。というか、お前は昨日も内藤君に会っているだろ。

「悪くないです。特に違和感もないし」

それに対しての内藤君も回答も変だ。なんだ、特に違和感が無いって。遠藤の影響を受けているのだろうか。あまりよくない傾向だ。「そうか。良い事だな。健康第一だもんな。じゃあ、一緒に行こうぜ」

「はい」

そう返事をして、中学生に向かって少し、申し訳なさそうに言う。「僕これから先輩と学食に行くから」

内藤君は中学生達に別れを告げると、僕らの方へやってきた。なんだ？

「どうしたのさ、内藤君」

不思議で仕方が無い。君はなんで当たり前のようにこっちに來たんだ。一緒に友達と何処かに行こうとしてたんじゃないのか。

「遠藤先輩と約束してたので。今日、一緒に学食に行くって」

「そうそう。俺達は仲良しこよしだからな。学食で昼飯を食べるくらい、当たり前だろう？」

常識だろ、と言わんばかりの口調だ。

ここ数日で二人は仲はかなりよくなっていた。同好会が終わったあとも二人で何処かへ遊び行くことがあるし、日曜日には内藤君が遠藤の家に遊びに行ったみたいだ。

なんだろう。内藤君が遠藤と一緒にいるのは、怖いもの見たさみたいなものなのだろうか。そうでなくちゃ説明がつかないような気がする。

「まあ、ともかく飯喰いに行こうぜ。腹が減ってしょうがない」

遠藤は一人で学食へ向かっていった。内藤君がその後を追いかける。

僕の疑問なんて些細なものだし、どうでもいいか。

僕も二人を追いかけて、学食へ向かう。

僕は弁当。遠藤はカツカレーとかけうどん。内藤君は醤油ラーメン。まあ、なんというか、カツカレーとうどんというのはボリュ

ームがありすぎると思う。

「本当はさ、カツカレーうどん定食ってのを喰ってみたいんだよ。でも、ここの学食にそれはないんだよな。残念な事に。だから妥協してるんだ。俺は」

遠藤は不満そうにカツカレーを頬張る。

「あのさ、カツカレーうどん定食ってのは初めて聞いたけど、カツカレーうどんの定食のことなんだろう？ だったら、それでいいじゃないか」

目の前にあるカツカレーうどん。それで十分、遠藤の要望には答えられていると思う。

遠藤は「わかってないなあ」と言うと、水を飲みながら言った。

「カツカレーうどん定食は『カツカレー』と『うどん』の定食じゃないんだよ。『カツカレーうどん』と『ご飯』の定食なんだ」

「は？ カツカレーうどん？」

そんなの、この世の誰が食ったことあるっていうんだ。

僕は想像する。多分、カツカレーうどんとはカレーうどんにカツが乗っているのだろう。

そして悲しい気分になった。

本当に遠藤はそんなものが食いたいのか、と。

カレーうどんの汁を吸って、カツの衣が湿気てしまうのは目に見えている。しかも、その湿ってカレーの味のしみこんでいるカツは、多分ご飯と一緒に食べるんだ。

だったらカツカレーでいいんじゃないか？ カツの衣が湿って美味しいことなんて、まず、ありえない。僕はそう思う。

「先輩、それって美味しいんですか？」

内藤君も疑問に思っている。というか、そんなメニューがあるのだろうか。

「なあ、アキラ。俺が不味いものを好き好んで食う男だと思うか？」
「でも、見たことも聞いた事ないし」

「あのな、カレーうどんの汁がカツに染み込むだろ。そのカツを山盛りのご飯で食べるとな、なんとも言えない味が口の中に広がるんだ。しかもカレーうどんは素でうまい。こんな最高の組み合わせ、美味くなかったら嘘だろう……まあ、俺も話だけで喰った事無いんだけどね」

「なんだよ、出鱈目か。そもそもさ、湿った衣って不味いじゃないか」

「嘘じゃねえよ。カツカレーうどん定食、絶対美味しいから。美味くなかったら俺は腹を切るね。そうそう、クリームシチューうどん定食というのも世の中にはあるらしいぞ」

「そっちはもっと不味そうだ」

「英志、それは偏見ってヤツだよ」

「僕もあんまり美味しくないと思います」

「アキラ……俺は悲しいよ……」

昼（後書き）

知る人ぞ知る、カツカレーうどん定食。

ちよっといういい機会なので使わせてもらいました。

他の小説でもちよくちよく出すかも。

いつかは俺も食ってみたいな。カツカレーうどん定食。

自尊心 1

とまあ、そんなくだらないことを話しているうちに、僕は昼ごはんを食べ終えた。

なんだかんだ言いながら、遠藤はしっかりとカレーうどんを食べていた。カツカレーうどん定食よりも、そっちの方が美味しいんじゃないかと言う事に、いつかは気がついてくれるのだろうか。

「ようし、これからどうする？まだ時間あるしな。グラウンドに行つて、サッカーでもやるか？」

遠藤は、というかこの学校の生徒は、昼休みによくサッカーをやっている。昼休みにはサッカーしかやらない生徒もいる。授業の合間に弁当を食べておくんた。ようするに、早弁というやつ。

それほどサッカーをしたってことだ。僕だって嫌いじゃない。早弁してまでやりたいとは思わないけど。

「アキラはどうする。お前も見に来てもいいぞ。なんなら、一緒にやってもいい」

「え、でも、先輩達の学年の人しかいないじゃないですか」

サッカーをやる時は、大体学年で固まっている。

高一は高一、中二は中二だけでサッカーをしている。当たり前と言えは当たり前のことだ。

学年と学年が入り混じって何かスポーツをしたら、気まずくてしょうがないと思う。特に、運動部の人たちは。先輩と一緒にやるんだから。

「別にいいんじゃないの。無理に誘わなくてもさ」

内藤君がサッカーをやりたいがっているのかどうかもわからないのに。

「だって俺、アキラとサッカーしたいし」

「いや、そういう問題じゃ」

僕は左ポケットから振動を感じた。携帯電話がメールの受信を告げているんだ。

「ちよつとごめん」

僕は携帯を取り出して、メールを開く。

一ノ宮博士からだった。件名は無い。そのままだと何かなんだかわからないから、本文を開く。

そのメールには、一言こう書いてあった。

変異種が出た、と。

「悪い、二人とも。僕ちよつと、用事ができた」

「用事？用事って一体なんだよ」

僕は遠藤の声を無視して、走り出した。上手い言い訳が思いつかなかった。本当のことを話すわけにもいかない。

「うーん、どうしたんだ英志のヤツ」

「すごく急いでましたね」

「そうだな。あんな急ぐ英志って、珍しいな……うーん、とりあえず、何処か行くか。なんかサッカーやる気、失せちゃった。英志どっか行っちゃうし。そうだな、ちよつと学校探索でもするか」

「学校探索？」

「そう。探検と言い換えてもいいぞ。アキラはここに来てまだ二年目だろ。まだ知らない場所が沢山あるはずだ。それを紹介してやる。全部、俺に任せろ」

この時間帯の自転車置き場には誰もいない。それはそうだ。自転車なんて、放課後にならなければ誰も使わない。

僕は自転車置き場の、一番人目似つかないような場所に向かった。そこには屋根が無い。教室からは死角になっていて、誰かに見られる事もない。

仮想空間の転送には、最適の場所だ。今朝、一ノ宮博士から何かあったらそこへ行くようにと言われていた。

その場所に着くと、そこにはもう天月がいた。僕は急いできたって言うのに。

学食から自転車置き場までは近い。二階から一階に降りて、中庭を突っ切れればいい。天月は教室にいたはずだ。学食からより教室の方が、時間が掛かる。

習慣みたいなものなのだろうか。呼び出されたら、一刻も早く指定された場所に行く、みたいな。

「ごめん、ちょっと送れちゃって」

僕は若干息を切らせながら口を開く。天月の呼吸は乱れていない。本当に、天月はどうやって教室からここまで来たんだろう。不思議だ。

「大丈夫。徴集されてから三分以内なら、問題ないから」

再び携帯が振動した。今度は着信だ。

「調子はどうだい。久坂君」

通話ボタンを押すと、一ノ宮博士の声が聞こえてきた。

「準備が整い次第、仮想空間に転送する。座標指定をするから、少し待っていてくれ」

そして通話が切れてしまった。一方的だ。

現場指揮官だから、変異種の対応の指示とかで忙しいんだろう。

「もう少し待っててだって」

天月に伝えると、「そう」といつも通りのそっけない返事が返ってきた。

それからお互いに何も喋らなくなった。昨日とは違う意味で気まずい。

この気まずさも、きっと僕一人が感じているものなんだ。空回りにもほどがある。アホらしいと思う。

別に喧嘩をしたとか、そういうわけじゃないんだ。ただ、天月と一緒にいるのが気まずい。昨日の、あの言葉のせいだ。「貴方にはできないわ。絶対に」というあの一言が、僕の中になにかを詰まらせている。

ヴァリアント・システムを使ってエニティレイターになって、天月を守った。

変異種と闘う為に訓練をして、武器や身体の扱い方を覚えた。

僕は闘える。ヒーローとなって、闘えるんだ。

でも天月は違うと言う。できないと言う。それがたまらなく悔しかった。

下らない、ちっぽけで安っぽいプライドだ。しかもそれはずっと持っていたものじゃない。ここ最近で芽生え始めた、とても微かなプライドだ。

けれど、僕にとっては掛替えの無いプライドだった。

ヒーローに憧れていた僕が、ヒーローになる。正義の味方になる。

ずっと、思い描いていた事だ。

それを否定されて、プライドが傷つけられて、だから僕は悔しい。その思いが僕と天月と間に、僕だけの勝手な隔たりを作っている。

本当に空回りだ。自分ひとりだけの、馬鹿馬鹿しい空回り。

わかっているのに、僕の中の安っぽいプライドがそれを認めない。

僕はヒーローになれるんだ、と自己主張を止めない。

自尊心 2

僕は敵と闘って、皆の平和を守るんだ。

できないなんて事は無い。僕はヒーローになるんだ。正義の為に闘うんだ。絶対に、やり遂げてみせる。

その言葉は高揚感を伴って僕の頭の中に響く。とても気持ちがよかった。思考を止めて、身を任せてしまいたいと思うほどに。

ヒーロー、そして正義という憧れが、自分の目の前にある。手を伸ばせばすぐに届く。僕が、それを体現する事ができる。

プライドが肯定し、僕の心が受け容れる。そうでありたいから。そうであってほしいから。だから、天月の言葉を僕は否定している。

馬鹿馬鹿しいという感情は消えうせていた。

ヒーローに、正義に、この状況に、僕は酔っているんだろう。それらはたまらない興奮と心地よさを僕にもたらしている。

ヒーローとなれることに、正義を貫く事に、僕の気持ちは最高に高まっている。

三度目の振動。携帯は一ノ宮博士からの着信を告げていた。

僕は携帯を開く。通話を開始すると、間髪いれずに一ノ宮博士の声が聞こえてきた。

「今から君たちを仮想空間に転送する」

その直後、僕らの視界は白く変わった。

仮想空間へと転送される間の、この白い視界。

ここは、僕らの次元と仮想空間の次元の狭間だ。白く見えるのは、

僕らの身体を被っている膜だ。これがなければ、僕らは次元と次元の間を永遠に彷徨う事になる。この膜が僕らを仮想空間へと導いてくれている。

膜が消え、眼前には見慣れた、だけど違和感のある景色が広がった。

僕らはグラウンドに立っていた。視線の先には校舎がある。近くにはいくつかのサッカーボールが転がっていた。時間はまだ昼休の途中だから、サッカーをしていたんだと思う。

僕らの他にはだれもいない。ここはそういう場所だ。

「今回は、この前の兎の変異種が一体だけ。逃げ足がすばやく、脚力もある。前は大した攻撃をしてこなかったから攻撃能力はわからないが、一応蹴りには注意しておいてくれ」

「大丈夫ですよ。このためにトレーニングしてきたんですから」

僕は一ノ宮博士の声に答え、制服の袖をまくった。僕の右手首には腕輪がはめられている。ヴァリアント・システムと呼ばれるものだ。

腕輪のボタンに解除コードを打ち込むと、電子音が聞こえてきた。

《解除コード認証。ヴァリアント・システム起動》

僕の身体が変わっていく。人のものから、エニテイレイターというヒーローへ。誰かを守る為の力を持った、敵と闘う姿へ。

「久坂君は敵を追ってくれ。なに、君の適合率なら相当の動きができるはずだ。あの変異種はすばやいが、問題ないだろう。天月さんはバックアップに回ってくれ。但し、できる限りは久坂君に闘わせしてくれ。助っ人的な立場とは言え、実戦経験は多いに越した事はない」

「了解」

天月の声に感情は感じられない。機械みたいだ。

「それじゃあ、いきます！」

僕は背中と足のスラスターを全力で吹かす。

身体が飛んだ。数秒で校舎の屋上の高さまで昇る。

僕の頭の中に、この町の地図が浮かんだ。その中の一つの点が、赤く光っている。それは僕から離れるように移動していた。

「変異種の座標を転送した。君の意志でイメージとして頭の中に呼び起こす事ができるから、うまく活用してくれ」

エニティレイターの姿だからこそこできる事なんだろう。僕の意志に応じて、それは頭の中に浮かんだり消えたりする。しかも、その頭の中のイメージが鮮明だ。普通、頭の中で考えている画像や映像っていうのは、どこかぼんやりとした物なのに。

チェイサー 1

頭の中に浮かぶ点は、僕や遠藤の家の近くを移動していた。学校から離れるように、言い換えれば僕から離れるように動いている。その方向を見た。

エニティレイターが人間より優れているのは、単純な身体能力だけじゃない。思考の高速化や反射神経の鋭敏化など、感覚も強化されている。もちろん視力だって。

高速で移動するそれを、僕の目は捉えていた。一キロほど先の変異種の後ろ姿は、驚くほど鮮明に見える。

兎の変異種は、前回と同じように屋根の上を移動していた。変異種が通った後の屋根には、いくつかの穴が開いていた。

推進剤を上手く調節し、地面と水平になるような姿勢をとる。そして一気に目標へ向けて飛んだ。

変異種と僕の間は見る見るうちに縮まっていく。僕の真下では、道路や車、信号機や民家が瞬く間に通りすぎる。

直線の簡単な飛行だが、僕の思い描く動きができていた。訓練の成果が出ているんだ。

一キロはあった変異種との距離が、二、三百メートルほどになっていた。

僕は両腰のホルスターから銃を取り出し、両手で握った。

もう少し近づけば、銃の射程県内に入る。さらに近づいていけば、僕にだって狙えるくらいの間合いに入ることができる。

変異種はまだ気がついていないんだ。そのうちに一発でも命中さ

せれば、多少は有利になれる。

不思議だ。心は高揚感で溢れているのに、頭は驚くほど冷静だ。緊張も不安もあるのに、思考の中に反映されていない。

感情と思考が別々の所にあるみたいだった。感情の僕がいて、その遠くに思考の僕がいる。そんな感じ。

不意に、変異種が後ろを見た。

僕のことを視界に入れて、存在に気がついたのだろう。変異種は一気に加速した。縮まっていたはずの距離が、開き始める。速い。今のままだったら、追いつけない。

逃がしてたまるか。

僕も速度を上げた。もう、加減をする必要は無かった。さっきまではあまりブースターを強く吹かしたくなかった。音で気が付かれてしまうかもしれないから。

けれど、もうバレてしまった。だったらもう、ブースターから出てくる音を気にする必要は無い。そんなことに意味は無い。

開き始めた距離が、今度は縮まり始めた。

僕と変異種の差がどんどん短くなる。

二百メートル、百メートル、五十メートル。十メートル。

よし。この距離なら、僕でも当てることができる。

二丁の銃を構えた。身体は水平に保ったままで、引き金を引いた。標的に向けて、何度も。

いくつもの銃声が上がった。それと同じだけの弾丸が銃から吐き出される。

しかしそれは、一発も命中しなかった。大量の弾丸が民家や道路へ着弾する。

兎の変異種は横へと跳んでいたんだ。弾丸が命中する前に逃げていた。あの時のように、左右にランダムに動きながら。

僕の技量だったら、弾丸を命中させる事はできない。

だったら。

僕は体勢を変える。推進剤の量を調節し、減速。足の裏のブースターを使い、方向転換を行った。

銃をホルスターへ収めた。敵へ弾丸を当たる事ができないんだったら、邪魔になるだけだ。けん制に使おうにも、無駄打ちが多い僕では、すぐに弾切れを起こすだろう。

高度を落とした。屋根の上、数メートルを飛行する。

兎の変異種が振り向いた。接近している僕を確認すると、何故か立ち止まった。

迷っているみたいだった。どうしたらいいのかわからなくて、何もできないみたいだった。

チェイサー 2

僕は体当たりをかます。変異種は避けなかった。避けられなかったと言った方が、正しいかもしれない。

吹っ飛んだ変異種の身体が民家の屋根に激突した。僕はそれに向けて接近する。

左腕でからナイフを取り出した。超振動を起動させて、屋根の上で倒れている変異種に切りかかる。

「もらった！」

だがナイフが変異種の胴を捉えようとしていたその瞬間、変異種が動いた。

右足を高く上げてそこから振り下ろし、その力だけで上空へ跳ねたのだ。

ありえない跳躍の仕方だった。兎の変異種の脚力はそれほどまでに高い、と言う事でもある。

ナイフは目標を失い、民家の屋根に直撃した。超振動を行う刃は、屋根をいとも簡単に切り裂いていく。バターを切り分ける時のように、屋根が裂けていく。

ナイフを引き抜き、僕は変異種を追った。変異種は二つ奥の民家へ着地していた。

変異種は再び跳躍する。反撃の姿勢は見れなかった。ただ、逃げているだけ。

「順調だね。この調子なら、短時間で決着が付きそうだ」

一ノ宮博士の声が聞こえてくる。逃げられているだけの今が最高の状況とはいいがたいが、それでも反撃を受けてやられているわけではない。そう考えたら、十分に順調だと考えられる。

僕は何度か攻撃を仕掛けていて、もう少しで変異種に直撃を与える事ができた。対して、変異種はまだ僕に攻撃すら仕掛けていない。

「可能なら、変異種を殲滅するのは早いほうがいい。仮想空間を維持するのには電力が必要となるし」

仮想空間の維持。それはつまり、この世界を保ったままにする、ということ。

元々存在しないはずの次元である仮想空間は、その維持に大量のエネルギーを必要とする。「無いの物」を「存在させる」ための代価と考える事もできる。

変異種を倒すまで、この空間は保たれている。人目を気にせず闘えて、被害を気にせず闘える。そのための仮想空間だから。変異種を倒すまで、仮想空間を解除するわけにはいかない。

逆に言えば、早く変異種を倒す事ができれば、それだけ早く仮想空間を保つ必要が無くなる。電力は有限で、使った分はなくなってしまう。消費した電力の使い道は適当に改ざんされる。それでもなるべく、消費は抑えた方がいい。

電力は逐電できない。仮想空間の維持使用する分、政府の根回しで優先的にこの町へ電力が送られているらしい。消費電力がギリギリになってくれば、一般家庭の電力供給ストップして、仮想空間の維持に電力をまわすらしい。

とにかく、仮想空間は維持しいていられる。電力が無くなって、僕らが無理矢理もとの世界に戻らされるということはない。でも、なるべく電力消費は抑えたい。頻繁に一般家庭が停電を繰り返していれば、何かを勘ぐられるかもしれないから。

——まあどっちにしろ、変異種は倒すんだから、関係ないか。敵を倒す。平和を守る。それが、ヒーローのすべきこと。

一刻も早く敵を倒す。そこにどんな理由があろうと、関係ない。敵を倒し、正義を守り、皆が幸せに暮らせるようにできればいい。

僕は変異種を追っていた。空中を飛行し、時には民家の屋根の上を走りながら。素早く方向を変えながら逃げていく変異種に振り回されながらも、距離を確実に詰めることができていた。天月は最適な動きをする事で、やつとできていたことだ。

一ノ宮博士が言うにはこれが適正の差、というのもらしい。僕はヴァリアント・システムの適正が高い。つまり、よりエニテイレーターへとされる、ということ。性能をその分、高く引き出せる。僕と天月となるエニテイレーターでは僕の方が速いし、僕の方が力も出せる。

単純に、僕の方が向いているんだ。エニテイレーターとした闘う事に。

その言葉は僕になんとも言えない快感を与える。

——ああ、そうだ。できない訳なんてあるもんか。僕は天月より強いんだ。

僕が守って見せるんだ。天月を、皆を、この町を、平和を。

変異種が屋根の上から飛び降りた。道路を走り始める。入り組んだ十字路を変異種が爆走し、僕はその姿を見失った。

けれど、大丈夫だ。僕の頭の中には、これがある。

脳裏に仮想空間の地図を表示させる。移動していく赤い点を、確認した。

「あそこか」

僕はホルスターから銃を取り出した。不意打ちなら、ナイフよりも銃のほうが成功率が高い。僕から変異種が目視で確認できないと言う事は、変異種も僕の姿を確認できないと言う事だ。上手く先回りしてやれば、十分、可能性はある。

大体のコースを予測する。道路から見ることでできないギリギリの高度をなるべく音を立てないように飛行する。

さっきは飛行の音で感づかれた。一応、気を使っていたのだが。今度はさらに気を使えばいい。速度よりも、確実にバレないように移動すればいい。

チェイサー 3

変異種の移動している経路を確認する。それを元に、変異種が通るであろう場所に見当をつける。

僕は音を立てないように、ゆっくりと飛行する。変異種が表れると思われる場所へ向かう。

途中、銃のカートリッジを新しいものと取替える。少ない弾数のままでは、心もとなかった。

僕は道路からは見えないように、屋根の上へ隠れた。僕も道路を見ることはできないが、問題ない。僕は、変異種がどこにいるかわかる。赤い点となって、地図の上を移動しているそれがわかるんだ。

変異種が僕の予想した地点に近づいてくる。速度は遅い。多分、歩いているのだろう。

僕は屋根の影から視線と銃口が向けれるように、身を出した。指は引き金に掛かっている。隙があれば、それを引けばいい。そして、変異種に一発でもぶち込めればいいんだ。

「久坂君、大丈夫？」

天月だ。その声は腕輪あたりから聞こえてくる。天月の持っているトランシーバーかなんかと回線が繋がっているんだ。

「うん、大丈夫。問題ないよ」

なるべく小さな声で腕輪に向けて声を発する。

「無理しないで。あなたでなくても、私が」

「できるよ。僕にだって」

天月の声を遮るように、僕は言った。

「僕だって、変異種を倒せるんだ。天月の補助が無くたって、できるよ」

僕はヒーローになったんだ。訓練だってやった。その成果はちゃんと出てる。今は逃げているだけのあの変異種が反撃をしてきたって、負るとは思わない。

エニティレイターは変異種を殲滅する為の姿、と一ノ宮博士は言っていた。性能をちゃんと引き出せば変異種に負ける事はない、とも言っていた。

僕は天月よりも上手くエニティレイターとして闘えるんだ。だったら、僕に変異種を倒せないわけが無いじゃないか。

「久坂君……」

何かを言いたげな口調。僕はそれに気が付いているから、言う。

「僕がやってみせるよ。君の代わりに闘って勝ってみせる」

天月は僕が変異種を倒せないと思っている。僕にできるわけが無いと思っている。

自分の代わりができるはずがないと、僕は変異種を倒すだけの力がないと思っている。

だったら、証明してみせる。変異種を倒して、天月を納得させて見せる。

頭の中の地図を開いた。変異種がすぐその道路を歩いているのがわかる。あと数秒もすれば、僕が目星をつけた地点を通るだろう。

「じゃあ、これからまた戦闘になるから」

「……わかったわ」

通信が切れた。僕は屋根の上から身を乗り出し、銃を構えている。ただ、身体全部を乗り出しているわけじゃない。視界と銃口を道路に向けれる、最低限の体勢を確保する為だ。

ブースターで飛行しながらでもいいのだけれど、多少は音がでてしまう。そうして変異種に気づかれたら、待ち伏せの意味が無い。

——来た。

僕の視界に変異種が映る。兎の変異種は落ち着き無くあたりを見回していた。僕が現れないか、警戒しているのだろう。

息を殺しながら、変異種に銃口を定める。狙うは脚。一時的にでも機動力を奪えばいい。

兎の変異種の一番厄介なところは、脚力だ。跳躍力や走力など、あの変異種の目立った所は全て脚力だ。この前の狼の変異種はただ強かった。兎の変異種ほどではないが、速くて、一撃が重い。それに比べたら唯一つの長所しか持っていないこの変異種は倒しやすい。うだ。

変異種に見つからないよう、視線の動きに気を配る。僕が完全に視界の外にいったときがチャンスだ。そのタイミングで撃てば、銃声が聞こえたとしても、変異種の動きは僅かに遅くなるはずだ。弾丸が到着するには、その僅かな隙で十分だ。

息を殺し、その時を待つ。

グリップと引き金の感触を確かめながら、変異種の視線を観察する。

視線はせわしく動いている。僕の隠れている民家にも視線が向けられた。

多分、大丈夫だ。見つからないと思う。冷静じゃなければ、隠れている何かを見つけるなんて、そうそうできるもんじゃない。

あの変異種は焦っている。この状況に困惑しているのかもしれない。だから、さっき、いきなり立ち止まったんだ。混乱して、動けなくなってしまったんだ。

道路から見たら、僕は少ししか見えないだろう。あの変異種は注意深く注意しながらあたりを見ているわけじゃない。適当に視線を動かしながら、僕を探している。

案の定、変異種は僕を見つけないまま、視線を逸らした。もう、別の場所へと意識を向けている。

それもほんの少しの間の事で、もう次の瞬間には違う場所を見ていた。身体の方を変えながら、全方位を順番に確認している。

変異種の身体が完全に僕に背を向けた。後頭部が見える。僕の位置は変異種から死角になる。

今だ。

引き金を引いた。銃声が鳴る。変異種はそれに気がつき、僕の方を見た。直後、弾丸が変異種の脚を貫通する。

変異種が声のような、悲鳴のような、どちらとも付かない叫びを発した。脚からは血が流れている。

ビンゴだ。一発で命中させる事ができた。カートリッジ一つ分以上、つまり十五発以上は消費するかもしれないと思っていたのに。やっぱり、訓練の成果が出てる。

僕は跳び、そして飛んだ。高速で変異種へと接近し、殴りつける。皮膚に毛が触れる感触、そして拳が肉に抉りこむ感触。変異種の身体は吹っ飛ばされ、ブロック塀に叩きつけられた。

変異種の脚が地につく。膝こそ折らなかったが、ダメージはあったようだ。すぐに動く、ということとはできていなかった。

「うあああああ！！！」

僕はナイフを取り出し、それを変異種の右肩に突き刺す。肉に突き刺さったナイフで、その肩を切り裂いた。

真っ赤な血飛沫と共に、変異種の右腕が地面に落ちた。さらなる絶叫が聞こえてくる。僕はそれを黙らせるように、腹部を殴った。

よし、このまま！

今度は左脚にナイフを向ける。脚を切断してしまえば、例え恐るべき再生能力を持っている変異種でも、元通りに直るまではかなりの時間を要するだろう。

けれど僕がナイフを突き刺そうとしたその時、轟音と共に、変異種の身体が僕へ向かってきた。

僕は正面から体当たりを食らう。ナイフは僕の手から離れてしまった。

何が起こったのかわからないまま、身体がアスファルトに叩きつけられた。

視界には、脚から血を流しながら跳んで逃げていく、兎の変異種が見えている。

チェイサー 4

僕は起き上がる。そしてわかった。何が起きたのか。

目の前のブロック塀はくぼみ、ヒビが入っていた。僕の考えが正しいなら、兎の変異種が蹴った跡だ。

ナイフを突き刺そうとした時、兎の変異種はブロック塀を蹴って、僕に体当たりをしてきたんだ。そして、そのまま逃げた。

逃げられたからって、素直にそのまま放っておくわけにはいいかな。

変異種は血を流しながら民家の上を跳んでいた。

遅い。少し前のまでの僕から逃げいていた時と比べて、格段に遅い。足に弾丸を受けて、腕を切断されたからなのだと思う。

これなら、簡単に捉えることができる。

僕は脚の裏と背中中で推進剤を吹かす。少し跳んで、身体を浮かした。そしてブースターを加速させる。飛行を開始した。

瞬く間に僕は変異種に追いついた。右肩が無くなった変異種の移動速度は、見た目よりも遅く感じた。

「喰らえ！」

僕は銃を取り出し、変異種に撃ち込んだ。僕と変異種の距離は三メートルもない。こんなに接近していて、目標もあまり動かなければ、僕だってほぼ全ての弾丸を命中させる事ができる。

引き金を引く。弾が吐き出される。それが命中する。変異種の身体が衝撃で仰け反る。

変異種は叫び声を上げながら、最後の力を振り絞るように、跳んだ。

高く高く、変異種の身体が空へと舞い上がる。

これは、チャンスだ。

あの変異種は、空中を移動する事はできない。攻撃を避けられる事は無い。

変異種の身体はもう多分、限界だ。身体が再生するまで待っていたら話は別かもしれないが、とにかく今は、余裕があるとは思えない。

敵が弱って、動きが鈍くなって、隙が大量にできるようになったら。

することは一つだ。必殺のあの技を、変異種に叩き込む。そして、殲滅する。

僕は右腕に力を込めた。自分の全身の力を、全てそこへと移動させる。そんな感覚。

背中のバックパックからモーター音が聞こえてくる。不思議だ。エニティレイターは機械じゃなくて生物なのに、なんでこんなに機械的なのだろう。

右腕が発光を始めた。そこに力が集中していくのがわかる。これを直撃させれば、変異種はひとたまりも無いだろう。

いける。やってみせるさ。天月じゃなくて、僕が変異種を倒すんだ。

「うおおおおおおお!!」

空中の変異種目掛け、一直線。全力を籠めた右拳を、叩き込む為に。

変異種が僕を振り向いた。けど、空中だったら関係ない。いくら僕を認識してたって、僕の攻撃がかわせる訳じゃない。

「こいつでトドメだ!!」

僕は加速をしながら、光る右腕を変異種へと振りかぶる。

この一撃を叩き込めば、変異種は光となり、消える。敵を倒すことができる。皆も平和も街も、守ることができる。僕だって一人でも闘えるんだと言う事を、天月に証明する事ができる。

この一撃さえ、当てる事ができれば。

しかし、僕の拳は胴の一部を掠めただけだった。

——しまった!こんな状況で攻撃を外すって、どういうことだよ!

変異種は僕の拳が直撃するその瞬間、身体を捻らせたのだ。そのせいで僕の拳は胴を掠めただけとなってしまった。

力のやり場を失った拳は宿していた力を解放させた。全力をそのままとどめて置く事ができなかった。それは高エネルギーの球体となり、街へ向かおうとしている。

——やばい。こんなのが街に直撃したら!

この一撃は、変異種を光の粒子に変えるほどの力を持っている。物体に直撃したら、同じように消し去る事ができるだろう。民家一つ消えるくらいじゃ、済まないかもしれない。

「くっ!」

僕は腕の方向を変えた。街の方向を向いている拳を振り上げ、街に直撃しないようにする。

エネルギー体が僕の手から飛び出し、上空へと放たれる。腕から力が抜けていくような感覚。それはそうだ。さっきの技には、僕の全身の力を込めていたんだから。

エネルギー体は上昇していく。そして、五十メートルくらい上った所で、その球体は破裂した。

「うわっ！」

突風が僕の身体を襲う。周囲では、ガラス戸が揺れ、割れていた。僕はバーニアを全力で吹き、なんとかそれに耐えた。しかし空を飛べない兎の変異種は突風に耐えられるはずが無く、風に流され、そのまま地面に落ちていく。

チェイサー 5

民家の屋根が剥がれた。瓦が吹っ飛ぶ。歩道に倒れていた自転車が車に激突して、その窓を破壊していた。電柱がゆれ、中には折れてしまうものもあった。

なんて威力だ。

エニティレイターの全力とは、こんなにもすごいのか。確かにこれを変異種に叩き込めば、跡形も無く消し飛ぶだろう。逆に変異種に叩き込めず、僕のように無駄に暴発させれば、こんな風にすさまじい衝撃があたりを襲う。

これだけの力があれば、変異種に負けないはずだ。というか、変異種を倒すにしたって、これは過剰な力なんじゃないか？

「無事か、久坂君」

突風の中、かき消されそうな一ノ宮博士の声を、僕は何とか聞き取る。

「ええ、一応」

風が少しずつ止んでいた。

あれが街に直撃したら本当に危なかった。上空で爆発して、あの威力なんだ。仮想空間での出来事は多少、僕らの住んでいる次元に反映されるらしい。もし街に直撃していたら、僕ら住んでいる次元で、何かしらの被害を被っていたかもしれない。

けれど、最悪の状況は回避できた。それだけ、まだマシだ。

「そうか。ならいいんだ」

その後に何か言葉が続くかと思ったが、そんなことはなかった。

エネルギー体の爆発の衝撃がほぼ完全に収まった。生き物の気配をろくに感じない世界は、何事も無かったかのように静けさを取り戻す。

ここにいるのは僕と天月。そして変異種だけ。

不意に、身体に妙な倦怠感を感じた。だるさと疲れが僕の身体に押し寄せる。

多分、あの技を使ったせいだ。全力を籠めたから、その分の疲れが僕の身体に出てきたんだ。次ぎ使う時は、もう少し威力を調節しよう。じゃないと、今回みたいな事があったとき、また同じ事を繰り返すことになる。

周囲に被害を与えて、僕には疲労だけが残る。そこを狙われたら、負けはしないだろうが、不利になることはわかる。

まあ、そんな事はどうでもいいんだ。今は、あの変異種を倒す事だけを考えていればいい。

僕は変異種を探した。突風に押し切られて、地面に落下したはずだ。周囲を見回したが、しかしそれらしい影は見えなかった。かわりに、血の跡、というより血の線が見える。

その線は十字路を曲がっていて、この位置からでは目で変異種を確認する事はできなかった。

だるさを必死に訴える身体を無視して、僕はそこへと向かう。左腕からナイフを取り出し、握った。あの技はもう使えそうに無い。だったら、変異種の急所とやらを潰すしかなさそうだ。

血の線をたどり、変異種を探す。二つほど道を曲がった所に、そいつはいた。道路を這い、移動していた。脚がおかしな方向に曲がっていた。着地に失敗したのだろうか。

僕は変異種の正面に立った。獣と人の織り交ざった顔が見える。

急所って、多分、心臓とか頭だよな……

僕はナイフを振動さた。そして、這っている変異種の身体を押さ

えつける。

変異種の身体は震えていた。恐怖に怯えているのだろうか。

でも、見過ごすわけにはいかなかった。ここで僕が変異種を倒さなければ、誰かが犠牲になるかもしれない。変異種の中の本能がいつ暴走して、誰が傷いてしまうのうか、全く予想できない。

だからやらなきゃいけない。僕がここでやらなきゃいけないんだ。それがヒーローで、それが正義というもの。誰かの為に、僕は闘うんだだから――。

その時だった。変異種の身体が、違うものへと変わっていったのは。

いや、変わったんじゃない。戻ったんだ。発光を行いながら、変異種が人の姿へと戻っていく。脚や胴体、そして頭が変異種のそれから人のそれへと戻っていく。

「え……？」

僕は目の前の光景が信じられなかった。

いや、変異種が人へと戻った事が信じられなかったんじゃない。確かにいきなり人へと戻った事に少なからず戸惑いはあった。けれど、目の前の出来事に比べれば、そんなことはどうでもよかった。

僕の手は華奢きゃしゃな少年の身体を押さえつけていた。

運動をしているわけではないとすぐにわかる身体。細く、お世辞にも太いとは言えない身体。喧嘩をしたら、骨が折れてしまいそうな身体。

僕はそれを知っていた。一週間前に、知ったばかりだった。

怯え、涙を流しながら助けを請うその少年の顔を僕は知っている。

「やめて……殺さないで……お願いします……」

恐怖に怯えたその声。それはまるで、僕とはじめてあった時のような声だった。

いや、今の方が酷い。完全に怯えきって、その顔は真っ青になっていた。

鼻水と涙と涎が垂れ流しになっている。幼さを残したその顔は、ぐしゃぐしゃに歪んでいた。

その少年を僕は知っている。

それは紛れも無く、内藤君だった。

絶叫

なんで、内藤君が。

内藤君の身体は右肩から先が切断され、足からは血を流していた。どうして、こんな。

本当はわかっていた。

けど、わかりたくなかった。そんな事、信じたくなかった。

内藤君が変異種？

そんなこと、あるわけないじゃないか。

ナイフが手から落ちる。内藤君を押さえつけている手から力が抜ける。

僕と内藤君は昼と一緒に食べたんだ。そこには遠藤もいた。下らない話をして、学食で昼休を過ごして、その後サッカーをしないとかなんとか、そんな話をしていたんだ。

いや、それよりもまず、内藤君が僕の目の前にいる時に、一ノ宮博士からメールが来たんだ。「変異種が出た」という一文を僕が目にしたとき、内藤君は目の前にいたんだ。それは、内藤君は変異種じゃないってことなんじゃないか？

少年は地面を這って僕から遠ざかろうとしていた。

信じたくなかった。あり得ないと思った。でも、その少年は間違
いなく内藤君だった。

細い身体。幼さを残している姿。僕の知っている内藤君だった。
制服を着ていて、白いワイシャツに血が染みている。よく見ると
茶色のシミがあった。昼に食べていた、醤油ラーメンのスープだ。
片腕と無事な片方の足で、なんとかアスファルトの地面を這って
いる。しかし、血がひたすら流れ出ていた。背中にもいくつもの傷
跡がある。さっき、僕が何発も弾丸を撃ち込んだからだ。

嘘だ。

僕は声を出す事ができない。思考するのが精一杯だった。

どうして内藤君なんだ。あの子は僕らの同好会に入ってくれて、
楽しそうな顔を見せてくれた。僕らと一緒にいたはずなんだ。遠藤
となぜか仲良くなっていて、僕も仲良くなって、最初は僕らに怯え
ていたけど、そんなこともなくなっていたのに。いい子だったんだ。
変異種なんて、関係ない子のはずだったのに。

「久坂君、どうしたんだ？はやく、変異種を殲滅するんだ」

当たり前のように一ノ宮博士は僕を促す。いや、一ノ宮博士にと
っては当たり前のことなんだ。

でも、僕にはできない。

殲滅するって言う事はつまり、僕が、内藤君を――

殲滅と言えば、違う意味に聞こえてしまう。当然の事に聞こえて
しまう。何も間違っていない、正しい事のように聞こえてしまう。
それだけで自分を肯定するには十分なほどに。

でも違う。違うんだ。殲滅と言い換えているだけで、僕がやろう
としてたことは、一ノ宮博士が言っていることは――「殺す」って

事なんだ。

できるわけが無い。

僕の身体は震えていた。恐怖じゃない。怯えているわけじゃない。ただ、震えていた。

ヒーローだとか正義だとか、そんな考えは頭の中から消し飛んでいた。あんなにも僕を高揚させていた言葉は、この状況になんら意味を持たなかった。

目の前で起こっていることをわかりたくなかった。目を逸らしたかった。けれど、僕の視線は内藤君に吸い込まれてしまう。

「はっ……くっ……」

苦痛の声を上げながら、内藤君は僕から逃げる。片腕で地面を這って、生き延びようと僕から遠ざかる。

僕は動けない。動く事ができない。

どうしたらいいかわからなかった。どうしようもなかった。

僕の身体は小刻みに震えていた。何に震えているのか、僕にはわからない。意思とは関係のない何かが僕の身体を震えさせといた。

「嫌だ、死にたくない……」

今にも消え入りそうな声が聞こえてくる。

「死にたくないよ、先輩……」

震えがさらに強くなった。

内藤君の傷は修復が始まっていた。肉が傷を高速で被い、出血を止ようとしている。

弾丸を打ち込まれた場所も、腕を切断されたところも、少しずつ

再生している。

生きようとしているんだ。人間の身体でも、変異種の本能が内藤君を生かそうとしている。

僕がこのまま何もしなければ、内藤君は生き残る事ができるんじゃないか？

僕は希望を無理矢理見いだすように、思考する。

このまま、何もせず終わってしまえば、そして仮想空間を解除されてしまえばいいんだ。

一ノ宮博士だって、ずっと仮想空間を維持させるなんてできないはずだ。それだけ電力を喰うんだから、なるべく無駄に仮想空間を維持するのは避けたいことのはずだ。

僕が闘わなければ、仮想空間を維持することに意味はなくなる。

そうだ。僕が何もしなければいいんだ。そうすれば内藤君は生き残って――

僕の背後から、乾いた音が聞こえた。

銃声だった。

直後、内藤君の頭の一部が弾けた。血と共に、肉片が空中に飛び散る。それ以外のものも。

内藤君は一瞬、たった一言だけ、「あ」と声を上げた。そして、頭から大量の血が噴出す。

飛び散ったそれらは道路に撒き散らされた。

肉と骨。そして目玉と髪の毛。

頭の一部を失いつつも、数秒間、内藤君は動いていた。生き延び

ようとしていた。

しかし程なく力を失う。身体は動きを止め、地面にすべてを委ねた。身体の再生もとまり、血を垂れ流すだけだった。

内藤君が、死んだ。

僕は背後を振り向く。

そこには、銃を握っている天月がいた。

天月が撃ったんだ。

そして内藤君は頭部に弾丸を受け、死んだ。
それが目の前で起こったことだった。

「どうして！」

僕は天月に詰め寄る。

身体が勝手に動いていた。考える前に言葉が出ていた。

「どうして内藤君を！」

僕は天月の肩を揺さぶった。

天月は悲しい眼差しで僕を見つめている。とても深く暗い、憂いを込めて。

「内藤君は死にたくないって言ってたんだ！死ぬのが嫌だったんだ！生きたかったんだ！それなのに、どうして君は！」

止まらない。言葉があふれでる。

「なんで撃ったんだ！内藤君は普通の中学生だったじゃないか！僕らと同じ人間だったじゃないか！どうして、君は、君は！」

答えなんて、聞かなくてもわかっていた。

変異種は殲滅しなければならぬ。

天月はこれまでそういう世界で生きていたんだ。これまでそうして生きてきたんだ。だから、今回もそうした。それだけのこと。

そして、内藤君を撃つたのは僕の代わりにやったことなんだ。

僕が内藤君を殺せないから、代わりに天月がやった。やらなければならなかったから。

ああ、わかってるさ。天月は僕の代わりにやったんだって。僕が内藤君を殺さなくてもいいようにしてくれんだって。

でも、言葉は溢れてしまう。

「内藤君と一緒に笑ってくれて、喜んでくれて、楽しんでくれて！」
僕は膝を地面についた。

「内藤君は、僕らの後輩で、仲間で、友達だったのに……」

涙はでなかった。僕がエニテイレイターだから。代わりに震えていた。ずっと、ずっと。

「これが、変異種と闘うということ」

天月の言葉が聞こえてくる。

「変異種は人間なの。偶然に、覚醒因子が目覚めてしまっただけの私達と同じ人間。けれど、時間が経つにつれて思考が本能に支配されていくから、いつ暴れてしまうかわからないから、私達は変異種を殺している」

そうだ。僕もそうしようとした。迷わず、大義を掲げて、そうしようとしたんだ。

それが正義だと言って、それがヒーローのすべきことだと思い込

んで。

「私達は人殺しよ。どんな理由をつけても、それは覆らない。危険だからと、なんの罪もない、偶然にそうなってしまっただけの人間を殺している」

人殺し。

ひとごろし。

ヒトゴロシ。

頭の中で言葉が響く。何度も何度も響いている。

現実味のわからない言葉。なのに、重く、重く、僕にのし掛かってくる。

「貴方の正義は幼い。だからこそ、純粹で真っ直ぐで歪みのない正義でいれる」

天月は言葉が続ける。こうなってしまったことを、後悔するよう

に。

「貴方はエニティレイターになるべきではなかった」

僕はそれを、ただ黙って聞いている。

僕の足元に、血が流れてきていた。誰の血かは、考えなくてもわかる。

それは少し、温かみを帯びていた。それは、ほんの少し前まで内藤君が生きていたから。

「あ、ああ……」

涙は出ない。エニティレイターは泣けないから。

悲しみと苦しみが津波のように押し寄せてくる。

一気に僕の心を埋め尽くす。それ以外の感情を消し去っていく。

「あああああああああああ！！！！」

僕は叫んだ。

感情を押さえられなかった。

押さえられるわけがなかった。

僕の絶叫は、静かな世界に響いていく。

内藤君は死んだ。

死んだんだ。

「あああああああああああああ！！！！！！！！」

僕はただ叫んだ。

そうすることしか、できなかった。

陣内博士（前書き）

五章開始です。

ここからが本番。やっとこれた。

陣内博士

一人の男がドアを開け、家から出てきた。背広を着た、四十台半ばくらいの男性だ。男性の出てきた家の表札には、久坂と書いてあった。

その家は一軒家で、周囲には同じデザインの家が並んでいた。

男は道路を少し歩き、自らが出てきた家を振り返った。二階の窓を見る。そこには、男の息子の部屋があった。カーテンが邪魔をして、外から部屋の中を確認する事はできない。

男は辛そうなまなざしでそれを見つめ、踵を返した。そして歩き出す。一軒家の立ち並ぶ住宅街を複雑に入り組んだ道を歩いていく。

「お久しぶりです、陣内博士。いや、今は久坂啓示さんでしたね」
突然、男は声をかけられた。

「二週間ぶりですか。少し、痩せました？」
声の主は、白衣を着ていた。住宅街に白衣とは、風景から浮いていてしうがなかった。

やせこけた頬に巨大な隈、そして無造作に伸ばされた髪と髭が、さらに風景との一体化を拒んでいる。男は研究室に籠りきりの、世俗から切り離されたような風貌であり、傍から見れば背広の男に声をかけている姿は、奇妙としか言いようがない。

「……一ノ宮か」

背広を着た男は、声をかけてきた人物に言葉を吐き捨てるように言った。

一ノ宮と呼ばれた男は、嬉しそうに笑う。

「名前、覚えていてくれていたんですか！嬉しいなあ。まさか、陣内博士が僕なんかの名前を覚えてくれてるなんて」

「政府の人間が何の用だ。俺はもう、君らと係わり合いはないはずだ」

久坂啓示は一ノ宮の発言を無視し、問う。

一ノ宮は言葉を見殺されたにもかかわらず、上機嫌に答える。普段の一ノ宮なら顔をしかめている所だが、今回はそんな様子はない。「そんな事ないでしょう。検体A01078は今や、人類の救世主となりえるかもしれないのに。とまあ、本音を言うのですね、報告ついでに世間話でもしようかと思ひまして。少しお時間、よろしいですか？」

久坂啓示はそれに頷きはしなかったが、断りもしなかった。

「貴方は覚えていないでしょうが、僕と貴方は昔、こうして話したことがあったんですよ」

二人は住宅街の一角にある、公園のベンチに座った。その公園は小さく、ブランコと鉄棒、そして砂場しかない。

「あの時は天月博士もご一緒でしたね。施設に来たばかりだった僕は、あの時、必死でしたよ。天才と言われるお二方に気に入られようと、自分の知識と研究を語った。今にして思えば、恥ずかしい。あの程度の事であなた方の気が引けるはずかない」

一ノ宮は懐かしそうに語る。そして笑っていた。上機嫌、と言ってもよかった。

「……覚えている。あの頃の君の目は純粹だった。印象に残っているよ。すごく」

久坂啓示は静かに口を開いた。その表情に僅かな陰りが見える。「だが今の君の目は、暗く淀んでいるように見える」

一ノ宮は、それに対して答えなかった。

一羽の鳩がやってきた。続けて二羽、三羽とやってくる。
エサがないかと地面を観察するように、歩いている。一ノ宮それを見ながら話を始める。

「検体A01078は最高の数値を示しています。あなたが打ち立てた理論どおりの、いや、それ以上の力を秘めている。従来のヴァリアント・システムではその力の十分の一も引き出せやしない」

主婦が公園を通りかかった。その手にはリードを握っている。犬の散歩の途中なのだろう。いつもは公園で愛犬を遊ばせている。だが、白衣と背広の二人を見ると、不快そうに顔を歪め、あからさまに公園から離れていく。

静かだった。公園には二人の話しか聞こえない。

「あなたが検体A01078を持ち出して施設を去ってから十年以上が経っている。なのに、あなたは今なお私達の遥か上にいる」

久坂啓示は無言だ。どこか遠くを見ている。

その視線の先には自らの家が、そしてカーテンの締め切られた息子の部屋がある。

「あなたは最高の科学者だ。俗物どもに紛れて才能を無駄にするには惜しすぎるほどの。私ができるかぎりの事をします。報酬だって何だって、望むだけの物が手に入るように。だから、私たちと一緒に」

「俺はもう、政府と係わり合いはないんだ」

一ノ宮の言葉を遮って、久坂啓示が声を発する。

二人の間に沈黙が流れる。

数分間、お互いに何もしゃべらず、動かなかった。

「なぜ、英志を巻き込む？」

口を開いたのは久坂啓示だ。

「あいつは普通の子供だ。普通の人間だ。それなのに何故お前たちは、あいつを闘いの世界に巻き込もうとする？」

それを聞いた一ノ宮は、心底意外そうに言う。

「彼は特別ですよ。それは、あなたが一番よく知ってるでしょう？彼は、エニテイレーターを超える力を持っているんだ。変異種を殲滅させるために、そのためにあなたが創り上げたんだ。検体A01078は、ただそのためにだけに存在している。違いますか？」

「違う……あいつは……」

「あなたもわかっていないはずだ。特異種が施設を脱走してから、もう二十年になる。僕は直接には特異種を知りません。ただ、その恐ろしさはわかる。話を聞いただけでも十分に。そして、特異種を直接に知っているあなたなら、その脅威を僕以上に知っているんじゃないですか？特異種を殲滅する。そのための、検体A01078じゃないんですか？」

「違う。あいつは、英志は、俺の息子だ……」

久坂啓示の身体は震えている。

両手を組んで、いつの間にか視線は地面に向いていた。

「道具に情が移ったんですか？あなたらしくもない」一ノ宮が立ち上がった。

仰々しい動作で、久坂啓示の正面に立つ。

目の前の男の手を掴んだ。自らの手でそれを包み込み、そして言う。

「あなたはすばらしい科学者だった。目的の為なら手段を選ばない。どんな犠牲も厭わない。何百、何千という命を犠牲にしても、顔色一つ変えない。思わず目をそらしたくなる非人道的な実験も、瞬きせずに観察する。あなたは科学者のあるべき姿だった。あなたが科学者の完成系だった。自らの定めた唯一つの事の為に、全てを犠牲にできる。僕の憧れですよ、あなたは」

「やめろ。やめてくれ。俺はもう、あの世界には戻れない。戻りた

くない」

久坂啓示は手を振りほどいた。力強く、無理矢理に。

「……そうですか。残念です。あなたの才能があれば、より確実に計画を実行することができなのに」

一ノ宮は大袈裟に肩を落とした。ため息をいた。

先程までは純粹に笑っていた一ノ宮の顔に、負の感情が入り交じる。

落胆、苛立ち、そしてある種の憎悪。

「状況は動いています。変異種同士は引かれ合う。脱走から二十年も経過した今、特異種がどれだけの仲間を集めているか、わからない。現在のはかろうじて日本だけに止まっているが、世界規模で変異種が目覚めればはじめば、もう手遅れになる」

「だから、英志なのか？」

「ええ。先程も言いましたが、あなたの研究は私達の遙か上の領域にある。あなたは施設を離れる際に、研究所データの一部を持ち去ってしまいましたから、私達はあなたの技術を完全に模倣することができないんですよ」

一ノ宮はなおも喋り続ける。

「もう時間がないんです。変異種は年々増加している。確実に増え続けている。『大変異』の予兆かもしれない。それを対処することができなければ、人類はあの突然変異種共に滅ばミュータントされるでしょう。そのためには力が必要だ。エニティレイターを越え、変異種を圧倒し、特異種と同等以上の力を持つ、エヴォリューターである彼の力。それが人類に不可欠なんですよ」

久坂啓示は無言だ。眉を寄せられ、瞼が閉じられている。齒を食い縛り、苦痛に耐えるように表情を歪ませる。

一ノ宮はそれを蔑むように見る。笑顔はもう消えていた。剥き出しの負の感情を目の前の男にぶつけている。

「これでいいと思っているのか？」

声の主は久坂啓示だ。

「変異種も生きているんだ。俺たちと同じように、泣いて笑って悲しんで、精一杯に生きているんだ。俺たちは闘い以外の道を選んでもいいはずだ。選べるはずなんだ」

「……変わりましたね、貴方は」

一ノ宮の落胆の表情が、さらに強くなる。

「完成されたあの姿が見る影もない。今の貴方は俗物以下の存在だ。自らにできることをしようとせず、解決策もないままに偽善を掲げている。理不尽に立ち向かおうとせず、理不尽を綺麗事で受け入れようとしている。何が貴方をそうさせてしまったか。天月博士の死？ 久坂真由理の影響？ どちらにせよ、もう貴方は自分では何もできない、哀れな男になってしまった」

鳩はもう、いなくなっていた。逃げ出してしまっていた。

「久坂の名前を使って、罪滅ぼしのつもりですか？ そんなことをしても彼女は帰ってこないし、意味はない。あなたを守って死んだ天月博士も、本望じゃないはずです。見損ないましたよ。本当に。あなたはあんなにも完成されていたのに」

「完成？ 人を人と思わず、自分の自己中心的な知識欲のままに、罪もない命を奪う事がか？」

「しかし、そうしなければヴァリアント・システムは完成しなかった。また、仮想空間も実現せず、変異種の実在を一般人に知られていたことでしょう。あなたの行いは世界を救っている。言わば、正義のため、ですよ」

「正義だと」

「ええ、そうです。正義とは万人を救う事でしょう？ あの検体達は正義のための尊い犠牲なんです。誰かがそうしなければならな

った。貴方が心を痛める必要はない。貴方の心を縛っている久坂真由理の言葉は、ただの偽善です。『誰も泣かない世界』でしたっけ？そんなもの、創れるはずがない。創れるとしたら神だけだ。そして神は、傍観者として遥かなる高みから僕らを見下ろすだけだ。無理なんですよ。そんなことは。人類が生き残るためには、変異種を殲滅するしかない。これは生存競争なんだ。ヒトと突然変異種^{ミュータント}、どちらがこの星の支配者にふさわしいか。どちらかが滅びるまでは終わらない。なら、ヒトが生き残るために正義を行うのは当然でしょう」

「そして殺すのか。何の罪もない人間を」

「人間じゃないですよ。変異種です。彼らは人を殺す。だったら先に殺すしかないでしょう」

一ノ宮は久坂啓示に背を向ける。

「昔のあなたなら、それができたはずですよ。僕の言葉も理解できるはずですよ、久坂啓示さん。いや、陣内博士」

一ノ宮は去った。公園には久坂啓示だけが残される。

「すまない、英志……」

そう呟いた背広を着た男の目には、涙か浮かんでいた。

陣内博士（後書き）

三人称が苦手だという事を改めて痛感しました。
でも少なくとも、後一回やらないといけないという。

暗がり 1

正義って、なんだ。

僕は真っ暗な部屋でテレビを観ていた。カーテンの隙間からは、僅かに光が見えていた。いつの間にか、朝になっていたみたいだ。布団の上にはいくつものDVDのケースがある。この三日間で観終わったものだ。内藤君が死んだあの日から、僕はずっとこの部屋でDVDを観ていた。

画面では悪の怪人が人質を取っていた。ヒーローを脅し、変身を解くように迫っている。

ヒーローは仕方なくそれに応じる。ヒーローの身体が人間のそれへと戻っていく。悪の怪人は部下を使って、人間となったヒーローを襲わせた。

内藤君の姿が、声が、頭から離れない。考えないようにしても、それを拒んでも、脳裏で再生されていく。

地面を這う内藤君。生き延びようと必死だった内藤君。そして、撃たれて死んだ内藤君。その声。息づかい。表情。

それを紛らわすように、僕はヒーロー番組を観る。僕が大好きでたまらなかった、それを観る。今まではそれさえ見れば、たいいていの嫌な悩みは吹き飛んだ。

けど、今、僕の心は晴れない。晴れるわけがなかった。

僕は内藤君を殺そうとしていたんだ。ヒーローだから、正義を守るために、という理由で。

殲滅という言葉を使って自分が何かを殺そうとしている実感もなく、彼を撃って、彼を切った。それが正しい事だと思い込んで。

何が正義だ。僕がやろうとしてたことは、ただの人殺しじゃないか。

悪の手下がヒーローに襲い掛かるその瞬間、もう一人のヒーローが現れた。そいつは悪の手下を瞬く間に倒し、不意を突かれてあせる怪人から、人質を開放した。

襲われそうになってたヒーローの手を取り、起き上がらせる。二人のヒーローを前に、悪の怪人は後ずさりしていた。

天月は多分、こうなる事をわかっていたんだ。だから彼女は僕をエニテイレイターにさせないように一ノ宮博士に反論して、僕を説得しようとしていた。

彼女は言っていたんだ。変異種も人なんだって。僕はそれをちゃんと聞いていたし、わかっていたつもりだった。けれど、心のどこかで思っていたんだ。変異種は悪の怪人だから、倒さなくちゃいけないって。変異種は人間ではなく、ただの危険な存在なんだって。

最悪だ。僕は。

正義という言葉の前に思考を停止させ、ヒーローになれるという状況に酔いしれて、僕は大事な事を忘れていたんだ。

ヒーローが悪の怪人に対し、必殺の蹴りを喰らわせる。

胸に直撃したそれは、怪人の身体を爆発させた。怪人の身体がババラに飛び散る。

二人のヒーローは変身を解き、手を組んだ。お互いを褒め称えるように、熱く手を握り合う。

「二人の闘いは続く。悪を倒し、正義を守るために、二人は闘い続ける！」

ナレーションが入り、エンディングに入った。スタッフロールが画面に表れ、エンディングテーマが聴こえてくる。

ヒーローは正義を守る為に、悪の怪人を殺した。画面の中のヒーロー達は、その事に何の抵抗もないのだろうか。

正義を守るためだったら、悪は殺しても構わないという事なんだろうか。

それとも、怪人だったらいいのだろうか。

怪人だって意思を持っているはずなのに。怪人だって、生きているのに。

ヒーロー達は悩まない。悪を倒すのは当然だから、とも思っているんだらうか。

つくりもの
フィクションは卑怯だ。都合のいい展開に、都合のいい出来事。もし、自分たちの戦うべき相手が、自分の大切で守りたい人たちならば、ヒーロー達はどうするんだらう。

僕の観ている映像はその答えをくれない。敵は敵で、倒すべき相手。最初からヒーロー達に迷いはなく、その敵を倒している。どのヒーローもそうだった。

正義を守るってことは、正しい道を生きるって事なんじゃないのか。

僕の知るヒーローは、いつも悪を倒している。別の言い方をすれば、殺している。

「お前さ、そいつがヒーローだと思えるの？」
いつだったか、遠藤は僕にそう聞いてきた。

「そいつはさ、お前を助けるために怪物を倒したんだろ？ 怪物だ

って生きてるんだぜ。もしかしたらさ、怪物にだって何か事情があったかもしれないじゃないか。それでも、お前の言うヒーローはそいつを殺したんだ。それでもお前、そのヒーローが正しいって言うの？」

僕はこの質問をされた時、迷うことなく肯定的な回答をする事ができた。

けれど、今は違う。

「正義の味方なんかじゃないわ」

あの時の帰り道、天月は言っていた。

「変異種になったとしても、人は人よ。だから私は……人殺しだわ」

それに対して僕は考えもせず、自然とかける言葉が見つかった。た。

けれど、今は見つからない。

「貴方の正義は、人を殺せる？」

これも、天月が言っていた事だ。

「変異種も元々は人間なの。それでも貴方は闘える？」

闘える、と僕は答えた。変異種は野放しにできない、と。

でもそれは人を殺せる、という意味じゃなくて、変異種を倒す、という意味だったんだ。

人殺しの理屈も覚悟も道理も、僕にはなかったんだ。

結局の所、僕の正義は、何も知らなかったんだ。

フィクシつくりものョンのカッコいいそれに、憧れているだけだったんだ。

誰かの為に闘えて？

誰かの為に命を賭けて？
誰かの為に平和を守る？

それって、誰かの為に誰かを殺すって事じゃないか。

僕が内藤君を殺そうとしたように。変異種だから、という、それだけの理由で。

内藤君は、何もしてこなかったんだ。内藤君は自分から僕に攻撃してくる事はなかったんだ。それは、天月の時からそうだった。

反撃する機会がなかったわけじゃないはずだ。その気になれば、蹴りの一発くらい、僕に叩き込む事はできたはずだ。なのに、内藤君はそうしてこなかった。ただ、攻撃を避けて逃げていただけだった。

それは何故だったのか。ただ僕らに怯えていたからなのだろうか。僕は違うと思う。

内藤君は変異種になりたくなかったわけじゃない。偶然、そうなってしまったんだ。

ある日突然前触れもなく、覚醒因子が『進化の系譜』を呼び覚まし、内藤君をあつ姿へと変えてしまったんだ。

それだけなのに僕は内藤君を殺そうとしていた。

僕だけじゃない。天月も、一ノ宮博士も、もつと言うなら、変異種を殺せ、と命じている政府も。

一体、内藤君が何をしたというのだろう。何もしてない。ただ、彼は、生き残るのに必死で――

僕はDVDデッキの中身を取り替えた。新しい映像が流れ始める。もうそれに、何の魅力も感じれなかった。ただ流しているだけだった。

こんな事に意味はない。何も変わらない。内藤君は戻ってこないし、僕のやった事は、覆らない。

けど、僕は期待していた。僕の信じていたヒーロー達が、今の僕に答えをくれる、ということを。

そんなこと、あるわけないとわかっているのに。

暗がり 2 (前書き)

ちよくちよくサブタイ変えることがあります。内容的には変わってないことが多いので、スルーしていただいて結構です。すみません。サブタイ、結構思いつきで決めてるんで。

暗がり 2

敵を倒す事に迷いがないからヒーローはヒーローになれているんだ。自分の正義に迷いがないからそれを貫く事ができるんだ。

だったら、僕の正義って、なんだ？

わからない。あんなにも明確だったはずのものが、今では霞んで、薄れて、消えかけている。それを読み取る事もできず、僕は途方にくれている。

内藤君を殺そうとした僕に、正義なんてあるのか？

映像は動いている。敵が現れ、悪事を行い、そしてヒーローがそれを阻止する。

敵は悪で、ヒーローは正義。そう決まっている。そうできている。だからヒーローが敵を倒して殺したとしても、正しい事として僕らの頭の中に認識される。でも、ヒーロー達は確実に誰かを殺しているんだ。

でもヒーロー達に迷いはない。それはきっと、敵が悪だからだ。悪を倒さなければ平和が崩れる。悪が蔓延れば世界は壊れる。だからヒーロー達は、自分の守りたいものの為に精一杯闘う。

僕だって、そのつもりだった。

平和を変異種の手から守っているつもりだった。街の皆を人知れず救っているつもりだった。いや、実際にそうだったのかもしれない。少なくとも、敵を一人殺したんだから。

けどその敵は悪なんかじゃなかった。僕らと同じ、普通の人間だったんだ。僕らと同じように生きていて、僕らと同じような生活をしていて、そして僕らと同じように死に怯えていた。

その敵を、僕は殺した。正確には僕じゃなくて、天月が引き金を引いた。それでも僕が敵を、内藤君を殺そうとしていた事実は変わ

らない。

内藤君はなににも悪くなかったんだ。それなのに、僕は何も考えないで変異種は悪だと決めつけ、殺そうとした。

そんな僕に正義なんてない。あるのは、人を殺したという、ただそれだけ。

頬を何かが触れた。シートにはしずくが落ちていた。

僕は泣いていた。涙が溢れていた。視界は歪んで、光が水に反射する。画面が見えなくなっていた。それでも僕は、視線を外さない。

僕の懂れていたヒーローはこんなにも不完全で、僕の信じていた正義はこんなにも不確かなもので。だけど僕にとっては、それが全てだったんだ。そのために僕は守ろうとして、闘って、内藤君を――

ヒーローは敵を倒して、殺している。そして自らの正義を貫いている。

何かを守る為に、何かを犠牲にしなければいけないのか？

そうかもしれない。そういうことなのかもしれない。けどそれは、絶対に正義なんかじゃない。

犠牲の上に成り立つ正義なんて、あっていいはずが無い。

天月は、僕の正義を幼いと言った。だから僕はこんなにも悩んでいるのだろうか。

だったら、幼くない正義ってなんだ？大人の正義って、なんだ？この画面の向こう側のつくりものフィクションのヒーローのように、迷うことなく敵を倒し、殺すって事なのか？

それは、何かを犠牲にする覚悟を持って闘うって事なのか？違う、そんなの正義じゃない。そんなの、正しくなんてない。

そう思うこと事態が、幼いって事なのかもしれない。

でも僕は認められないんだ。誰かが傷つかなきゃならない、正義なんて。

あんなにも信じていたものは、所詮ただの幻想だったんじゃないか。

正しい事も守ることも、本当の非現実の前では儚く脆い。貫く事のできない、あっけない正義だ。

「ごめん……ごめん……」

謝った所で、何も変わらない。どうしようもなく、現実だけが突きつけられる。

僕は内藤君を殺した。

からっぽの正義を振りかざして内藤君を殺したんだ。

正義が何か、僕はもうわからない。

そんなもの、本当にあるのだろうか。作り物じゃない、本当に正しさを貫ける正義なんて、この世にあるのだろうか。

そんな事はわからない。けれどただ一つだけ、わかっていることがある。

僕のやったことは、正義なんかじゃない――

僕は暗がりの中、泣いている。涙が零れ落ちていく。

それは止まらない。止まる様子もない。止めようとも、思わなかった。

学校 1

「なあ、天月。ちょっといいか？」

ホームルームが終わり、掃除が始まろうとしていた頃。荷物を鞆に仕舞い、帰ろうとしてた天月に声をかけたのは遠藤だ。

「何？」

「大事な話があるんだ。どこでもいいからさ、あまり人がいないところへ行こう。誰かに聞かれてたら、話しづらい」

遠藤が天月に声をかけたのは、久しぶりの事だ。

久坂英志が学校に来なくなってからというもの、遠藤は天月に対する興味を失ってしまったかのように、近寄る事すらしなかった。

ヒーロー同好会の活動も行われておらず、二人の接点は全くなかった。

そもそも、ヒーロー同好会の活動を楽しみにしていたのは、久坂英志と内藤だけだった。残りの三人は、それほど同好会の活動に意欲的というわけではない。

いつか久坂英志が思っていたとおり、天月は特撮が嫌いではなく、好意的な印象を持っている。だが、熱心に観るほどではない。自ら進んで同好会の活動を行おうとも思っていない。

久坂英志は体調不良ということで学校を休んでいた。

内藤は手続き上、親の転勤ということで学校を止めていた。内藤はすでに死んでいる。学校にこれるわけがなかった。

内藤の両親は搜索願を出していない。他人ならまだ虚偽の報告で

ごまかせるかもしれないが、肉親となれば話は別だ。政府が事情を説明したか、それとも両親を「処理」したのか。

「遠藤君、天月さんにちよっかいだしてるの？」

横から首を突っ込んできたのは、笹倉美由紀。彼女はまだ、自分の帰りの身支度が終わっていない。それでも口を挟んできたのは、二人の会話が気になるからだ。

「ちげーよ。真面目な話だって。美由紀はちよっとさ、あっち行っ
てくれよ」

遠藤が鬱陶しそうな態度を示す。それを見た笹倉は、繭を寄せて遠藤に詰め寄った。

「最近は無意味なちよっかいを出さなくなったから、やっと、天月さんも迷惑してるんだってわかってきたんだと思ったのに。久坂君が来なくなつて暇なのはわかるけど、そういうの、止めた方がいいわよ」

「そんなんじゃない。俺を信じてくれて。頼むからそういうの、後にしてくれないか？ほんとにさ、大事な話なんだ」

「大事な話って、何？そんなに大切だったら、今ここですればいいじゃない」

「なんつーか、他人に聞かれちゃいけない事っていうか、他人がいたらいけないっていうか……ああ、頼むよ、美由紀。わかってくれよ。一生で最後のお願いだからよ。俺は確かめなきゃいけないことがあるんだ。お願いだ、ちよっとの間くらい、許してくれよ」

遠藤は両手を合わせ、笹倉に頼み込む。

「あんたねえ……どうせ、ろくでもない事、考えてるんでしょ？」
笹倉は呆れたように、ため息をついた。

「違う。真面目な話だって、言ってるだろ？」

そう言う遠藤の顔を見て、笹倉はたじろいだ。その表情はいつになく真剣だった。

笹倉は久坂英志ほどではないが、遠藤とは長い付き合いだ。だからわかる。遠藤が真剣な顔で言う時は、本気の時なのだ。たとえば、一生で最後のお願ひ、などとふざけた事を言っていたとしても。

「別に私は構わないわ」

はつきりとした声で、天月が言った。笹倉はそれに、若干驚いたようだ。

「あ、天月さん？」

「悪いな、天月。助かる。じゃあ、あんま人のいない場所にいこう。そうだな、校舎裏とか」

遠藤と天月は教室から廊下へと出た。笹倉はそれを目で追う。

「ああ、そうだ」

遠藤が立ち止まった。天月に「先に行っておいてくれ」と言い、そして、笹倉の方を振り返り、口を開く。

「美由紀、ありがとう。お前がいてくれて、本当によかった。お前と英志がいたから、俺は――」

「え、何？」

笹倉はよく聞き取れなかったようだ。遠藤の言葉をもっと近くで聞こうと、寄ってくる。

「なんでもねえよ。こっちの話」

「嘘。今、なんか言ってたでしょ。なんでもなくないじゃない。ちゃんと聞かせてよ」

遠藤の顔は、悲しそうだったのだ。笹倉がこれまで見たこともないような顔で、何かを言っていたのだ。

どんな事かはわからないが、聞かなければ成らない事がある。笹原はそう、確信していた。

しかし遠藤はそれを言おうとしない。二回もそれを言うつもりはなかった。代わりに、いつものようにふざけた口調で喋りだす。

「だから、何でもねえって。つかさ、美由紀はさ、本当は可愛い

んだからもう少し怒らないようにした方がいいって事を言ったんだよ。怒ってばかりだったら、彼氏なんて一生できないぞ」

「な、何よそれ！」

笹倉の顔が真っ赤になった。

遠藤は楽しそうに笑いながら、彼女から遠ざかる。

「まあ、そういう話。じゃあな、美由紀」

「ちょっと、待ちなさいよ！」

笹倉が手を伸ばした時、すでに遠藤は走り去っていた。

天月に追いついた遠藤は、息を整え、共に歩く。

「悪い。ちょっと野暮用があつてさ」

「別にかまわない」

それから暫く、二人は無言で歩いた。廊下を進み、階段を下りて、校舎から出る。狭い建物と建物の間を通り、校舎裏へと向かう。

途中、蜘蛛の巣が這っていた。足元は平らではなく拳くらいの大きさの石がいくつもある。まともな道ではないから、仕方がない。

普通の女子ならば嫌がって顔をしかめる位はしているだろう。しかし、天月はいつもどおりの無表情だ。

学校 2

校舎裏に二人は着いた。あたりには誰もいない。

校舎の窓からこの場所は見ることができない。木の幹や葉が壁となって、周囲の視線を遮断している。この手の場所によくあるように、告白によく使われている場所だった。

この学校の生徒ならば、それは周知の事実だ。しかし、学校に着てから間も無く、また、ろくに友人関係を広げようとしていなかった天月は、それを知らない。

遠藤もそのつもりでここに来た訳ではなかった。

今一度周囲を見回し、誰もいないことを確認すると、遠藤は天月に向き合った。

「一体、英志はどうしたんだ？ あいつが三日間も学校来ないなんておかしい。体調不良っていったって、長すぎる。俺が見舞いに行こうとしても、会いたくないって塞ぎこんでやがる。天月、お前なら知ってるんだろ？ 英志はどうしちまったんだ？」

やはり、と天月は内心で思っていた。

久坂英志がなくなり、学校から内藤光がいなくなった。偶然にしても、何かあったのではないかと勘繰られてもしようがない。特に、その二人と深く関わっている者ならば。

遠藤が自分を避けていること、天月は知っていた。なんとなくだったけど、感じ取っていた。

それは、もし話をしてしまえば、この疑問をぶつけてしまいそうになっていたらではないか。天月はそう推測した。

「最近、あいつはおかしかった。妙に浮かれていた。ヒーローを見たって言ったり、化け物に襲われた、とか言ったり、妄想にめちゃ本気で話してた。あいつはそんな冗談を言うやつじゃなかった。なあ、お前が来た前日くらいから、あいつには何かあったんじゃない

のか？教えてくれ。何でも良いんだ」

天月はそれに答える事ができなかった。

機密保持の為、というのもある。しかしそれ以上に、久坂英志が体験してしまった事を、目の前の男に言うべきか否か、迷っていた。そもそも、一般人が変異種やエニテイターの事を信じるとは思えない。妙な誤解をされて、間違った納得をされるのは避けたかった。そうしたら、また久坂英志を傷つけるのではないか。そう、天月は考えていた。

天月は遠藤の事をよく知らない。興味がなかった。心のどこかでは鬱陶しいとも思っていた。だから、どんな人物かを全く知らない。どこまで話して良いのか。どこまでなら信じてくれるのか。彼は、久坂英志の支えとなってくれるのか。

「その腕輪、英志がこの間していたやつと一緒にのろ？」

遠藤は天月の制服の右の袖を指差した。ヴァリアント・システムのことを言っているのだろう。

天月も久坂英志も、それを直に人目に触れさせるような事はしていなかった。長袖を着て、手首までそれを伸ばし、見えないようにしていた。

それに遠藤は気がついていて。確かに、その気になれば腕輪をはめていると言う事はわかる。征服の上からでも、若干形が浮かび上がって、それを確認することができる。

「英志は何かに巻き込まれてるんじゃないのか？なあ、頼むよ。教えてくれ。あいつに何があったんだ？」

「……それは、言えない」

「お前」

「けど、彼は苦しんでいる」

目の前の男は本気で久坂英志の心配をしている。天月はそれを感じ

じとった。

だから言ってもいいと思った。この友人ならば、この先、久坂英志の苦しみの意味をわからなくとも、理解できるのではないかと。久坂英志の心を救えるのではないかと。

「私のせい。私が、彼を止める事ができなかったから」

「お前の？　どういうことだ」

天月はそれに答えない。自らの言葉が続ける。

「もう二度と、あんな事はさせない。彼を苦しめるようなことはさせない。私を信じて」

天月は心に決めていた。久坂英志を日常に帰すことを。右腕にはめられた、腕輪がその証明だった。

久坂英志が日常に戻る、ということは、天月自身が闘うと言う事だ。

一週間前、覚醒因子が暴走した時と比べ、天月の身体はだいぶ安定していた。日々、薬を投与しているお陰でもある。それに、あの暴走はヴァリアント・システムのせいではないと、天月は考えていた。

あと数回ならば、エニティレイターとして闘う事ができる。残り二体の変異種を殲滅し、この街から離れてしまえば、久坂英志を非日常から遠ざける事ができる。そうすれば、あとは後任のヴァリアント・システムの適正者にすべてを任せればいい、と。

「時が経てば、彼はきっと戻ってくる。でも、心の傷は癒えていないと思う。だからその時は、あなたが彼を支えてあげて」

私にはできないから、とまでは言わなかった。

天月は久坂英志を巻き込んだ責任を感じていた。そこに悪意が介入している事はわかっているが、それでも責任を感じていた。

久坂英志の苦しみが天月にもわかる。かつて、彼女も悩んだ事だった。

彼女は割り切れた。久坂英志は割り切れない。

割り切ることのできない彼が、天月は羨ましかった。だから天月は、自分にはできないと思う。人を殺す事を当たり前として受け容れてしまった自分には、純粹ゆえに割り切る事の彼に、かける言葉かみつからない、と。

「……やっぱり、思ったとおりだ」

奇妙だ。呟くように言った遠藤は、微笑んでいる。

天月はその表情に何か、ズレのようなものを感じ取る。

天月が喋った事は、少なくともそういう類の話ではなかった。微笑む要素がなかった。それなのに、遠藤はそうしている。優しく、やわらかく、微笑んでいる。

「天月、お前は良いヤツだ」

遠藤は天月に歩み寄る。微笑みながら、ゆっくりと。地面を一步、踏みしめるように。

「英志のこと本気で心配してくれている。あいつの事を助け出そうとしてくれている。お前ならきっと、大丈夫だ」

天月には遠藤の言っている意味がわからない。近づいてくる男の考えがわからない。

「英志はこれから、沢山辛い目にあうと思う。ホラ、あいつ、バカみたいに正義正義って言って、割り切る事なんて絶対にできなさそうだろ？きっと、一人じゃあいつは壊れちまう。だからさ、誰かが一緒にいないと、ダメなんだ」

遠藤は天月のすぐ近くで立ち止まった。近い。あともう少し前に出れば、息を感じる事ができるくらいに。

微笑みは失せていた。真剣で、悲しみ帯びたものへと変化していた。

それが何故だが、天月にはわからなかった。

ただ、目の前の男は何かを知っていると、思考が告げていた。具体的なこととはわからない。それが変異種に関する事なのか、ヴァリアント・システムに関する事なのか、それとも、そんな事はなくてただの気のせいなのか。

「英志のこと、支えてやってくれ」

意味がわからなかった。だから天月は口にする。

「何を言ってるの？」

「俺には、できないんだ」

天月の声をかき消すように、遠藤が口を開く。深い苦しみと、限らない哀しみと、そしてほんの少しの後悔を含んだ声を口にした。

不意に、天月は痛みを腹部に感じた。身体がくの字に曲がっている。何かにそうさせられていた。

意識をなんとか保つ。痛みが全身から力を奪う。不意のそれは、鈍く、重く、天月の身体に響いていた。

腹部には、遠藤の拳が叩き込まれていた。それは深くめり込んでいる。鍛えている天月の身体にを悶えさせるほどに。

「あなた、何を……っ」

天月は苦痛を押さえつけ、身体を起き上がらせようとする。頭を前へと上げ、脚でしっかりと地面を掴む。

天月は何がなんだかわからないまま、それでも何とか体勢を起した。正面の男に向け、視線を向ける。

しかし直後、天月の視界から遠藤が消えた。腹部に痛みを抱えたままの天月は、反応が一瞬、遅れる。

天月の首筋に手刀が振り下ろされた。

僅かなうめき声とともに、天月の意識が薄れていく。

その手刀は的確に、確実に意識を奪っていった。

「悪いな、天月」

遠藤のその言葉は、天月の耳に届かない。

「さてと。これで後戻りはできなくなった」

気絶した天月を見下ろし、遠藤は呟いた。

周囲には誰もいない。誰も、この現場を目撃してはいない。

「……っ！」

何の前触れもなく、遠藤が苦しみだした。膝が折られ、蹲る。

頭は抱えられ、口からは擦れた声と涎が漏れてくる。額には汗が浮かんでいた。視線は彷徨い、表情は歪められている。

一分ほどして、それは収まった。遠藤は息を荒げ、口元の涎を拭いた。

ふらつきながら立ち上がる。その顔は真っ青で、正常ではない事が伺える。

「ダメだ。あともうちよっとなんだ。それまで頼むから、黙っててくれよ……」

着信

あれからどれくらいの時間が経ったのだろう。

わからない。とりあえず、カーテンの隙間から光は消えていた。時計を見るのも億劫だった。僕は画面に視線をひたすらに送る。

それ以外、する気は無かった。

何かを叩く音が、ドアの方から聞こえてくる。程なくして、父さんの声が聞こえた。

「開けるぞ」

僕は何も言わなかった。どっちでもよかった。父さんが入ってこようが来なかろうが、どうでもいい。

画面の中では、肉親を殺されたヒーローが悪の怪人に復讐を誓っていた。

これもそうだ。同じように怪人を殺す。悪だから、敵だから、その行為に違和感を感じる事はない。

「何か食べたか？」

ドアを開けた父さんは、部屋の入り口で立ち止まり、僕に問いかけた。

「食べたよ」

嘘だった。本当は三日前から何も食べてない。そんな気にはなれなかった。ちょっと、水を飲んだくらいだ。

最後に水を飲んだのはいつだったっけ。

少し考えて、止めた。まあ、どうだっていいや。

「そうか……」

多分父さんは、僕の言ったことが嘘だってわかってる。当然だ。台所は綺麗なままだし、生ゴミなんてどこにもない。僕の様子を見て、料理をしなくてもいいように父さんはカップラーメンをいくつか買ってきたくれていたみたいだけど、もちろんそれは一つも開封されていない。

僕の記憶が正しければ、今日、というかカーテンの隙間が光が出るようになってから、僕はこの部屋から出ていない。尿意や便意も特に感じていなかったから。

身体からすいた臭いがしていた。そういえば、風呂にも入っていないな。でも、それだってどうでもいいことじゃないか。だって風呂に入らなくなつて、死にはしないんだから。

「なあ、英志。晩御飯は何を食いたい？」

その言葉で今が大体七時くらいなんだとわかる。いつも晩御飯を食べている時間だったから。

「いらない。お腹いっぱいだから」

僕はまた嘘をつく。お腹は空いている。何も食べてないから。

けど、精神的な意味ではお腹は空いていなかった。気にならないんだ。そんな事なんて。

暫く、父さんは何も喋らなかった。その間、僕はずっと画面を見ている、いや、最初からずっとそうだった。

復讐を誓ったヒーローは、仲間の制止を振り切って、怪人のアジトへと乗り込んだ。下っ端の怪人を蹴散らし、複数の悪の幹部を相手に、圧倒的な強さを見せ付けている。

「辛い事があるなら、全部話してもいいんだ。父さんは、何だって聞かし、どんな相談にでも乗る。お前が何かを抱えているなら、すぐに話してくれ。一人で抱え込んでも、それはきつと、解決しない事だと思うから」

父さんの声は優しい。だから言えない。だってそうだろう？父さんは僕を一人で頑張って育ててくれたのに、僕は人殺しになったんだ。

言えるわけがない。もし言ったら、父さんは悲しむ。そんなのは嫌だ。正義なんてない、間違った僕でも、父さんは悲しませたくないかった。

「大丈夫。なんでもないから。そういう気分だけだよ」

父さんはきつと、納得しないだろう。でもそれでいい。本当のこととは言えない。けど、だからと言ってなにかこれといった言い訳があるわけでもない。

それでも父さんは頷いてくれるんだ。父さんは、そういう人なんだ。厳しい時もたまにあるけど、僕の事を大切にしてくれている。僕の事を、思ってくれている。

「英志、お前は……」

父さんが何かを言っていた。けどその声は歯切れが悪く、尻すばみに小さくなっていく。テレビの音声に飲み込まれて、何を言っているかわからない。

ヒーローは悪の首領と闘っていた。そのほかの怪人は殆ど全て倒していた。息があるのか、それとも無いのか。詳しくはわからない。でも、多分、後者だ。

「僕は大丈夫だから」

そんな風には絶対に見えないだろう。でもいいんだ。口だけでも、大丈夫なフリをしたかった。

「大丈夫なんだ」

嘘をつく。それでいい。父さんに本当の事を話さなす無くてすむ。それ以外に、僕は術を知らない。

いつもどおりの生活が送れれば、僕はこんな状況を作らずにすんだんだろう。

朝起きたら学校に行って、授業を聞いて、同好会の活動をして、そして帰ってきて、適当に勉強して、DVDを観て。

でもそんなこと、できない。僕はどんな顔で遠藤に会えばいいんだ。どんな顔をして毎日を生活すればいいんだ。

だって、僕は内藤君を殺したんだ。

いつもどおりなんて、できない。そんな事は不可能だ。

ここで、父さんを顔を見ずに、説得力のない嘘をつくのが精一杯なんだ。

「……腹が減ったら、いつでも言ってくれ。英志の食いたい物、なんでも作るからな」

「うん。ありがとう」

悪の首領の秘密兵器が登場し、少しずつ押されていくヒーロー。とどめの一撃を刺されようとしたその時、ヒーローの仲間が現れた。仲間と協力し、ヒーローは憎しみではなく。絆という力で悪の首領を倒す。

ありふれた、だからこそ誰もが好む展開だ。僕だってそうだった。「あまり、遅くなるなよ。じゃあな」

父さんが部屋から出て行った。ドアが閉められ、僕の部屋は、テレビの光だけが灯っている。

父さん、僕にはわからないんだ。

僕は心の中で呟く。口には出せなかった。

本当は聞きたいことがあった。尋ねたい事があった。でも、言えない。話を聞く父さんの表情を想像すると、そんな事はとてもじゃないが聞けはしない。

僕はさ、人を殺そうとしたんだ。学校の後輩を、この手で。そし

てその子は死んじゃったんだ。僕が殺したのも、一緒なんだ。

でも聞いてよ、父さん。倒さなきゃいけなかったんだよ。だって、その子は変異種っていうヤツで、いつか暴れて人を殺すかもしれないんだ。だから、僕は闘ったんだ。平和を守る為に。正義を守る為に。ヒーローとして。

ねえ、父さん。正義って何なのかな？

どんなに考えても、答えが出ないんだ。倒さなきゃいけない敵を倒したはずなのに、みんなの平和を守ったはずなのに、僕はどうしてもそれが正義だとは思えないんだ。

教えてよ。僕には正義が何か、わからない。わからないんだ。

心の中の、僕だけにしかわからない言葉だ。

ぐるぐるぐるぐる僕の中を駆け巡る。答えを求めて彷徨っている。それを見つきたいから、僕は画面をみつめる。答えがないと知っているのに。

絆の力を得たヒーローは、自分の仲間の大切さを知る。悪を滅ぼし、平和になった世界で生きようと決意を固める。

悪を滅ぼした事に、ヒーロー達はなんの負い目もないだろう。当たり前だ。だって、悪は倒すべき相手なんだから。悪がいるから、世界は脅威に晒されているんだから。

そう考えれば、変異種だって立派な敵だ。悪だ。変異種はいつ暴走するかわからない。

虎の変異種を思い出す。あの、狂ってしまった男を。

もしもあいつが街中で変異種になっていたら、きっと何人もの犠牲者が出た。人が死んでいた。だから、天月があいつを倒したんだ。殺したんだ。人々の平和を守る為に。

それは立派な正義と思えて、変異種は倒すべき相手なんじゃないかって気がする。

でも、それは違う。だってそうだろう？内藤君だって、変異種だったんだ。

いつかは内藤君も、あの虎の変異種のようになっていたのかもしれない。けど、内藤君は生きていたんだ。普通の人間と、同じように。それは人ってことなんじゃないのか？だったら、人を殺す事に正義はあるのか？

いくら考えても僕の答えは一緒だ。けど、世界はそれを正義と呼ぶ。映像がそれを証明している。僕の正義と世界の正義はズレている。

世界の正義を受け容れてしまえばいいのだろうか。僕もこのヒーロー達の様に、世界を守る為に何かを犠牲にして――そうすれば、きっと楽になれる。

そんなの、ダメだ。世界が許しても、僕の心が許さない。

正義を見つけれないまま、僕は暗闇の中で、答えを求め続ける。映像が止まった。DVDが終わったんだ。これで、僕は自分の持っているDVDを全て見た事になる。答えは見つかってない。僕の求めていたヒーローは、僕に正義を教えてくれなかった。

「ハ……ハハハ……」

意識しないうちに、僕は小さく笑っていた。

「ハハ、なんだよ、ヒーローってさ……」

どうして僕は、ヒーローに憧れていたんだろう。

わからない。それすらもわからなくなっていく。

カッコいいから？何かを守る人間になりたかったから？だから僕はヒーローに憧れていたのか？

そうだ。この前まで、僕の心は世界の正義を受け容れていたんだ。なのに、何で今、僕はそれを拒もうとする？

わからない、わからない、ワカラナイ……

音が聞こえてきた。今度はドアを叩く音じゃない。なにか、振動している音だ。暗闇の中で、何かが光っていた。机の上の、そこから振動音が聞こえている。

携帯だ。僕の携帯が、振動していたんだ。

僕はベットから降りて、それを手に取る。着信を告げる画面には、「一ノ宮博士」と記されていた。

通話ボタンを押そうとする指が、止まる。

一ノ宮博士は知っている。僕が変異種と闘っていた事を。それを否定的に捉えている事は絶対にならないだろう。でも、僕が内藤君を殺そうとしたと知っている人と、関わりたくはなかった。

振動が止まった。不着信として処理されたんだ。画面には着信ありのマークが出てきた。

僕は安心していった。一ノ宮博士と、話さなくても済むことに。

あの人は変異種と闘っている人だ。これまで、何対の変異種を、何人の人間を殺してきたか、わからない。天月だってそうだ。それが彼らにとつてのやるべきことで、誰かがやらなきゃいけないことなんだとわかっていても、僕は嫌だった。

もう一度、携帯が振動を始めた。着信かと思ったが、違う。不着信の保留メッセージを告げるアイコンが現れた。わざわざ留守電に入れたってことだ。

僕は気になって、そのアイコンにカーソルを合わせ、ボタンを押す。

携帯を耳に当てた。留守番のメッセージが再生される。

「久坂君、大変だ」

一ノ宮博士の声は、焦っているようだった。一体何が、と思った僕は、次の言葉で一ノ宮博士の焦りの意味を理解する。

「天月が、変異種にさらわれた。もしかしたら殺されているかもしれない。これを聞いたら、すぐに僕のところに来てくれ。君にも協力してもらいたい事がある。僕は、いつもの場所にいるから——」

僕の手は震えていた。携帯が落ちてゆく。一ノ宮博士の声だけが、真っ暗な部屋で聞こえていた。

敵 1

自転車を漕ぐ。力がろくに入らない。けど、それでも自転車を漕ぐ。

——天月がさらわれた？変異種に？しかも、殺されているかもしれない？

ないはずの力を振り絞る。川原へと一直線に向かう。

頭はふらついていた。視界も若干霞んでいる。生ぬるい風が僕の顔に当たる。それすらも辛い。

僕は何も食わず、父さんに何も言わず、家を出てきた。だから、三日間、まともに何も食べていないことになる。体調が最悪なのはそのせいだ。こんな僕が、一ノ宮博士の所に行ったとして、何かをできるとは思えない。

それでもペダルを踏む。

息が切れる。心臓は限界を訴えている。血液が酸素を全身に供給する為に動き回る。それが辛い。まるで、身体の内側から殴られているかのよう。

学校を通り過ぎ、喫茶店やファミレスを通り越し、高級住宅街を抜ける。川原まで、もうすぐだ。

「久坂君！」

僕は呼び止められた。その声の主は、一ノ宮博士だ。

ブレーキをかけ、自転車を停止させる。今にも倒れそうになる身体に鞭打って、なんとか自転車から降りた。

街頭の下に、一ノ宮博士はいた。僕のほうへ走ってくる。無造作な髪も、髭も、白衣も、四日前から何も変わってはいない。

「天月は生きてるんですか？」

息を切らしながら、何とか僕は言葉をひねり出す。どうしても聞きたかった。確かめたかった。果たして、天月は生きているのか？「詳しい事は僕の車の中で説明する。歩けるかい？相当、顔色悪いけど」

「……大丈夫ですよ」

本当は大丈夫じゃなかったけれど、それ以外に言葉が見つからなかった。

頭がふらつく。このまま倒れてしまいたかった。それでも何とか歩き、僕と一ノ宮博士は川原の坂を先に下っていった。僕も自転車を止め、

一ノ宮博士は川原の坂を先に下っていった。僕も自転車を止め、その後続く。坂道を下っていく。

途中、脚を踏み外した。バランスを崩してしまう。態勢を立て直そうとしたが、できなかった。身体を自由に動かせなかった。僕はそのまま、坂を転げ落ちる。

僕はソファアーの上で寝ていた。視界に映る光景に見覚えがあった。ここは、あのキャンピングカーの中だ。

「起きたかい？」

だるい身体をなんとか起した僕に、一ノ宮博士がコップを差し出した。それを受け取り、礼を言う。

「まさか、坂で転んで気絶するとは思わなかったよ。君、寝てないのかい？」

僕は気絶していたのか。

記憶が途中で途切れていて、確信がもてない。ただ、僕の身体にはいくつかすりむいた跡があった。服には泥が付いている。

「それ、飲むといいよ。僕の特製栄養ドリンクだから」

言われるがままに、僕はそれに口をつけた。

不味い。

それしか感じなかった。かと言って、そのせいでを吐き気を催すとか、吹き出してしまふとか、そんなことはなかった。

喉を久しぶりにまともな物が通った感覚があった。水ばかりだった僕の身体に、その不味いながらも栄養を含んだそれが染み込んで行く。

「ありがとうございます」

僕は二度目の礼を言った。少し、身体がまともになった気がした。「そうか。ならよかった。それじゃあ、本題に入ろうか」

一ノ宮博士はノートパソコンを机の上に置く。画面には地図が表示されていた。

何処かで見た事があるような地図だった。そうだ、アレににている。エニティレイターとなった僕の頭の中に送り込まれてきた、あの時の地図に。

ただ、僕の頭の中にあった地図とは違い、赤い点ではなく、代わりに緑色の点があった。

「これが、天月のいる場所。正確には、ヴァリアント・システムの所在地だ。これは三時間前から全く動いていない。僕に連絡もせず、天月一人でこの場所にとどまり続けている、とは考えられない」

いや、ちょっと待て。ヴァリアント・システムのある場所が天月のいる場所ってことは。

「天月が、ヴァリアント・システムを持ってるってことですか？」

「当然だろう？ 君が天月にヴァリアント・システムを渡していたんじゃないか。だから今、エニティレイターは彼女だ」

そうか、と僕は当たり前のことに気が付く。

四日前、内藤君が死んだあの時、僕はもう、エニティレイターにはなれないと思った。闘えないと思った。天月もそう言っていたし、僕は自分のしでかした事で頭がいっぱいで、それでもとにかく、ヴ

アリアント・システムを手放したかった。

何も考えていなかった。僕が闘わないってことは、天月が闘うってことなんだ。覚醒因子が暴走してしまうほどの身体を抱えて、それでも天月は闘うだろう。これまでそうしてきたんだろうから。

僕が闘わないってことは、そういうことでもあるんだ。

「数分ほどだったが、このヴァリアント・システムの反応とほぼ同じ座標に変異種の反応があった。天月はその変異種に捕獲、または殺害された可能性が高い。だが、恐らく生きているはずだ。ヴァリアント・システムは体温を感じ取っている。パスワードを入力するか、こちらから遠隔操作をしない限りはあの腕輪は取り外す事はできないし、装着する事もできないから、変異種の体温を感じ取っているという可能性は低い」

「天月は、生きてるんですね？」

「多分ね。確証はないけれど」

僕はほっと、胸を撫で下ろす。

よかった。天月は死んでない。生きてるんだ。

「だが、安心できる状態ではない。変異種の目的がわからない以上、彼女をこのままにしておくわけにもいかない……そこで、君に頼みがある」

敵 2

「頼み、ですか」

どんな事かは、大体想像がついている。

「君にはヴァリアント・システムを回収し、それを使って変異種を殲滅して欲しい。できる限りのバックアップはこちらでも行う」

やっぱりそうだ。わかっていた。わざわざ僕を呼びつけたんだ。

それ以外の理由はない。

僕は無言になってしまふ。答えられなかった。少し前までの僕ならば、すぐに確実に了解していただろう。

天月を助けたい。その気持ちはある。でもそれだけじゃない。僕が変異種を倒すってことは、誰かを殺すってことなんだ。内藤くんが死んでしまった時のように。

「どうして、迷っているんだ？」

一ノ宮博士が問いかけてくる。

多分、一ノ宮博士には理解できない事だと思う。だって、一ノ宮博士はずっとそうしてきたんだから。変異種という敵を倒し、人の平和を守ってきた。言うなれば、世界の正義で動いてる。

僕はそれがどうしても受け容れられない。誰かを犠牲に、誰かの全てを奪って、平和を守るってことが、どうしても納得がいかない。幼い僕の正義は、それに拘っている。

「変異種を倒す事が、そんなにも嫌なのか？」

「……はい」

「変異種を殲滅しなければ、どれだけの被害が出ると思う？ 街中で暴れてもしたら、十数人は確実に、下手をすれば百人単位の間人が命を落とすだろう。変異種を殲滅しないで行くことはできないんだ。そして、そうすることで人の平和は守られる。君もわかっているだろう？」

それはわかってる。でも、理屈じゃないんだ。

「でも、変異種だって、僕らと一緒に、生きてるんですよ」

内藤くんがそうだった。他の変異種だってそうだろう。僕らと変異種となった彼らに、何の違いがあるんだ？ 危険だと思ったら、僕らだって対して変わらない。毎日のように世界のどこかで、時には故意に、時には偶然に、誰かは誰かを殺している。

被害が出るって言うのはわかる。それを防がなきゃいけないってのもわかる。

けど、偶然そうってしまっただけの人を、殺していいのか？

「この街の人間が皆殺しにされてもいいって言うのかい？」

「それは……」

「君が言っているのはそういう事だ。いいかい？ 変異種を殺さなければ、人が死ぬんだ。確かに変異種は生きている。僕らと同じようにね。けれども、やつらはもはや人間ではない。別の生き物だ。

虎やライオンや熊が僕らと共存できると思うか？ 僕らと同じ場所で、檻もなく自由に動き回る猛獣たちは、そのうち人を殺すだろう。それと同じだ。変異種は人じゃない。化け物なんだ。放置しておけば人を殺す。君も殺されそうになっただろう？ だったらどうする。答えは二つある。檻に閉じ込めるか、殺すか。だが変異種には檻なんて意味はない。檻に閉じ込められないなら、殺すしかない」

僕は何も言い返せない。

そうなんだ。変異種は殺さなくちゃいけない。大切なものを守りたいのなら、そうしなくちゃいけない。

要するに、僕は正義という言葉に固執しているだけなんだ。自分の行動を正当化しておきたいだけなんだ。

守りたいものがあるのなら、何も考えず、何も思わず、それを守る事だけを考えていればいいんだ。

わかってるさ、そんなことは。

「君がやらなければ、人が死ぬ。どれだけの被害になるかは想像がつかない。まあ、確実に天月死ぬだろうね」

この街の全ての命が消えていくかもしれない。

父さんも、遠藤も、田上君も、笹倉さんも、学校の皆も、一ノ宮博士も、もちろん、天月も。

わかってる。僕は闘わないってことは、そういうことなんだって。それを防ぎたいなら、答えは一つしかない。

「……わかりました。やりますよ」

そう言うしかないんだ。僕は。

敵 3

僕は真っ暗な土手を歩く。たった一人で、息を殺しながら。

ヴァリアント・システムの反応は、廃工場の中にあった。僕が特訓に使っていた、所の近くだ。この街で人目につかないところといったら、あそこくらいなものだ。だから廃工場に変異種は天月を連れ去ったんだろう。あの廃工場は人目につかないという、それを知っているという事は、変異種はこの街に長く住んでいるってことだ。僕はこの街を守る為に、この街の誰かと闘おうとしている。この街の誰かを殺そうとしている。

そんなこと、正義じゃない。

けれど、僕の正義に一体どんな価値があるというのだろうか。世間とズレている僕の正義は、一ノ宮博士に対し、何も言い返せなかった。

廃工場に向かうのは僕一人だ。一ノ宮博士に「構成員を十人ほど囹に使ってもいい」と言われたが、断った。僕の心は、それを許さない。

一人で歩く。心臓の鼓動は強くなっていく。

怖がっているのか、僕は。

多分、そうだ。たった一人でヴァリアント・システムを奪還するという、そのことに僕は恐怖を感じている。無性に自分が嫌になった。僕は、内藤君にそれ以上の恐怖を与えていたじゃないか。

震えかけている足を、音が出ないように殴った。

無性に腹が立った。あんな事をしておいて、一丁前にビビっている僕に、僕自身がとても苛立っている。

暗闇を進みながら僕は思う。

果たして僕は、変異種と闘えるのか？

やります、と言ったのはそうしなければ天月が死んでしまうからだ。それは嫌だった。だからやると言った。でも、僕が闘うという事は、僕は変異種を倒すという事で、つまり誰かを殺すという事でもある。

誰かを助ける為に、誰かを殺す。

僕はそんな事、したくない。内藤君の時と同じ事をするってことだから。

あの声。表情。息遣い。脳裏に焼きついて離れない。三日たった今でも、目の前で起こっている事のように、脳内で再現される。

できるかどうか、正直わからない。その時になったら、こんなにも悔やんで悩んでいる事が嘘のように、あっさり変異種を殺しているかもしれないし、もしくは、殺す事などできないと、どうにかしてその場を切り抜けようという事を頭の中で考え続けるかもしれない。

どっちにしろ、廃工場にいかねければ天月を助ける事すらできない。

答えが出ないまま、覚悟の無いまま、僕は歩く。

正義を見つける事ができれば。

僕は思考する。それは自分を正当化するだけの言い訳なのかもしれないけど。

正義という、信じる絶対の「何か」があれば、僕はこんな、覚悟も何も無い、ただ悩んで答えが出ないだけの現状から抜け出せるかもしれない。

けど、探しているものが正義なんだ。信じたいものがわからないんだ。

僕は天月を守りたい。誰も死なせたくない。

けど、そのためには誰かを死なせなくちゃならない。

矛盾している。そんなものを信じれるわけが無い。そんな事に、

覚悟なんてもてない。

それが僕のがままだって事はわかる。わかってるんだ。

僕が素直に闘う事を受け容れてしまえば、全ては解決する。僕がやらなくても、誰かがやる。変異種を殺すのは誰だっていい。それが僕でも、一緒だ。

わかってるのに、心が受け容れない。そんな事してはいけな
いと、拒んでる。

世界を守る為に、少数の、人間から離れていった人を、犠牲にする。それができない。

目的の廃工場についた。内部ではほんの少しだけ、灯りがついて
いた。僕は足音を立てないように気を使いながら、その灯りへと向
かう。

変異種はそこにいるだろう。僕の倒さなければならぬ相手は、
そこで待ち構えているはずだ。

覚悟も結論も、まだ出てない。ただ、天月を死なせたくないのだ
け、それだけははっきりしている。

薄暗い廃工場を、僕は進んでいく。

人影が見えた。一つは何かに座っていて、もう一つは倒れている
方は長い髪。天月だ。

天月は動かない。眠らされているのかもしれない。身体は鎖で拘
束されている。でも、拘束されているって事は、生きてるって事だ。
僕は安堵する。

天月の倒れている近くには、腕輪が転がっていた。一ノ宮博士が
ロックを解除したからだ。

変異種に気づかれないようにそれを回収するには、とりあえず変
異種の死角から回り込むしかない。

僕は座っている方の人物に目をやった。そいつがどんな風に、ど
んな所へ視線を向けているか、わからなければ動けないと思ったか
ら。

――は？

物陰から見えたその顔は、ありえるわけが無かった。

「ん、ああ、遅かったじゃねえか」

そいつは僕に気がついた。完璧に目が合った。間違いない。そいつを、僕は知っている。

「そんなところに隠れてないで、こっちに来いよ。お前、この腕輪が欲しいんだろ？」

そいつは天月の近くに転がっているそれを拾い、掲げた。

「どうして」

僕は呟いていた。

ふらふらと、自分の意思とは関係なく、脚が進んでいく。心のどこかに、近くで確かめたいと、そんな事があるわけないと、そんな気持ちがあったのかもしれない。

「どうして、お前が！」

薄い灯りの中に、見える顔。

知ってる。間違いない。信じたくない。

「ま、俺には俺なりの考えがあるってね。まあいいや、ともかくさ、闘おうぜ。そのために、そのためだけにここまでのお膳立てしたんだからよ」

いつものように、軽い調子で、そんな事を言う。

そいつは、遠藤だった。

敵 4

「何言ってるんだよ。大体、なんでこんな所にお前がいるだよ」

どうして、遠藤が。ここにいるのは変異種のはずだ。天月をさらったやつが、ここにいるはずなのに。お前は、関係ないじゃないか。「闘おうぜ、って言ったんだ。ヴァリアント・システム、だったか？

大層な名前だよな。要するに、変身ブレスレット、だろ」

遠藤が僕へ腕輪を投げってくる。足元にそれは転がった。

どうしてヴァリアント・システムを知ってるんだ。僕は、この腕輪の事を遠藤に言っていない。

「そいつで変身しろよ。俺と闘え」

「なんで僕がお前と戦わなくちゃいけないんだ！」

そうだ、僕と遠藤が闘うことなんてない。意味なんてない。

なんで僕が遠藤と闘わなくちゃいけないんだ。遠藤は関係ない。関係ないんだ。

「何でって、お前だってわかってるんだろ？」

遠藤の腕が変化していく。信じられない光景だった。

銀色の毛。鋭い爪。見覚えのあるそれは、あの時の、僕が初めて闘った、狼の変異種のもの。

それが、遠藤の腕となり、僕の目の前にある。

は？なんで？おかしい。おかしいだろ。どうして、遠藤の手がそんな風になってるんだ？

嘘だろ。やめてくれ。どうかしてる。

「こいつが、俺の正体だよ」

「何言ってるんだよ」

タチの悪い冗談だ。

「これまで大変だったんだぜ。我慢するのさ。頭の中で声が響いてんだよ。滅茶苦茶うるさいんだぜ。殺せだの喰らえだの、喚き散らしててよ。必死に聞こえないフリしてた」

「適当な事言うなよ」

「でもな、それも今日で終わりだ。我慢して耐える日は、今日で終わるんだ。思いっきり暴れられる。最高の気分だ」

「やめてくれよ、遠藤」

「俺の正体は、お前らが変異種って呼んでいるヤツだ。天月をさらったのも俺だ。お前をここにおびき寄せるためにな」

「嘘だ」

「本当に苦勞したよ。お前をさ、えっと、なんだっけ。そうだ、エニティレイターってヤツに仕立て上げるのはさ。あの日、ジャストのタイミングでお前を電話で呼び出したり、天月の変身が解けるまでの時間鍵の為に、逃げ足の速いアキラ使ったりよ。腕輪をわざわざお前の前に転がしてみたりもしたな。他にも色々やったんだぜ。全部は、この時のためだ」

「嘘だって言ってくれ」

けど、遠藤は僕の声に答えてくれない。

「俺と闘え。英志。俺とお前で殺しあおう。俺とお前、変異種とエニティレイター、悪の怪人と正義のヒーロー、どっちが生き残るか、確かめようぜ」

くだらない遊びに誘ってくる時のようだ。しかし、遠藤の表情は真剣そのもの。真剣な表情をしている時遠藤は、本気で物を言っているんだと、僕は知っている。遠藤と過ごしてきた経験が、それを告げている。

遠藤の身体が少しずつだが変異していく。僕の知っている遠藤から、銀色の毛をした、狼の変異種へ。僕が始めて闘った、あの変異種へ。

決定的だ。もう、疑う余地なんてない。

そう、遠藤は、変異種なんだ。

「お前も変身しろよ。さっさと始めようぜ。お前、敵を倒す為此にここに来たんだろ？ だったら、早くしろよ」

僕は動かない。動けない。足元にあるヴァリアント・システムに視線を落としているだけ。

変異種となってしまった遠藤のその姿を見たくなかったから、視線を腕輪に向けている。だって、遠藤が変異種って事は、僕は、遠藤と闘わなくちゃいけないってことで、闘うって事は、僕は、遠藤を――

無理だ。僕にはできない。

僕には闘えない。闘う意志が起きない。僕は天月を助けたいだけなんだ。それ以外、何も望んじやいない。変異種を殺すなんて事はやりたくない。それが、知っている人間ならばなおさら。

「英志、お前、何の為にここに来たんだ？ 悪の怪人にさらわれたお姫様を助け出す為だろう？ 悪の怪人を倒さなきゃお姫様は助けられない。だったら、答えは一つしかないじゃねえか」

わかってる。かわってるさ。

でも、僕は。

「お前とは、闘えない」

「は？ 何言ってるんだ？」

「僕は闘いたくないんだ。もう、誰とも」

内藤君を殺したあの日から、ずっと思っていることだ。

本当はこんな、廃工場になって来たくなかった。天月を助け出すのだって、ヴァリアント・システムを扱えるのが僕だけじゃなければ、きっと断っていた。

怖いんだ。この手で、また誰かを殺すと言う事が。おこがましい事はわかってる。でも、怖い。

今まで生きていたその命を、僕の手で奪う。

それが何の為か、僕は明確な決意も理由も、何も持っていない。平和の為とか守る為とか、そんなのは人殺しの理由になりはしない。

僕はそう思ってる。

何も意志がないって事は、ただの行動として殺すって事なんだ。意味もなく殺しているのと一緒にだ。いや、意味はあるかもしれないけれど、それは人の命を奪うのに十分なものではない。

そう、これは僕のエゴだ。

変異種を殺すということは、やらなきゃいけないことなのかもしれない。でも、僕の正義エゴがそれを許さない。もはや、なくなりかけているはずの正義エゴは、それでも僕の心を縛っている。

そして、僕はエゴに縛られたまままでいたい。

「殺したくないんだ。無理なんだ。僕には」

「はあ？ お前、アキラ殺してるだろ。気取るのもいい加減にしろっての」

「だから！」

そう、僕は内藤君を殺した。

だから、僕は。

「もう、嫌なんだ。無理なんだよ、僕には。理由もなしに、誰かを殺すなんて」

聞えない。殺せない。その無理だ。

考えるだけならできるかもしれない。でも、決定的な瞬間になったら、きつと僕は殺せない。

それに。

「僕は、お前を殺したくない。だってお前は、僕の、僕の……」

——親友じゃないか。

「理由なら、あるだろ？」

狼の変異種が、遠藤が、言う。

「俺は悪の怪人で、お前は正義のヒーローだ。これ以上に、どんな理由が必要なんだ？ こいつこそがお前が憧れてた現実なんじゃないのか？ だったら迷うなよ。聞え。それがヒーローだろ？ お前の憧れてた、カッコいい、正義の味方だろ？」

違う。違うんだ。

僕の求めていた正義は、本当は僕にとって、正義じゃなかったんだ。

世界にとっては正義だったかもしれない。でも僕はそれを認めない。心が拒む。エゴが拒む。

「情けねえヤツだな。本当、お前は少年漫画や熱血アニメなら間違いないく主人公にならないタイプだ」

それは、僕を内藤君に紹介する時に口にした言葉。

「だったら、お前が闘うに足りる理由を作ってやる」

狼の変異種となった遠藤は、天月を縛っている鎖をその手で鎖を握った。

それを引き上げ、天月の身体を宙に浮かす。そして、鋭い爪を、天月の首に突きつける。

「お前が闘わないなら、コイツを殺す」

敵 5

僕は、遠藤のやっている事が理解できなかった。どうしてそんな事をするのか、わからなかった。

闘う理由を作ってやる？どうして、遠藤はそこまでして闘いたがる？闘うって事は、どういうことなのか、遠藤にだってわかってるはずだ。

殺しあおう。

そう、遠藤は言った。まさに言葉の通りの事を、遠藤は僕と行おうとしている。

「やめろよ……やめてくれ……」

僕のその声は、消え入るような声だった。

「そういえばよ、お前に貸したDVDの中に、こうやって人質捕られているシーンがあったよな。あのDVDだと、変身を解け、だっ
たっけな」

こんな状況で、遠藤はそんな事を言い出す。まるで、いつもの会話のように。

けれど、遠藤のやろうとしていることは、いつもの、あの平穏な毎日と遠くかけ離れた、非日常。僕が憧れていた、正義と悪の非日常。人質とられて闘いを強制されて、まさにその通りなんじゃないか。

遠藤の言うとおり、僕はこんな状況に憧れていた。でもそれは、何もしないからだったんだ。それがどんな結果を招き、どんな罪深い事なのか、全く考えていなかった。

だって、闘えば、殺しあえば、どちらかは死ぬんだ。

「あのシーンの逆バージョンだ。こいつの命が惜しかったら、変身しろ。そして、俺と闘え。わかりやすくて、シンプルだろ？」

遠藤の爪が、天月へと僅かに刺さる。ほんの少しだけ、天月の首筋から血がにじみ出た。

その気になれば、その爪は容易に天月の喉を突き破る事ができるだろう。

そして、それを防ぎたいのなら、僕にエニティレイターになれば、遠藤は言ってくる。

僕に聞えと。殺し合えと。遠藤は僕に迫ってくる。

「早くしろよ。さもないと、このお姫様は喉搔っ捌かれて、オダブツだぜ？」

遠藤の爪が、少しずつ天月の首へ突き刺さっていく。

天月が、死ぬ。

そんなのは嫌だ。

だったら遠藤と闘うのか。

そんな事は無理だ。

どちらかを選ぶなんてできない。

だってそうだろう？二人とも、僕にとっては大切なんだ。

「もう、やめれくれ」

僕はそんな言葉を吐き続けるだけ。

けれど遠藤はそれを聞き入れない。ゆっくりと確実に、その爪を喉へ食い込ませていく。

「さあ、早くしないと、天月が死んじまうぜ？」

そう、このままだったら天月は死ぬ。遠藤に殺される。

だったらどうすればいい？答えは一つだ。

その、たった一つの答えを僕は受け容れたくない。たった一つしかない答えが、最悪の回答だから。

それなのに、僕は腕輪を拾っていた。ヴァリアント・システムを手にとっていた。

僕はこんな事したくない。けど、他に方法が無いんだ。

遠藤は本気だ。変異種となって、表情が読み取れなくなつて、わかる。僕が闘わなければ、こいつは、僕の親友は、本気で天月を殺すだろう。

「そうだ。それでいい」

爪が止まる。これきつと、天月は助かるんだ。

そう、助かるんだ。けれど。だけど。

「迷うな。英志」

遠藤のその声は、何故か、とても優しくて。

ふざけるなよ。なんでそんな風に喋るんだ。僕は、お前と闘おうとしているのに。お前もそうしろって言ってきたのに。なのに。なんだ。

「お前に守りたいものがあるのなら、それをどうしても守りたいのなら、迷うな。迷って何も動かなければ、全てが無くなっていく。目の前で消されていくだけだ。だから迷うな。お前の守りたいもののために、闘え」

そんな事を遠藤は言うんだ。変異種の姿で、けれど優しい声で。今まで聴いたこと無いような声で。

おかしいだろ。何なんだよお前。ちくしょう。わからないことばっかりだ。この状況をどうすればいいのか。どうしたら僕の望む答えが出るのか。どうすれば遠藤も天月も死なないですむのか。わからない。だから僕は言われるがままのことをしてしまう。それは、自分の意志で選択しているのと一緒なんだ。

僕は、遠藤と闘おうとしている。

《コード認証。ヴァリアント・システム機動》

僕の身体が変わっていく。右手首から少しずつ、漆黒の鎧を身に纏ったヒーローへ。

「そうだ！迷うな！お前はお前の守りたいものの為に闘え！」

遠藤が天月を縛る鎖を手放した。天月の身体が地面に落ちる。

それと同時に、遠藤は前傾姿勢となり、僕に突撃してきた。

「さあ、始めようぜ！俺とお前の闘いを！殺し合いを！」
鋭利な爪が迫ってくる。

——ちくしょう！

僕は左腕に内蔵されているナイフを宙に射出させる。それを右手で握った。

「ハッ！」

遠藤の爪と、僕のナイフが拮抗する。まるで金属同士がぶつかったような、そんな音が薄暗い廃工場の中に響いた。

変異種がどんなものなのか、僕は知っている。

突然変異で生み出された覚醒因子。それによって、『進化の系譜』を呼び覚ました人間。それが、変異種。突然変異は本人の意思によって起こるものではない。偶然に起こってしまう。ある朝起きたら、風邪を引いているように。ある日、前触れも無く、その人間の中で覚醒因子が目覚めている。

そして、覚醒因子によって呼び覚まされた『進化の系譜』の「人間がなりえた可能性」と、その人間の身体は交わっていく。脳はその生物のものと交じり合っていく、次第に、人間の理性は野生の本能に奪われていく。飲み込まれていく。

いつ、理性をなくして暴走するかわからない、危険な存在。例えば今日までは人間と同じ生活を送れても、明日には理性の欠片もなくなっているかもしれない存在。それが、変異種。

もしも誰かを守りたいのなら、変異種を殺すしかない。

わかってる。わかってるさ。

その人殺しは、必要な事なんだって。誰かがやらなきゃいけないんだって。

「おいおい、手加減なんてしてんじゃねえよ」

拮抗していたナイフと爪が、そのバランスを崩していく。ナイフが爪に押されていく。

「迷うなっというたろう？ このナイフの切れ味は、こんなもんじや無いはずだ。出せよ。全力を。そうじゃなきゃ、お前、死ぬぜ。そしたら天月だって死ぬんだ。お前はそれでいいのか？」

そう、僕はナイフを振動させていない。もしそれを起動させれば、

遠藤の爪は容易く両断されるだろう。だから、使えない。
闘おうとして、変身して、そして今、闘っているのに。
僕は遠藤を傷つけるのが、怖い。

敵 6

「覚悟を決めろ。英志」

遠藤の、狼の変異種の顔が、僕の目と鼻の先にある。

「覚悟？覚悟って何だよ。ふざけんなよ。お前ばかり、知った風な口きいて。なんでこんなことするんだ？こんなことする必要なんて無いじゃないか！どうして僕とお前が闘わなくちゃいけないんだ！」

「そうだ。こんな必要なんて、ない。」

例え変異種でも、遠藤は遠藤なんだ。それなのに、どうして。

「お前がそんなヤツだからだよ」

遠藤は静かに言い放つ。

「普通に闘えって言っても、お前は絶対に断るだろ？」

「当たり前だ！」

「だからだよ。俺はお前と闘いたい。いや、闘わなくちゃならないんだ。絶対に、何があってもそうしなきゃいけない。だからお前が闘わざるを得ない状況を作った。そして闘ってる」

「闘わなくちゃいけない？何でだよ。わけわかんないんだよ！」

遠藤の考えが全くわからない。

僕らは毎日顔をあわせていた。遠藤がくだらないことで絡んできて、鬱陶しく思うこともあったけど、でも、僕はそんな遠藤が嫌いじゃなかった。嫌々ながらも、なんだかんだでヒーロー同好会に毎日付き合ってくれていたし、なんだかんだで同好会の存続の為に、色々と考えてくれていた。

僕みたいな、ヒーローに憧れているガキみたいなヤツを、遠藤は受け容れて、認めて、仲良くしてくれていたんだ。小学校の頃からずっと。

同じ私立の中学に入って、腐れ縁が続いて、僕らは何年も一緒に過ごしてきた。

遠藤は僕の親友なんだ。遠藤もきつと、そう思ってくれているはずだ。

なのに、何で僕達が闘う必要がある？

「お前はヒーローにならなきゃならないんだ」

そんな事を、遠藤は口にする。

「お前にしかできないんだ。お前じゃなきゃ駄目なんだ。お前がやらなきゃいけないんだ。お前は全ての変異種を倒して、平和を勝ち取らなきゃならない」

「なんで僕なんだよ。どうして僕なんだよ。わからないよ。お前は、何考えてるんだよ！」

「お前は選択しなきゃいけないんだ」

遠藤がナイフを弾いた。その腕が、僕の首筋を掴む。

喉が締め付けられる。爪が僕の喉元の装甲にめり込む。苦しい。

遠藤は、本気で僕の首を握り締めている。窒息死させるつもりで。

僕の事を、本気で殺そうとしている。なのに、そんな素振りを全く見せない口調で喋る。

「お前はきつと、全部を守ろうとするだろう。けれどお前は神様じゃない。全部を守る事なんてできない。だから選択しなくちゃならない。そうしなければ、守りたいものは何も守れない。たった一つもだ」

遠藤の爪がさらにめり込む。僕は宙に吊り上げられた。僕の脚が地面から浮く。

「選択しろ。覚悟を決めろ。今、お前が本当に守りたいものは何だ？ 本当を守るべきものは何だ？ 変異種の俺と闘わず、人間の天月を見殺しにするのか？ 俺を生かせばどうなるか、変異種を野放しにしておけばどうなるか、お前はわかっているよな？ だったらお前はどっちを選ぶ。どちらかだ。両方は選べない」

それが覚悟だったのか。ふざけんなよ。僕にとって、お前も、天月も、両方大切なんだ。

どっちかなんて選べるわけ無いだろ。どっちも死んでほしくない

んだ。

「選べないか？それなら、お前は全部を失うぜ。天月も、お前の父さんも、学校のやつらも、俺はそのうち、全てを殺し始めるだろう。俺の意志とは関係無しにな。それが変異種だ。進化に行き詰った人類が、突然変異という形で得た新たな進化だ」

遠藤が僕を壁に向かって投げつけた。

「が……っ」

僕の身体がコンクリートの壁にぶち当たり、そして床に倒れた。地面に突っ伏した。

なんなんだよ、ちくしょう。ふざけんなよ。なんで、僕にそんな事を選ばせるんだよ。

僕の理性は、とっくに答えを導き出していた。

そう、僕は変異種を、遠藤を殺さなければならぬ。

そうしなければ、天月が死ぬ。天月だけじゃない。下手をすれば、この街の人全てが死ぬかもしれない。変異種ってのは、そういうものなんだ。

遠藤はまだ理性と言うものが残っている。けれど、いつあの虎の変異種のように、赤い豚の変異種のように、暴れてしまうかはわからない。それが十年後なのか、もしかしたら、今すぐなのか。

どちらにせよ、僕が皆を殺させたくないのなら、遠藤を殺す以外の方法は無い。

うるさい。わかってる。わかってるんだ。でも、そんなの、選べるわけ無いじゃないか！

遠藤をこの手で殺す。内藤君の時と同じように、殺す。

生きている命をこの手で奪う。自分と誰かの為に、誰かの息の根を止める。

遠藤は、僕がヒーローにならなければならないと言った。もしそうだったとして、そんなものが、犠牲を払わなければ平和を掴み取れないやつが、本当にヒーローなのか？

そうしなければ、平和なんて得られないのか？

ちくしょう!ちくしょう!ちくしょう!

敵 7

嫌だ。遠藤を殺したくない。でも、どうしたらいい？ どうしたら、殺さなくて済む？

僕はこれまでに無いくらい、頭の中で思考を繰り返す。

嫌なんだ。絶対に避けたいんだ。例え理性が結論を既に出していたとしても、僕の心が別の道を探している。だってそうしなかったら、僕はこの手で遠藤を殺さなきゃいけないんだ。

僕はあることを思いつく。

身体を起した。立ち上がる。視線は狼の変異種である、遠藤に向けて。でも意識は全く別のところを向いていた。

「……一ノ宮博士」

僕は弱々しく、その名前を口にする。

恐らく、一ノ宮博士は僕のこの声を聞いているはずだ。エニティレイターの腕輪には、通信機の機能も含まれている。戦闘中のボイスレコーダー的な役割もあるのだろう。それを、一ノ宮博士が聞いていないはずがない。

「仮想空間に転送してください」

仮想空間に行ってしまうえば、もしかしたら、遠藤を説得できるかもしれない。

その結果、どうなるかは全然わからない。ただの思いつきだ。でも、もしかしたら、遠藤を止める事ができれば。僕が必死に一ノ宮博士に頼み込めば。もしかしたら遠藤の覚醒因子の侵食を抑える薬を、一ノ宮博士から貰えるかもしれない。

ヴァリアント・システムに使用されている覚醒因子に利く薬があったんだ。変異種の覚醒因子に利く薬があったって、不思議じゃない。

憶測でそれがほんの僅かしかなさそうな可能性だとしても、僕はそれにかきたい。

ほんの僅かでも最悪の結果を招く事を避けられるのなら、今の僕はどんなに小さな可能性でも信じる事ができる。

けれど、声は返されない。

「一ノ宮博士。聞いてるんでしょう？返事くらい、してくださいよ……」

声は一向に聞こえてこない。僕の声だけが、弱々しく空しく廃工場に木魂する。

「無駄だ。いくら呼びかけたって、あの場所にはいけないぜ」

「どうして何も言ってくれないんですか……？」

「だから無駄だって言ってるだろ。仮想空間なんて所に俺たちを転送したら、そんなことしたら、人質の意味がなくなっちゃう。そんな事を、あのいかれたオヤジが許すと思うか？」

遠藤は何を言ってるんだ。

「あのクソオヤジはな、お前の事をヒーローにしたいくたしてたくてしようがないんだよ。お前を正義の味方に仕立て上げる為にな、こんな手の込んだシナリオまで用意してよ。全く、大人ってのはくだらない事ばかりに無意味に思考を費やしているよな」

遠藤の言っている事は無茶苦茶だ。

「全部、あのオヤジが仕組んだことだ。この場面を作り出すために。エニティレイターとなったお前。人質となった天月。そして、俺を殺さなければならぬこの状況。全てはこの時、この為に仕組まれた事なんだ」

一ノ宮博士の声は聞こえてこない。

だから遠藤の言葉が、聞きたくも無いのに耳に入ってくる。

「だからお前は覚悟して闘って選択して、平和を掴み取らなくちゃいけない。それしか方法は無いんだ。それ以外、無理なんだよ。お前ができないと思っただけでも、それでもやるしかないんだよ」

なんなんだよ、それ。

「さあ、これで選択肢は二つしかなくなった」

遠藤が僕に歩み寄ってくる。

ゆつくりと、確実に。

「このまま俺に殺されて、そして全てが死んでいくか」
答えはもう決まっている。そんなもの、既に理性がたたき出している。

「それとも俺を殺して、そして全てを守るのか」

どっちを選ぶのか。

僕が僕でなかったら、すぐにでも選べるだろう。僕が僕だから、選べない。

遠藤と僕は親友なんだ。遠藤がそう思っているのか、もうわからない。けれど、僕は今でもこの瞬間でも、遠藤の事を親友だと思っている。

「選択しろ。覚悟を決めろ。そして、平和を掴み取れ」

なんなんだよ。お前は何でも知ったように言うけれど、僕は何にもわからないんだ。

お前が敵だって、変異種だって事だけで、僕は頭の中がいっぱいになりそうなのに、それだけじゃなくて闘えだとか選択しろだとか覚悟を決めろだとか、なんでそんな事を要求するんだよ。

「できるわけ、ないじゃないか……」

だって、お前は、お前は、僕の――

「お前なら、できるさ」

遠藤が僕の目の前で立ち止まる。

そして、言うんだ。こんな事を。

「だってお前は、俺の親友だろう？」

――ああ、そうか。

その一言で、僕は悟った。

遠藤は僕の為に闘おうとしているんだ。

僕に決意をさせる為に、僕に選択をさせる為に、僕に覚悟をさせる為に。

遠藤は、僕を迷わせないようにしようとしている。僕の道を、確固たるものにさせようとしている。それが正しい道なのか間違った

道なのか、それはわからない。
けれど、人を守る為の道だ。僕が選びたくて、でも選べない、道だ。

変異種を殺せない僕に対して、変異種を殺さなければならぬ状況を作り、そしてその道を進むように、選ばせようとしている。

自らが、死ぬ事によって。

「……遠藤」

「仕切りなおしだ。武器を手に取り。俺と闘え。俺を殺せ。そして、お前はヒーローになるんだ」

遠藤の思いを知って。

遠藤の決意を知って。

遠藤の覚悟を知って。

僕にはそれを知らないふりは、できなかった。

選びたくなかった。他の道を選択したかった。

でも、遠藤はこの道の為に、覚悟をしている。変異種を殺せない僕を、自らの命を糧にすることで、変えようとしている。そしてそれは、僕のためなんだ。僕が殺せないから、遠藤は、自分が犠牲になる事で――

僕は拳銃を握った。それを遠藤に向ける。

重かった。引き金はそれ以上に重い。

けれど、遠藤は死ぬ覚悟で、僕の為に闘おうとしている。

だったら、だったら僕は。

「……お前は、僕の親友だ」

「俺だってそう思ってるさ」

「本当は殺したくなんて無い」

「知ってるさ。お前は、そういうヤツだ」

遠藤は優しく、そう言ってくれる。

「でも、それしか道が無いんだったら」

そう、無いんだ。僕の理性と、遠藤の死ぬ気の決断が、それを物語っている。

だから、だから僕は。選びたくない。だけど、選ぶしかない。

それが正しいのか間違っているのか、わからない。

けど少なくとも、「人」は救える。

だから、僕は。

「僕はお前を、殺す」

「そうだ。それでいい」

僕は引き金を引いた。銃声が廃工場に響く。

それが、僕と遠藤が殺し合う、始まりの合図だった。

敵 8

跳躍し弾丸を避けた遠藤は、ベルトコンベアに跳び移っていた。僕は両手に銃を構え、走る。接近しながら遠藤を狙う。

遠藤が再び跳んだ。錆びた機械や所々にヒビの入った壁、埃まみれの床を蹴り、細かく方向転換を繰り返す。弾丸が当たらないように。内藤君の使った、あの戦法だ。

障害物の多いこの場所で、弾丸は何度も遮られる。何度もはじかれる。そうでなかったとしても、細かく方向転換を繰り返す遠藤に、弾丸は当たらない。

だったら、どうすればいいのか。

僕はまだ遠藤のいない場所に弾丸を放った。遠藤の動きを予測したんだ。あいつの動きは、なんとなくわかる。僕を誘導しているよな、そんな動き。

遠藤の右肩を、銃弾が貫いた。血が噴き出る。遠藤は失速し、動きが鈍る。

——迷うな。英志。

僕は弾が尽きるまで、二丁の銃を乱射する。遠藤を大量の弾丸が襲った。それらは障害物に遮られ、時には的外れな場所に向かっていきながらも、残りの数発が遠藤の身体に命中した。

血が宙を舞う。遠藤からかすかなうめき声が洩れる。

僕は片方ずつ新しいカートリッジを装填しながら、遠藤の元へ走る。接近する。

遠藤は全身から血を噴出しながらも、動いていた。動きは遅くなっている。けれど、確実に、動いていた。僕と闘う為に。

全身の血は少しずつだが出血量が収まってきている。傷口が修復されているんだ。だから、致命傷が決定的な傷にならない。変異種を殺したいのなら、あの技を使うか、急所を完全に破壊するか。人間の状態なら、それに加えて、頭部を吹っ飛ばすか。

——それ、お前が観たいって言ってた特撮の映画のヤツだよ。たまたま見つけたから、落しといた。

遠藤が地面を蹴り、僕に突撃してきた。両手の爪で僕を切り裂こうと、腕を大きく振るう。僕はそれを銃身で受ける。重い一撃。銃がはじかれた。それでもなんとか一撃目を防いだが、すぐに二撃目がやってくる。僕はそれをまともに喰らった。胴に五つの直線が、斜めに刻まれる。熱を帯びた痛みが、僕の装甲を襲った。

苦痛で動きが止まった僕を、遠藤の拳が襲った。僕の胴体を何度も何度も殴ってくる。僕は後退し、吹っ飛ばされながら、それを喰らっていた。僕の背中がタンクに激突する。遠藤が差を詰めてくる。僕の腹に、十分に加速をつけた遠藤の一撃が、叩き込まれる。

——覚悟を決めろ。

僕は苦痛にもだえながらも、銃口を限りなく接近している遠藤に向けた。ほぼ真横から、遠藤の胴体を撃ち貫く。遠藤の身体が一瞬、跳ねた。その隙に僕は遠藤を蹴り飛ばす。

遠藤の身体は赤い液体を撒き散らしながら、床に衝突した。身体が地面で一回跳ねる。

僕はそれ目掛け、トリガーを引く。遠藤の身体がさらに跳ねた。開きっぱなしの蛇口のように、血が流れでている。

——お前は、ヒーローにならなきゃならないんだ。

銃を撃ちつくす。弾丸を全て遠藤に叩き込む。身体が反れ、絶叫にも似た雄叫びが廃工場の中に響いた。

それでも、僕はやらなくちゃいけない。

僕は弾薬の尽きた銃をしまい、ナイフを手を取った。超振動を起

動させる。どんなものでも簡単に切り裂く事のできる、刃物。遠藤の身体だって。それを手にして遠藤へ跳ぶ。背中と足の裏のバーニアを吹かしながら、加速する。

遠藤は起き上がり、僕を迎え撃っていた。

僕は遠藤の右腕を切断する。噴出す遠藤の血を、全身に被った。真っ赤な血だ。僕らと同じ、赤い血。それが地面に流れ落ちていく。遠藤の残りの腕が、僕の首を掴んだ。投げられ、叩きつけられ、地面と僕の背中がぶつかる。さらに遠藤は僕を蹴り飛ばした。僕の身体は血まみれの床を転がり、何かの機材に当たって止まった。

——お前は選択しなきゃいけないんだ。

僕は立ち上がる。遠藤が僕に襲い掛かってきた。残りの腕を僕に振るう。鋭い研ぎ澄まされた爪が、僕を切り刻む為に、迫ってくる。反応できなかった。僕は殴られ、機械に激突する。めり込むような形になる。遠藤の爪が、幾重にも僕の全身を切り裂いた。黒の装甲は削られていく。痛みが広がっていく。

押し寄せる、苦痛。苦痛。苦痛。逃げ出したくなるほどの痛み。腹部を今、全力で殴られた。機械を破壊しながら、僕の身体は廃工場のコンクリートの壁にぶつかる。

痛みで力が入らなかった。飛行することもままならず、僕の身体は重力に逆らえず、落ちる。全身を床に打ち付けた。辛苦の声が吐き出される。

遠藤が迫ってくるのがわかる。痛くて痛くてしょうがなかった。だけど、立たなきゃならない。そうしなければ、この闘いが、遠藤の決意が、遠藤の覚悟が、無駄になってしまう。

足の裏と背中中のバーニアを吹かす。初速度0から、一気に加速する。遠藤の腕をかわし、交錯する際にもう一本の腕もナイフで切り裂いた。

灰色の毛をした獣のような腕が、落ちていく。遠藤の血は止まらない。もう、致死量になるほどには出血しているはずだ。それでも遠藤は立っている。何のために？ 僕に、選ばせる為にだ。

身体をくの字に曲げる。足を前方に向け、バーニアの勢いで方向転換。

遠藤は両腕を失いながらも、僕に向かってくる。

——だったらお前はどっちを選ぶ。どちらかだ。両方は選べない。遠藤に向かって、進む。迎え撃つ。右手には、どんなものでも切り裂く事のできる、超振動ナイフ。遠藤は丸腰。負けるわけが無い。やるしかない。殺すしかない。遠藤を。

——お前なら、できるさ。

僕は遠藤の胴体を、真っ二つに切り裂いた。腰を一閃し、上半身と下半身を切り離す。

遠藤の上半身が、床を転がった。遠藤の下半身が、ベルコトンベアの上に乗った。それらが人の姿に戻っていく。血を噴出しながら、それでも生きようと、肉を再生しようとしている。

僕は、やらなくちゃいけない。

人へと戻った遠藤の表情は、酷く歪んでいた。それでも、平静を装うとしているのがわかる。何故そんな事をするのかは、考えるまでも無い。

人となった変異種を、完全に殺す為には。

——やめて……殺さないで……お願いします……。

僕は迷わない。

——嫌だ、死にたくない……。

覚悟を決めるんだ。

——これが、変異種と闘うということ。

天月のやったように、頭を吹き飛ばせばいい。

僕は遠藤に歩み寄りながら、銃を取りだす。カートリッジを装填する。右手にそれを持ち、銃口を遠藤に向ける。

「そうだ。それでいい」

遠藤は顔をさらに歪めた。もしかしたらそれは、笑おうとしていたのかもしれない。

「俺の最後の頼み、聞いてくれるか」

血を垂れ流して、遠藤の顔は蒼白になっていた。血が足りないんだ。それでも生きているのは、遠藤が変異種だからなんだろう。

僕は無言で頷く。喋ったら、感情が流れ出てきそうだった。

サンキューな、と遠藤は口にする。

「父さんと母さんと美由紀を、守ってくれ。死なせないでくれ。必ずだ」

頷く。

「それとな、英志。お前、死ぬなよ。お前には生きていて欲しいんだ。頼むぜ、本当。絶対に、何があっても、生き残ってくれ」

僕は頷く。

身体が震えていた。何で震えているか、わかる。エニティレイタ―は泣けないんだ。だから震える。行き場の無くなった悲しみが、全身を震わせる。

「お前ならヒーローになれるさ。人を守って人を救って、平和な世界を勝ち取る事ができる。お前は神様じゃないから全部は救えないかもしれないけれど、それでも、お前のお陰で誰かが生きることができるんだ。それだけでも十分、上等な正義だと俺は思う」

僕は何もいえなかった。震えて、頷くだけだった。

ここで僕が止まれば、全てが無駄になる。内藤君の死も、遠藤の決意も、そしてこれから起きる遠藤の死だって。

――また明日な。

だから止まらない。遠藤は僕に理由をくれたんだ。人殺しの理由を。それに足りる動機を。他人にとっては、ただの言い訳にしか聞こえないかもしれない。けれど、僕にとっては重く十分すぎるほどの、理由だ。

「わりいな。お前にこんな、辛い事押し付けちゃって」

止めるよ。そんなこと言うなよ。口にはできないから、心の奥底で、呟く。

僕は引き金に置いた指に力を込めた。あと数ミリ。たった数ミリ押し込めば、目の前の命は消える。

「じゃあな、親友」

遠藤は笑っていた。苦痛に歪むことなく、綺麗に、すがすがしいほどに。本当は怖くて仕方が無いはずなのに。死にたくないはずなのに。

だから僕は、引き金を引いた。

天月葵は意識を取り戻していた。闘いの途中から、ずっと。

視界には、拳銃を構える黒い影。そして、上半身だけの少年。

――駄目。

天月は叫ぼうとした。しかし、声が出ない。出す事ができない。

何か、薬を飲まされていた。

何故、遠藤が久坂英志と闘おうとしたか、大体天月には察しがついていた。そもそも、遠藤という少年が久坂英志を殺そうとするわけがないと、確信していた。それほどに、彼は久坂英志のことを大切に思っていたからだ。

久坂英志が彼を撃てば、その心は壊れてしまう。幼く歪みの無い正義は砕け、残るのは自分自身への嫌悪感だけだ。

――だから、彼は、私にあんなことを言っただけなの？

英志のこと、支えてやってくれ。

遠藤は久坂英志がどうなってしまうのか、わかっているのだろう。人を殺すと言う罪に、耐え切れないと言う事を。そして、壊れてしまおうと言う事を。

――だったら、どうして。貴方がいた方が、久坂君は……

人殺しに殉ずることしがでなかつた自分がいても、なんの支えにもなりはしない。

天月はそう考えていた。

人殺しに慣れ、正義など一切考えず、ただ人殺しを続けていた自

分。そんな自分が、人を支えられるわけがない。

だが久坂英志は引き金を引こうとしている。友を、その手で殺そうとしている。

――駄目！

しかし、弾丸は放たれる。遠藤光一は頭を四散させ、絶命した。頭部を破壊すれば、例え変異種の再生能力を持つ人間の身体でも、確実に死ぬ。

久坂英志がその姿を人間のそれへと変える。友のなきがらを抱え、そして泣いていた。吼えるように泣いていた。

久坂英志は決断していた。変異種を殺すということを。人を守る為に、何かを犠牲にするということを。

それが久坂英志にとっての正義でない事を、天月は知っている。幼い正義が歪み、罅割れ、壊れていくのを、感じていた。

俺には、できないんだ。

遠藤の言葉が、天月の胸に響く。

敵 8 (後書き)

との。さん協力感謝です。
ありがとうございます。

欠落と憎悪 1 (前書き)

こっから六章です。

なんか、色々とぐちゃぐちゃになりそうですが、お付き合いいただけたら幸いです。

欠落と憎悪 1

遠藤の葬式には、僕らの学校の生徒が何人も出席していた。僕らのクラス全員と、そして遠藤と交友があった人たち。高三や中学生、大学生までいた。遠藤のことを知っていた近所の大人たちもいる。

棺には遠藤の死体があった。頭を強打して脳内出血で死んでいる事になっていた遠藤の死体は、とても安らかな顔をしていた。葬式やが、そういう風にしたのだと、皆が思っている。

けれど、僕は知っている。

遠藤を殺したのは、僕だ。

その死体は、作り物の偽者なんだ。

遠藤の両親が泣いていた。田上君が辛い表情をしていた。僕の隣で、佐藤くんが鼻を吸っていた。山崎先生は、目を真っ赤にしている。近所のおばさんがハンカチを口元に当てている。おじいさんが悲しそうな眼差しで棺を見ている。父さんもそうだった。天月だって、悲しそうだ。

僕だけだった。この中で、悲しみの感情を持っていないのは。

殺したのは僕なんだ。脳内出血なんかで死んだんじゃない。僕があいつを切り裂いて、あいつの頭を撃ったから、死んだんだ。こんな偽者の形だけの葬式なんて、僕は何も感じない。

棺を前に、笹倉さんが泣いていた。遠藤が死んだと知ったその瞬間から、ずっとそうだった。泣いている。悲しみが溢れている。笹

倉さんは遠藤の事が好きだったんだ。だから、悲しい。皆、僕が泣いていないのは、遠藤の死んだという現実を受け止められていないからだと思っている。けど、違うんだ。何も思えないんだ。こんな葬式、世間の目を欺く為だけのものだから。

この葬儀屋にはもう話が通っているらしい。というか、今日のこの葬儀屋にいる職員は全員、政府の工作員なんだそうさ。だから、遠藤の死体に疑問を持たない。

――ああ、こんな事に意味なんて無い。

十分、上等な正義。遠藤はそう言った。

僕は神様じゃない。全部を救うなんて、無理なのかもしれない。いや、多分、確実に、不可能なんだ。だから僕は誰かを犠牲にする覚悟を持たなくちゃいけないくて、だから遠藤はその後押しをした。

遠藤を殺した僕は、もう、引き返せない。

それは一ノ宮博士が仕組んだ事だ。遠藤はそう言っていた。けれど、遠藤が僕の為にたった一つしかない命を使って、やってくれた事でもある。

けど、それは僕の中から、ぽっかりと「何か」を奪っていった。それが何かはわからない。でも、「何か」が無いと感じる。欠落していると感じる。

笹倉さんは女子たちに慰められながら、なんとか棺から離れていた。

もし、遠藤を殺したのが僕なんだと彼女が知ったら、一体どんな反応をするのだろうか。

怒るだろうか。もっと悲しむのだろうか。それとも、僕の事を憎むのだろうか。もしかしたら、僕の事を殺しに来るかもしれない。

「おい、久坂」

田上君だ。右隣に座っていた彼は、僕の顔を見つめながら言う。

「何？」

「お前、大丈夫なのか？」

「何が？」

「何がって、なんか、変に笑ってるからさ」

田上君に言われて、僕は気が付く。

「……本当だ。何でだろう」

どうしてだが、自分でもわからない。けど僕の口元は確実に笑みを作っていた。

「久坂、お前」

「大丈夫だよ。何でもないから。全然、大丈夫だから」

僕はそう言いながら、席を立った。

「おい、どこ行くんだ」

「帰るよ。僕」

もうこの場にいても、どうしようもないと思った。

無意味だ。時間の無駄だ。全く価値が無い行為だ。

「久坂……」

田上君は僕の事を引きとめるような素振りを見せたが、僕はそれを無視して、葬儀場から出た。

「久坂君」

僕が一人で道を歩いていると、背後から声が聞こえてきた。天月の声だった。

「戻った方がいいよ。まだ、葬式終わってないだろう？」

けれど彼女は首を横に振る。

「僕だったら勝手に向こうが勘違いしてくれるからどうにでもなるけどさ、君は違うだろ？だから早く、戻った方がいいって」

けれど天月は首を横に振るだけだ。

「一人でいたいんだ。面倒くさいんだ。誰かと一緒にいるの」

悲しみの感情を顔にしている人というのは、疲れる。嘘の死で泣

いているのを見ると、何故だから苛立ってくる。あの人たちは何も悪くは無いのに、無性に腹が立ってる。そのくせ心の中は何も思わない。苛立ちながら、心は何も感じていない。苛立ちに疲れるだけだった。

天月だって、悲しんでいる。今までの彼女では考えられないくらい、遠藤の死に動揺している。これまで何人もの命を葬ってきたはずの彼女が、遠藤の死を受け容れがたく思っている。

それを見ていて、疲れる。

「貴方を一人にはさせない」

天月はそんな事を口にする。

「約束、だから」

「約束？誰との？」

「遠藤君が、彼が言ったの。貴方を支えてくれて」

欠落と憎悪 2

遠藤は天月にそんな事を言っていたのか。

あいつ、とんでもないお節介焼きだ。だからあいつは、僕にこの道を選ばせてくれたんだ。選ぶだけの理由をくれたんだ。そして、自分が死んだ後のことまで気にしてくれている。

わかる。あいつは、いいやつだ。最高の親友だ。

けど、今はただ、遠藤の気持ちも天月の善意も鬱陶しいだけだった。悪いとは思うけれど。

「ごめん。今は一人でいたいんだ」

僕は踵を返し、天月を振り返らず、歩く。

一ノ宮博士の所に行こうかと思った。聞きたい事は山ほどあった。一ノ宮博士は遠藤が変異種だって事を、多分知っていた。二人は協力していたんだと思う。それを確かめたかった。

それに、一ノ宮博士は遠藤の死を、なんとも思っちゃいない。全く気に留めていない。

家じゃ駄目だ。父さんが帰ってくる。近所の家の人皆、遠藤のことを知っている。僕に気を使って、腫れ物を障るように扱ってきて、そして僕は苛立ってしまう。

一人になりたかった。もしくは、苛立たない場所に行きたかった。それは廃工場だっていいし、あの真っ黒なキャンピングカーでも構わない。

どこだっていい。とにかく、苛立たない場所ならば。

天月の足音は聞こえてこなかった。

僕は歩く。道を曲がって横断歩道を渡る。学校の傍を通る。グラウンドでは、体育着を着た生徒がサッカーをしていた。体育の授業なんだろう。今日は平日だ。僕らだって、本当は葬式なんかやってないで、つまらなくて退屈で、けれど平和な授業を過ごしているはずだった。遠藤だってそうだ。

僕が遠藤を殺したから、それが行われていないだけで。

遠藤のことを知らない人間にとっては、当たり前の毎日が続いているだけだ。朝礼で何か、担任の先生に一言いわれ、ゴシップのネタが増える。それくらいだろう。

川原にたどり着く。

「おい、久坂くん」

黒いキャンピングカーの側に、一ノ宮博士が立っていた。いつもどおり、変わらない格好で。髭と髪は相当伸びている。外見を気にするような人だとは思わないけれど、邪魔だと思わないのだろうか。僕は坂を下りて、一ノ宮博士の下へと行く。

「君が何でここに着たのか、大体のことは察しがついているよ」

そうだろう。この人は多分、僕がどんな性格をしていて、どんな行動をするかどうか、考えた上で遠藤を協力させたんだろうから。

「中に入りなよ。立ち話もなんだし」

キャンピングカーのドアを開け、一ノ宮博士は言った。僕の返事を待たずに中に入ると、ソファに座り、ノートパソコンを開いた。きっと拒否権なんてのは無いんだろう。どっちにしろ、僕は中に入るけれど。

「さあ、さて。何から話そうか。何から知りたい？ 今、僕はとても気分がいいんだ。なんだって答えてあげるよ」

僕は向かいのソファに座る。

「最初から、僕が天月と出会って、僕がエニティレイターになって、内藤君が死んで、遠藤が死んで、それって全部、一ノ宮博士は知っていたんですか？」

遠藤は言った。全ては一ノ宮博士が仕組んだ事だと。

最初から全部、この人は知っていたんだ。僕にエニティレイターとしての適正があることを。遠藤が変異種だって事を。内藤君が変異種だって事を。そして、僕が彼らを殺せば、どんな感情を抱き、どんな選択をするのかを。

「ああ、そうだよ。君が仮想空間に始めて転送されたことがあった

だろう？あの時点から既に、計画は始まっていた。君をヒーローに変えるための計画がね」

「僕をヒーローにする？」

「そうさ。君は人類の救世主となるんだ。君にしかできない、君がやらなければならない事なんだ。掛替えの無い友人をその手で殺めた君は、引き返す事などできなくなる。だから、彼にはその犠牲となってもらった。平和の為の、正義の為の犠牲にね」

やっぱりそうだ。思った通りだ。

「君が仮想空間に転送されたのはシステムの誤作動なんかじゃない。僕がそうしたからだ。君をヒーローにするために、僕らの世界を知っておく必要があったからだ。天月の覚醒因子がああタイミングで暴走したのも偶然じゃない。彼女が戦いの前に打ち込んだ薬は、因子の侵食を加速させるものだったからだ。内藤光という少年を仮想空間に転送できたのは、君の友人の協力があつたからだ」

目の前のこの男は、全てを思うがままに動かしていたんだ。

僕は自分で選んでいるつもりでいた。でもちがう。何もかも、この男の思惑通りに選択を繰り返してただけだったんだ。

「そして、君が彼を殺したのは、僕がそうなるように仕向けたからだ」

僕はソファから立ち上がる。何も考えず、身体が勝手に一ノ宮博士の胸倉を掴んでいた。

「君はもう引き返せない。引き返せるような人間ではないだろう？君の一番の友人が、そう言っていたよ。君は本当にいい友人を持っていたね。僕の思い通りにならければ君の事を消すと言ったら、彼は快く協力してくれた」

「あんたは……」

僕の右手は、握り拳を作っていた。

そのくせ、心は空っぽだった。

この男が憎い。憎くて憎くてたまらない。それなのに、この状況を冷めた視点でとらえている僕がいる。

「僕を殴るかい？それもいいんじゃないか。僕は今、最高に気分がいいんだ。それくらいなら笑って許す事ができる。しかし、君は引き返せない。戻る事はできない。君は知ってしまったんだ。変異種を倒さなければならぬと言う事を。君はやらなければならぬんだ。変異種を殲滅し、人類を救うと言う事を」

胸倉を掴んだまま、拳を握ったまま、僕は一ノ宮博士の声を聞いている。

「それが君の宿命なんだ。君はそのために産まれてきたんだ。大変異から人々を救い、特異種を殲滅し、世界に、人類に平和をもたらす、ヒーローとなるために」

「あんたは、何を言って……」

「僕が何を言っても、君は心の底からは信じないだろう。だったら、君が父親だと思っている人物に訊けばいい。あの人に訊けば、君は全てを知ることになる。自分が何のために産まれてきたか、何のために存在しているか。そして君は手に入れる事になるだろう。進化の力を。限らない、究極の力を」

欠落と憎悪 3

「あんたは、僕に何をさせよとしてるんだ」

僕の宿命？父さんが全てを知っている？何のために存在しているか？進化の力？限らない究極の力？

この男は僕を導こうとしている。けれど、それがどんな結果なのか、僕にはわからない。

「さっきも言っただろう。君に正義の味方になって欲しいのさ。人類を守る、ヒーローにね」

飄々と、さも当然のように、そんな事を言う。

「……何が正義だ。何がヒーローだ。ふざけんな。あんたの言うてる事は、ただの人殺しじゃないか！」

例えその結果、誰かを救う事ができたとしても、その事実だけは変わらない。

誰かを守る為に内藤君を殺し、誰かを救う為に遠藤を殺した。それが正義だなんて、やっぱり僕は思えないんだ。

求める正義がわからなくなって、信じたい正義がわからなくなって、それでもわかる事がある。

今の僕には、正義なんかない。

なあ、遠藤。僕はやっぱりガキなんだよ。お前が言ってくれた言葉、誰でも救えるわけが無いって言葉、僕にはどうしても、正義だとは思えないんだ。全部を救いたいんだ。できない事だって、わかっているけれど。

「どうして君たちはそうも、奇麗事に縛れるんだい？変異種を殺さなければ、どうなるか、わかっているはずなのに。殺さずにはいられないだろうに。そのくせ、奇麗事に苦しめられている。馬鹿らしくて、笑えてくるよ」

そんなことはわかっている。知っている。僕の考えなんて、所詮は奇麗事だ。それを割り切らせる為に遠藤は死を決意したんだし、

僕はそれを消し去る為の覚悟を決めたはずなんだ。

人殺しの選択をした。変異種を殺す覚悟はある。人のために、人を殺すのはもう、迷っちゃいけない。

けれど、割り切れない。割り切れないんだ。

「どっちにしろ、君はもうヒーローになるしかない。君自身でその道を選ぶだろう。あとは全てを知るだけだ。君が本物のヒーローになるために」

「……ヒーローって、なんなんですか」

「人類を救う、英雄の事だよ。変異種という敵から、全ての人類を守る、絶対の救世主^{メシヤ}。それがヒーロー。それが君。全ては陣内博士——いや、君の父親が知っているよ。訊いてみれば、全てがわかる」
目の前のこの男は笑っていた。笑っていたんだ。

——こいつ！

けれど、僕は殴らなかった。一ノ宮博士の胸倉を、僕は手放していた。

「ふうん。意外だったよ。君はてっきり、殴ってくるものかと思っていた」

「あんたなんか殴っても、何も変わらない」

もしこの男を殴って全てが解決するのなら、何度だって殴ってる。でも、殴ったって何も意味が無いんだ。

「帰ります」

一人になりたい。けれど僕は、家に帰って父さんに訊いているだろう。知らなければならぬ。命令されている訳じゃない。けれど、知りたい。

僕の宿命を、父さんの知っていることを、進化の力を、僕は知りたい。

クソ。ちくしょう。結局僕は、こいつの思い通りにされようとしている。

「全てを知れば、君は必ずヒーローとなる道を選ぶ。確実にだ。君はそういう人間のはずだからね」

「それも、遠藤が言っていたんですか」

「ああ。そうだよ」

だったら僕の結果は、もう既に決まっているのかもしれない。

欠落と憎悪 4

家に帰ると、鍵が開いていた。父さんはもう帰ってきているみたいだ。

玄関で靴を脱ぐ。廊下を進み、リビングのドアを開ける。父さんがいた。ソファに座って、僕に背を向けている。

「おかえり。英志」

振り向いた父さんの顔は、とても悲しそうだった。

父さんは全部、知ってたんだ。

僕はそう、直感する。父さんは全部知っていたから、だから多分、僕が始めて仮想空間に飛ばされたあの日、「すまない」と言ってきたんだ。

「僕の宿命って、何？僕の存在意義って、何？進化の力って、何？知りたい。知りたくてしょうがない。」

「全部、教えてよ」

僕は父さんに訊く。父さんはわかるはずだ。全てを知っているから。

例えそれを訊いた結果がああ男の思い通りとなろうとも、僕は知らなければならぬ。そんな、核心に近いものがあった。

「……わかった」

父さんは本当に辛そうに、頷いた。

「お前は、試験管の中で産まれたんだ」

静かに、けれどしっかりと父さんは口を開く。まるで、自分自身に言い聞かせるように。

——試験管の中、ね。

つまり、僕は何かの目的で作られただけのことだ。その目的

が僕の存在意義。あの男は、そう言いたかったんだろう。

なんだろう。変な気分だ。結構な衝撃的な事のはずなのに、僕の心は特に何も感じていない。

「変異種の中でも特別な、特異種の遺伝子を元に創られた存在。それがお前だ。政府が、俺達が、対変異種の決戦用兵器として生み出したのが、お前だ。相手が並みの変異種ならば造作も無く、相手が特異種ならば互角以上に闘う為に」

「特異種って、何？」

「特異種と言うのは、全ての『進化の系譜』を自由に引き出す事のできる変異種のことだ。同時にいくつもの『進化の系譜』を覚醒させ、その身体を無限に変異させる事ができる。三十年ほど前に捕獲した特異種の研究データと遺伝子を元に、お前が産まれた。他にも百体の実験体を生み出したが、結局は特異種の因子に適合できず、死んでいった」

父さんは淡々と語る。僕は事実だけを受け止める。

それだけで十分だと思った。

「お前がエニティレイターの適正があったのは、特異種の因子を引き継いでいるからだ。通常の人間には無い、特別な因子を持っているからだ」

ああ、だから一ノ宮博士は僕をエニティレイターにさせようとしていたのか。

「だったら、どうして僕は研究施設みたいなところにはいないの？」

「俺が、お前を連れて政府の施設を脱走したからだ」

「脱走？」

「お前が産み出されて一年後、事故が起こった。仮想空間の起動テストで、俺は大切な人と親友を失った」

父さんは言葉を続ける。

「五次元的に限りなく隣接した場所に、仮想空間を作り出す。それは、一歩間違えば俺たちの暮らしているこの空間に、さらに別の空間を上書きする事になる。その結果、次元に歪が生じ、空間はかき

消される。そこにあるものは全て消失する。仮想空間が本物の空間となってしまう。親友は俺を庇って死に、そしてあの人は身体的一半以上を失った。その人が死ぬ間際に、俺は言われたんだ。『誰も悲しまない世界を掴んでくれ』と。だから俺は、お前を連れて、施設を脱走した。あの場所では掴めないと思った。自分の探究心と身勝手な正義感で何百、何千の命を犠牲にしてもなんとも思っていなかった自分を変えなければ、そんなものは掴めないと思った」

過去に、父さんが何をしていたか。話を聞かなくても、大体見当は付いた。僕が試験管ベイビーならば、僕以外の死んだと言う九十人だってそうだろう。そして、それ以上の『実験体』がいるはずだ。

「次元の狭間で、あの人は、可能性の世界を見たんだそうだ。誰も悲しまない世界を。だから、いつか、掴んでくれと、あの人は言ったんだ……」

「だから僕を連れて逃げ出した」

「そうだ。おこがましい事は理解している。許されない罪を背負っている事はわかってる。だが、あの人は俺に気づかせてくれたんだ。命の価値など全く考えず、わずかなデータの為に大量の命を奪うことが、間違っているという事を。親友が俺を庇ってくれたんだ。その命を投げ出して。それを知って、間違ったまま生きることが、俺にはできなかったんだ」

欠落と憎悪 5

「俺はお前ともう一人、亡くなった親友の娘を知り合いに預け、各地を動き回った。整形を繰り返し、いくつも名前変えて、ようやく政府の目をごまかす事ができた。お前が母親だと思っていたのは、俺の昔の友人だ。お前はあの、俺の親友の娘と仲がよかったらしい。よく、一緒にヒーロー番組を観ていたそうだ。だが、政府の目を撒いた俺が、お前達を引き取るために友人の家を訪れると、親友の娘はいなくなっていた。さらわれたらしい。犯人は、政府の連中だ。研究の為に、外国を含めた各地で子供を拉致し、人体実験やヴァリアント・システムの起動実験を繰り返していたようだ。確かあの子がいなくなったのは、お前が七歳の頃だったか」

「父さん、ちよつとまって」

僕の頭の中に、ある一つの考えが浮かぶ。

父さんの親友の娘。つまり女の子であり、僕が七歳の頃に政府の機関にさらわれていた。ヴァリアント・システムを扱う為の、訓練を受けている。

「その子の名前は？」

「天月葵だ」

そういうことだったのか。

これでまた、謎が一つ解けた。

「あの子がこの街に来たことを知ったときは、素直に嬉しかったよ。生きていてくれてな。けれど、あの子は知らなくてもいい世界を知ってしまった。本来ならば、あたりまえの女の子でいられるはずだったのに。知らなくてもいい世界で、彼女は闘っていた。あの子をそんな世界から救いたかった。けど、あの子にはあのまま、闘っていて欲しかったよ」

「それ、どういう意味？」

「一ノ宮がお前をエニティレイターとして闘わせる為に、この街に

来たことは知っていた。だから、あの子を犠牲にしても、お前を巻き込みたくないと思った。あの子が闘ったままでいれば、お前が闘わなくてもいいから。なあ、英志。俺はお前の事を本当の息子だと持っているんだよ。おこがましいだろう？ 俺の都合で勝手に産み出したお前を、本当に大切に思っているんだ」
知ってるよ。父さん。父さんが、僕の事を大切に思ってくれてることなんて。

「お前に闘って欲しくなかった。だがお前は、闘ってしまった。あの遠藤という子は、お前の為に決断をしてしまった。お前はもう引き返さないだろう。俺が親友を死なせ、あの人を死なせ、政府の施設から脱走したように、お前はあの子の死を背負って、闘うだろう？」

そうだ。その通りだ。僕はもう決めた。絶対に引き返さない。そんな選択肢、存在しない。

父さんは父さんなりに、追い求めるものがある。僕には僕なりの、求めるものがある。

「……ありがとう。話してくれて」

辛かったと思う。思い出したくも無かった事だったんだろう。それでも、話してくれた。過去の思い出したくもない事を引き起こして、僕に話してくれた。

「あ、ああ……」

父さんはまだ何か口を開こうとしていたが、黙って俯いた。それから暫く、無言が続く。

何かを喋る気にはなれなかった。それは多分、父さんも一緒だ。静けさを破ったのは、携帯電話の着信音だった。僕のポケットから、音が響いている。

僕は無言で、携帯を開く。一ノ宮博士からだった。僕は通話ボタンを押す。

「久坂君！聞いてくれ！」

とてつもなく大きな声が、僕の耳に響く。

一体どうしたんですか、そう言う前に、一ノ宮博士が叫ぶ。

「君の家に変異種が向かっている！移動速度が早すぎて、仮想空間に転送できない！すまないが、迎撃して動きを――」

直後、目の前の窓ガラスの割れ、何かが家の中に突っ込んできた。

欠落と憎悪 6 (前書き)

展開が速すぎるってのも、ありだと思っくんですよ。
前半が遅かった分ね。

欠落と憎悪 6

僕は何かに体当たりをされていた。身体が壁に激突して、背中に衝撃が走る。

「が……っ」

窓ガラスの破片がリビングに散らばっていた。チラシや学校のプリントや、イス、机などの家具がそれが入ってきたときの風圧で、吹き飛ばされていた。

僕の目の前には、大きな翼を背中に生やした生き物がいた。人のような身体に、巨大な翼。両腕は太く、巨大な爪を持っていた。

——変異種！

多分、鳥の変異種だ。そいつが僕の身体を壁に押し込んでいる。骨の軋む音が聞こえた。

「大丈夫か、英志！」

父さんが叫んだ。一瞬、変異種の意識がそちらに向く。僕を圧迫する力が緩む。

僕はなんとか腕輪を操作して、解除コードを打ち込んだ。

《コード認証。ヴァリアント・システム起動》

エニティレイターとなった僕は、鳥の変異種を蹴り上げた。巨大な翼を持ったそれが、天井に激突する。

僕はナイフを握り、跳躍する。変異種に向かって、ナイフを振りかざす。

翼が動いたのが見えた。変異種の身体にナイフを衝きたてた瞬間、真横から叩かれる。僕の身体は一秒もしない内に壁に当たり、そして床に落下した。

「クソッ！」

僕は起き上がり、拳銃を手にした。銃口を変異種へ向ける。

だがすぐに引き金を引けなかった。

——あれだって、人だ。

引き金を引く指が重く感じた。けれど。

——それでも、覚悟を決めたんだ！

拳銃から弾が吐き出される。数発の弾丸が、変異種へと直進する。変異種はそれを受けながら、僕へ突っ込んできた。弾丸は変異種の肉を抉り、貫通する。血を噴出しながらも、変異種は僕に向かってくる。

変異種の身体が僕に直撃した。また、壁と変異種にはさまれる。かすかなうめき声が、僕の口から漏れる。

「英志！」

父さんの声が聞こえる。

「ここから離れてて、父さん！」

僕は変異種の身体を押し込みながら、叫ぶ。その時だった。

「お前も、俺と同じ気持ちを味わえよ」

変異種が、そういった。

——は？こいつ、何を言って……

変異種のいった言葉が一体何のことなのか理解する前に、変異種の身体が僕からどいた。

そして。

変異種は父さんへ、向かっていった。

まさか、変異種は、父さんを……！

「やめろ……」

銃を撃った。弾丸が変異種の背中に命中する。だが、そいつはとまらない。真っ直ぐに父さん目掛けて。

——なんなんだよそれ、ふざけんな！

僕はバーニアを吹かした。変異種へ手を伸ばす。父さんの腹を切り裂こうとする変異種に。

「やめろ……！」

叫んだと同時に、血飛沫が舞った。僕の手が変異種を掴む。僕の身体に血が降りかかる。

変異種の手が、父さんの身体を裂いていた。腹には深すぎる傷。血を噴出しながら、父さんは倒れた。鈍い音が聞こえてくる。

僕の手はだらり、と力を失う。足は僕を支えなかった。膝をついた床には、真っ赤な血が広がっている。

なんなんだよ、これ。

変異種が僕を蹴り飛ばした。僕の身体はイスや机にぶち当たる。

天井が見えた。そこから血の滴が僕の顔に落ちてくる。

「嘘だろ……？」

僕は起き上がった。目の前には、鳥の変異種がいた。その向こうで、父さんが倒れていた。血を流して、僅かに身体を呼吸させながら。

——選択しろ。覚悟を決めろ。今、お前が本当に守りたいものは何だ？ 本当に守るべきものは何だ？

遠藤の言葉が頭の中で反芻される。

決めたはずだったのに。守りたいものの為に、変異種を殺すって決めたはずだったのに。

僕は迷ってしまった。引き金を引く事を一瞬、躊躇った。もしも迷わなければ、変異種の手は、父さんを傷つけなかったかもしれないのに。

「何、驚いてんだ」

鳥の変異種が口を開く。

「お前だって、同じことをやってるだろ？」

僕は腹を殴られた。膝が折れ曲がる。抵抗する気力が起きなかった。

父さんの身体からは内臓が見えていた。グロテスクなそれが、傷口からこぼれ出ていた。父さんの目は僕を見ている。エニティレイターとなった僕を、悲しそうな目で見ている。

変異種がその大きな手で、僕の腕を掴んだ。僕は吊り上げられる。

「お前はここで――」

そう言いかけた変異種は、何かに向けて舌打ちをした。

「――わかったよ」

変異種は僕の身体を地面に叩き付けた。そして、ガラスの割れた窓へと向かい、そして飛び去っていく。

僕と父さんが、部屋の中に残された。

「……英志、いるのか……」

今にも消えてしまいそうな声が、僕の耳に届いた。僕はヴァリアント・システムを解除し、父さんの元へと、歩く。

「いるよ。ここにいます」

父さんから流れでる血は、止まりそうに無い。傷口は深すぎて、内臓も傷ついている。たいして医学の知識の無い僕だって、父さんが助かりそうに無いつて事はわかる。

「お前に、渡すものがある」

父さんはそういうと、ポケットから腕輪を取り出した。それはヴァリアント・システムとよく似ていて、けれど決定的に何かが違っていた。漠然とした、具体的には説明できないけれど、気配のようなものを、その腕輪からは感じる。

欠落と憎悪 6 (後書き)

現在、改訂版を製作中です。

主な変更点は、三人称視点とまらない描写の削除ですが。

あと、複線を色々と張ってみたりします。

四章終盤までできたら、UPするつもりです。

欠落と憎悪 7

「これは、エヴォルヴ・システム……特異種のデータを元に創り上げえた、お前にしか扱えないものだ……」

父さんの口からは血が流れ出ていた。それでも、最後の力を振り絞って、僕に語りかけている。

僕は腕輪を、エヴォルヴ・システムと呼ばれるそれを受け取った。

「この力の使い道は、お前が選べ」

「僕が、選ぶ」

「そうだ。他人の言う何かの為に、お前の思う何かの為に、この力を使え。それが例えどんな事でも、それが、お前にとっての正義となる。俺は、そう信じている」

「僕にとつての正義……？」

「結局、全ては自分の意志で決めるしかない……勝手なことを言っているのはわかってる。だが、お前にはそうして欲しい」

父さんの身体から力がなくなっていく。僕はそれを見ていることしかできない。

どうして。僕は守る為に、決めたんじゃないのか？ そのために遠藤を殺したんじゃないのか？ それなのに、どうして父さんが死のうとしているんだ？

おかしい。間違ってる。こんなの、絶対に狂ってる。

「……すまない。お前に、辛い事ばかり押し付けて……できればお前には、普通の生き方を……して……欲しかっ……」

その目から、光が消えた。力を失った腕が血の水溜りに落ちて、音を立てた。

父さんが、死んだ。

何も聞こえない。静かだった。

人が死ぬと言うのは、こんなにも静かなものなんだ。そこにあったはずの命が、消える。けれど、世界はそれに対して嘆きも悲しみ

もしない。ただ、命が消えた、その事実を突きつけるだけ。

僕は結局、守れなかった。決めたはずなのに。覚悟をしたはずなのに。それでも僕は、大切なものを守れなかった。

何も、守れなかったんだ。守りたかったのに。だから、遠藤を殺したのに。大きすぎる犠牲を払って、それでも迷って、だから、僕は、僕は……。

そしてこみ上げてくるのは、黒い感情。父さんを殺した変異種に
対する、真つ黒な憎悪。僕の欠落した「何か」があつた部分に、そ
れが流れ込んでくる。

こんな感情に流されちゃいけない。遠藤と父さんが僕を信じてくれたんだ。僕は正しく生きることができて。って。

殺したんだ。あいつは。だったらどうする？ 答えは一つしかない。

この感情を止める事ができない。絶え間ない怒りと憎しみを、押さえつける事ができない。

「殺してやる！」

僕は叫ぶ。その手には『力』があった。僕が正しく生きると信じてくれた、父さんから託された『力』が。それなのに僕は、間違おうとしている。そして僕は、それを望んでいる。

「殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる、殺してやる——！」

駄目だ。僕はこの衝動を抑えられない。

正義

あの変異種が誰なのか、目を見れば一瞬でわかる。確信があった。父さんを殺したあいつを、僕は絶対に見つけ出せる。後は殺すだけだ。ぶっ殺して、ぶっ殺して、ぶっ殺して、父さんと同じ目にあわせてやる。

同じ気分を味わえだって？ だったらあいつも味わうべきだ。父さんと同じ、死の瞬間を。

ああ、殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる――。

ヴァリアント・システムは一ノ宮博士に返した。あれはもう、必要ない。この右腕につけた新しい力があれば、僕は闘える。

一ノ宮博士は父さんの死を聞くと「そうか」とだけ呟いていた。どうやら、一ノ宮博士の尊敬していた人と言うのは父さんだったらしい。

あいつは、どこだ。

街中を探し回った。だがどこにもいない。一ノ宮博士が変異種の反応を今探っているらしいが、全く見つからない。

大通りを歩く僕は、過ぎ去る店の中に視線を送る。コンビニ、喫茶店、ファミレス。けれど、いない。あいつはいない。どこだ。どこにいます。この街にいるのはわかる。何か、感じるんだ。変異種という存在を、僕の全身が感じ取っている。

僕は道を曲がり、路地へと入った。一軒家の立ち並ぶ住宅街を探します。がだ見つからない。確かに存在を感じるのに、漠然としすぎていてそれをアテに探せない。

「クソッ！」

ポリバケツを蹴っ飛ばした。

路地を曲がる。その先に、僕の視界に、制服を着た女子が映る。天月だった。

「やあ、こんな所でどうしたの、天月さん」

口ではそう言いながら、心の中では全く別の、どす黒い濁ったヘドロみたいな思いが渦巻いていた。

「久坂君、あなたは……」

「ごめん、僕、急いでるから」

天月は父さんが死んだことを知っている。そんな顔をしていた。

「待って」

横を通り過ぎようとした僕の左手を、天月が掴んだ。

「離してよ。僕にはやらなきゃいけないことあがるんだ」

「嫌」

「離せて」

「あなたは優しい人だから。そんな気持ちで闘ったら、駄目」

天月はそんな事を言うんだ。優しい？ そんな気持ちで闘っちゃいけない？ 僕をそんな風に見てくれてたなんて意外でしようがないけど、でもさ、君の言う「優しい人」の父さんは死んだんだ。

「変異種は全部殺さなきゃいけないんだ。そうしなきゃ何も守れないんだ。迷ったらそれだけで全部なくなるんだ。だったらさ、どんな気持ちで闘おうが、一緒だろう？」

そうだ。何も変わらない。僕が悩みながら闘ったって、殺したくないって思いながら闘ったって、一緒だ。同じだ。結果は全部、変異種を殺す。違いはその過程で誰かが死ぬか死なないか。だったら、誰かが死なないほうがマシだ。迷わずに殺した方がマシだ。

「あなたの正義は、それでいいの？」

苦しそうな顔だ。僕の事を心配してくれているのか。わかるさ。

君は、君の方が優しい人だって。だからこんな事を言うのは卑怯だ。君はきっと、答えを出せない。それでも僕は聞きたい。

「正義ってなんだよ」

ずっと、ずっとわからないんだ。それがどうしてもわからない。

「僕は人殺しを悪だと思ってた。正義じゃないと思ってた。でもさ、それじゃ人は守れないんだ。遠藤がたった一つの命を使ってそう教えてくれた。僕は身をもってそれを知った。大切なものを守れなかったんだ」

引き金を引くのを躊躇った。一瞬、それが遅れた。かすかな差だったかもしれない。それでも僕は、あの状況で迷ってしまったんだ。そして、父さんは死んだ。

「人を守る事が正義がというのなら、人殺しが悪だというのなら、人を守る為の人殺しはどっちなんだ？ 教えてくれよ。天月。君は前に、間違った正義って言っていた。だったら間違っていない正義ってなんだ？ 君の言った、幼い純粋で歪みのない正義ってのは、大切なものを守れるのか？ なあ、教えてくれよ」

天月は何も言えない。言わないんじゃない、言えない。優しいから。僕よりも、ずっと。

誰かを守る為には、誰かを犠牲にしなくちゃならない。必ずしもそうじゃない。けど、その場面は必ずある。

そしてそれは、「幼い純粋で歪みのない正義」がどうしても受け容れられなかったことだ。

「それにさ、僕はあいつを殺したくて殺したくてしょうがないんだ。抑えられないんだ。無理なんだ。だから行く。だから闘う。だからさ……」

こんな事を言うのは卑怯だ。ずるい。天月が答えを出せないって知っているんだから。天月が何もいえないって知ってるんだから。それでも僕はあいつを殺したい。その邪魔になるなら、この優しさも消えて欲しい。

「離せよ。天月」

天月の手を振り解く。簡単だった。天月の手に力が入っていなかった。

天月は何も言えない。わかってる。天月は悲しそうに僕を見てい

る。知っている。天月は何かを言おうとして、何も言えない。でも僕はあいつを殺す。

「……歪みのない正義は」

天月の弦きが聞こえてくる。どうしようもなく、消え入りそうな声が。

「歪みのない正義は、正しい道の事。だけれど……」

その正義が何をもたらすのか、天月は知っている。僕も知っている。天月は優しいから、言えない。僕は天月の言うような優しさもっていない。心の中に渦巻いているのは真っ黒な憎悪だけ。だから、言う。

「そんなのじゃ、誰も守れない」

父さんのように、死んでいくんだ。

正義（後書き）

修正版ができました。でもまだ、誤字脱字あるかも……

ストックたまったら修正版の方に持ってきます。基本的にはこっちで更新。

なんか、ストックためてやったほうが修正上手くできそうな気がして……

一応、URLです

`http://ncode.syosetu.com/n1181v/`

最後の一人 1

唐突に、全身に嫌な感覚が走った。なんだこれ。気持ちが悪い。怖気が走る。身体の中がぐちゃぐちゃに引っ掻き回されるような――

「久坂、それに天月……？ どうしたんだよ、こんな所で……」
路地から現れたのは田上君だった。

「でっかい声が聞こえてきて何事かって思ったら、二人がいて……一体、何があったんだ？」

田上君は僕らの事を心配そうに尋ねてくる。その僕が目を見て、瞬間。

身体が動いた。反射的に動いた。僕はそいつの首を掴み、ブロック塀に叩き付けた。うめき声が聞こえてくる。それをかき消すように、両手を使って首を絞める。

「く、久坂……？」

目の前に映るのは、苦しそうな表情。焦りの眼差し。困惑している。何故僕が首を絞めてくるのか。

「だけど、こいつは、こいつが！」

「君だったのか。意外だったよ。でもまあ、どうでもいいや。こうやって見つけられた。僕は君を殺せる。最高の気分だ。君を殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺してやる！」

確信があった。こいつだ。こいつが父さんを殺した変異種だ。

頭の中がぐちゃぐちゃになる。身体の中がかき乱される感覚は続いていた。真っ黒なものが僕の中で渦巻いている。僕にこいつを殺せと。

「駄目、久坂君！」

「うるさい。黙ってろ。こいつは父さんを殺したんだ。それなのに生かしておけるか。こいつは殺す。僕が殺す！！」

僕が叫んだその数秒後、僕の指が田上君の喉元に食い込んだその瞬間、目の前の身体が人間のものから変異種のものへと変わって

く。知っている。さっき見たばかりだ。巨大な羽と大きな爪を持った、鳥の変異種。

「やっぱりそうだ。嬉しいよ。君に会えて！」

顔が勝手に笑みを作る。変異種の喉元にさらに力を加える。そうだ。殺す、殺す、殺す！

変異種が唸る。僕の身体を弾き飛ばした。背中が電信柱に直撃する。後頭部を打った。そして、視界には僕に突撃してくる変異種が映っている。

僕は変異種の爪を避け、背後に回った。変異種の爪はブロック塀に突き刺さり、動きが止まる。

——動きは止めた。これでいいんだろ？

そして、僕らは仮想空間に飛ばされる。真っ白な膜が僕達を覆う。

「いつから気づいていた」

鳥の変異種が口を開く。僕らは対峙していた。場所は川原。いるの僕ら二人だけ。ここは余計なものがない場所だ。思いつきりこいつを殺せる。

「さっき見たときに直感したんだ。君が変異種だって。それに、君がそうだって考えると、色んなことの辻褄があう」

何故田上君が同好会に戻ってきたのか。何故天月は田上君に「観察されている」と感じたのか。何故田上君の行動に違和感を感じたのか。

「君は僕と天月を観察するために同好会に戻ったんだろう？ 変異種の敵である天月。それに関わっている僕。僕らが一体何をするのか、手っ取り早く知る為に同好会に戻ったんだ」

遠藤はあの時言った。「なるほど、大体わかったぜ。お前がどん

なヤツなのか」と。遠藤は最初から気づいていたんだ。だからあんな事を言った。

「正解だ。全くその通りだ。そうでなかったら、あんな子供だましの奇麗事なんかにつき合う気にはなれない」

田上君は、いや、田上は暗い声で喋る。こいつも同じだ。僕と一緒にで相手を殺す事を決めている。

「家庭の都合で教師を止めた菊池里香。交通事故で死んだ鈴木達也。転校していった内藤光。そして、脳内出血で死んだ遠藤光一。全部、お前らの仕業だろう？ 笑わせるよな。正義の味方だのヒーローだの言っている割には、やっている事はただの理不尽な人殺しなんだから」

「知ってるさ」

知ってる。わかってる。でも僕はやる。

「ムカつくんだよ、久坂。悩んでますって態度して。でも僕は正しい事をしてますって面をして。けど、お前のやってるのはただの人殺しだ。俺達は何をした？ 何もしてない。それなのにお前らは俺たちを殺す。許せないよ。どうしたって許せる事じゃない」

「僕だってそう思ってる」

「なんだと？」

「父さんを殺した君を許せない。お前を殺したくてしょうがない」
ぐちゃぐちゃだ。何もかも入り混じって、一つになって、その目的一つの為に集中していく。

殺す。

ただその一つのために、僕の全てが変わっていく。

僕は右腕につけた腕輪を起動させた。

父さんがくれた力。僕を信じて託した力。でも駄目だ。僕はもうしようもない。こいつを殺さないでいることなんてできない。

《遺伝子称号クリア。エヴォルヴ・システム起動》

僕の身体が作り変えられる。姿を変える。

最後の一人 2

エニティレイターのような身体。背中と足の裏のバーニア。腰の拳銃。腕に内蔵されているナイフ。全身の色は黒ではなく、真っ白。そして、決定的に何かが違う。

これは、強い。

地面を蹴る。一瞬で間合いが詰まった。田上は反応できてない。無防備な腹が、僕の視界に映っている。

それを全力で殴った。肉を抉り、衝撃を与える。変異種のその身体が向こう岸まで吹き飛んだ。その距離、五百メートル。

「ハハハ！」

笑いがこみ上げてくる。最高だ。この力は。

この力があれば絶対に負けない。エニティレイターの何倍もこの身体は強い。勝てる。殺せる。あいつをぶっ殺す事ができる。

——この力の使い道は、お前が選べ。

頭の中に響くその声を無視する。聞こえないフリをする。

僕は跳躍し、バーニアを使って一気に向こう岸まで飛んでいく。その速度を維持したまま、起き上がろうとする田上の顔面に、蹴りを叩き込む。土手に他の上の身体が激突する。顔、そして腹部から血が流れ出てくるのが見えた。

僕は両腰の拳銃を手取る。二丁の拳銃を連射して、田上の身体に弾丸を撃ち込む。田上は身体をそらせ、そして絶叫。その身体を無数の弾丸が貫通していく。

田上に接近。間合いに入ると同時に田上の顔面を掴む。土手に半ばめり込んでいるその身体を引き剥がし、顔面を地面に押し付けた。ナイフを取り出す。超振動を起動させる。それを田上の背中に突き刺す。

「ぐ……ああっ!!」

田上が吼えた。同時に、巨大な羽が僕の視界を被った。前が見え

なくなる。身体が後退する。しとめ損ねた。

空中を見上げると、ナイフを腹部から引き抜く鳥の変異種がいた。その巨大な翼を羽ばたかせ、宙に浮いている。全身から血が滴り落ちている。傷を再生しようと、ミミズのような肉が蠢いている。

「さすがだよ、久坂。自称ヒーローってだけのことはある」

「何だよそれ。余裕のつもり？　けど、もうすぐ君は死ぬ。僕が殺す」

「久坂、お前そんなやつだったか？　俺の知っているお前は、ただのガキで偽善者みたいなヤツだったのに」

「そんなの、どうでもいいんだよ」

脚力とバーニアを使い、空中に浮かぶ田上の目の前に立つ。

「僕はお前が殺せれば、それでいい」

銃口を田上の腹部にねじ込んだ。引き金を引く。弾丸が再生しかけの肉を貫く。僅かに黒味を帯びた血が、真っ白な僕の身体に降りかかった。

「お前は父さんを殺した。だから殺す！」

「……自分勝手過ぎて反吐が出る」

田上が僕の腕を掴んでいた。手首が捻られ、銃口が上を向く。

「先に仕掛けてきたのはお前らだ。俺の仲間を殺したのはお前らなんだ。だったら、俺にだって復讐する権利があったっていいだろう？」

「そんな理由で父さんを殺したのか！」

「そんな理由だと？」

田上のもう一方の手が、僕の身体を押さえつける。

「やっぱりお前、ムカつくな」

僕の身体を押さえつけながら、田上が急降下。僕の身体が地面に激突する。土が舞い上がる。僕らの身体にそれが降りかかる。

「結局お前は、お前の事しか考えてない。なあ、久坂。お前は誰かのことを考えた事があるのか？　人の命を奪うということが、本質的にどういふことなのか考えた事があるのか？　お前は、お前が人

を殺すと言う事しか考えた事がないんじゃないのか？」

「何を……っ！」

「お前が殺したやつらにはな、親がいて、兄弟がいて、友達がいて、それをお前は殺したんだ。お前は、お前が人殺しをするということしか考えていなかっただろう？ 今日だってそうだった。自分が人殺しをしたという事実だけ受け止めて、そこから何もしようとは思わなかった。遠藤の両親がどれだけ悲しんでいるのかお前は見ただろう？ 笹倉が泣いているのをお前は見ただろう？ それなのにお前は、あの場から消えた。自分の事しか考えていない。他人の悲しみを受け容れようなんて、していない」

最後の一人 3

うるさい。お前に何がわかる。どうしてそんな事が言える。人殺しの本質的な意味？ そんなの知るかよ。人殺しがいけない事だつてのはわかってる。でも僕らはやらなくちゃいけないかったんだ。

泣いている人たちがいた。悲しんでいるのは知っている。でも、そんなのどうだっていいと思えてしまう。自己中心的な、勝手な発想。

空っぽな心は何も感じない。苛立つただけだ。あの悲しみを見て、僕は悲しみを感じなかった。苛立っているだけだった。僕は間違っている。僕は狂っている。でも、それはお前だって同じだ。

「だったらお前はどうかんだよ。変異種はいつか人を殺す。自分の思考なんて消えうせて、暴れまわって全部奪ってく。そうなる前に殺さなかったら、大勢の人が死ぬ！」

「だから俺達に死ねって言うのか」

田上が吐き捨てるように言った。

「勝手なんだよ。お前らは。俺たちは生きているのに」

「父さんだって生きていたさ！ それをお前が殺したんだ！」

バーニアを吹かし、無理矢理に上昇。そのまま加速し、田上を廃工場の外壁にぶつける。コンクリートの壁を打ち破り、設備を破壊する。廃工場を突き抜け、そのまま大きく旋回。再び工場を突き抜ける。建物を貫通し、高層マンションに向かって、全力で田上を叩き付けた。

窓ガラスが割れて、田上の背中に突き刺さる。そのほかの破片は二十メートル下の地面へ落ちていく。

「僕は守りたい。救いたい人がいる。その人たちをお前らは殺す。だから、殺す」

遠藤はそのため覚悟を僕にくれた。父さんはそのため力を僕にくれた。だから戻れない。引き返せない。僕がやらなきゃならな

い。

「それに、お前だけは許さない。父さんを殺したお前だけは、この手で殺してやる！」

許すなんて、そんなことできるわけがない。復讐？ 権利？ 知ったことかよ。

「……調子に乗るなよ」

田上の手が僕の喉元を掴んだ。

「俺の命は俺のものだ。他の誰のものでもない。俺の命の使い道は俺が決める。それに、この街のやつらはまだ、誰も殺しちゃいなかった。自分じゃなくなっていく自分を必死で抑えて、当たり前生活が欲しかっただけなんだ。そんな俺たちにお前らは死ねと言う。だったら、やられる前にやるしかないじゃないか」

田上が僕を蹴り飛ばす。僕は数メートル押しやられた。バーニアを吹かし、その高度を維持する。

「許せないだ？ 俺のほうが許せないさ。理不尽を振りかざし、それを当然の事のように突きつけてくるお前らが。そんなお前らが憎くて憎くてたまらない。だから俺が……」

田上が何かを取り出した。

僕はそれを知っている。それはさっきまで、僕が持っていたものだったから。

「俺が、お前らをぶっ殺してやる」

田上が右腕だけを人間のそれに戻す。取り出したそれを右腕にはめて、起動させる。パスワードを打ち込み、認証させる。

《解除コード認証。ヴァリアント・システム起動》

田上の身体が変化していく。変異種のものから、真っ黒な姿をした、エニティレイターに。黒い装甲、白のライン。背中のブースター、腰の二丁拳銃。僕の今の姿と瓜二つだ。

僕はさっきそれを一ノ宮博士に渡したんだ。それなのに、どうして変異種がそれを。

「また、アンタなのか……」

またもあいつが何かを企んでいる。直感がそう告げていた。それ以外の理由が見つからなかった。だって、そうじゃないか。仮想空間はこうして造られている。一ノ宮は生きているんだ。ヴァリアント・システムを殺されて奪われたわけじゃない。

「またアンタなのか、一ノ宮ア!!」

車内に一人の男がいる。白衣を着た、髪や髭が無造作に伸ばされて、やせこけた男だ。その男がノートパソコンの画面を見ながら、暗い声で呟いた。

「さて。エヴォルヴ・システム、そしてエヴォリユーターのその力。じっくり見させてもらおうよ。エニティレイターの力を得た変異種。その程度の相手に勝てなければ、切り札にはなりえない。大変異を切り抜ける事は敵わず、特異種に一矢報いる事さえできない。さあ、僕に見せてくれ。陣内博士の最高傑作。最強の進化の力。僕を拍子抜けさせないでくれよ？」

画面を見つめるその男の口元は、笑っていた。

進化 1

銃弾が頭部を掠めた。皮一枚の所でかわしたそれは、あるいは僕の頭を吹き飛ばしていたかもしれない。

エニティレイターがそこにいる。僕の視線の先で、そいつは銃口を僕に突きつけていた。

——クソ、こいつ、ぶっ殺すぶっ殺すぶっ殺してやる！

目の前からそいつが消えた。エニティレイターとなった田上が、僕の視界から消失した。

直後、背中に無数の鉄の塊が衝突して、装甲を抉って、胸から飛び出した。血が流れ出る。

——後ろか！

僕は拳銃を握る。エニティレイターに向け、それを撃つ。

黒の装甲を弾丸が突き抜けた。衝撃でその身体が後ろへと僅かに下がる。隙ができる。僕は前方にバーニアを吹かして、背中をそいつにぶつける。

ゼロ距離から再び発砲。振動がじかに背中に伝わってくる。僕の胸から血が流れ出る。田上の身体からは、それ以上の血が出てくる。

「くは……ッハハ！」

田上は笑っていた。

「こんなものかよ、久坂。全然だよ。こんなもんだったのかよ、皆を苦しめていたヒーローってのはさあ！！」

僕の頭を、田上が握っていた。その手はエニティレイターのもの

じゃない。変異種の腕。いや、それでもない。変異種と、エニティレイターのそれが、混ざっている。

首が引きちぎられるような感覚に襲われる。僕は引き剥がされ、放り投げられた。意識を失いかけるが、なんとか保って姿勢制御。

――あいつ！

拳銃を握る手に憎しみが籠る。自分を抑えられない。だめだ、あいつを殺さなくちゃ。全部ぐちゃぐちゃにしくちゃ。そうしなきゃ僕は僕は僕は……。

振り向きざまに、拳銃を構える。

その瞬間、黒いナイフが僕の右腕を切断した。

「うあ……」

間拔けな声が口から漏れた。右肩から先の感覚がなくなる。そして、痛みが押し寄せてきた。

「ああああああああああ！！」

「喚くなよ。うざったい」

エニティレイターが僕の腹に蹴りを喰らわす。二十メートルの高さから、斜めに真っ直ぐに地面に激突する。アスファルトの硬いそれが、僕の背中を強打した。僕の右肩から血が流れでいていた。人間と同じ、真っ赤な血が。

それは止まらない。高級住宅街の広い道路に、僕の血が広がっていく。

「どうだよ、自分が死にそうになる気分は」

その言葉の終わりと同時に、僕の左膝から先がなくなった。分断された。

僕は声にならない声を上げる。押し寄せてくる痛み以上の痛みに耐えられなかった。身体をもだえさせ、僅かでも和らげようとする。それでも全く意味はない。

僕の首が押さえつけられた。もはや意志とは関係なく暴れまわる僕の身体の上に、黒いそいつが馬乗りになる。それでも暴れる身体を、無理矢理に押さえつける。

「痛いだろ。苦しいだろ。怖いだろ。逃げ出したいだろ。これが、お前たちのしてきた事だよ」

血が流れていくのを感じると同時に、力が少しずつ抜けていく。右腕を動かそうとしても左足を動かそうとしても、ない。

「超振動ナイフ、って言ったよな。なんでも切れるナイフ。俺たちの身体を切り刻む為だけに造られたナイフ。自分にそれが向けられる気分はどうだ？ ヒーロー」

何を言っているのかわからない。痛みが全部飲み込んでいく。

切られた断面が痛い。その周りが痛い。全身が痛い。身体を回る血が痛い。無いはずの場所が痛い。痛い、痛い、痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

「苦痛に駆られて恐怖に駆られて絶望に駆られて、皆死んでいった」
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

「それなのに、お前らが何もないなんて卑怯じゃないか」

痛い痛い痛い痛い

「あの男が何を考えているのか、俺は知らない」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

「けど貰った力は俺の自由に使わせてもらう」

痛い痛い痛い痛い痛い

「だから俺は精一杯の痛みと苦しみと絶望をお前にやるよ」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

「お前の全部を、これから俺が消してやる」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

「お前は苦痛に悶えている。根こそぎの絶望をしている。死に怯えている。何もかも失ったその果てで、全部を無くして死ね」

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い――。

血が止まらない。痛みが止まらない。何もかもが混ざり合って、僕の全ての感覚を歪ませていく。世界が真っ直ぐなのかどうか、僕にはもうわからなくなっていた。

――何してんだ。

僕の身体は動かない。動いているのかもしれないけど、それがどう動いているのかはわからない。

——田上を殺すんだろ？

歪んで霞んでぼやけたエニテイレーターがゆらゆらと動いている。そうだよ。僕は大切なものを奪ったこいつが憎く殺したくて、だから……

ああ、だから、動け、動け、動け動け動け動け！

僕は跳ね起きる。のりかかる重さを無理矢理に、乗っている田上ごと力ずくで、片足で起き上がった。

田上が僕から離れる。距離をとる。僕を見て、そして言う。

「さすがヒーロー」

耳障りな声。今すぐ消し去ってやりたい、真っ黒でどす黒い感情。それが僕の身体を動かしている。

こいつを消してやる。全て消し去ってやる。

「ああああああああああああああああああああ！！！」

そうだ、だから、僕は、そのために、僕は！

僕の身体が発光していく。そしてその光が、なくなった腕、そして足へと収束する。

「は、マジかよ」

光は僕の新たな身体となった。なくなった感覚が元に戻る。痛みも何もかも吹っ飛ぶ。力が際限なく溢れてくる。

進化 2

一瞬で田上との差を詰めた。僅かに光り輝く右拳を、田上の腹に叩き込む。

川原に向かって田上の体が吹っ飛んだ。それにバーニアを吹かして追いつく。真上から蹴り下ろした。土煙を上げて、エニティレイターが土手に激突する。土煙が舞って、僕はその中に突っ込む。

田上の蹴りが飛んできた。僕は腕を交差させ、それをガードする。痛いという感覚はなかった。ただ、力が溢れてきている。

田上の足を掴んだ。そして、握る。力を籠める。すると僕の手は発光し、光を帯びて、田上のその足を粒子へと変えていった。

「く……っ」

田上がナイフで自らの右足を切断する。そうしなければ、エニティレイターの身体は全て、消失していただろう。

疲れはなかった。エニティレイターの時は大量に体力を消費したあの技が、この身体ではあたりまえのようにできる。

負ける気がしない。

「驚いたよ久坂。まさか、こんなことまで出来るなんてな」

田上が持つナイフの柄には、血がこびりついていた。刃にはない。振動しているから、つかないんだ。

「けどな、俺だってこのまま負けてやる気はないんだよ……っ！」

エニティレイターに羽が生える。黒く、大きな二つの羽。それが背中から突然に現れた。

そして、エニティレイターの姿が変化していく。鋭さを増し、獣のように。巨大な爪だけではなくそのイメージはより変異種に近くなる。装甲は装甲と言うよりも皮膚に近くなり、真っ黒な皮からは毛が生えていた。

エニティレイターと鳥の変異種が、混ざり合っている。

そして、なくなったはずの右足は高速で再生をしていた。瞬く間

に足は修復されていく。

「さあ、これでイーブンだ。どうする、ヒーロー」

答えはもう、決まっている。

それが例え間違ってたって。それが例え狂ってたって。それでも僕はやる。父さんを殺したこのつを、僕のこの手で殺したい。

僕は無言で銃を構えた。銃口を田上に向け、そして引き金を引く。その瞬間、田上が高速で飛行を始めた。上空に舞い上がって弾丸を避け、僕に接近。ナイフが首元を掠める。この体の表層に傷がついた。

「待てよ」

通り過ぎていく田上を僕は追いかける。走り出し、そして跳躍。バーニアを吹かして僕も飛ぶ。

田上との差が詰まっていく。僕はナイフを手を取った。そして、それを振るう。

「遅い」

田上が一気に加速した。その巨大な羽に加えてバーニアを使用している。風圧が僕の身体を襲う。

大きく旋回した田上が僕に襲い掛かった。迫りくる巨大な爪を回避し、僕は銃弾を叩き込む。が、それは防がれた。僕が引き金を引こうとしたその瞬間、銃が叩き落とされていた。田上がまたも通り過ぎていく。

僕はもう一方の銃を取り出した。しかし、早すぎる田上を捉える事が出来ない。

追いつこうにも、田上の速さは僕を超えていた。全力で飛んでも、全く追いつかない。

——もつとだ。

僕は心の中で叫ぶ。

——もつと、もつと、もつともつともつと速く！

身体が作り変えられていく。身体が再構築される。体内がぐちゃぐちゃになって、新しい僕になっていく感覚。そして、バーニアが

さらに巨大なものへと変化していく。

僕は一瞬で田上に追いついた。圧倒的なまでの速度の差。当たり前だ。そのために、僕はそういう風に身体を作り変えたんだから。

「何!？」

「遅いんだよ」

僕は田上の顔面を殴りつけた。

進化 3

これこそが、一ノ宮が言っていた、進化の力。

このエヴォルヴ・システムは、僕の意志に応じて身体をより優れたように変化、つまり進化させることができる。

身体を再生させる事も、バーニアを大型化させることも、それ以上のこと。

——こんなものために僕は生まれて、父さんは……ッ！

多分、一ノ宮は田上に父さんを殺すように言っただ。僕にこのエヴォルヴ・システムを使わせる為に。父さんが僕に渡すように。父さんは迷っていたんだ。本当は僕にこの力を渡したくなかったんだ。だから、あいつは、あの男は、父さんを追い込むことで無理矢理に決断させたんだ。

ナイフを取り出した。そしてその刃を鋭く、長く、刀のように進化させる。超振動はそのままに、僕はそれを振るい、田上に斬りかけた。

田上がナイフでそれを防ぐ。変異種と入り混じったエニティレイターは、通常よりも何十倍も力が増幅されていた。刀とナイフが拮抗する。互いに超振動を繰り返し、互いを破壊しようとせめぎ合う。

——お前に、渡すものがある。

あの時の倒産の表情。とても悲しそうだった。とても辛そうだった。全身を血が被って、あのときにはもう本当は死んでいるくらいの傷だったんだ。

田上の爪が僕に切り込んでいた。腹部にそれは突き刺さり、力が一瞬抜ける。その隙にナイフが刀を押し切り、僕の首筋へ迫ってくる。

——この力の使い道は、お前が選べ。

父さんはそう言った。こんな事は間違っているのはわかっている。

父さんはこんな事望んじやないし、僕はこんな事をしちゃいけない

んだ。

バーニアを前方に吹かす。追ってくる刃を紙一重の所でかわし、そして刀を田上の左肩に突き刺した。刀は貫通し、そこから血が流れる。

「やってくれたなあ、ヒーロー！」

肩に刃が突き刺さったまま、田上が僕との距離を詰めてきた。さらに深く刃が突き刺さる。それでもエニティレイターと変異種の混ざった真っ黒なそいつは、僕の首筋を掴んできた。

田上がそこに力を籠める。苦しい。息ができない。首に食い込む爪は、僕の身体に傷をつける。

——他人の言う何かの為じゃなく、お前の思う何かの為に、この力を使え。それが例えどんな事でも、それが、お前にとっての正義となる。俺は、そう信じている。

父さんはそう言っていたのに。けれど僕は今、何もかもがあの男の思惑通りに動いている。自分の正義なんて見つけられなくて、かつて持っていたそれは何の役にも立たなくて、全部あの男の思い通り。

僕の首を握る腕を掴む。そして僕の手が発光する。田上の腕は、瞬く間に粒子となった。僕の首を絞めていたそれは消えていく。光の粒が僕らの目の前で舞う。

田上の動きが止まったその瞬間、僕は刀を振り上げる。左肩を刀が切り裂いて、そしてそのまま、今度は振り下ろす。完全に左腕を切斷した。

——……すまない。お前に、辛い事ばかり押し付けて……できればお前には、普通の生き方を……して……欲しかった……

そうして、父さんは死んだ。守れなかった僕は、迷ってしまった僕は、だから決めたんだ。こいつを殺す事を。

殺すんだ。殺すんだ。僕はこいつをぶっ殺さなくちゃ……

怒りに任せて突っ込んでくる田上をかわし、背後に回る。そして、背中を押さえつけて、そのまま地面にダイブする。田上の身体が地

面に激突した。骨が折れたような音が聞こえてくる。

僕は田上に馬乗りになり、そのまま背中の中を翼を？いだ。片方ずつ引きちぎる。叫び声が仮想空間の中に響く。

「お前は父さんを殺した。父さんを殺したんだ。だから……！」

けれど、この理屈は田上と同じだ。殺されたから殺す。やられたらやり返す。永遠の最悪の堂々巡り。その結果父さんは死んで、僕は田上を殺そうとしている。

「大層ご立派な理由だなッ！」

田上が暴れた。馬乗りになっていた僕は身体の体勢を崩す。田上は右腕を地面に押し付けて全身のバーニアを一気に吹かせ、僕を吹き飛ばした。

「お前らは俺たちに死ねと言う。何の代価もなしに、ただ死ねと言う。人を殺すだって？ 確かにそうだ。俺たちの本能はいつかお前らを殺すだろう。でもな、それはお前らのせいでもあるんじゃないのか？ 俺たちの本能がお前らを殺そうとするのは、お前らが俺たちの敵だからなんじゃないのか？」

田上は立ち上がる。左腕はなくなり、背中からは血が滴り落ち、しかしその傷を修復しようと肉が蠢いている。

「俺は死にたくない。死ぬのが怖い。何もかも無くなるのが怖い。久坂、それでもお前は俺に死ねと言うのか？ 大勢の命のために、死ねって言うのか？ だったら、俺の命は一体なんなんだ？ 何も成し遂げず、偶然の出来事で死を決め付けられて、死ななきゃいけないのか？ なあ久坂。答えろよ。そんな事を決め付けるお前たちは、正しいのか？」

進化 4

「正しくなんてない」

それだけは確かだ。それが憎しみからきていたとしても、誰かを
守る為にやらなくちゃいけないことだとしても、結局、人殺しは人
殺し。それだけは、変わらない。

「けど僕は皆を守りたい。そしてお前らは人を殺す。お前は殺した
！」

そうだ、だから殺す。それ以外の理屈も理由もいるもんか。必要
なんて、どこにもない！

「決着をつけよう」

あふれ出る力を、右腕に収束させる。拳が発光。集めた力は今に
も暴走しそうだ。僕はそれを無理矢理に押さえこんで、一箇所にと
どめる。

「なめるなよ。俺を」

田上の右腕が暗く発光する。黒い力が田上の手に集まっていく。
それは動物じみた腕をさらに変化させ、より凶暴でより野性的に変
化させていく。

「久坂ア！」

田上が吼えた。そして前に出る。

「お前は！」

僕は叫び、地面を蹴る。

「俺が殺す！」

「僕が殺す！」

お互いの拳が、黒い光と白い光が、真っ向から衝突した。
途轍もない衝撃が川原に走る。水は波打ち雑草は吹き飛ばされ土
が舞う。

田上の強大で禍々しい力が僕の力を押さえこもうとしてくる。力
を全力で解放し、僕を消し去ろうとしてくる。

僕も力を全て解放する。田上を消し去る為に、殺す為に、全力を放つ。

さらなる衝撃が仮想空間の中に走った。黒と白の光が造られた世界を包み込む。僕らの視界はその光に染まっていく。

結局、僕も田上も、同じなんだ。
殺してから殺されたのか。殺されてから殺したのか。それだけの違い。

自分のわがままで命を奪う。誰かを生かすため。自分が生きるため。そのために、犠牲を生む。

どっちも正しくなんてない。犠牲にきつと、正しさなんてない。
だから僕のちっぽけな正義はそれを受け容れられなかった。完全な正しさを求めているから。

父さんを殺した田上が憎い。仲間を殺した僕が憎い。
だから僕は田上を殺す。だから田上は僕を殺す。

「ふざ……けんなよ……」

ボロボロになった田上がそこに倒れていた。エニティレイターと変異種の入り混じったその姿を辛うじて保っている。

あたりは何もかもが吹き飛んでいた。川の水はその大部分がなくなって、川原の表層の土や草は消し飛んで、僕らのいる場所は三メートルほど陥没している。川原にかけられていた橋は様々な箇所がかけ、なんとか骨組みが残っている状態だった。廃工場や高級マンションにはヒビが入っていた。窓ガラスは全て割れている。あの光の衝撃がつけたものだ。

僕はそこに立っていた。血を流しながら倒れている田上を見つめ

からなくても、闘えるんだ。そっちの方が迷わなくて済むんだ。だ
ったらいけないじゃないか。そんなもの。

それなのに。そのはずなのに。僕の涙は、止まらない。

「ハハハハハ……アハハッ……ハハ……」

仮想空間の中に、僕の声が空しく木霊する。

こんなのじゃ駄目だ。僕の心が、そう訴える。

勝手だ。どいつもこいつも。その結果どんなことになるかなんて、
誰も考えちゃいない。ただ、正しさの存在だけを問いかけてくる。

遠藤も、天月も、父さんも、田上も、僕自身の心ですら。

だから、僕は。

何にもならないとしても。何も変わらないとしても。

その結果苦しみしかなくても。その結果辛い事になったとしても。

ああ、それでも、そうだとしても。

僕は、正義が欲しい。

涙を流しながら、僕は心の底から強くそう思った。

進化 4（後書き）

感想評価あったらお願いします。

つかこれで大体六章終わりが。なんかすげえ詰め込んだ気になってたけどそうでもないかもしれない。

犠牲 1 (前書き)

久しぶりの更新です。滞ってすみませんでした。これからスローペースになります。

犠牲 1

生きる為には何かを犠牲にしなければならない。

時間を。物を。食べ物。命を。

魚を食べるのなら魚を殺さなければならぬし、牛肉を食べるのなら牛を殺さなければならぬ。

知っていたはずだった。わかっていたはずだった。僕はずっと前から、命を犠牲にしていたんだ。

「それは、エヴォルヴ・システムは、君の中にある進化の因子を完全に引き出す事ができる。君の望む、君の求める、君だけの進化の力。究極の救世主の力」

知っていたはずなのに、僕はなんとも思わなかった。

動物だから？ 人じゃないから？ 気に病むことなんて何もない。

考えないから？ 明確な意思を読み取れないから？ 生きていることには変わりないのに。

人を殺す子を躊躇う僕は、人以外を犠牲にすることに何のためらいも持っていなかった。

「その力は人を守る為にある。そうしなければ、人類は奴らに滅ぼされるだろう。迷う必要などどこにもない。それ以外の方法はないんだから」

人を殺す事は悪だ。悪い事のはずだ。

だけど人を殺さなければ人が死ぬ。何もしなければ、何もかもなくなる。

僕は正義が欲しい。

どんなことにも揺るがない、どんなことにもブレることのない、
明確で確かな正義。

正しい、間違いないなんて一つもない、絶対の正義。

「だから闘うんだ。闘って、闘って、闘って！　そして君は本物の
ヒーローになる！」

僕は正義のヒーローになりたい。僕の求める、正義のヒーローに。

街には大量のそれがいた。

沢山の人が逃げ惑っている。悲しみ、苦しみ、絶望。何人もの人
がそいつらに殺されている。

道路には血が飛び散って、建物には血痕がこびりついて、人の目
には人のような獣のような、そのどちらでもないそいつらが映って
いる。

無数の変異種が人を殺戮していた。

空は灰色に染まっていた。太陽は見えない。暗い空だ。

悲鳴が響き、骨の碎かれる音が聞こえる。液体のぶちまけられる
音が耳を打ち、また命がなくなった。

《遺伝子照合クリア。エヴォルヴ・システム起動》

電子音と共に、僕の身体が変わっていく。

「これが大変異だ。『進化の系譜』を呼び覚ます覚醒因子が、人か
ら人へ、連鎖的に目覚めていく。変異種は新たな変異種を呼び覚ま
し、そしてその変異種がまた別の変異種を覚醒させる。最悪の負の
スパイラル」

一ノ宮博士は僕の隣で語る。丸腰で白衣を着た男のその言葉は、
どこか喜びの感情を秘めていた。

「だが僕らは手に入れた。救世主の力をね。それが君だよ。久坂英
志くん。君こそ、ヒーローなんだ」

身体は真っ白な、まさにヒーローのそれへと変化していた。エヴ
オリューターと呼ばれるこの姿で、僕は変異種に目掛け飛翔する。

腰から拳銃を取り出した。銃口を変異種に向け、銃弾を放つ。

人を今まさに食いちぎろうとしていた変異種の頭が、弾丸によって吹き飛ばされた。目の前の女の人に真っ赤な血と肉がぶちまけられる。

その隣に、人間の腕を食っている変異種がいた。手前には心臓を爪で貫いている変異種が。すぐ左には人の頭を踏み潰してはじけさせている変異種が。

僕は一気に引き金を引く。変異種の身体にそれぞれ数発の弾丸がめり込み、四散させる。

そう、これが僕の選んだ道。

正義が欲しい僕は、正しさの欲しい僕は、人を守る為に人を殺すんだ。

時は一日前に遡る。

田上を殺した僕は泣いていた。自分の家で、自分の部屋で、泣いていた。

憎しみに任せて人を殺した僕の手は、言い訳のしようのない血で染まっている。

遠藤が教えてくれた、たった一つの方法。僕の怒りが導き出した答え。

人を守る為に変異種を殺す。人殺しで人を守る。誰かの大切な人をこの手で殺す。

「久坂君……」

気がつくと、天月が僕の目の前にいた。僕を見つめ、そして抱き寄せる。

「あなたは間違っていない。間違っていないわ……」

天月の言葉は優しく僕に響く。暖かいぬくもりが僕の肌に触れる。
「そうしなければいけなかったの。誰かがやらなくちゃいけないことなの。あなたはそれをしてただけ。間違っただけ、ない」

甘く響く、安らぎの言葉。僕を正当化し、僕を包み込んでくれる言葉。

それに身をゆだね、僕は泣いている。

「みんな、死んだんだ」

天月の胸で、僕は呟く。

「内藤君も、遠藤も、田上も。僕の父さんも、死んだ」
僕は弱い。

自分の決めた事すら、まともに実行できない。迷わないと決めたのに、迷った。殺すって決めたのに、それに徹しきれない。

「正義の味方になりたかったただけなんだ。こんな事、望んでいなかった。望んでなかったんだ……」

笹倉さんは泣いていた。遠藤を失って悲しんでいた。

僕が殺した。僕がそうした。しなきゃならなかった。

変異種は全部、殺さなきゃならないんだ。

人を守りたい。誰を死んで欲しくない。だから殺す。その矛盾を、天月は肯定してくれる。

「知ってる。あなたは優しいから。あなたは、だから全部が守りたくて……」

僕は泣く。

天月のぬくもりと言葉に甘えて、逃げこんで、泣いている。

犠牲 2

だから思う。このままでは駄目なんだって。

いつまでも弱音を吐いて、答えを見つけれなくて、そして誰かを殺し、殺されていく。

この繰り返しを続けているだけなんて、何の意味もない。

闘わなくちゃ。僕にはまだ、力がある。

「ごめん。天月……もう、大丈夫だから」

僕は立ち上がる。弱音を吐いて、少し楽になった。

田上が憎くてしょうがなかった。だから殺した。正義とか悪とか、そんな事は関係なしに。それで結果的に多くの人を救えたんだ。

正義を持っても、きつと誰かは死ぬし、正義がなくなるとも、誰かを助ける事はできる。なら正義って、なんなんだ？ 必要のない都合のいい言葉でしかないのか。

ずっと欲しかったものは、僕の手には手に入らなくて。どうすればいいのかも、全然わからなくて。でも、その答えが出なくても、闘える。

「ありがとう。本当にごめん」

「いいの。巻き込んでしまったのは、私だから」

天月はそんな事を言う。

違う。天月は何も悪くない。結局、僕が選んで、僕がやらなくちゃならなかった事なんだ。

「もう、決めたんだ」

正義が欲しい。その思いは今でも変わらない。僕はヒーローになりたい。誰も泣かない世界が欲しい。けれど、それだけじゃ守れないんだ。

「僕は闘うよ。闘える。大丈夫だから」

けれど、僕の言葉に天月は頷いてくれない。

父さんの死体は庭に埋めておいた。血は一応雑巾が消してふき取っておいた。黙々とした作業。悲しみや苦しみの感情はわきあがってこなかった。後始末をこなしただけ。

僕はリビングでカップラーメンを食べていた。

その正面には天月。まだ帰ろうとしていない。僕を一人にしたくない、と言って。天月は天月なりの考えがあるようだ。僕を心配してくれているってことははっきりわかる。

僕は僕で、いろいろな事を考えていた。

果たして、正義というのはなんなのか。

僕は変異種を殺した。それは多分、世間的にみたら正しい行いだ。でも人殺しは人殺し。悪のはずだ。なのに、正しい。

それは正義なのだろうか。答えは否だ。

ならば悪なのだろうか。それも否だ。

どちらでもない、グレーのエリア。白と黒をはっきり見分ける事ができない。善悪を一概にそうとは言えない。

人を殺した現実、未だ僕の目の前にはつきりとある。これから一生、薄れる事も消える事はないだろう。

理由はある。けれど、それは果たして人の命を奪うに値するのだろうか？

人は自分自身がなくなればそれで終わる。誰か一人を犠牲にして百人を助けても、百人がその先の未来を掴んだとしても、誰か一人の世界は閉じて消滅する。

絶対正義というのは絶対悪が存在しなければ成り立たないものなのか。完全な悪でないものに対しては絶対正義はありえないのか。命を守る為に命を奪う。だが、そんな事はいつもやっていることのはずなんだ。

動物の命を奪って、僕らはそれを喰らっている。そうしなければ生きられない。それと同じで、人を殺さなければ生きられないのなら、それは善や悪などの概念を飛び越えるのだろうか。

生きることの前に、正義も悪も霞むのならば、それは曖昧で都合のいい言葉でしかない。けど違うはずなんだ。あるはずなんだ。確固たる正義はきっと、この世にあるはずなんだ。

それは淡い期待。そうであればいいという願望。そして、僕の心の底からの欲求。

正義なんて、無くたって生きられる。間違っても正しくても、生きていける事には変わりはない。けど、それじゃ駄目なんだ。正しいことのために、僕は力を使いたい。

内藤君が死んだ。遠藤が死んだ。父さんが死んだ。田上が死んだ。でも、僕は生きている。

僕の力の近い道を、僕はまだ選べるんだ。

目の前の天月は、テーブルの上においてあるコップを見つめている。無言で、水をただ眺めている。

天月はこれまでどんな思いで闘ってきたんだろう。そういえばまだ、聞いた事がなかった。

カップラーメンの安っぽい具を口に入れる。スープの味の濃さが具の味をほとんどかき消している。

――正しい、道か。

世界がもっとシンプルで、単純だったらよかったのに。

テレビのように、漫画のように、善人は善人で、悪人は悪人だったらよかったのに。そうだったら何も迷わなくていいのに。

目の前の久坂君は、黙々とインスタント麺を食べ続けている。

さっきもそうだった。自分の父親の死体を、淡々と運び、埋めていた。血塗れの床を吹き、吹き飛ばされた家具を調べ、当たり前のようにしていた。

——きつと、一人じゃあいつは壊れちまう。

遠藤君がそう言っていたように、彼の心は今、壊れかけている。正義を求める事で、なんとかこまかしているだけ。

正義や悪なんて、人が作った便宜上の言葉でしかない。正義とは正しい事。悪とは悪い事。それだけだ。彼はそこに揺るがないものを求めている。

彼の憧れていたヒーロー達は、確かにそれを持っていた。正義という正しきで、悪という悪さを倒し、世界を守っていた。

でも、本当の世界はそんなシンプルなものじゃない。

物事には必ず理由がある。絶対悪がないとは言わない。けれど、そんなものは極少数。

例えば、空腹で所持金のない子供がパンを盗むように。完全な悪で人間は行動しているわけではない。

変異種もそう。思考が本能に犯されてしまっているだけ。

悪ではないそれを殺すのは、きつと久坂君にとって許される事ではないはず。悪だとしても、彼はためらいをみせるかもしれない。それでも、変異種は倒さなくてはいけない。

私は生きるためにそうした。そうしなければ、生きることができなかったから。

久坂君の求める正義とは程遠い、自分勝手な理由。生きるために誰かを殺す。正義や悪なんて、考えた事がなかった。考えないようにしていたのかもしれない。そうすれば、心が楽だから。

けど、久坂君は考えてしまう。

正義を求めるが故に悩み、苦しみ、そして壊れていく。それでも正義を渴望し、その欲求によって自分の心を保っている。彼の中にあるヒーローは、絶対に正しいヒーローは、いつか答えをくれるのだろうか。

結果はもうわかっている。

だから私は、一緒にいなきゃいけない。私が彼と一緒にいて、彼の心に変化があるか、正直なところわからない。でも、遠藤君に頼まれた。私自身もそう決めた。私が、久坂君を守るって。

けど、私はまた彼を巻き込んでしまった。彼もそれを望んでいる。そして一ノ宮博士も、確実に。

久坂君を状況から引き剥がせないなら、せめて久坂君の心だけでも救いたい。

そう思いながら、私はコップの中の水を見つめている。

犠牲 2 (後書き)

久坂以外で一人称やってみました。これから多用するかもしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1088q/>

ヒーロー

2011年9月8日03時27分発行